



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(106)

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩ

(伊集院IC～市来IC)

ど びら がま あと
堂 平 窠 跡

(日置市東市来町)

第2分冊

2006年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(106)

堂平窠跡

二〇〇六年十二月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



鹿児島県



目 次

〔第2分冊〕

第IV章 発掘調査の概要	
第4節 第2地点の調査	205
第5節 表層の出土遺物	302
第6節 平成11年度の調査	329
第V章 分析・同定	
堂平窯の炉跡の地磁気年代測定	340
堂平窯跡出土遺物の蛍光X線分析	346
堂平窯跡関連資料の蛍光X線分析	355
堂平窯跡から出土した炭化材の樹種	361
第VI章 まとめ	364
あとがき	

〔第1分冊〕

序 文	
報告書抄録	
例 言	
凡 例	
第I章 はじめに	
第1節 調査に至るまでの経緯	
第2節 遺跡の概要	
第II章 発掘調査の経過	
第1節 調査の経緯	
第2節 調査の組織	
第3節 調査の経過（日誌抄）	
第4節 移設保存の経過	
第5節 整理作業の経過	
第III章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第IV章 発掘調査の概要	
第1節 発掘調査の方法	
第2節 各地点の状況	
第3節 第1地点の調査	

〔第3分冊〕

写真図版

第2分冊 挿 図 目 次

第178図	物原1	3 E区北壁土層断面図	206	第224図	物原1	出土遺物(40)甕	249
第179図	物原1	3・4 G区西壁土層断面図	206	第225図	物原1	出土遺物(41)甕	250
第180図	物原2	5・6 E区西壁土層断面図	206	第226図	物原1	出土遺物(42)壺	251
第181図	物原1	2-4 E区西壁土層断面図	207	第227図	物原1	出土遺物(43)壺	252
第182図	物原2	5・6 F区西壁土層断面図	207	第228図	物原1	出土遺物(44)壺	253
第183図	物原1	1-4区西壁土層断面図	208	第229図	物原1	出土遺物(45)壺	254
第184図	第2地点コンタ図及び物原位置図		209	第230図	物原1	出土遺物(46)壺	255
第185図	物原1	出土遺物(1)碗	210	第231図	物原1	出土遺物(47)植木鉢	256
第186図	物原1	出土遺物(2)碗・皿	211	第232図	物原1	出土遺物(48)植木鉢	257
第187図	物原1	出土遺物(3)白色陶胎 碗	212	第233図	物原1	出土遺物(49)植木鉢	258
第188図	物原1	出土遺物(4)白色陶胎 碗	213	第234図	物原1	出土遺物(50)植木鉢	259
第189図	物原1	出土遺物(5)白色陶胎 碗	214	第235図	物原1	出土遺物(51)植木鉢	260
第190図	物原1	出土遺物(6)白色陶胎 皿	215	第236図	物原1	出土遺物(52)植木鉢	261
第191図	物原1	出土遺物(7)蓋	216	第237図	物原1	出土遺物(53)盆栽鉢	262
第192図	物原1	出土遺物(8)蓋	217	第238図	物原1	出土遺物(54)盆栽鉢	263
第193図	物原1	出土遺物(9)德利	218	第239図	物原1	出土遺物(55)鉢	264
第194図	物原1	出土遺物(10)德利	219	第240図	物原1	出土遺物(56)鉢	265
第195図	物原1	出土遺物(11)德利	220	第241図	物原1	出土遺物(57)その他	266
第196図	物原1	出土遺物(12)德利	221	第242図	物原1	出土遺物(58)その他	268
第197図	物原1	出土遺物(13)德利	222	第243図	物原1	出土遺物(59)動物型土製品	269
第198図	物原1	出土遺物(14)德利	223	第244図	物原1	出土遺物(60)瓦	270
第199図	物原1	出土遺物(15)片口	224	第245図	物原1	出土遺物(61)瓦	271
第200図	物原1	出土遺物(16)片口	225	第246図	物原1	出土遺物(62)瓦	272
第201図	物原1	出土遺物(17)播鉢	226	第247図	物原1	出土遺物(63)瓦	273
第202図	物原1	出土遺物(18)播鉢	227	第248図	物原1	出土遺物(64)瓦	274
第203図	物原1	出土遺物(19)播鉢	228	第249図	物原1	出土遺物(65)瓦	275
第204図	物原1	出土遺物(20)播鉢	229	第250図	物原1	出土遺物(66)瓦	276
第205図	物原1	出土遺物(21)播鉢	230	第251図	物原1	出土遺物(67)窯道具	278
第206図	物原1	出土遺物(22)播鉢	231	第252図	物原1	出土遺物(68)窯道具	279
第207図	物原1	出土遺物(23)把手付き鉢	232	第253図	物原1	出土遺物(69)窯道具	280
第208図	物原1	出土遺物(24)把手付き鉢	233	第254図	物原1	出土遺物(70)窯道具	281
第209図	物原1	出土遺物(25)鉢	234	第255図	物原1	出土遺物(71)窯道具	282
第210図	物原1	出土遺物(26)鉢	235	第256図	物原1	出土遺物(72)窯道具	283
第211図	物原1	出土遺物(27)蓋	236	第257図	物原1	出土遺物(73)窯道具	284
第212図	物原1	出土遺物(28)蓋	237	第258図	物原1	出土遺物(74)窯道具	285
第213図	物原1	出土遺物(29)蓋	238	第259図	物原1	出土遺物(75)窯道具	286
第214図	物原1	出土遺物(30)甕	239	第260図	物原1	出土遺物(76)窯道具	287
第215図	物原1	出土遺物(31)甕	240	第261図	物原1	出土遺物(77)窯道具	288
第216図	物原1	出土遺物(32)甕	241	第262図	物原1	出土遺物(78)窯道具	289
第217図	物原1	出土遺物(33)甕	242	第263図	物原1	出土遺物(79)窯道具	290
第218図	物原1	出土遺物(34)甕	243	第264図	物原1	出土遺物(80)堂平窯製品以外	291
第219図	物原1	出土遺物(35)甕	244	第265図	物原2	出土遺物(1)德利・水注・片口	292
第220図	物原1	出土遺物(36)甕	245	第266図	物原2	出土遺物(2)蓋・播鉢	293
第221図	物原1	出土遺物(37)甕	246	第267図	物原2	出土遺物(3)甕	294
第222図	物原1	出土遺物(38)甕	247	第268図	物原2	出土遺物(4)甕	295
第223図	物原1	出土遺物(39)甕	248	第269図	物原2	出土遺物(5)壺	296
				第270図	物原2	出土遺物(6)壺	297
				第271図	物原2	出土遺物(7)その他	298

第272図	物原 2 出土遺物(8)瓦	299
第273図	物原 2 出土遺物(9)窯道具	300
第274図	物原 2 出土遺物(10)堂平窯製品以外	301
第275図	第 1 地点表層出土遺物(1)碗	302
第276図	第 1 地点表層出土遺物(2)白色陶胎 碗	303
第277図	第 1 地点表層出土遺物(3)白色陶胎 皿	304
第278図	第 1 地点表層出土遺物(4)蓋・德利・水注	305
第279図	第 1 地点表層出土遺物(5)片口・播鉢	306
第280図	第 1 地点表層出土遺物(6)鉢・蓋	307
第281図	第 1 地点表層出土遺物(7)甕・底部	308
第282図	第 1 地点表層出土遺物(8)壺	309
第283図	第 1 地点表層出土遺物(9)その他	310
第284図	第 1 地点表層出土遺物(10)その他	311
第285図	第 1 地点表層出土遺物(11)瓦	312
第286図	第 1 地点表層出土遺物(12)瓦	313
第287図	第 1 地点表層出土遺物(13)瓦	314
第288図	第 1 地点表層出土遺物(14)堂平窯製品以外	316
第289図	第 1 地点表層出土遺物(15)堂平窯製品以外	317
第290図	第 1 地点表層出土遺物(16)堂平窯製品以外	318
第291図	第 1 地点表層出土遺物(17)堂平窯製品以外	319
第292図	第 2 地点表層出土遺物(1)碗・蓋・片口	320
第293図	第 2 地点表層出土遺物(2)片口・德利・壺・播鉢	321
第294図	第 2 地点表層出土遺物(3)植木鉢	322
第295図	第 2 地点表層出土遺物(4)窯道具	323
第296図	第 2 地点表層出土遺物(5)窯道具・瓦	324
第297図	第 2 地点表層出土遺物(6)堂平窯製品以外	325
第298図	地点不明表層出土遺物(1)	326
第299図	地点不明表層出土遺物(2)	327
第300図	地点不明表層出土遺物(3)堂平窯製品以外	328
第301図	平成11年度発掘調査道路部分コンタ図	329
第302図	平成11年度発掘調査道路部分土層断面図	329
第303図	道路部分出土遺物(1)碗・皿・蓋	330
第304図	道路部分出土遺物(2)德利・片口・水注	331
第305図	道路部分出土遺物(3)蓋・播鉢	332
第306図	道路部分出土遺物(4)鉢	333
第307図	道路部分出土遺物(5)甕・壺	334
第308図	道路部分出土遺物(6)その他	335
第309図	道路部分出土遺物(7)瓦	336
第310図	道路部分出土遺物(8)窯道具	337
第311図	道路部分出土遺物(9)窯道具	338
第312図	道路部分出土遺物(10)窯道具	339
第313図	韓国済州島における朝鮮王朝期の 窯模式図	367
第314図	清道薄池里窯跡 出土遺物実測図	368
第315図	皿屋上窯跡 出土遺物実測図	368
第316図	串木野窯跡出土遺物実測図	371
第317図	I a期(上)・I b期(下)相当の出土遺物	374

第318図	II期相当の出土遺物	375
第319図	堂平窯跡位置図	378

表 目 次

第100表	物原 1 遺物観察表 1	210
第101表	物原 1 遺物観察表 2	211
第102表	物原 1 遺物観察表 3	213
第103表	物原 1 遺物観察表 4	214
第104表	物原 1 遺物観察表 5	215
第105表	物原 1 遺物観察表 6	217
第106表	物原 1 遺物観察表 7	219
第107表	物原 1 遺物観察表 8	221
第108表	物原 1 遺物観察表 9	222
第109表	物原 1 遺物観察表10	223
第110表	物原 1 遺物観察表11	225
第111表	物原 1 遺物観察表12	227
第112表	物原 1 遺物観察表13	229
第113表	物原 1 遺物観察表14	231
第114表	物原 1 遺物観察表15	232
第115表	物原 1 遺物観察表16	235
第116表	物原 1 遺物観察表17	237
第117表	物原 1 遺物観察表18	239
第118表	物原 1 遺物観察表19	240
第119表	物原 1 遺物観察表20	241
第120表	物原 1 遺物観察表21	243
第121表	物原 1 遺物観察表22	245
第122表	物原 1 遺物観察表23	246
第123表	物原 1 遺物観察表24	247
第124表	物原 1 遺物観察表25	248
第125表	物原 1 遺物観察表26	250
第126表	物原 1 遺物観察表27	251
第127表	物原 1 遺物観察表28	252
第128表	物原 1 遺物観察表29	253
第129表	物原 1 遺物観察表30	255
第130表	物原 1 遺物観察表31	257
第131表	物原 1 遺物観察表32	258
第132表	物原 1 遺物観察表33	259
第133表	物原 1 遺物観察表34	261
第134表	物原 1 遺物観察表35	263
第135表	物原 1 遺物観察表36	265
第136表	物原 1 遺物観察表37	267
第137表	物原 1 遺物観察表38	268
第138表	物原 1 遺物観察表39	269
第139表	物原 1 遺物観察表40	271
第140表	物原 1 遺物観察表41	273
第141表	物原 1 遺物観察表42	277

第142表	物原 1	遺物觀察表43	278
第143表	物原 1	遺物觀察表44	281
第144表	物原 1	遺物觀察表45	283
第145表	物原 1	遺物觀察表46	285
第146表	物原 1	遺物觀察表47	286
第147表	物原 1	遺物觀察表48	287
第148表	物原 1	遺物觀察表49	288
第149表	物原 1	遺物觀察表50	290
第150表	物原 1	遺物觀察表51	290
第151表	物原 2	遺物觀察表 1	293
第152表	物原 2	遺物觀察表 2	295
第153表	物原 2	遺物觀察表 3	297
第154表	物原 2	遺物觀察表 4	298
第155表	物原 2	遺物觀察表 5	299
第156表	物原 2	遺物觀察表 6	300
第157表	物原 2	遺物觀察表 7	301
第158表	第 1 地点表層	遺物觀察表 1	302
第159表	第 1 地点表層	遺物觀察表 2	304
第160表	第 1 地点表層	遺物觀察表 3	306
第161表	第 1 地点表層	遺物觀察表 4	307
第162表	第 1 地点表層	遺物觀察表 5	308
第163表	第 1 地点表層	遺物觀察表 6	309
第164表	第 1 地点表層	遺物觀察表 7	311
第165表	第 1 地点表層	遺物觀察表 8	313
第166表	第 1 地点表層	遺物觀察表 9	315
第167表	第 1 地点表層	遺物觀察表10	316
第168表	第 1 地点表層	遺物觀察表11	317
第169表	第 1 地点表層	遺物觀察表12	319
第170表	第 2 地点表層	遺物觀察表 1	321
第171表	第 2 地点表層	遺物觀察表 2	322
第172表	第 2 地点表層	遺物觀察表 3	323
第173表	第 2 地点表層	遺物觀察表 4	325
第174表	地点不明表層	遺物觀察表	328
第175表	道路部分	遺物觀察表 1	331
第176表	道路部分	遺物觀察表 2	332
第177表	道路部分	遺物觀察表 3	333
第178表	道路部分	遺物觀察表 4	334
第179表	道路部分	遺物觀察表 5	335
第180表	道路部分	遺物觀察表 6	337
第181表	道路部分	遺物觀察表 7	338
第182表	道路部分	遺物觀察表 8	339

第4節 第2地点の調査

平成8年度に実施した分布調査で窯跡の存在が推定された地点であり、西側に大きく傾斜した谷への急傾斜面の上部に当たる。

調査は、雑木や竹などの伐採から開始し、窯跡と推定した陶器片の集中した場所に谷と直交する任意の軸を設定し、4m毎のグリッドを設定して調査を開始した。陶器片の集中か所付近から表土剥ぎをした後に掘り下げを行ったが、陶器片とともに窯壁の破片や土などが層を成して堆積していた状況が確認されたことから、窯跡ではなく物原であることが判明した。

次に、その物原の広がりをお確かめるとともに、別に窯跡の所在を確認するために範囲を広げて調査を行った。

上方の里道と谷に下りる小道との間のほか、小道の下方にも調査の範囲を広げた。

その結果、里道と小道との間に別の窯跡は確認できず、物原が広がっている状況が確認された。

小道の下方は、その物原が下部にも広がっている様子が確かめられた。

最終的な物原の広がり、小道の上方で23m×11mに及び、小道の下方では10m×8mを確認した。それぞれの地点での堆積状況は次のとおりであった。まず、小道上方の北側端では、下部が黒～茶褐色の土が中心で、一部に陶器や窯壁、焼土が見られる。上部では、陶器や瓦、軽石に混じって窯壁、焼土も見られる。その上部には黒～灰褐色の砂が堆積する。

小道の上方で、窯跡と想定したものの最終的に物原と確認された、陶器片が大量にあった木の辺りでは、下部はシラスや黄褐色の砂などの上に、陶器や焼土、窯壁が大量に見られ、その上に薄く灰褐色の砂質土が乗る。さらにその上部には、広域にわたって焼土、窯壁が中心となった砂質の土が大きく見ると3層ほど堆積しており、これがこの物原の主体をなすものと考えられる。

小道の上方でも物原の中央部付近では、里道の直下から、何回にもわたって陶器片や焼土、窯壁が投げ込まれた状況が見られた。下部ではシラスやそれが主成分と考えられる砂質土が厚く堆積した上に、傾斜面でよくそうなるように、下方に長く流れた状況で堆積している様子が顕著に見られる。

これに対して小道の下方では、下部でシラスの上に成層した堆積がシラス及びそれに起因すると考えられる砂質土が見られるが、シラスの地山に接している傾斜面近くでは、断面実測を行った方向とは直交する方向に雨水によるものか窪みが形成されたようで、その部分に陶器片や窯壁、焼土などが堆積する。ところが、これが堆積した後も雨水などによる流出が続いていたと考えられ、中央部分が減失している様子が観察される。そのために、上部の物原の堆積は地形とは逆方向の堆積をしてい

るように見える。

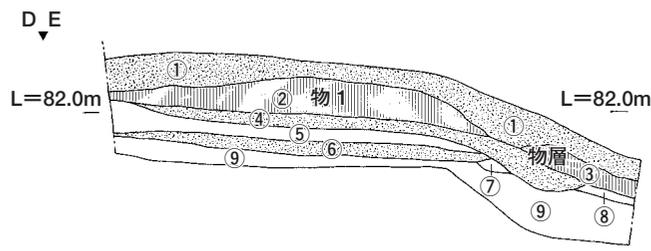
物原の中央部分は、小道の付近では成層した状況での堆積が見られるものの、小道から離れるに従って上述したような地形とは逆方向の堆積となっている。また、小道下は白色の砂の混じった砂質土が地形に沿った形で大量に堆積しているが、これは土砂崩れなどの要因が考えられる。

ところで、第2地点のこの物原をそのように呼んで良いのかという意見があるかも知れない。物原は窯の近く、殊に窯の下方に、焼成時に生じた破損品を遺棄する目的で造られるというのが一般的である。そのために、窯自体を斜面の上部に築くことで下方を物原とするわけである。

しかし、堂平窯においては、既に述べたように窯の上方及び両脇に第1地点の物原が所在し、窯の下方に形成された物原は確認されていない。第2地点の物原は、さらに窯からは離れた窯の上方に所在する。そのことから、物原と言えるのかという疑問が提示される可能性が考えられるのである。

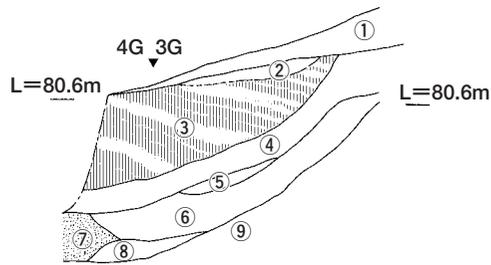
これについての考え方は、‘物原’を窯の焼成で生じた破損品や窯道具、窯壁その他の窯に関するものをまとめて遺棄した場所と規定するならば、窯の上方に位置しようが下方に形成されようが‘物原’には違いないのである。また、窯のごく近くに遺棄したものだけを‘物原’と規定するのであるならば、遠い、近いの距離を何mと規定しているのかを聞いてみたい。おそらく、そのようなものはないであろう。また、平らに近い場所に形成されたもののみを‘物原’と呼称するのであれば、傾斜のきつい谷部に遺棄し、堆積したものはそう呼べないことになる。そうすると、谷の傾斜を利用した窯で、下方に遺棄したことで形成された物原は物原とは言えないのであろうか。そんなことはないであろう。

ところで、ここ美山地域には南京皿山窯跡などのように、窯の上方に遺棄することで形成された物原があり、現に「南京皿山窯跡の物原」と呼んでいるのである。そうであれば、同じ美山地域で窯跡の上方に遺棄されたことで形成された物原も、物原という呼称で何ら問題はないことになるはずである。したがって、堂平窯跡の谷部で検出された、陶器片や窯壁、焼土等が遺棄され、集中して確認された場所を物原と呼ぶのに何ら問題はないと考えるのである。



- ① 暗茶褐色土 焼土・窯壁・陶片含む
- ② 赤っぽい褐色土 陶片・瓦・焼土・窯壁などが多い
- ③ 暗茶褐色
- ④ 灰色がかった茶褐色 陶片・焼土・窯壁含む
- ⑤ にごった黄褐色細砂土 ほぼ無遺物
- ⑥ 黄みがかった暗茶褐色土 焼土・窯壁・灰などが多く、陶片も少しまじる
- ⑦ 無遺物
- ⑧ 暗灰褐色砂 無遺物
- ⑨ 黄褐色微砂（基盤層） 無遺物

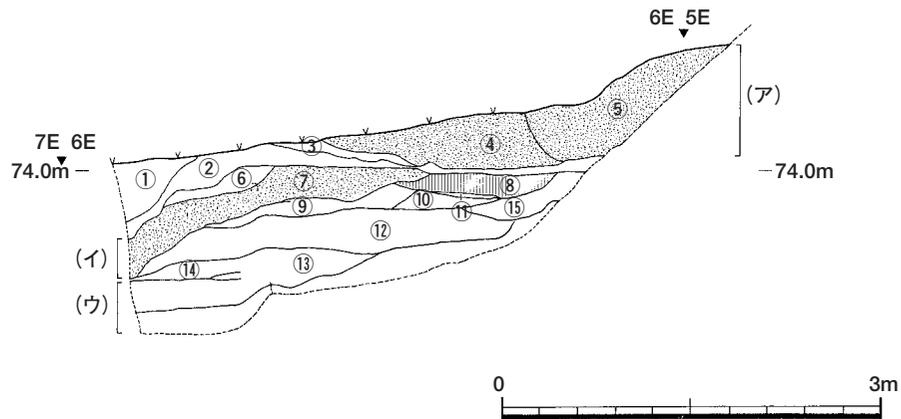
第178図 物原1 3E区北壁土層断面図



- ① 暗灰褐色細砂土
- ② 淡黒褐色細砂土
- ③ 物原2 焼土・窯壁・瓦・陶片・軽石がぎっしりつまる
- ④ 淡黒褐色細砂土 ほぼ無遺物
- ⑤ にごった淡茶褐色土
- ⑥ 黒褐色細砂土 ほぼ無遺物
- ⑦ 赤茶褐色粘質土 焼土・窯壁・陶片など多い
- ⑧ 黒色土
- ⑨ シラス

第179図 物原1 3・4G区西壁土層断面図

物原
 陶片・窯壁
 などが含まれる

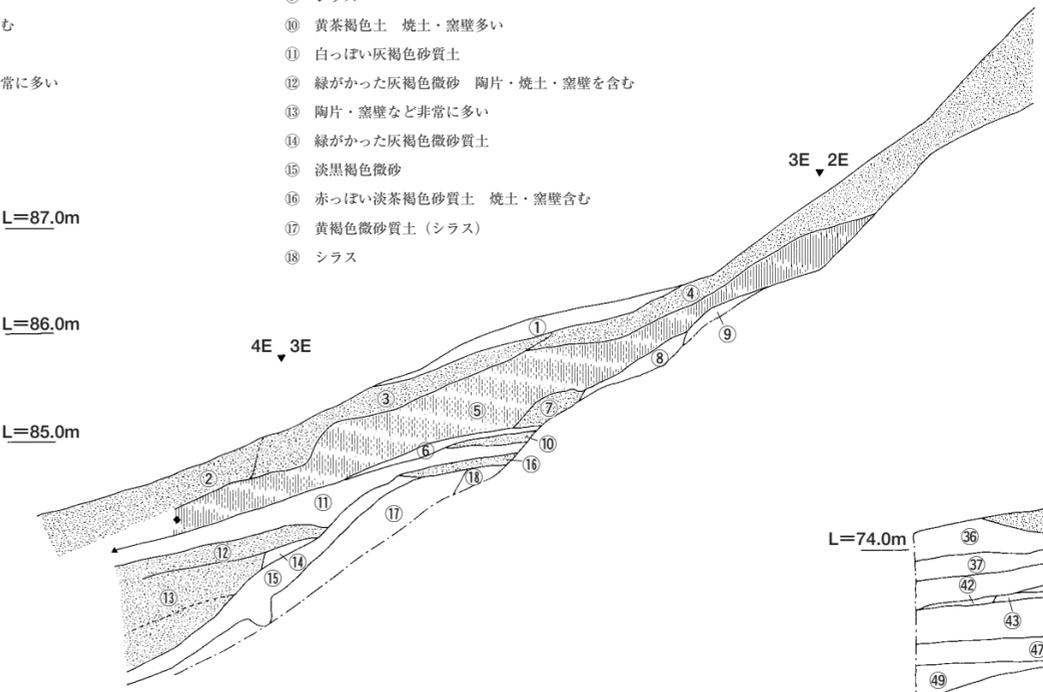


第180図 物原2 5・6E区西壁土層断面図

- ① 耕作土
- ② 黄褐色砂質土 赤ホヤと表土のまざり
- ③ 黒褐色砂質土 炭化物を含む層と思われる
- ④ 淡褐色砂質土 焼土、窯壁を多く含む 陶片は含まない
- ⑤ 淡橙色砂質土 物原本体I 陶片・窯壁片を含む
- ⑥ シラス2次堆積
- ⑦ 淡褐色砂質土 ④と同じ
- ⑧ 物原2
- ⑨ 暗褐色砂質土 ⑧と同じ砂質土であるが 炭化物を含むものと思われる
- ⑩ アカホヤと表土のまざり
- ⑪ 暗褐色砂質土 物原本体II
- ⑫ 淡褐色砂質土 陶片・窯壁を含むシラス攪乱層
- ⑬ 黄色っぽい淡褐色砂質土 陶片・窯壁を含むシラス攪乱層
- ⑭ 暗褐色砂質土
- ⑮ 褐色砂質土
- ⑯ シラス地山
- (ア) この土層の中で最も新しい物原 ③の灰をかき出した後に⑤がかき出されている
- (イ) この部分は、最初の盛土の上にかき出された灰・陶片と思われる
- (ウ) この部分は最初の盛土と思われる

- ① 淡黒褐色砂質土 (表土)
- ② 焼土・窯壁, 陶片が多い
- ③ 灰褐色砂質土 焼土・窯壁などを少し含む
- ④ 淡黒褐色砂質土 焼土・窯壁が多い
- ⑤ 物原1 赤褐色細砂土 焼土・窯壁が非常に多い
- ⑥ シラス2次堆積
- ⑦ 黄褐色土 焼土・窯壁・陶片を含む
- ⑧ 黄褐色シラス
- ⑨ シラス
- ⑩ 黄茶褐色土 焼土・窯壁多い
- ⑪ 白っぽい灰褐色砂質土
- ⑫ 緑がかった灰褐色微砂 陶片・焼土・窯壁を含む
- ⑬ 陶片・窯壁など非常に多い
- ⑭ 緑がかった灰褐色微砂質土
- ⑮ 淡黒褐色微砂
- ⑯ 赤っぽい淡茶褐色砂質土 焼土・窯壁含む
- ⑰ 黄褐色微砂質土 (シラス)
- ⑱ シラス

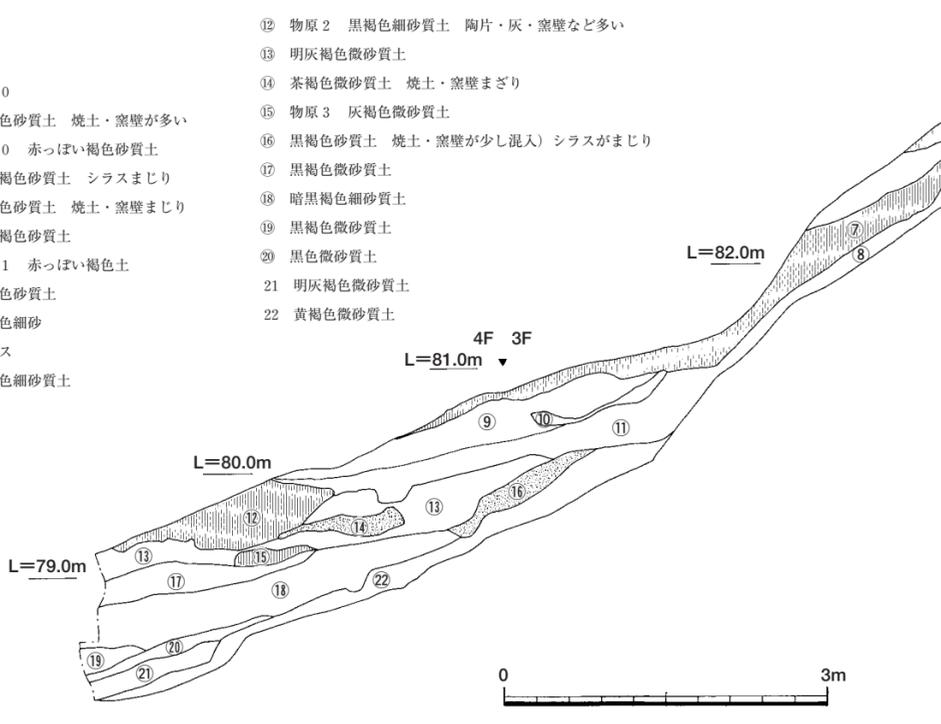
L=87.0m
L=86.0m
L=85.0m



第181図 物原1 2-4E区西壁土層断面図

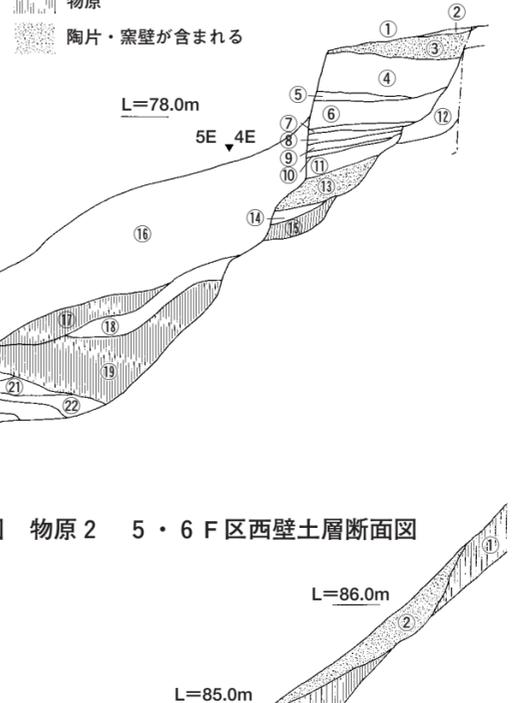
- ① 道路部分
- ② 淡褐色土
- ③ 黒褐色土 焼土・窯壁などが多い
- ④ 淡褐色砂質土
- ⑤ 黄褐色砂質土
- ⑥ 淡褐色砂質土
- ⑦ 黒褐色砂質土
- ⑧ 黄みがかった灰褐色砂質土
- ⑨ 黒褐色砂質土
- ⑩ 黄みがかった灰褐色砂質土
- ⑪ 暗灰褐色砂質土
- ⑫ 黄みがかったシラス2次堆積
- ⑬ 焼土・窯壁の多い黒褐色土
- ⑭ 暗褐色砂質土 シラスまじり
- ⑮ 物原1 シラスまじり
- ⑯ 黒褐色微砂質土
- ⑰ 物原1
- ⑱ 黄褐色微砂質土
- ⑲ 物原2 焼土・窯壁・陶片が多い
- ⑳ にごりのある黄褐色微砂
- ㉑ 黄褐色微砂質土
- ㉒ 黒褐色粘質微砂
- ㉓ 黒褐色微砂
- ㉔ 黄褐色微砂
- ㉕ 淡黒褐色微砂
- 26 黄褐色微砂
- 27 シラス2次堆積
- 28 黄褐色微砂質土
- 29 淡褐色微砂質土
- 30 物原1 赤みがかった褐色微砂質土 焼土・窯壁・陶片などが多い
- 31 黄みがかった淡褐色微砂質土
- 32 淡褐色微砂質土 焼土・窯壁など多い
- 33 黄褐色微砂質土 第2段階の整地
- 34 物原2 赤みがかった褐色微砂質土 焼土・窯壁・陶片などを多く含む
- 35 淡褐色微砂質土 焼土・窯壁・陶片などを含む
- 36 淡黒褐色微砂質土
- 37 黄みがかった明褐色
- 38 白っぽい淡黒褐色
- 39 淡黒褐色微砂質土
- 40 淡色微砂質土
- 41 黒褐色微砂質土
- 42 赤みが方淡黒褐色土
- 43 シラス2次堆積
- 44 灰茶褐色微砂質土 焼土・窯壁含む
- 45 シラス2次堆積
- 46 淡褐色微砂質土 軽石を多く含む
- 47 白っぽい淡褐色微砂質土 軽石を含む
- 48 シラス2次堆積 軽石含む
- 49 シラス2次堆積 細砂層もある
- 50 白色シラス

L=79.0m
L=80.0m
L=81.0m
L=82.0m



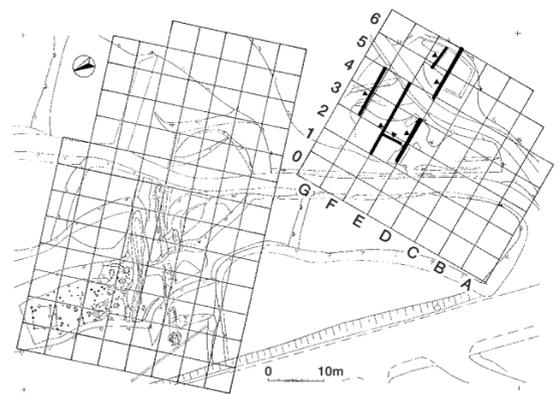
物原
陶片・窯壁が含まれる

L=78.0m
L=76.0m
L=74.0m

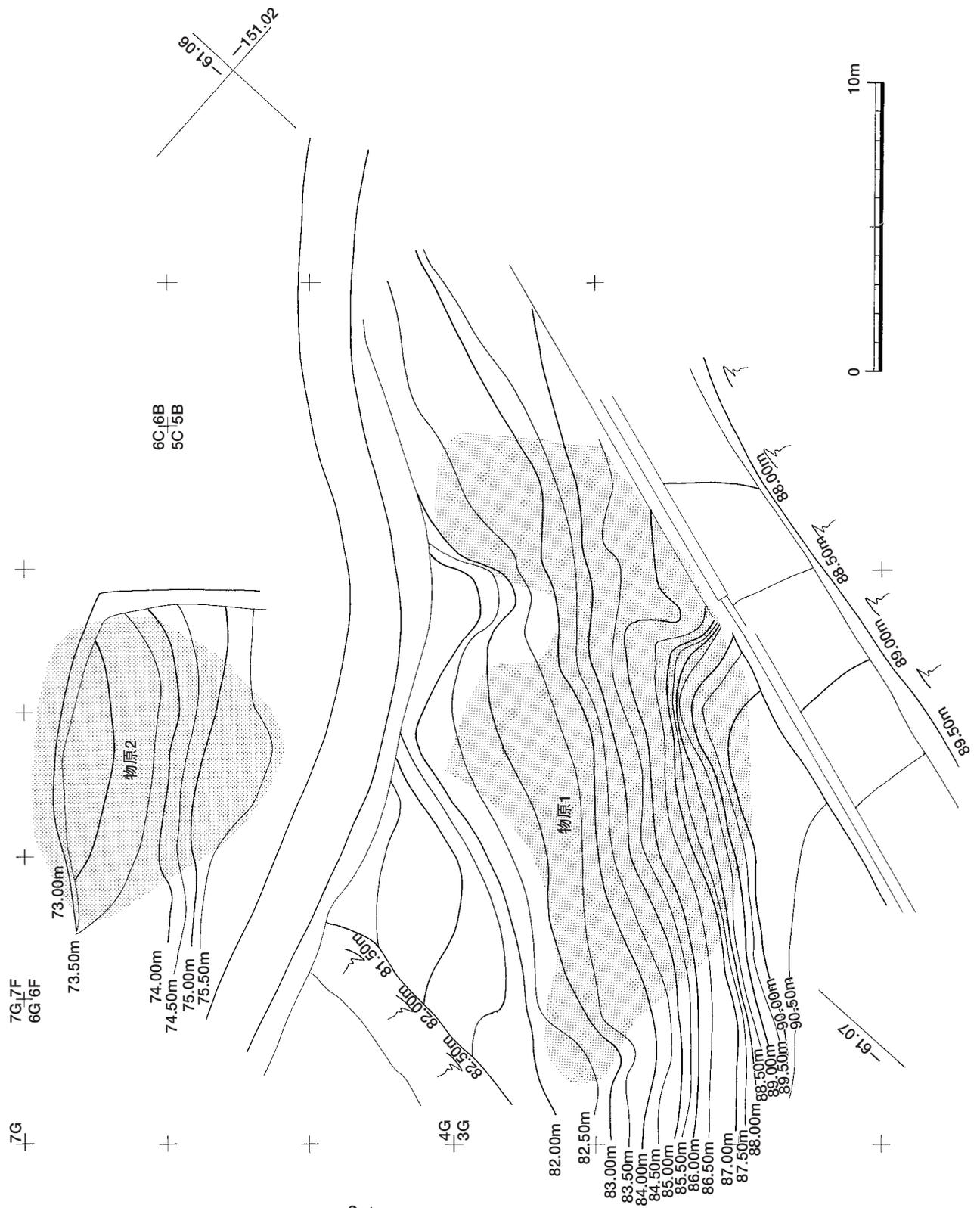


第182図 物原2 5-6F区西壁土層断面図

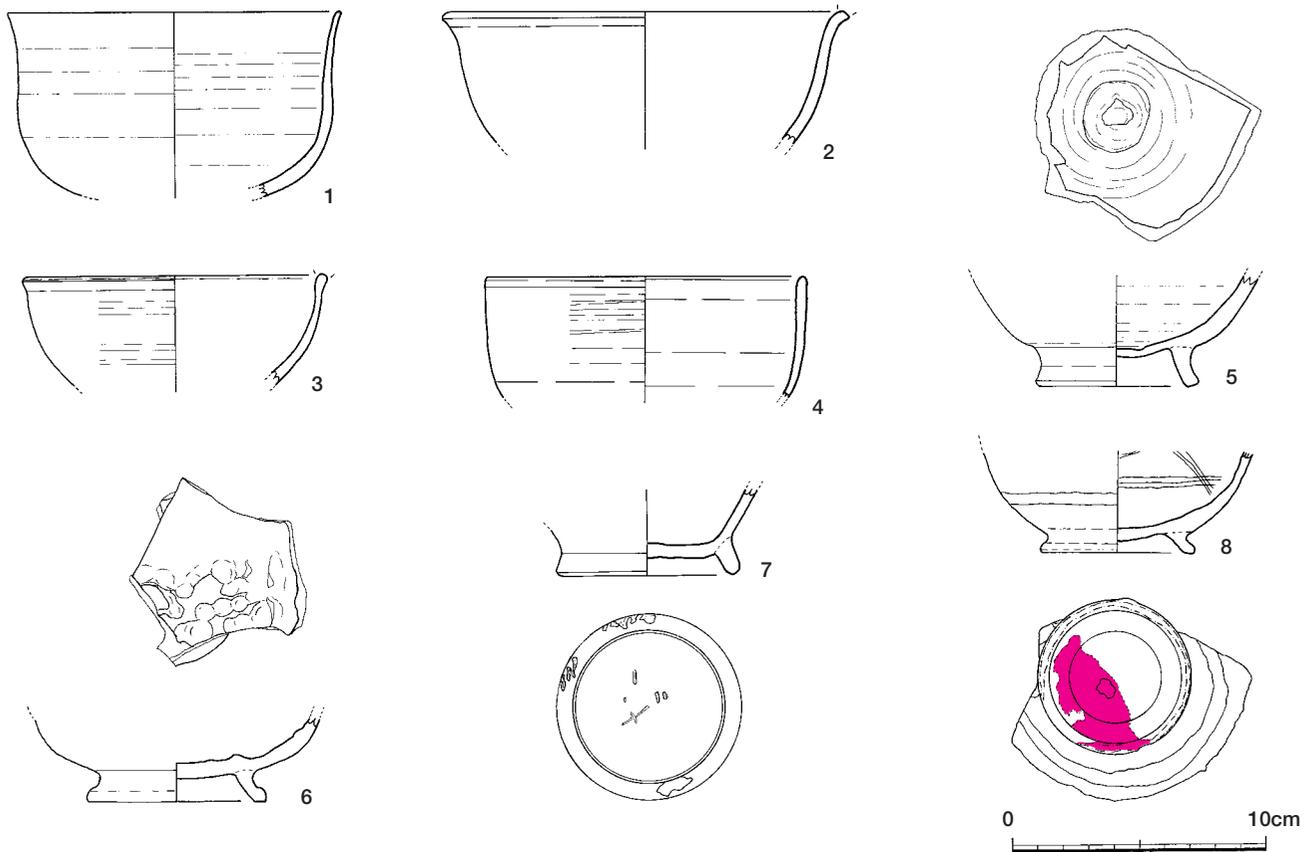
第183図 物原1 1-4区西壁土層断面図



0 3m



第184図 第2地点コンタ図及び物原位置図



第185図 物原1出土遺物(1)碗

第2地点物原1の出土遺物

第2地点とした地域で、集落へ続く里道から、谷側へ急傾斜する部分に形成された物原である。この場所は、堂平窯の時代以降も、ゴミ捨て場的な性格を持つと思われる場であるため、第1地点の物原と比較すると純粋な物原とはいえない。しかしながら、斜面であるため純粋な堆積層は見られないが、陶片や窯道具、窯壁などが、一時期に廃棄された状況が見られるため、広義の意味で、物原として取り扱った。

碗 (第185・186図)

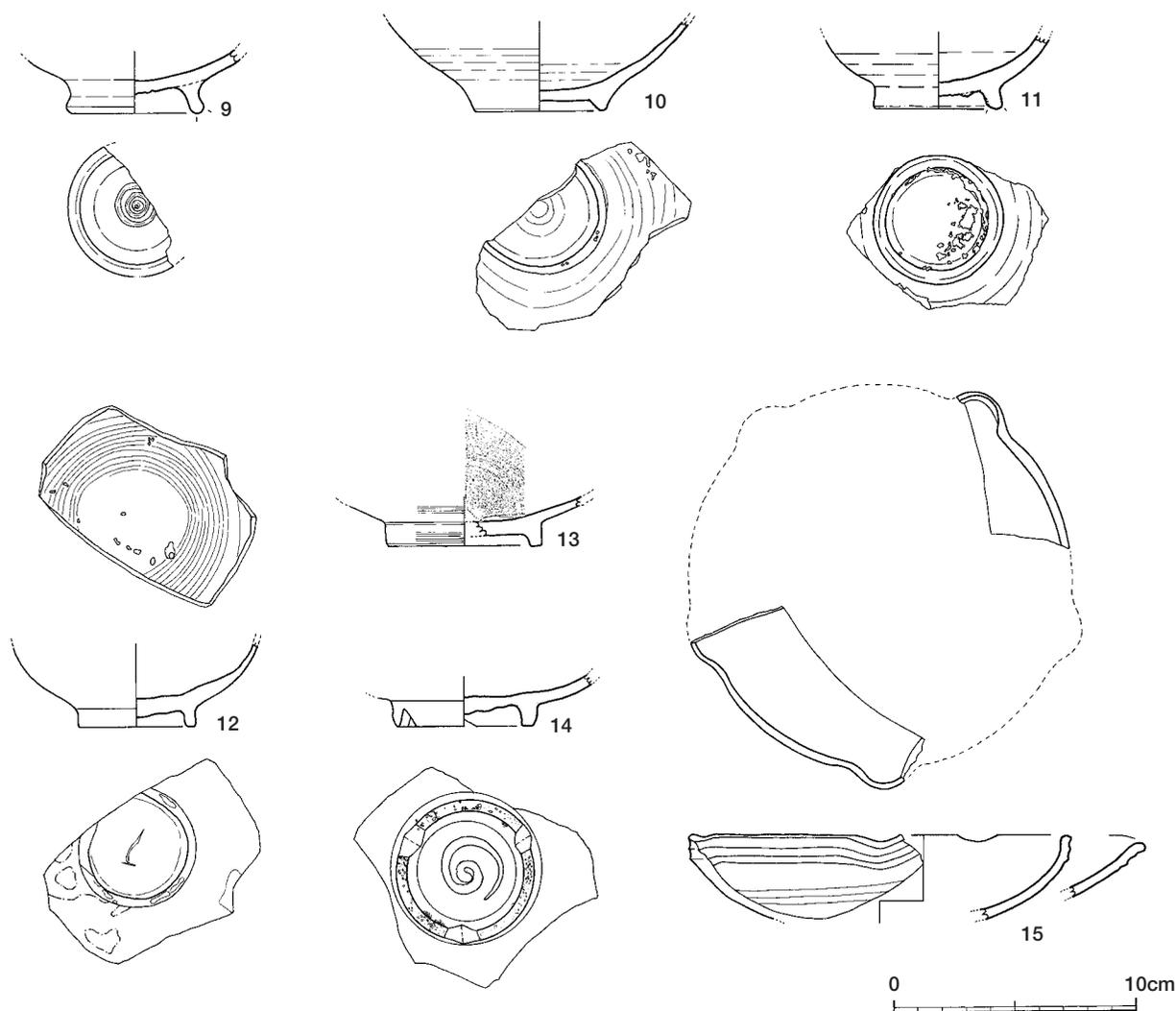
1～4は、口縁部である。1～3は外反するもので、4は直口するものである。1は、腰部の張りが強いもので、内外面には、ヘラ状工具による調整痕が残る。残存

部は全面施釉される。2・3は、口唇部以外灰釉がかけられるものである。4は、外面にヘラ状工具による調整痕が筋状に看取される。

5～9は、底部である。高台は付け高台のため、バチ状を呈する。5は、高台が比較的高くつくられるもので、見込みには円形に一段低く凹みをつくる。畳付には貝目が残る。6は、腰部が張るタイプの資料で、見込みは釉溜まりが見られる。7は、胴部が直線的に伸びるものである。畳付には貝目が残る。8は、内底面にヘラ状工具による調整痕が看取されるもので、高台内面には黄白色の目跡が残る。畳付と高台内面は無釉である。9は、高台内面に渦巻き状の沈線が施されるもので、削り痕の可能性も考えられる。

第100表 物原1 遺物観察表1

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
1	碗	物原1 3.4EF	13.2	—	—	灰黄褐色	灰釉 灰白色	残存部全面施釉	焼成不良
2	碗	物原1 2D	16.2	—	—	黒褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	
3	碗	物原1 2D	12.0	—	—	灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	
4	碗	物原1 4G	12.6	—	—	黄灰色	灰釉 暗灰黄色	残存部全面施釉	
5	碗	物原1 4F	—	5.5	—	灰褐色	灰釉 黒緑色	残存部全面施釉	
6	碗	物原1 2D	—	6.8	—	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	
7	碗	物原1 2D	—	7.3	—	灰色	灰釉 褐色	残存部全面施釉	高台内面に目跡
8	碗	物原1 2F	—	6.0	—	にぶい黄褐色	灰釉 褐灰色	高台内面以外全面施釉	高台内面に目跡



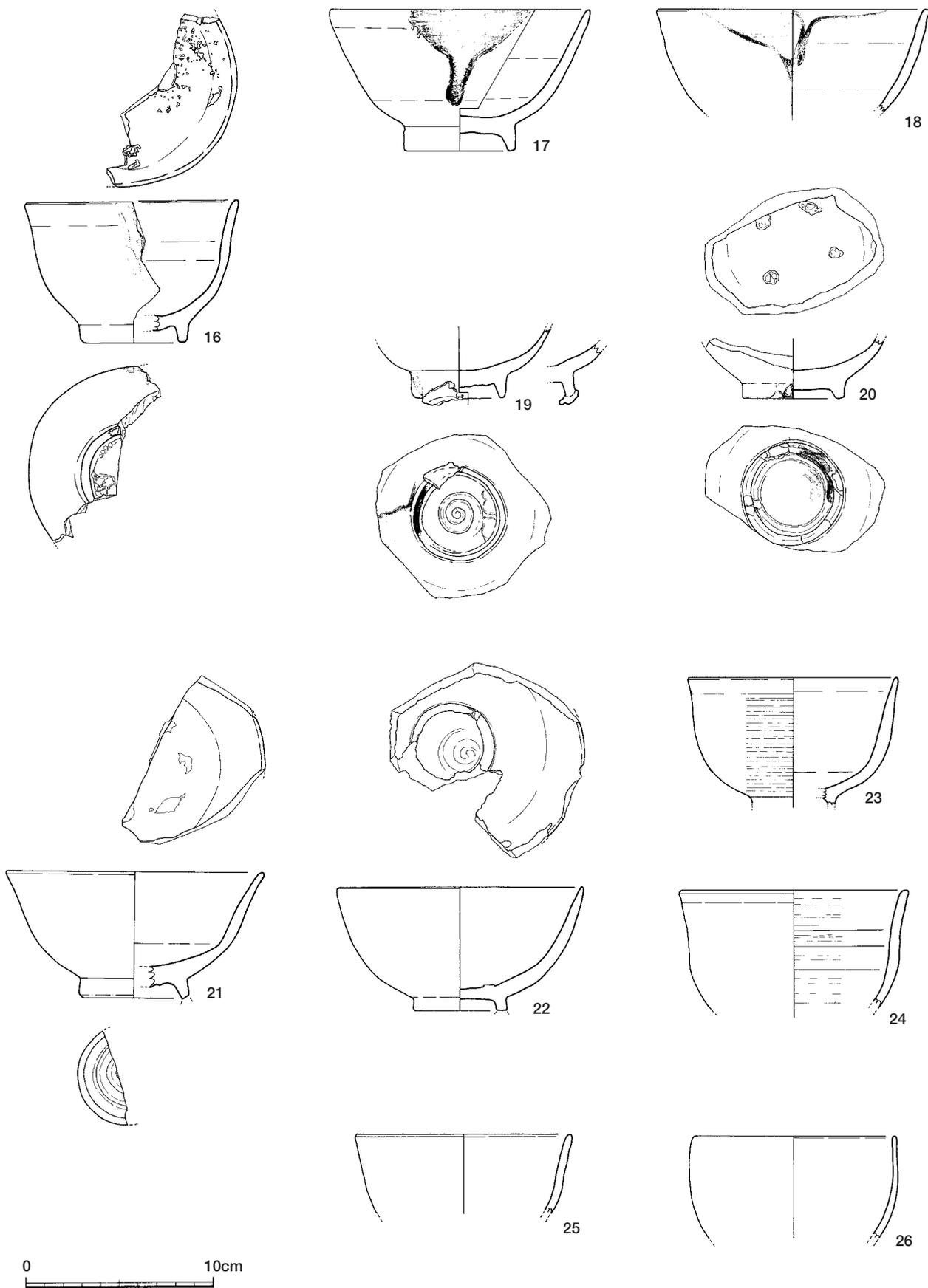
第186図 物原1 出土遺物(2)碗・皿
皿(第186図)

10~12は、1~9とは胎土が異なり、非常に緻密なものである。堂平窯の製品として取り扱ったが、そうでない可能性も否定できない資料である。高台は、削り出しでつくられる。10は、碗としたが皿の可能性も考えられる資料である。非常に焼き締まっており、須恵器のような色調を呈する。無釉である。11は、高台内面に白色砂粒混じりの胎土が付着するものである。12は、見込みに筋状の調整痕が明瞭に残るもので、畳付には貝目が残る。釉は、畳付以外全面施釉される。

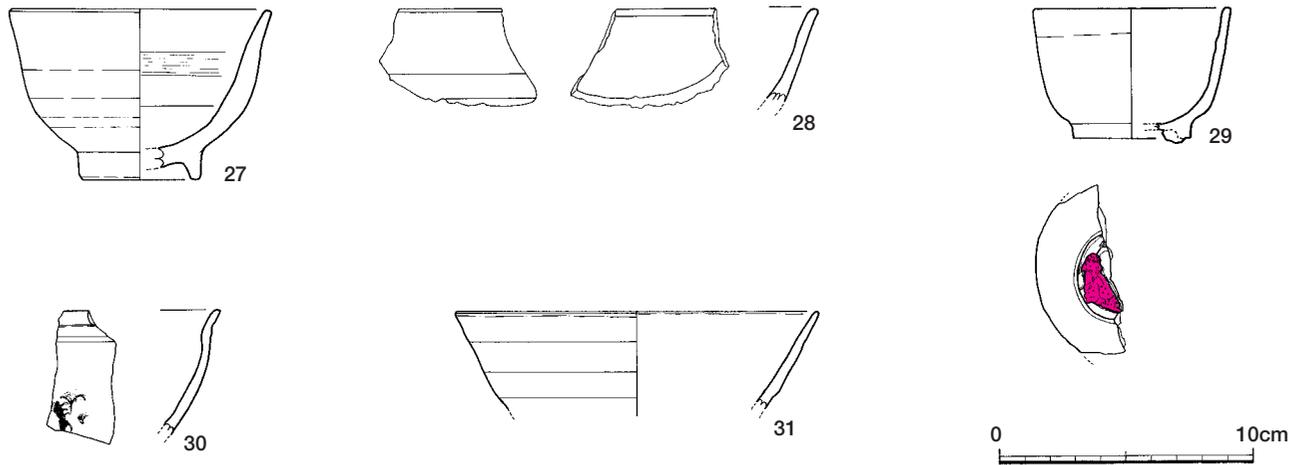
13~15は、胎土が非常に緻密でよく焼き締まっている。堂平窯の製品としたが、そうでない可能性も考えられる。13は、内外面に筋状の調整痕が明瞭に残るもので、無釉である。高台は削り出しでつくられる。14は、削り出しでつくられた高台が割り高台を呈するもので、3か所入れられるものである。畳付と高台内面には、窯道具の目跡が残る。15は皿としたが、他の器種の可能性も考えられる。口縁部は、5か所を外側に押し出し片口状につくる。5か所設けられるものと思われる。

第101表 物原1 遺物観察表2

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
9	碗	物原1 2 D	—	5.6	—	明赤褐色	灰釉 黄灰色	残存部全面施釉	畳付に砂粒付着 高台内面に削りの痕跡
10	碗	物原1 4 D	—	5.4	—	灰褐色	無釉	—	—
11	碗	物原1 4 E	—	5.3	—	明褐灰色	透明釉 緑色	畳付以外全面施釉	高台内面に砂粒付着
12	碗	物原1 3 E	—	4.8	—	黄灰色	灰釉 黄緑色	残存部全面施釉	畳付に貝目
13	皿	物原1 4 D	—	6.4	—	灰褐色	無釉	—	—
14	皿	物原1 3 E	—	5.6	—	にぶい橙色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	切り高台 畳付に砂粒付着 高台内面に削りの痕跡
15	皿	物原1 4 B 4 E	15.8	—	—	褐色	無釉	—	—



第187図 物原1 出土遺物(3)白色陶胎 碗



第188図 物原1 出土遺物(4)白色陶胎 碗

白色陶胎 碗 (第187~189図)

第2地点の物原1からは、他の物原に比べて白色陶胎が多く出土した。形状は、口縁部が僅かに外反するものがほとんどであるが、斜め上方に伸びるものも見られる。高台は、削り高台である。胎土は、白色又は淡黄白色で、やや粘質性に欠け、微細な砂粒も多く含まれる。釉は、畳付を除き透明釉が総釉でかかる。

16~20は、外面に鉄釉により景色が施されるものである。16は、内面に灰が被り、高台内面に貝目が残るものである。17は、ほぼ完形の資料である。18は、内面にも一部鉄釉がかかる部分が見られる。19・20は、底部である。19は、内面に目跡が看取され、畳付には胎土目が熔着する。高台内面は、削り出しにより巴状を呈する。20は、見込みと畳付に胎土目が残る資料である。

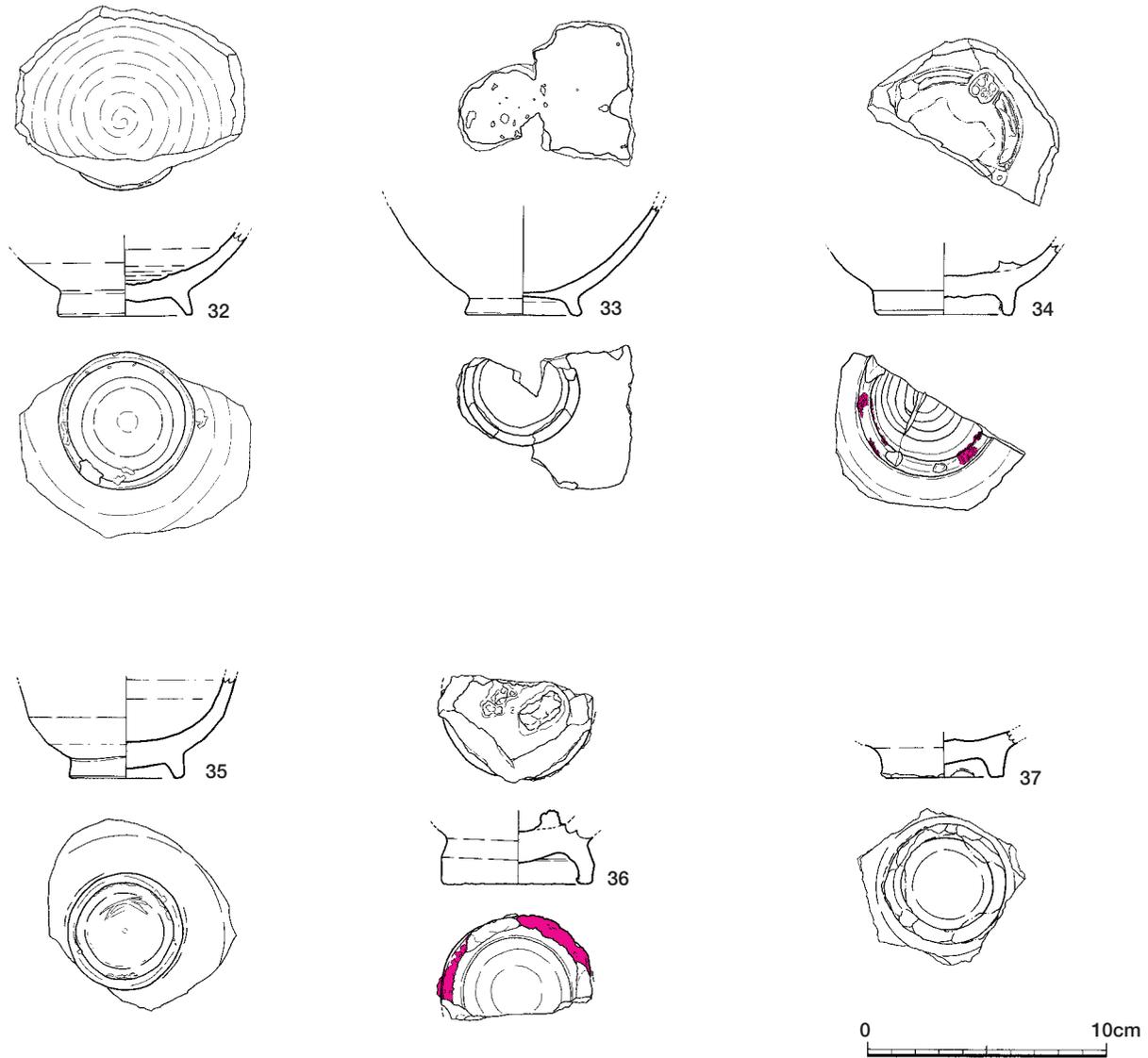
21は、胴部が腰部でやや屈曲するもので、見込みには胎土目が残る。高台内面は、削り出しにより巴状を呈す

る。22は、見込みに高台が熔着した資料である。23・24は、細い筋状の調整痕が明瞭に残るもので、23は外面に、24は内面に見られる。25は焼成不良のためか、胎土が淡黄色で、釉は透明釉が緑褐色に発色した資料である。26は、口縁部が内傾するものである。

27・28は、焼成不良のためか素焼きのように見える資料である。素焼きの段階である可能性も考えられる。27は、内外面ともに筋状の調整痕が明瞭に看取される。29は小形の資料で、高台内面には胎土目が熔着する。釉は、透明釉が緑褐色に発色する。30は、口縁が天目碗のような形状を呈するものである。外面には鉄絵のような文様が描かれる。31は、胴部から口縁部にかけてのラインが、「ハ」の字状に伸びるものである。

第102表 物原1 遺物観察表3

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
16	碗	物原1 4 E	11.4	5.6		浅い黄橙色	透明釉 鉄釉褐色	畳付以外全面施釉	
17	碗	物原1	14.0	6.0	7.5	黄白色	透明釉 鉄釉褐色	畳付以外全面施釉	
18	碗	物原1 2 D	14.6	—	—	淡黄色	透明釉 鉄釉褐色	残存部全面施釉	高台に置台付着 高台内面に削りの痕跡
19	碗	物原1 4 F	—	5.0	—	淡黄色	透明釉 鉄釉褐色	残存部全面施釉	
20	碗	物原1 3.4 E F	—	5.4	—	淡黄色	透明釉 鉄釉褐色	残存部全面施釉	見込みに目跡 畳付に貝目
21	碗	物原1 3 D	13.9	5.9	6.7	淡黄色	透明釉	畳付以外全面施釉	
22	碗	物原1 3 G	1.0	5.0	6.5	淡黄色	透明釉 緑色	畳付以外全面施釉	見込みに高台痕
23	碗	物原1 4 E	11.2	—	—	灰白色	透明釉 灰白色	残存部全面施釉	
24	碗	物原1 3 F	12.2	—	—	浅黄橙色	透明釉 灰白色	残存部全面施釉	
25	碗	物原1 3・4	11.5	—	—	淡黄色	透明釉 緑褐色	残存部全面施釉	
26	碗	物原1 3 D	10.8	—	—	淡黄色	透明釉 淡黄色	残存部全面施釉	
27	碗	物原1 3 E	10.4	4.8	—	淡黄色	無釉	—	
28	碗	物原1 2 D	12.0	—	—	白色	無釉	—	
29	碗	物原1 2 E	7.8	4.6	5.1	灰白色	透明釉 緑緑色	畳付以外全面施釉	畳付に砂粒付着
30	碗	物原1 4 E	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	
31	碗	物原1 3 G 下	14.4	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	



第189図 物原1 出土遺物(5)白色陶胎 碗

32～37は、見込みや畳付に焼成時の重ね焼きの痕跡が残る資料である。

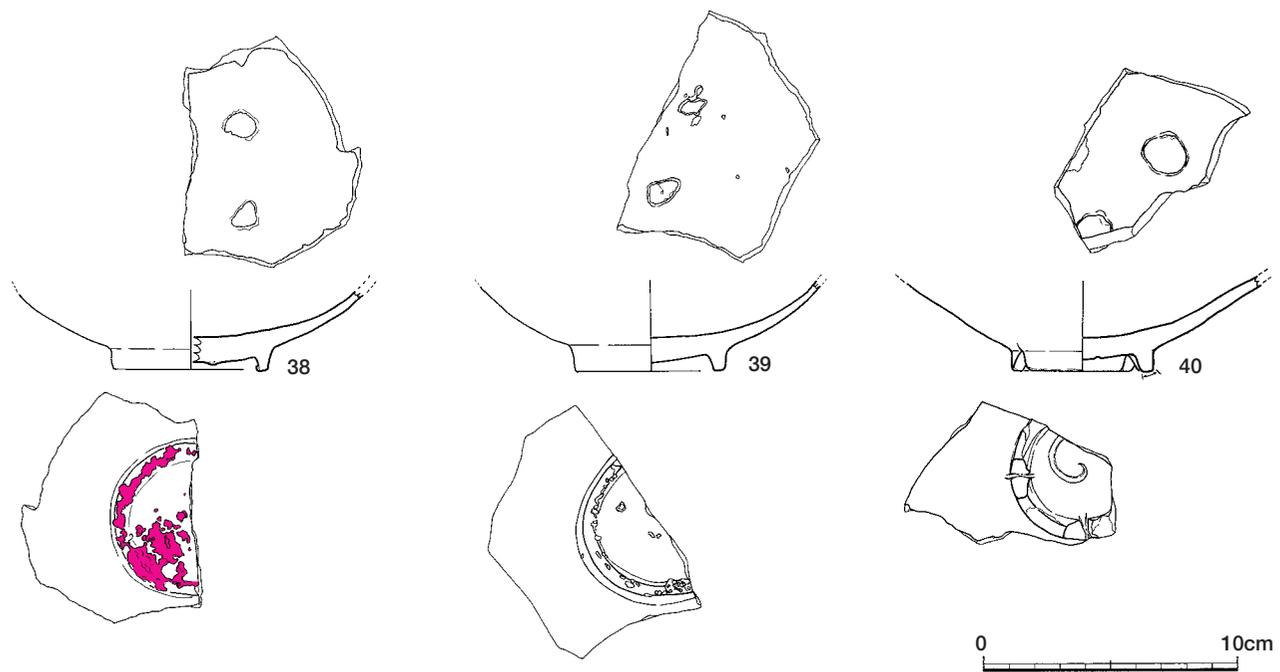
32は、畳付と外面腰部に貝目が残るもので、内面は削り出しにより、渦巻き状の稜線が残る。また、透明釉には細かい貫入も入る。33は、畳付に胎土目が残るものである。内面は灰が被る。34は、見込みに他製品の高台が

熔着し、貝目も残る資料で、畳付にも胎土目が熔着する。

35は、畳付に僅かに胎土目が看取されるものである。器体が腰部でやや屈曲するため、外面に稜が入る。36は、見込みに褐色の窯壁の一部と思われる塊が熔着し、畳付には胎土目が付着するものである。37は、畳付に胎土目が残るものである。

第103表 物原1 遺物観察表4

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
32	碗	物原1 4 D	—	5.4	—	灰褐色	無釉	—	
33	碗	物原1 4 E	—	5.3	—	灰白色	透明釉 灰緑色	畳付以外全面施釉	畳付に貝目
34	碗	物原1 2 D	—	5.6	—	灰白色	透明釉 緑色	畳付以外全面施釉	畳付に砂粒付着
35	碗	物原1 4 F	—	4.8	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	
36	碗	物原1 4 F	—	6.3	—	浅黄色	透明釉 緑色	畳付以外全面施釉	見込みに粘土付着 畳付に砂粒付着
37	碗	物原1 4 F	—	5.0	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	



第190図 物原1 出土遺物(6)白色陶胎 皿

白色陶胎 皿 (第190図)

38～40は、口縁部が欠損しているが、皿になる資料である。

高台は、白色陶胎の碗と同様に削り高台である。胎土は、白色又は淡黄白色で、やや粘質性に欠け、微細な砂粒も多く含まれる。釉は、畳付を除き透明釉が総釉でかかる。

38は、見込みに胎土目が残るもので、畳付と高台内面には白色の砂粒混じりの胎土目が付着する。

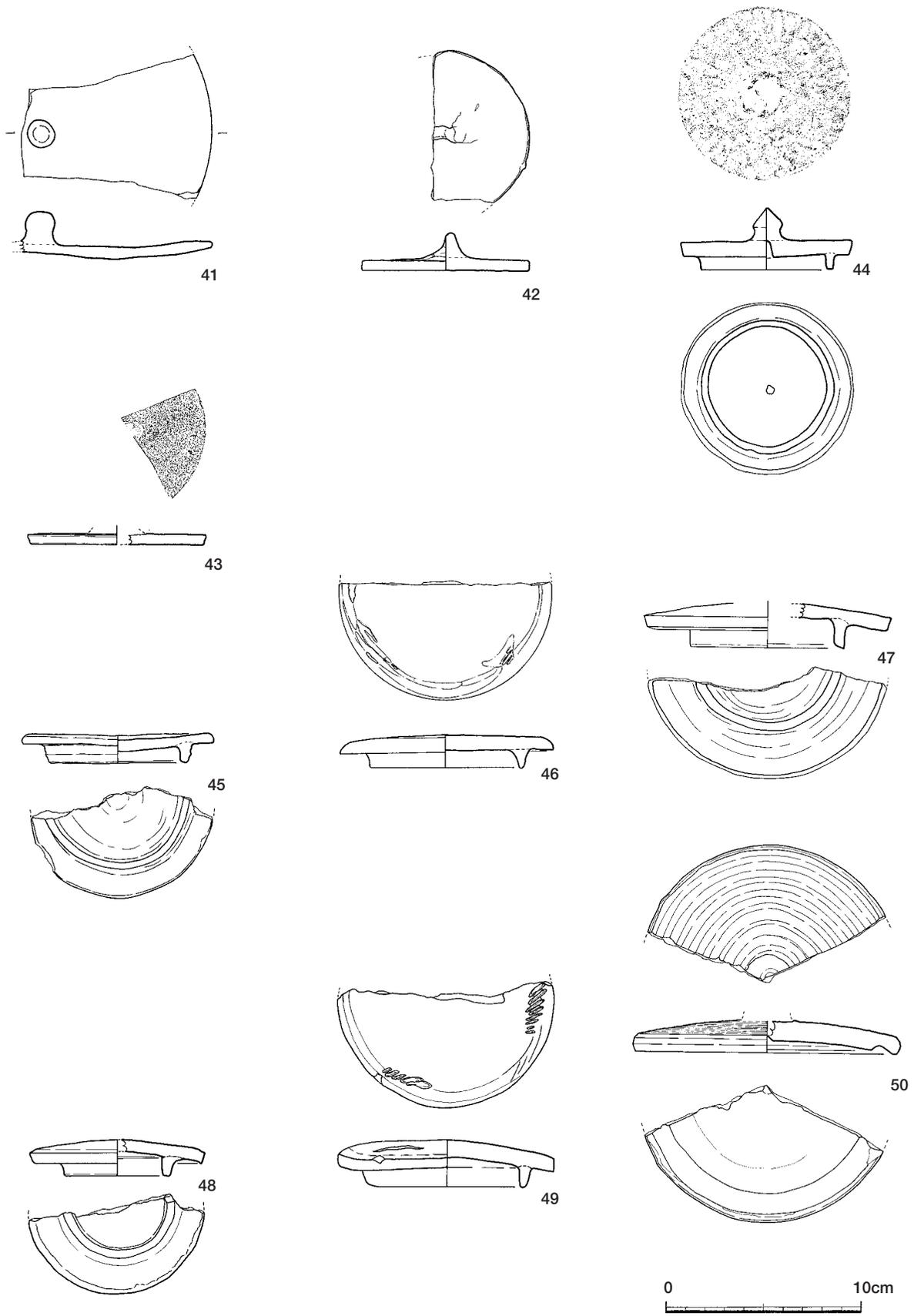
39は、見込みと畳付に胎土目が残る。

40は、見込みに大きめの胎土目が看取されるものである。高台は削り高台を呈し、高台内面には巴状の削り出しが見られる。



第104表 物原1 遺物観察表 5

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
38	皿	物原1 2 D	—	6.2	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	見込みに胎土目 畳付に砂粒付着
39	皿	物原1 2 D E	—	5.8	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	見込みに貝目 畳付に砂粒付着
40	皿	物原1 4 D	—	5.6	—	淡黄色	透明釉	畳付以外全面施釉	切り高台 見込みに胎土目



第191図 物原1出土遺物(7)蓋

蓋 (第191・192図)

主に水注等に被せたと考えられ、浅鉢型の器形を呈する蓋以外のものを掲載する。

形状から、平坦な円板形の体部につまみを付けたもの、円板状の体部の下面に、輪状の粘土紐を貼り付け、身受け部をつくるもの、特殊な形状のもの大きく3つに分けることができる。

円板状の器形を呈する資料については、粘土を叩いて平坦に伸ばし、刃の鋭い工具で、円形に切り抜いて作られたものと思われ、蓋の端部にシャープな作りとなっている資料や上面にタタキ目が残る資料がみられる。

41~43は、平坦な円板状の体部につまみを付けたものである。41は、大形のもので、上面中央に丸みを帯びた円柱状のつまみが付くものである。やや歪みが見られる。釉は無釉で、下面には窯道具の痕跡と思われる目跡が残る。42は小形のもので、アーチ状のつまみが中心からややズレた位置に付けられているものである。釉は、無釉である。

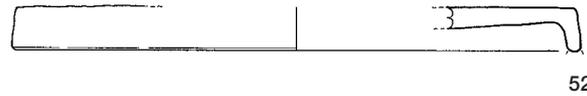
43は小形の資料で、つまみが欠損しているが、アーチ状のつまみが付くものと思われる。無釉である。

44~49は、円板状の体部の下面に、輪状の粘土紐を貼り付け、身受け部をつくるものである。44は、上面中央に宝珠状のつまみが付くもので、下面からつまみに向かって穿孔が施される。上面にはタタキ目の痕跡が明瞭に残る。無釉である。

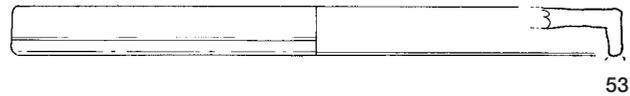
45~49は、上面中央につまみが付かないタイプの資料である。ただし、47は中心部が残存していないためはつきりせず、つまみが付く可能性も考えられる。46・49は、上面端部に貝目が残るものである。また、49は歪みも見られる。47は、胎土が灰色の色調を呈しよく焼き締まった資料である。



51



52



53



54

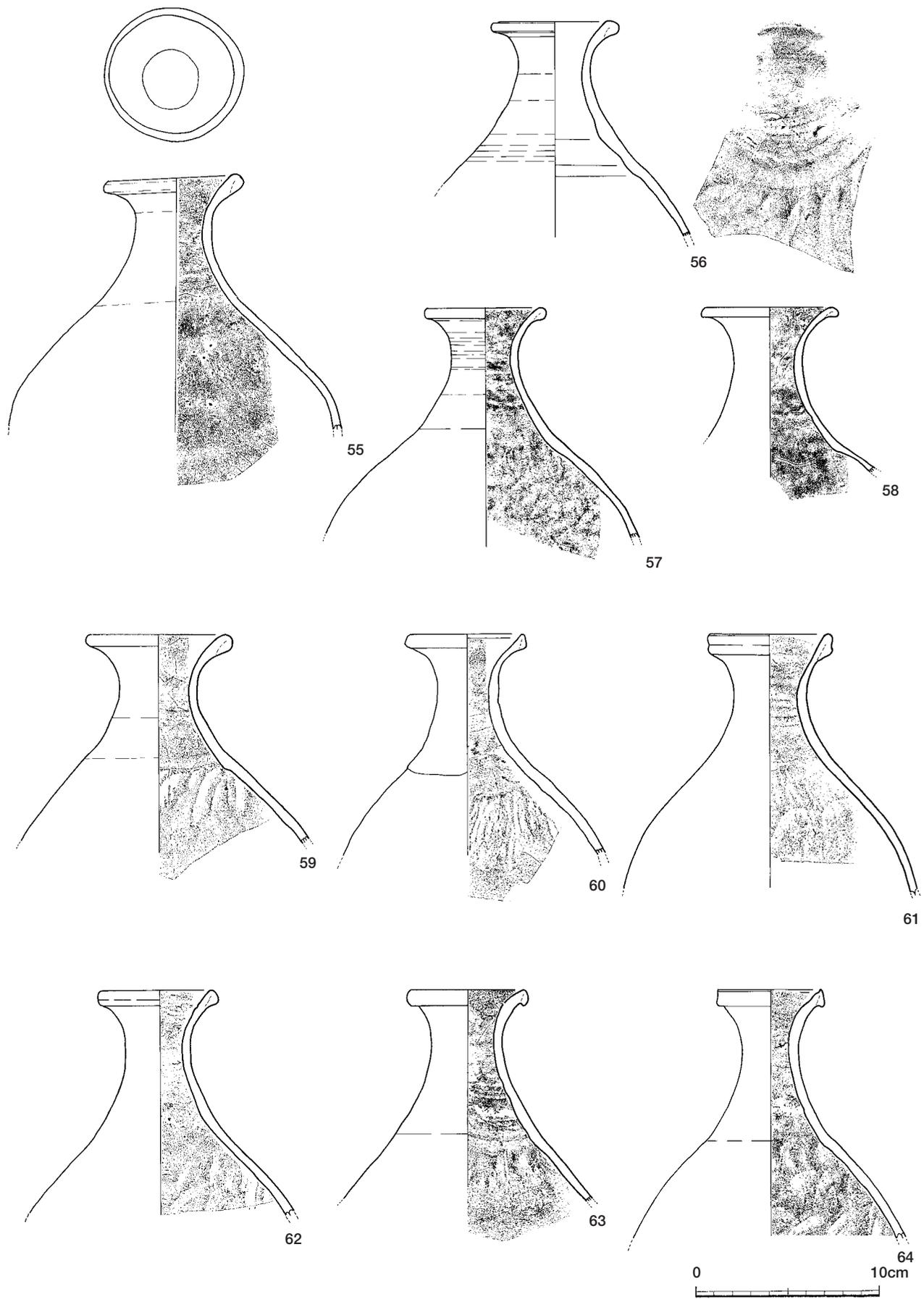


第192図 物原1 出土遺物(8)蓋

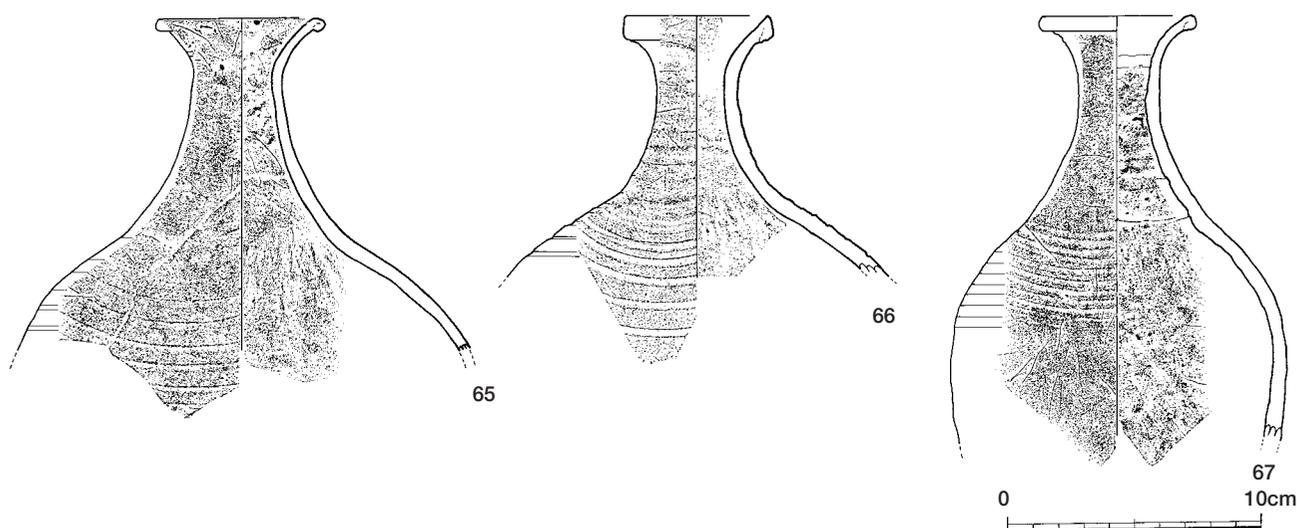
50~54は、その他の形状のものである。50は、身受け部を溝状に抉ってつくるもので、上面にはつまみが付いていた痕跡が残る。また、ヘラ状工具による調整痕も明瞭に看取される。51は、身受け部をつくらないもので、釉は上面のみ施釉される。52~54は、蓋としたが大皿の可能性も考えられる資料である。盆を伏せたような形状を呈し、釉は口唇部以外全面に施釉される。53は、上面に貝目残り、54は中心部に歪みが見られる。

第105表 物原1 遺物観察表6

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
41	蓋	物1 2 D	18.0	—	2.3	にぶい橙色	無釉	—	
42	蓋	物1 3 C	8.6	—	2.0	灰色	無釉	—	
43	蓋	物1 3 D E	9.1	—	0.6	黄灰色	無釉	—	
44	蓋	物1 D物	6.8	8.8	3.1	褐灰色	無釉	—	上面にタタキ目 内面に穿孔
45	蓋	物1 2 E	7.2	9.8	1.6	にぶい橙色	無釉	—	
46	蓋	物1 D	7.8	11.0	1.8	赤灰色	灰釉 灰赤色	上面のみ施釉	上面に貝目
47	蓋	物1 3 E	7.9	12.6	—	黄灰色	無釉	—	
48	蓋	物1	5.4	—	1.8	橙色	無釉	—	
49	蓋	物1 4 G	8.2	11.0	2.4	灰褐色	灰釉 暗赤褐色	上面のみ施釉	上面に貝目
50	蓋	物1 2 E	13.4	—	—	灰赤色	無釉	—	
51	蓋	物1 2 D	—	24.6	2.0	にぶい灰褐色	鉄釉 黒緑色	上面一部のみ施釉	
52	蓋	物1	22.4	—	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
53	蓋	物1 2 E	24.0	—	1.9	灰黄色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	上面に貝目
54	蓋	物1 3 E	23.0	22.2	2.2	にぶい褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	



第193図 物原1出土遺物(9)德利



第194図 物原1出土遺物(10)德利

德利 (第193~198図)

德利は大量に出土している。形状としては、「舟德利」型ものが中心であるが、「鶴首」型と呼ばれる頸部が細長く肩部がなで肩のものも見られる。これは、肥前系磁器の德利を模造したものと思われる。その他に、器壁が厚く、口縁部が肥厚した形状の資料もみられる。

器形や口縁部の形状により、大きく3つに分けることができる。また、その後に胴部から底部のみの資料を掲載した。

55~67は、「舟德利」と呼ばれる形状を呈するもので、

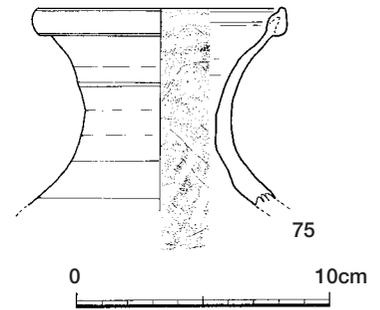
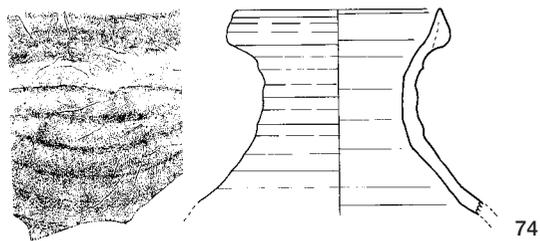
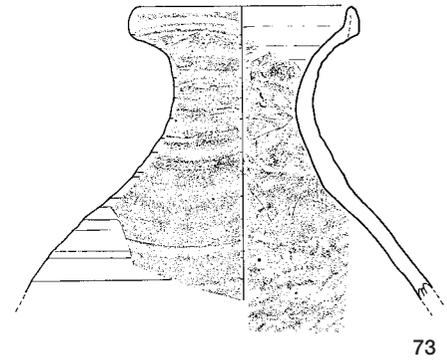
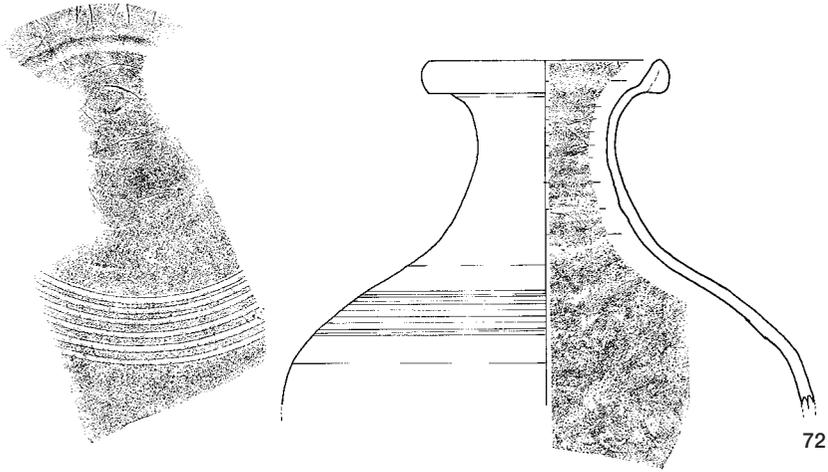
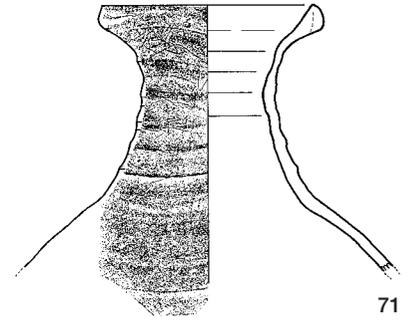
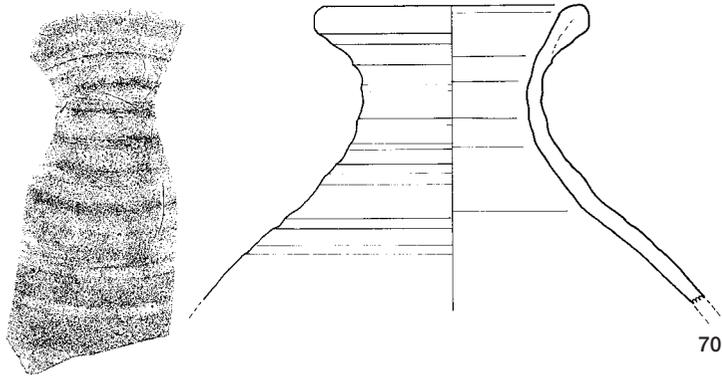
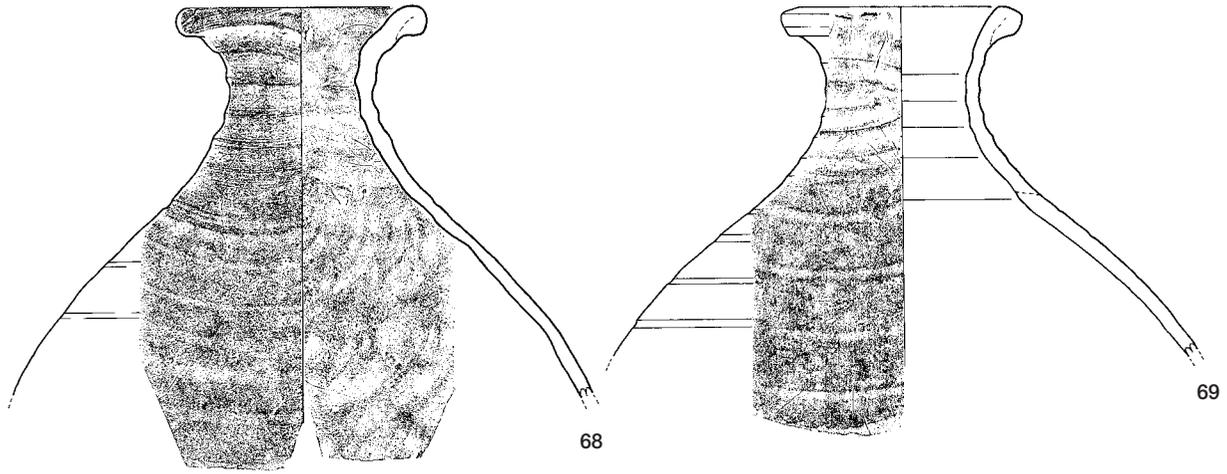
外面の沈線の有無により、さらに2つに細分化できる。

55~64は、外面肩部に沈線を有しない資料である。口縁部は端部で外反し、丸くおさめるが、60~62のように玉縁状を呈するものや、63・64のように玉縁部がやや下垂気味の資料も見られる。内面には同心円状のタタキ目残り、頸部には筋状のナデ調整の痕跡が残る。

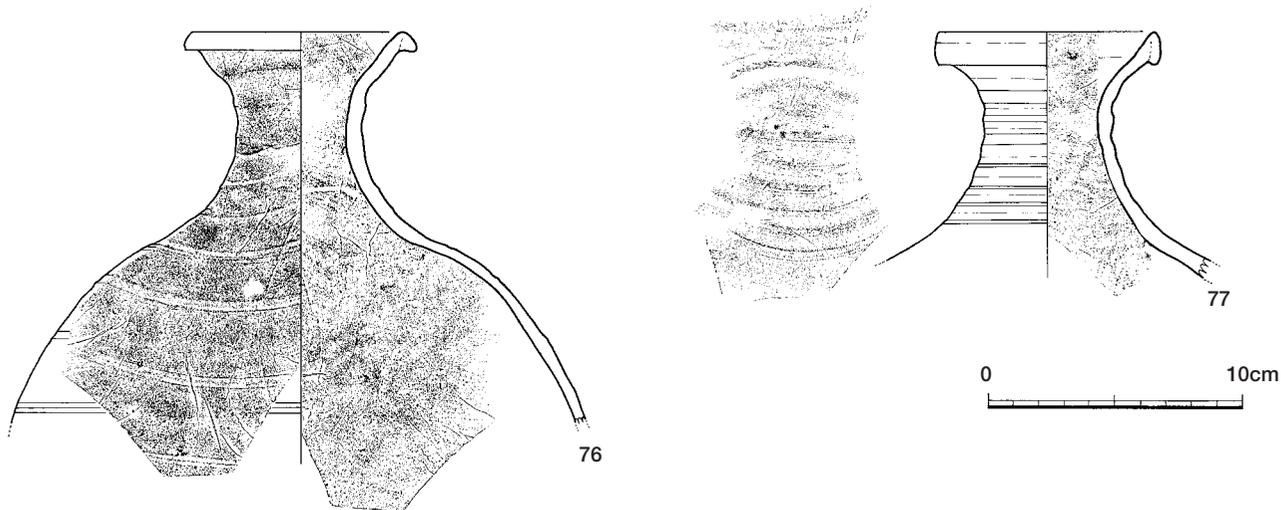
65~67は、外面肩部に沈線が巡る資料である。口縁部は、65・67は丸くつくられ、66は玉縁状を呈する。内面には同心円状のタタキ目が残る。

第106表 物原1 遺物観察表7

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
55	德利	物原1 4 E	7.5	—	—	灰色	灰釉 暗褐色	残存部全面施釉	
56	德利	物原1 3 F	7.0	—	—	灰黄褐色	灰釉 灰緑色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	
57	德利	物原1 3 E	6.5	—	—	灰褐色	灰釉 緑黒色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	
58	德利	物原1 3 F	7.4	—	—	黄灰色	灰釉 黒色	残存部全面施釉	
59	德利	物原1 3.4 E F	8.0	—	—	灰褐色	鉄釉 褐灰色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
60	德利	物原1 2.3 F	6.2	—	—	灰黄褐色	灰釉 灰黄褐	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	内面に同心円状タタキ目
61	德利	物原1 3 F	6.8	—	—	灰黄褐色	灰釉 黒褐色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	内面に同心円状タタキ目
62	德利	物原1 4 F	6.2	—	—	灰白色	灰釉 灰白色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	内面に同心円状タタキ目
63	德利	物原1 3 F	6.6	—	—	浅黄色	灰釉 褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
64	德利	物原1 3 E	5.8	—	—	にぶい黄褐色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
65	德利	物原1 3 F	6.6	—	—	暗灰黄色	灰釉 灰褐色	外面と内面一部施釉	内面に同心円状タタキ目
66	德利	物原1 4 E	5.8	—	—	褐灰色	灰釉 褐灰色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	
67	德利	物原1 2.3 F	5.6	—	—	にぶい橙色	鉄釉 黒褐色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	内面に同心円状タタキ目



第195図 物原1出土遺物(1)德利



第196図 物原1出土遺物(12)徳利

68～77は、大形で器壁が厚く、口縁部が肥厚した形状の資料である。口縁部の形状や外面の沈線の有無によりさらに細分化することができる。

68～70は、口縁端部を外側に折り返して丸くおさめるものである。外面は、沈線が巡る。内面は、68のように同心円状のタタキ目が明瞭に残るものもあるが、69・70は不鮮明である。

71～74は、口縁部が玉縁状につくられるもので、外面には沈線が巡る。71を除き、内面には同心円状のタタキ目が残る。72はやや肩部が張るものである。

73は、口縁部が玉縁状のもの先端を、上方へ引き伸

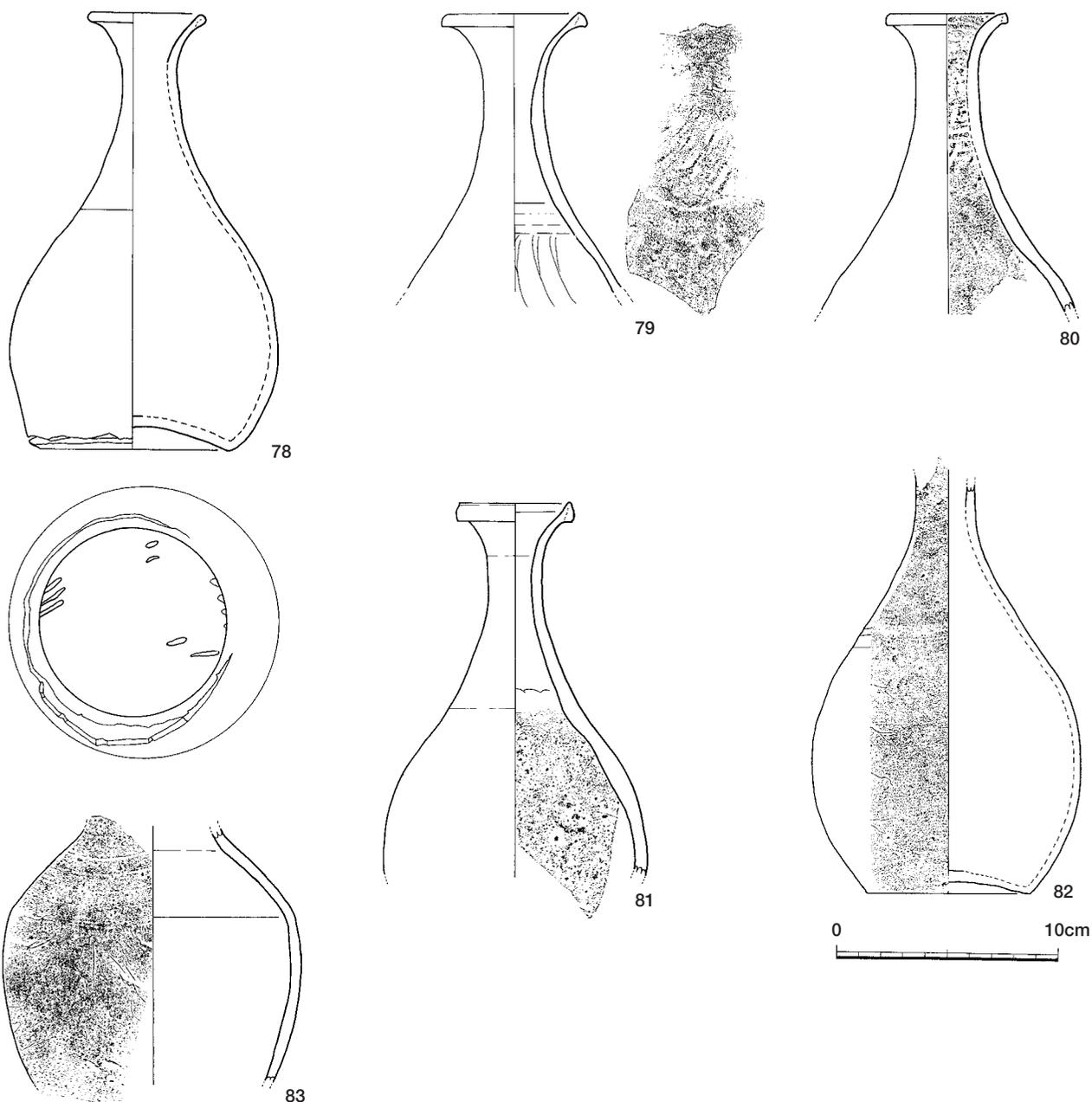
ばした形状を呈する。外面には沈線が巡り、内面にはタタキ目が残る。

74・75は、口縁端部が玉縁状を呈するもので、残存部が口縁部から頸部までのため、沈線の有無については不明である。

76・77は、玉縁状につくられた口縁部がやや下垂するものである。76は、外面に沈線が巡り、内面にはタタキ目が残る。77は、外面頸部に轆轤成形によるナデ調整の痕跡が筋状に残り、内面は筋状の調整痕とタタキ目が残る。

第107表 物原1 遺物観察表 8

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
68	徳利	物原1 4 E	9.8	—	—	赤褐色	灰釉 灰黄褐色	口唇部の一部以外施釉	内面に同心円状タタキ目
69	徳利	物原1 3 F	9.6	—	—	灰黄褐色	灰釉 灰緑色	残存部ほぼ全面施釉	
70	徳利	物原1 3 F	10.8	—	—	灰褐色	灰釉 黄褐色	残存部全面施釉	
71	徳利	物原1 2 E	8.9	—	—	灰褐色	灰釉 緑黒色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	
72	徳利	物原1 2 E	9.8	—	—	灰黄褐色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
73	徳利	物原1 4 F	8.8	—	—	にぶい黄褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	
74	徳利	物原1 3 E	8.8	—	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	
75	徳利	物原1 4 E	10.0	—	—	褐灰色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	
76	徳利	物原1 3 F	9.1	—	—	灰色	灰釉 にぶい赤褐色	外面全面施釉	
77	徳利	物原1 4 E	8.6	—	—	褐灰色	灰釉 黄灰色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	



第197図 物原1出土遺物(13)徳利

78～83は、「鶴首」型と呼ばれる頸部が細長く、肩部がなで肩の形状のものである。

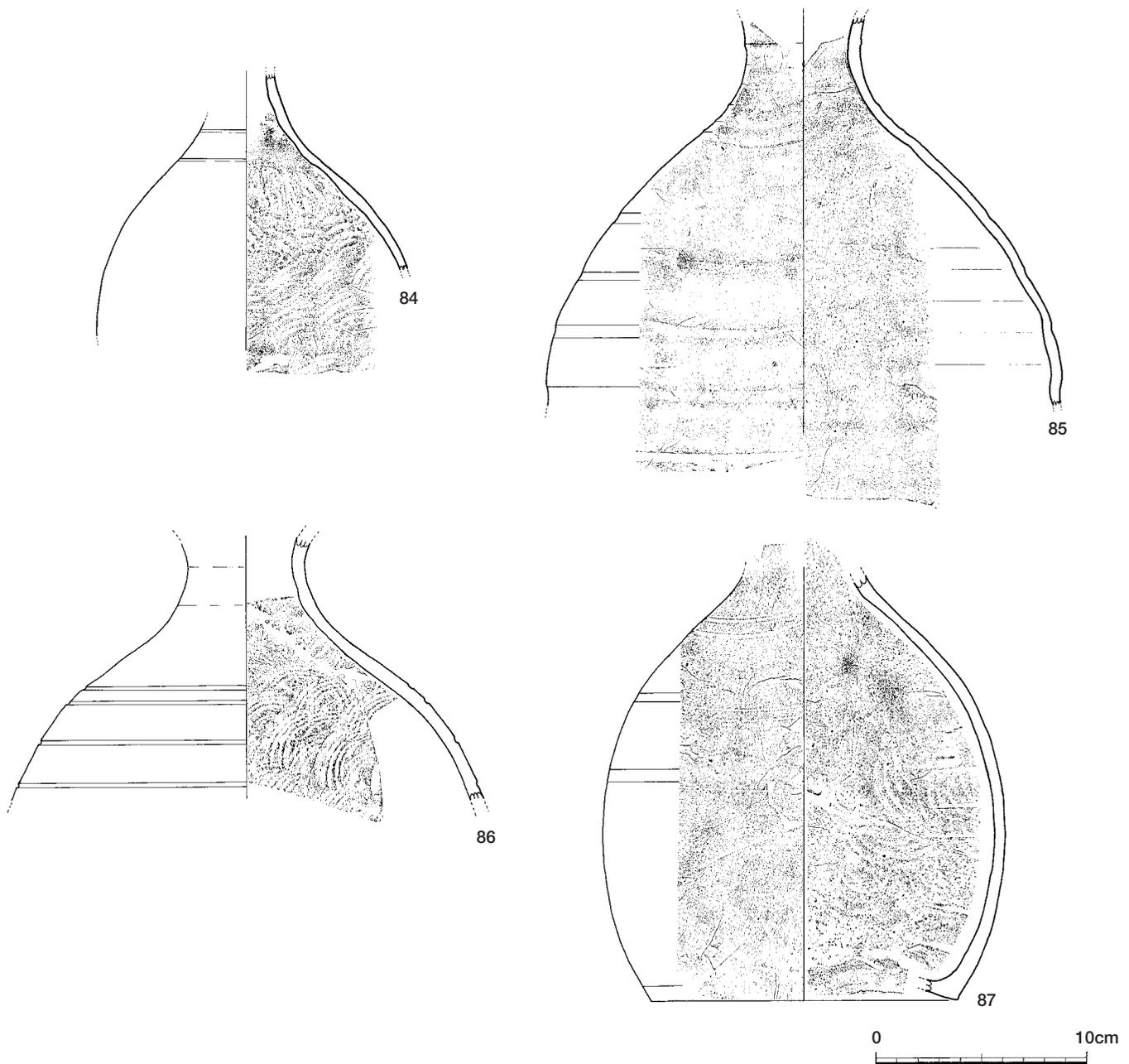
78～80は、口縁部を丸くおさめるものである。

78はやや焼き歪みが見られ、底部と胴部の間に亀裂が

入るものの、ほぼ完形の資料である。外底面には貝目が残る。79～81は、内面に同心円状のタタキ目が残る。82は、外面にヘラ状工具による横方向の調整痕が残る。

第108表 物原1 遺物観察表9

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
78	徳利	物原1	5.3	8.6	19.8	褐灰色	灰釉 灰緑色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	外底面に貝目
79	徳利	物原1 4 F下	6.6	—	—	褐灰色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
80	徳利	物原1 3 E	5.6	—	—	灰黄褐色	灰釉 にぶい黄橙色	残存部全面施釉	
81	徳利	物原1 3 F	5.4	—	—	にぶい黄橙色	灰釉 灰緑色	外面全面と内面口縁部から頸部まで施釉	
82	徳利	物原1 2 D		7.4	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	外面全面と口縁内部施釉	
83	徳利	物原1 2 E		—	—	灰褐色	灰釉 黄灰色	残存部全面施釉	



第198図 物原1出土遺物(14)徳利

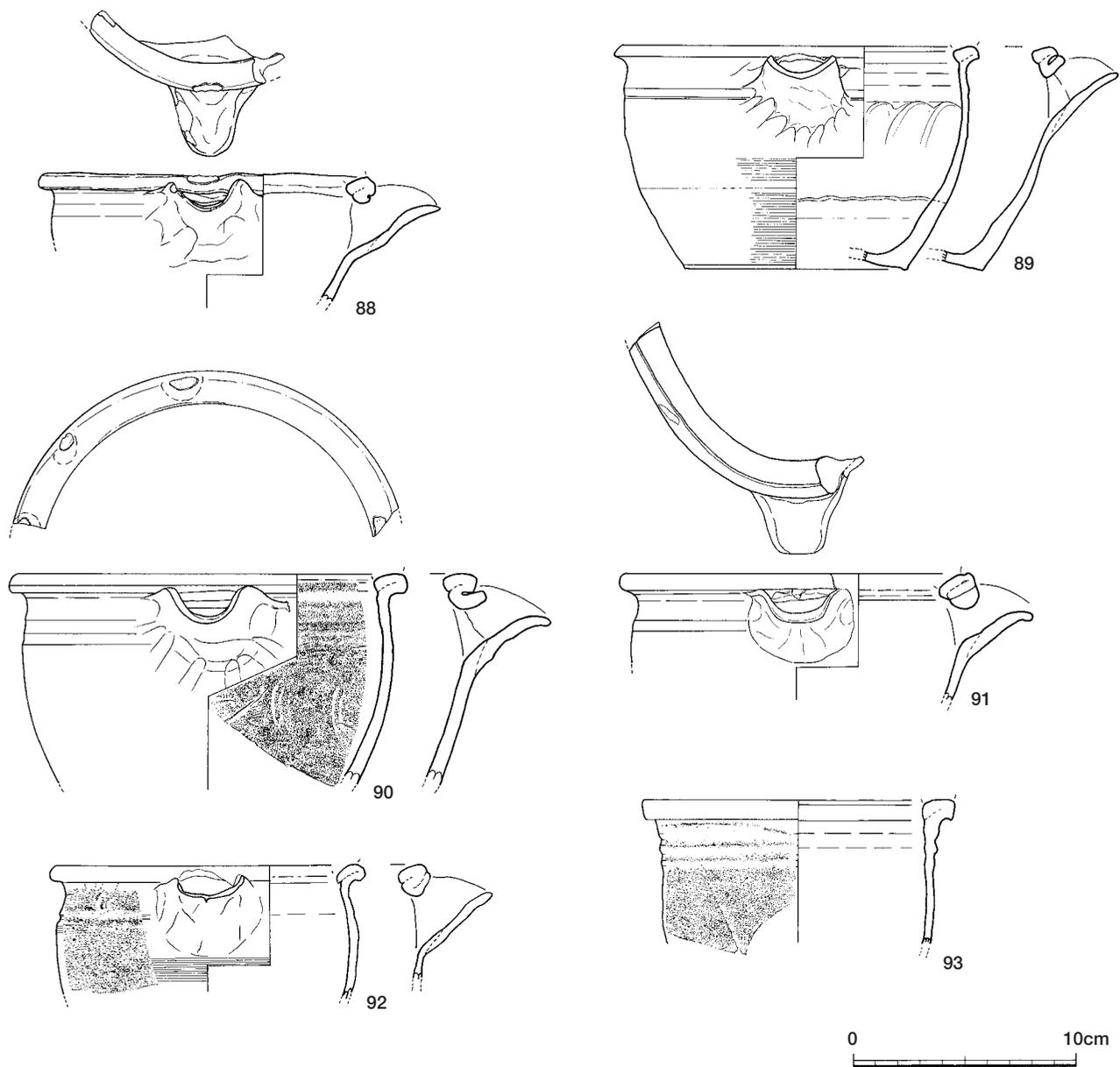
84～87は、胴部から底部のみの資料である。

どの資料も、内面には、タタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。84は、外面肩部に沈線が2条巡る。85は、粘土紐を輪積みにして成形した際のつなぎ目部分

が、沈線状に残る。86は、肩部に4条の沈線が巡るが、胴部全体に巡るものであるかは不明である。87は肩部から胴部にかけて沈線状の凹みが3条が巡る。

第109表 物原1 遺物観察表10

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
84	徳利	物原1 4 E	—	—	—	褐灰色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	
85	徳利	物原 3 E	—	—	—	灰色	灰釉 灰赤色	残存部外面のみ施釉	
86	徳利	物原1 4 E	—	—	—	褐灰色	灰釉 にぶい黄橙色	残存部外面のみ施釉	内面に同心円状タタキ目
87	徳利	物原1 2 D	—	15.0	—	灰色	灰釉 灰緑色	内底面付近以外残存部施釉	



第199図 物原1 出土遺物(15)片口

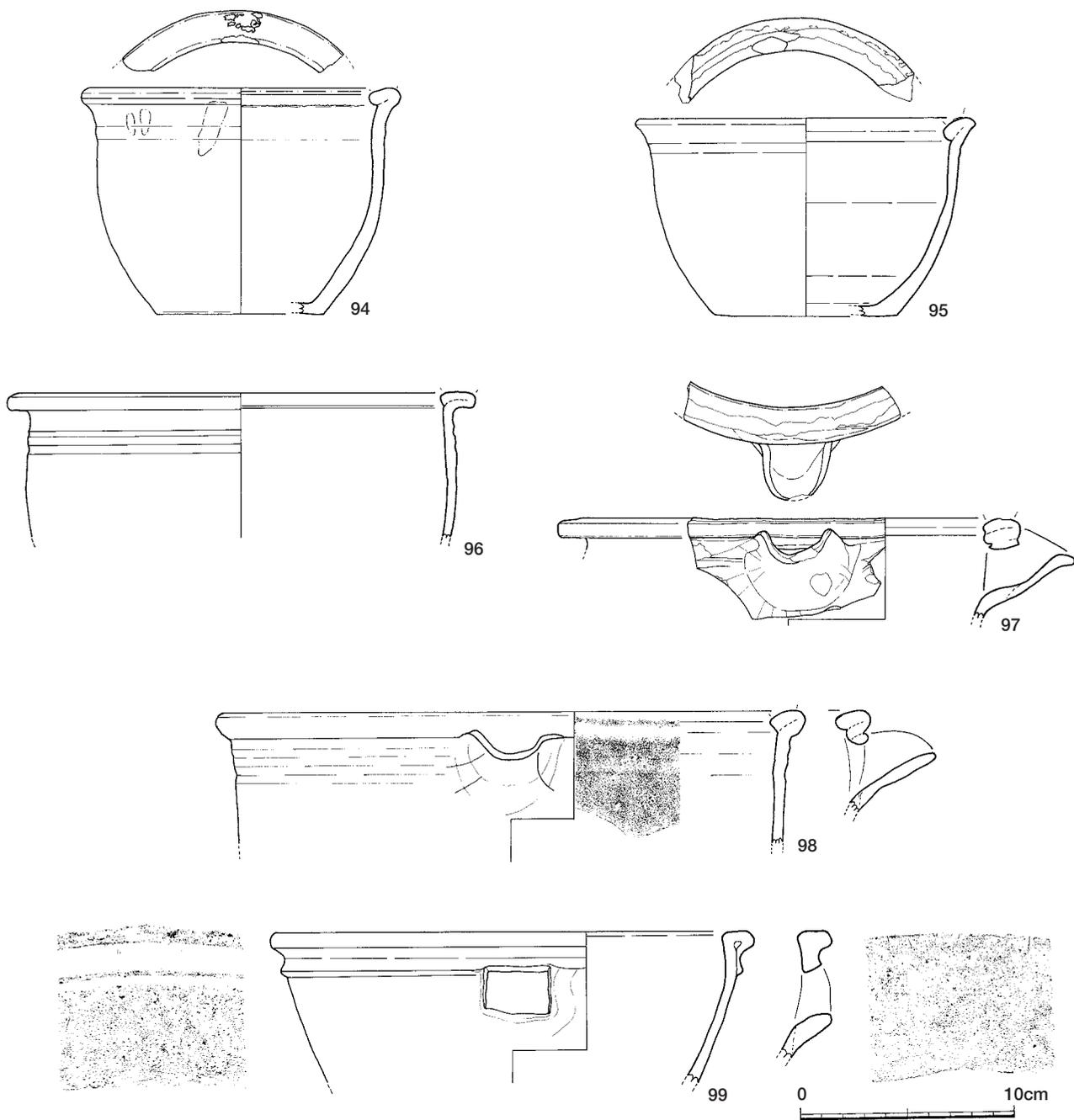
片口 (第199・200図)

口縁部は端部で外側に折り、さらに内側に折り返して丸くつくられるものがほとんどであるが、一部例外的なものも見られる。口径の大きさにより、15cm前後のものと20前後のもの大きく2つに分けることができる。

88～95は、口径が15cm前後のものである。88は、口唇部に貝目が残るものである。89は、外面にヘラ状工具による横方向の調整が施されるもので、内面にはタタキ目が残る。90は、小形に分類したがやや大きめの資料である。口唇部に胎土詰貝目、内面にタタキ目が残る。91は口縁に焼き歪みが見られる。92は外面に細い筋状の調整痕が残るものである。93は、外面口縁下位に2条の浅い凹線が巡るもので、胴部には平行タタキ目の痕跡が見ら

れる。94・95は、口縁部の屈曲が弱いものである。口唇部には貝目残り、95は、合わせ口で焼成したものと思われ、口唇部に他製品の一部が熔着する。

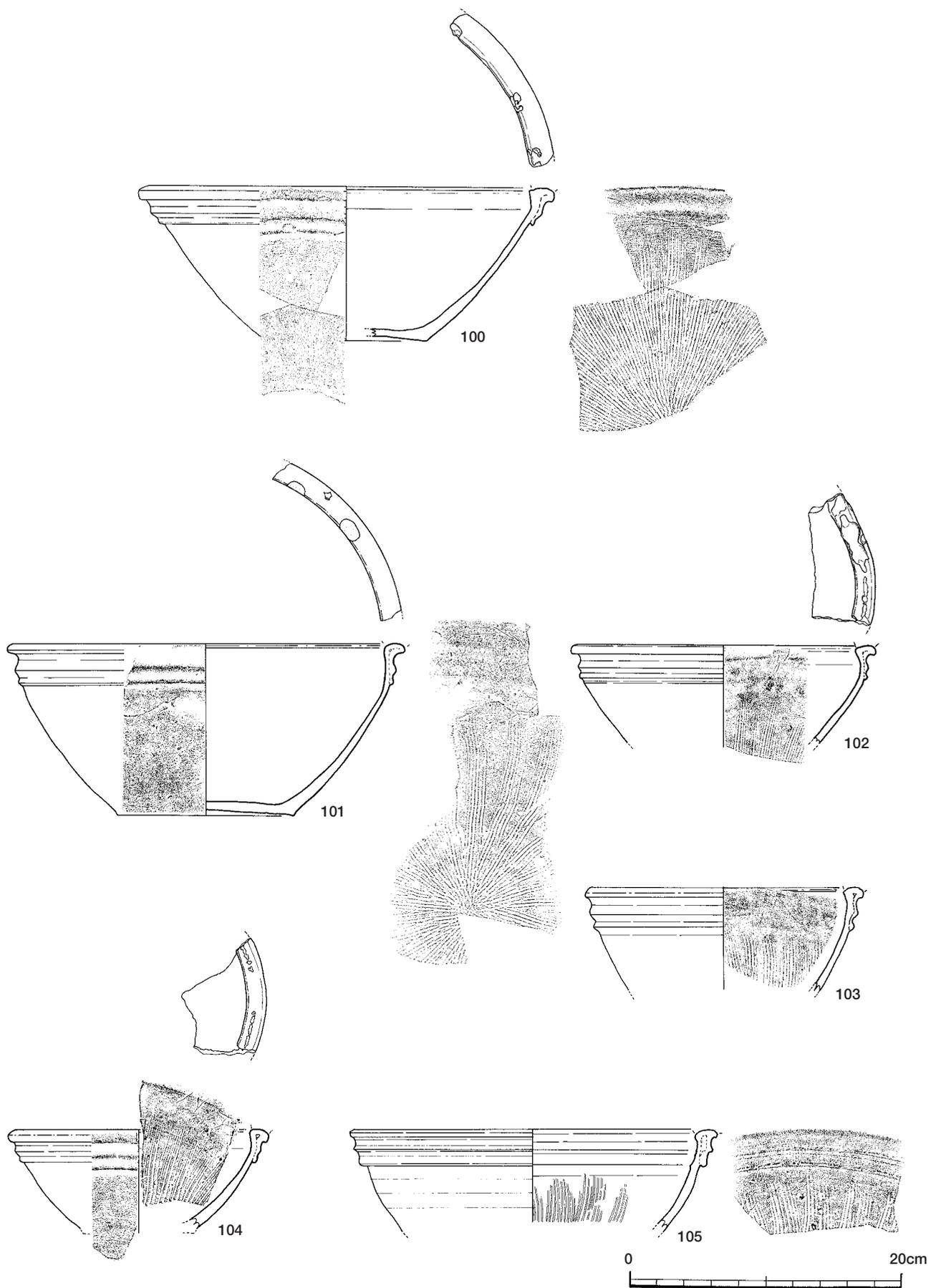
96～99は、口径が20cm前後のものである。96・98は、外面口縁下位に2条の凹線が巡る。99は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、1条の突帯を巡らせるものである。片口部は、外面から粘土を貼り付けて肥厚させ、鋭い刃物状のもので方形に切りぬいてつくられる。釉は、無釉である。



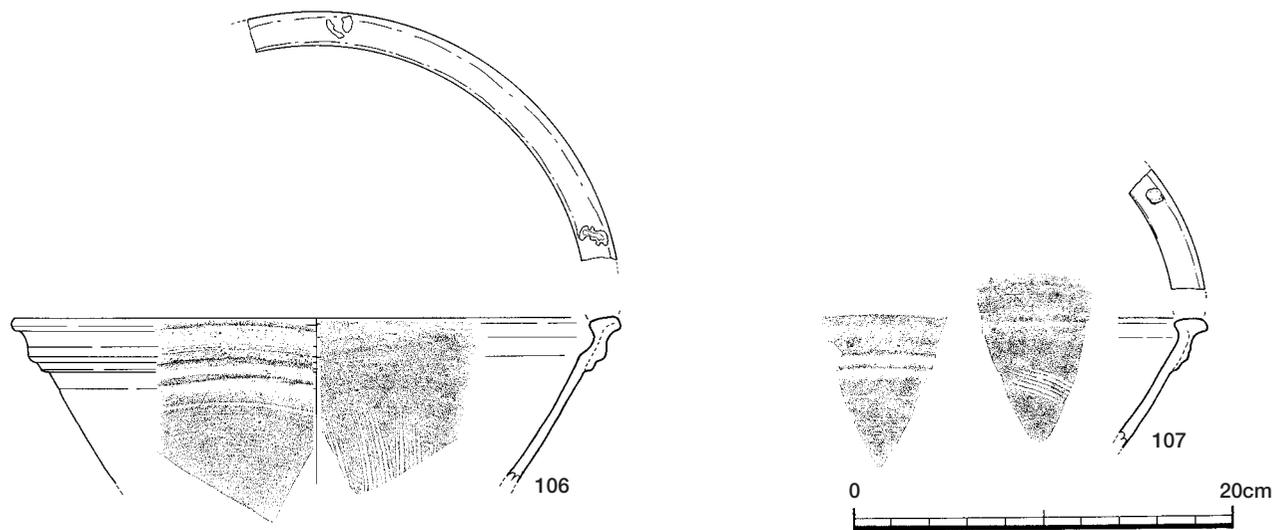
第200図 物原1出土遺物(16)片口

第110表 物原1 遺物観察表11

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
88	片口	物原1	15.2	—	—	暗灰黄色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
89	片口	物原1 2 D	16.4	10.0	10.0	褐灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目?
90	片口	物原1 2 D	18.0	—	—	灰褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面タタキ目
91	片口	物原1 4 D	16.0	—	—	灰黄色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	
92	片口	物原1 3 E	14.2	—	—	黄灰色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	内面同心円状タタキ目
93	片口	物原1 4 D	14.1	—	—	灰緑色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	
94	片口	物原1 3 DE	15.0	7.9	10.5	褐色	灰釉 にぶい黄橙色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
95	片口	物原1 4 E	16.0	8.6	9.2	灰黄色	灰釉 灰褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
96	片口	物原1 4 D	22.0	—	—	褐灰色	灰釉 暗灰黄色	口唇部以外全面施釉	
97	片口	物原1 3 G	21.6	—	—	灰黄色	灰釉 暗赤褐色	口唇部以外全面施釉	
98	片口	物原1 2 D	27.6	—	—	灰黄色	灰釉 灰赤色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
99	片口	物原1 4 F	22.6	—	—	暗灰黄色	無釉	—	



第201図 物原1出土遺物(17)播鉢



第202図 物原1出土遺物(18)播鉢

播鉢 (第201~206図)

第2地点物原1の播鉢は、一般的な器形として体部が「逆ハ」の字に開く形状を呈する。器壁は厚めで、口縁部は外側に折り返して肥厚させ、外面口縁下位に2~3条の突帯をつくるためさらに厚手となる。大きさは、大形のものがほとんどで、口径が35cm前後のものが多く見られる。口縁端部を外反させるため、口唇部が幅広につくられ、やや丸みを帯びるが平坦なものや丸みを帯びるものが見られる。

口唇部の形状から、大きく2つに分けることができる。

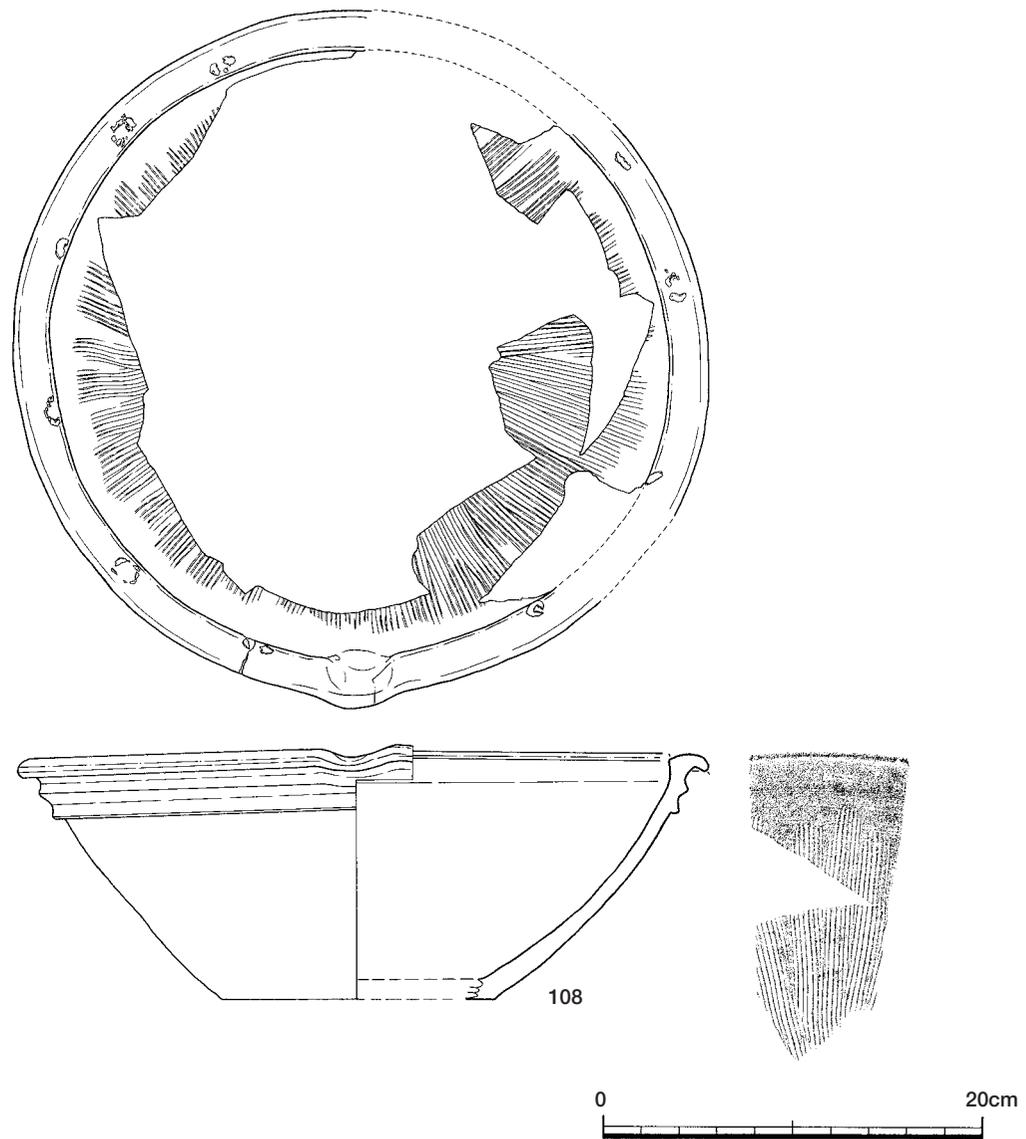
100~110は、口唇部がやや丸みを帯びるが平坦につくられるもので、そのため口唇部の内側に稜を有するものである。口縁部はやや内湾気味につくられる。播り目はやや太めで密に入り、口縁部下位には余白をつくるものが大部分を占める。

100~107は、口縁部がやや丸みを帯びるが平坦につくられ、播り目が太いものである。100・102~106は、内底面中心から太い播り目が密に入り、101は、太い播り目が粗く入る。

100は、口唇部に貝目が残る。101は、口唇部に胎土詰貝目が残る。102は口唇部に、合わせ口で焼成した際その他製品の口唇部の痕跡と貝目が残る。103は、播り目の先端が左方向にややカーブするように入るものである。104は、合わせ口で焼成した痕跡が僅かに残る。105は、口唇部に貝目は見られない。106は、外面にヘラ状工具による調整痕が筋状に看取される。口唇部には貝目が残る。107は、小片のため詳細は不明であるが、内面に斜め方向の播り目が入るものである。口唇部には胎土詰貝目が残る。

第111表 物原1 遺物観察表12

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
100	播鉢	物原1 4 F	30.6	12.0	11.3	灰褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
101	播鉢	物原1 2 D	29.2	13.0	12.6	暗赤灰色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
102	播鉢	物原1	22.0	—	—	灰白色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
103	播鉢	物原1 2 E	20.6	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	
104	播鉢	物原1	19.2	—	—	灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	
105	播鉢	物原1 3 E	27.2	—	—	灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
106	播鉢	物原1 4 E	32.2	—	—	明赤褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
107	播鉢	物原1	—	—	—	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第203図 物原1出土遺物(19)播鉢

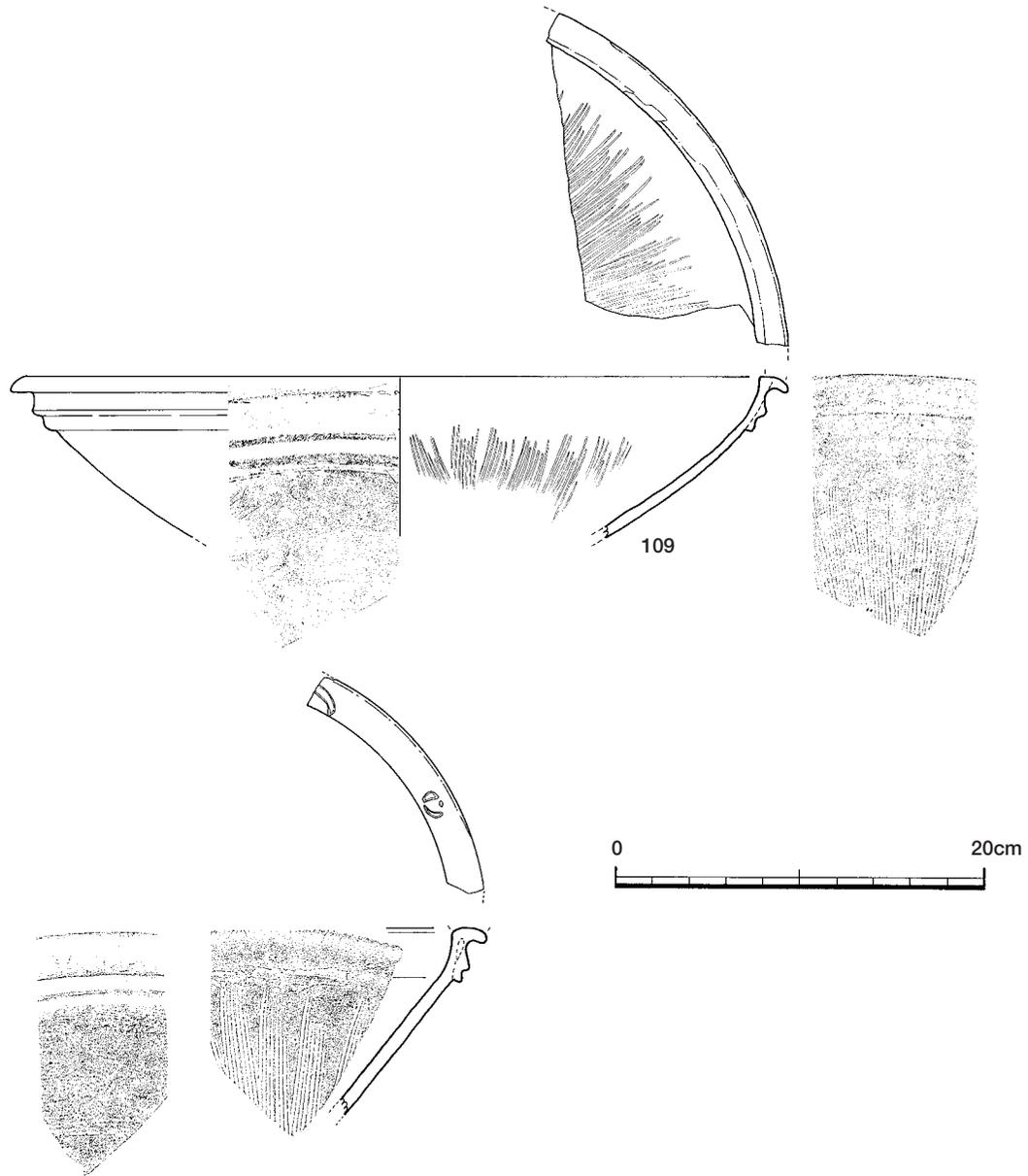
108~110も、口唇部がやや丸みを帯びるが平坦につくられるもので、そのため口唇部の内側に稜を有するものであるが、100~107と比較して、口唇部が平坦で、口縁部の先端もより外反するものである。

播り目は、やや太めで密に入り、口縁部下位で余白を残す。

胎土は密であるが、焼成不良のためか鈍い橙色気味の色調を呈する。

108は、胴部以下はほとんど残っておらず、口縁部は一部を除きほぼ復元できた資料である。口唇部に小形の貝目が看取される。外面胴部下位は、ヘラ状工具により削り調整が施されているものと思われる。また、平行タタ

キ目の痕跡が僅かに看取される。釉は、薄い灰釉が、口唇部を除き全面に施釉される。外底面は残存していないが、外底面もかかるものと思われる。



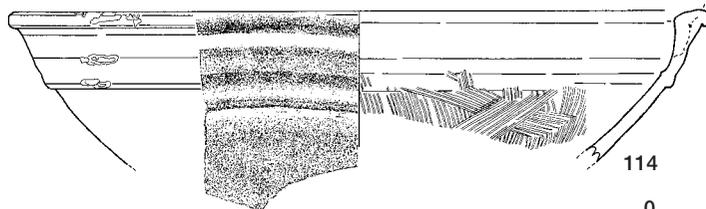
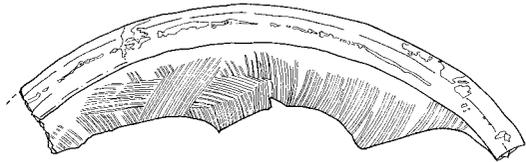
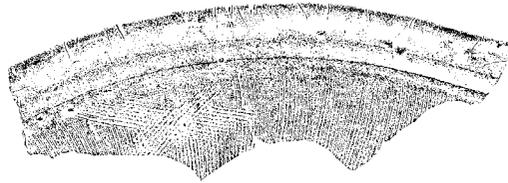
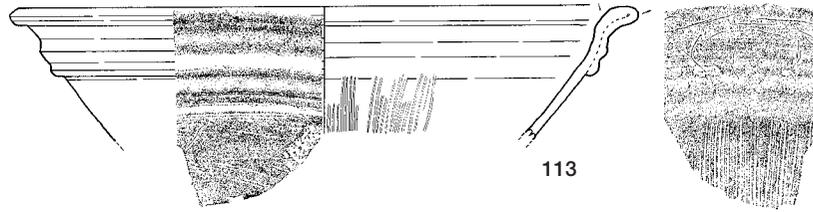
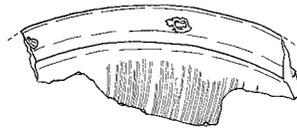
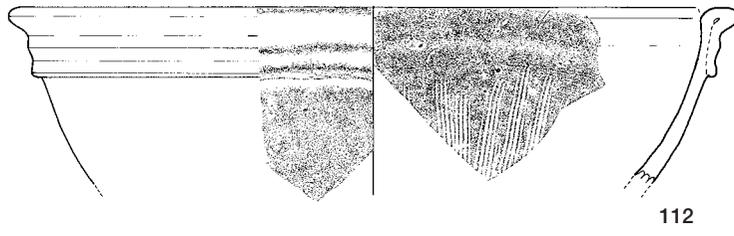
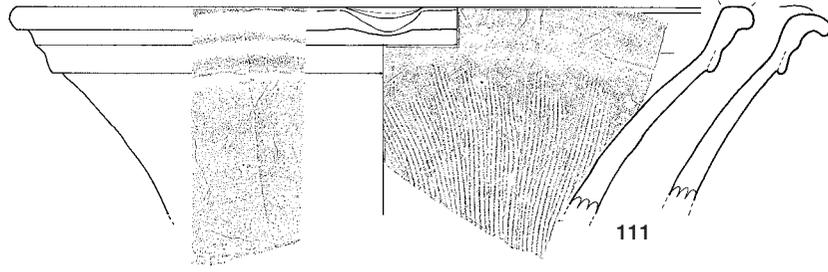
第204図 物原1出土遺物(20)播鉢

109は、焼き歪みが激しい資料である。そのため胴部の傾きがやや急となり、器形が変形しているものと思われる。外面には、ヘラ状工具による調整痕が看取され、突帯下位には平行タタキの痕跡が残る。釉は、口唇部を除き、薄い灰釉が残存部全面に掛けられ、口唇部には貝目は付かない。

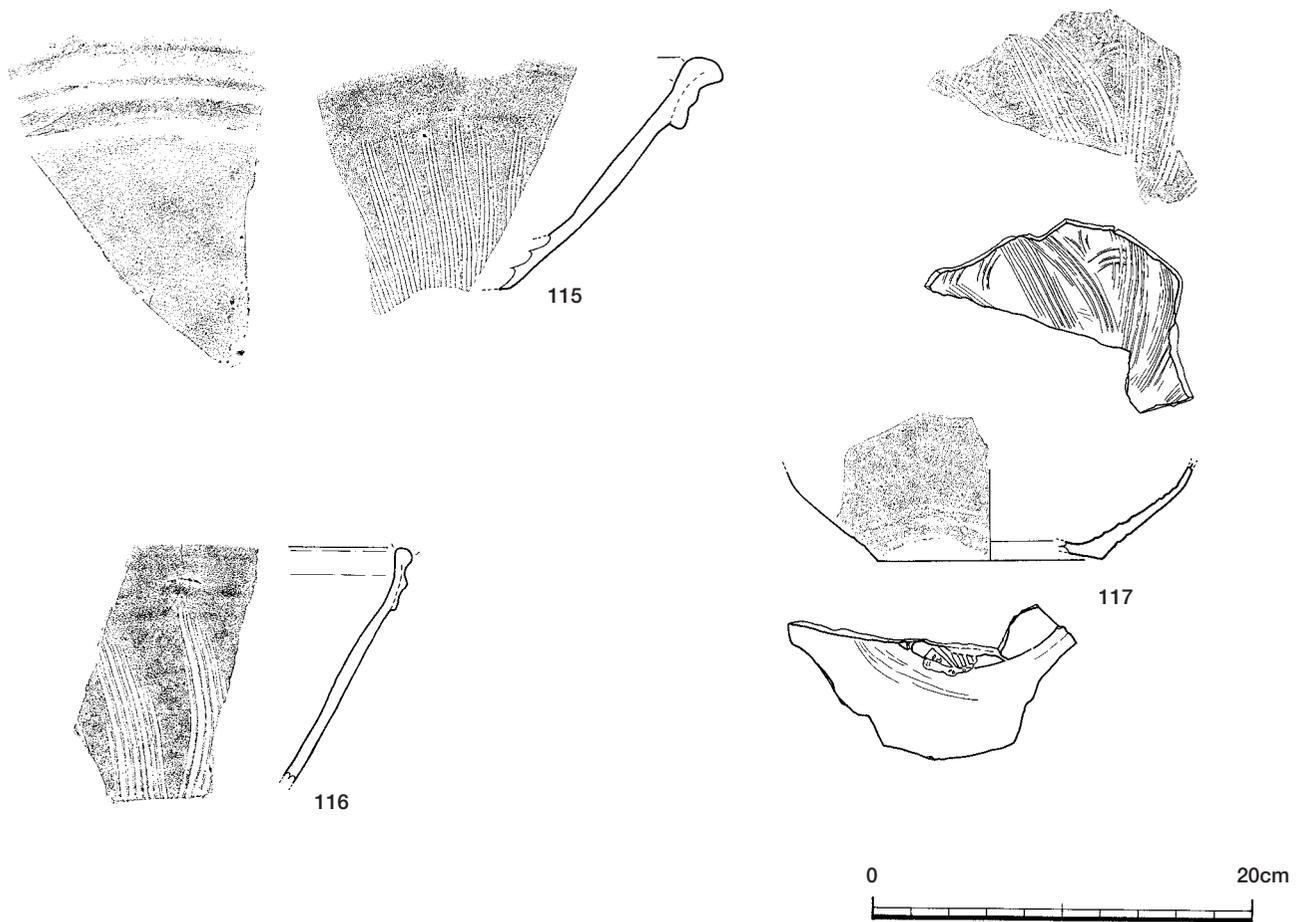
110は、外面にヘラ状工具による調整痕が看取されるもので、口唇部には貝目も残る。釉は、口唇部を除き残存部に掛けられるが、一部内面口縁下位に釉が禿げたような部分が見られる。

第112表 物原1 遺物観察表13

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
108	播鉢	物原1 2 D	36.0	—	12.5	橙色	灰釉 褐灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
109	播鉢	物原1 3 F	42.2	—	—	にぶい橙色	灰釉 浅黄色	口唇部以外残存部は全面施釉	外面に平行タタキ目
110	播鉢	物原1	29.6	—	—	明赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外残存部は全面施釉	口唇部に貝目 外面に平行タタキ目



第205図 物原1出土遺物(2)播鉢



第206図 物原1出土遺物(22)播鉢

111~115は、口唇部が丸みを帯びるものである。このタイプの口唇部の内側には、稜は見られない。全体的に器壁が厚く、口縁部が折り返して突帯をつくるためさらに厚くなる。播り目はやや太く、密に入る。

111・112は、焼成不良のためか釉が熔けきっておらず、胎土も鈍い橙色気味の色調を呈する。どちらも口唇部に貝目は付かない。111は外面に、横方向の筋状の調整痕が看取される。113は、口唇部に貝目が残るもので、外面には筋状の調整痕が残る。114は、放射状に施された播り目の上から、斜め左方向と斜め右方向の播り目が交差するように入れられるものである。口唇部には合わせ口

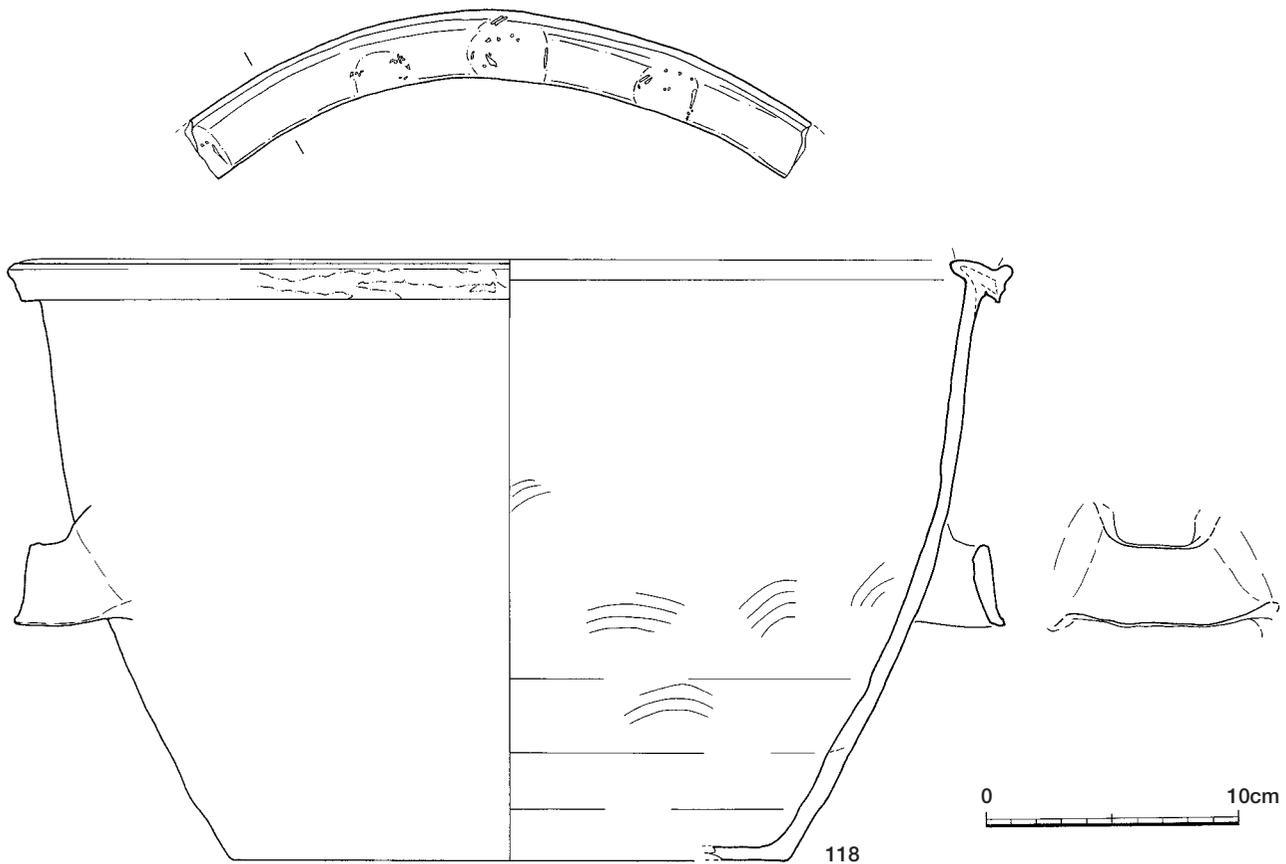
をした痕跡が残る。115は、外面に横方向の調整痕が看取される。

116は、口唇部が丸くつくられるもので、このタイプの資料は、物原1からはほとんど出土していない。堂平窯の製品の中で古い時期のものであると思われる。

117は、底部のみの資料である。内面には同心円状のタタキ目が看取され、その上から太い播り目が粗く入れられる。外底面には、貝目も残る。

第113表 物原1 遺物観察表14

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
111	播鉢	物原1 3 E	39.2	—	—	にぶい褐色	灰釉 灰黄色	口唇部以外全面施釉	焼成不良
112	播鉢	物原1 3 E	38.6	—	—	にぶい黄橙色	灰釉 にぶい橙色	口唇部以外全面施釉	焼成不良
113	播鉢	物原1 4 E	33.2	—	—	橙色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
114	播鉢	物原1 4 E	37.2	—	—	灰褐色	灰釉 黒緑色	口唇部以外全面施釉	
115	播鉢	物原1 3 E	—	—	—	にぶい黄橙色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
116	播鉢	物原1 4 E	—	—	—	にぶい黄橙色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	
117	播鉢	物原1 5 E	—	12.0	—	灰黄褐色	灰釉 灰緑色	残存部全部釉	外面底部に貝目 タタキ目



第207図 物原1出土遺物(23)把手付甕

把手付甕 (第207・208図)

118~122は、外面胴部上位又は中位に、対に把手が付けられるものである。口縁部の形状は甕と同様であるが、甕とは別にして把手付甕として分類した。

口縁部は外側に折り返して「T」字状につくる。口唇部は、内側を高く外側を溝縁状に仕上げる。把手部分は、胴部に「ハ」の字型に貼り付け、上部を狭く下部を広く空ける。

器形が深鉢型のものと浅鉢型のものの2つに分けることができる。

118~120は深鉢型のものである。

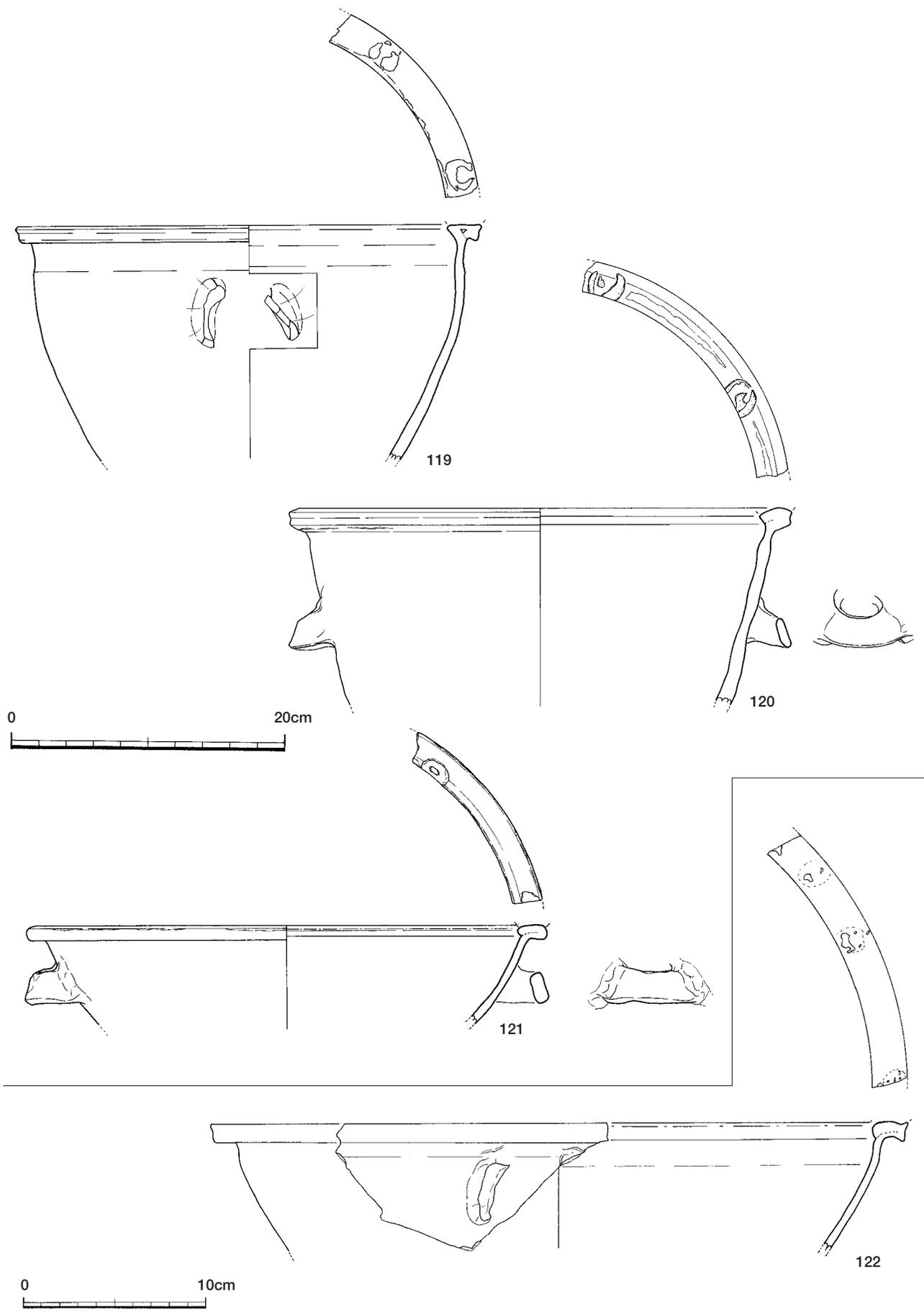
118は大形のもので、口唇部には貝目が残る、内面下位には径の大きいあて具を用いた同心円状のタタキ目が看取される。

119は、口唇部に貝目が残る。120は、口縁部に合わせ口をして焼成した痕跡と貝目が残る。

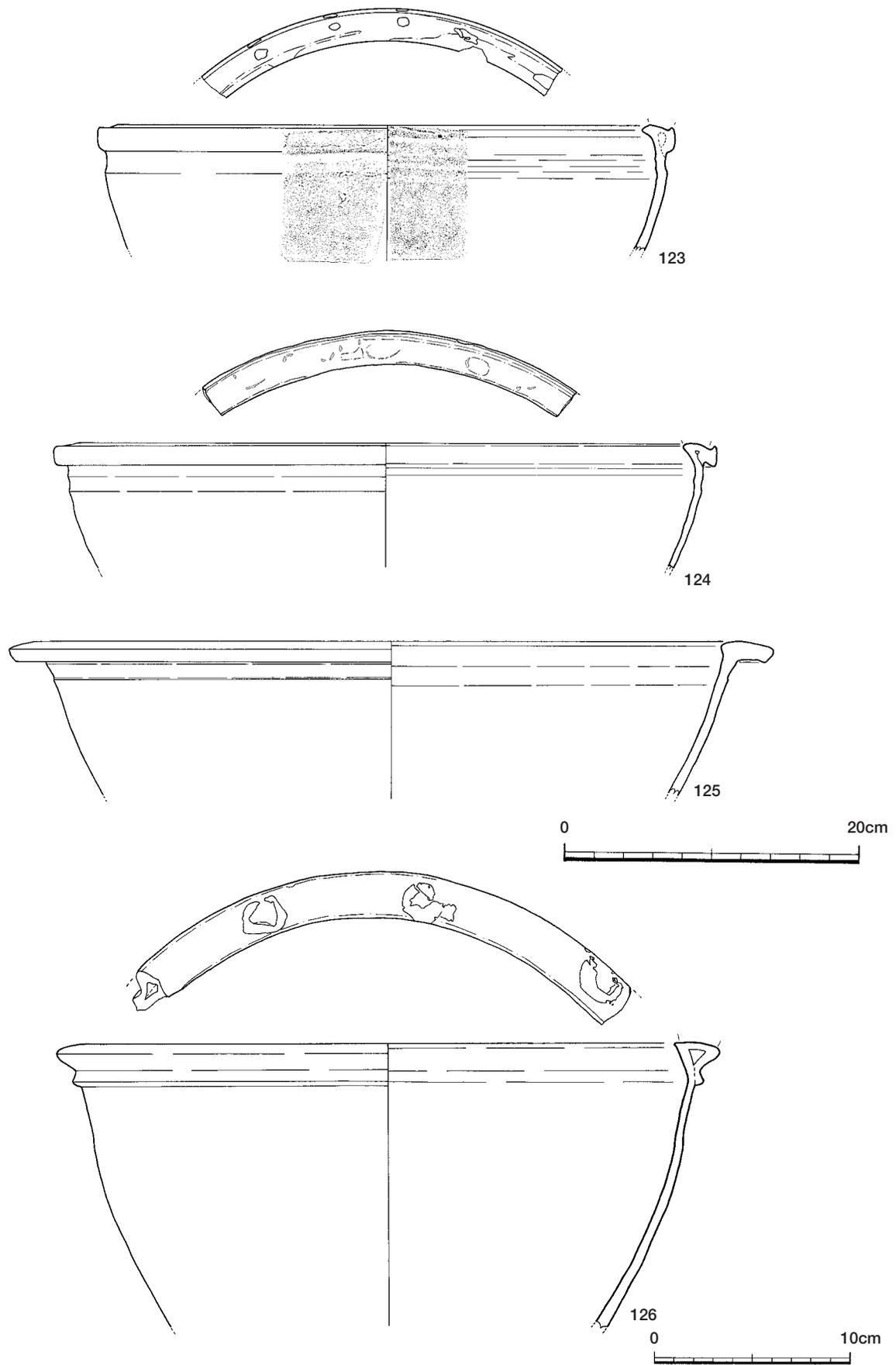
121・122は、浅鉢型の形状を呈するものである。口唇部には貝目が残る。蓋として使用された可能性も考えられる。

第114表 物原1 遺物観察表15

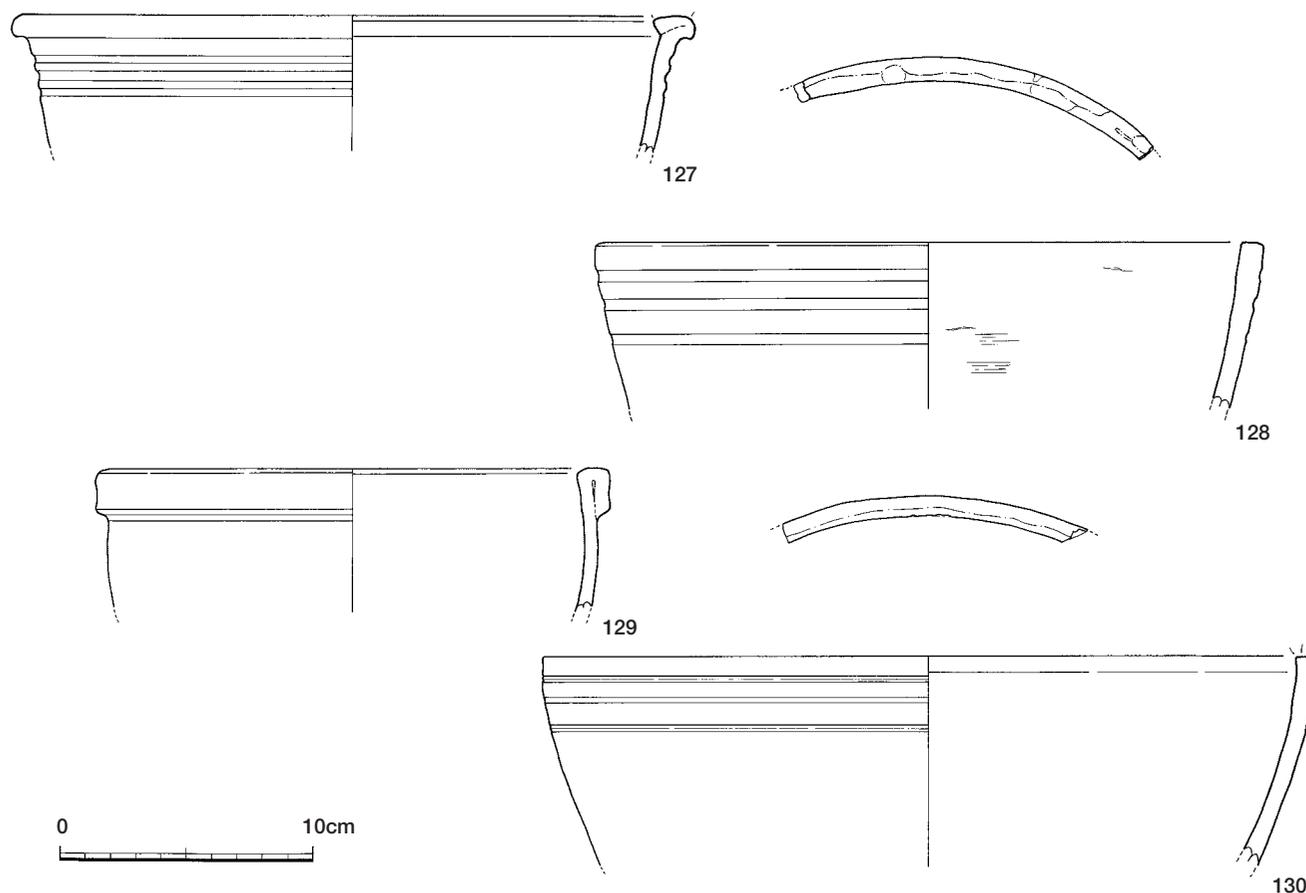
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
118	甕	物原1 2 F E	39.6	22.0	23.6	暗褐色	鉄釉 暗赤褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
119	甕	物原1	34.2	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 緑黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
120	甕	物原1 3 G	36.8	—	—	にぶい橙色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
121	甕	物原1 3 F	38.0	—	—	灰黄褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
122	甕	物原1 3 G	38.2	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第208図 物原1出土遺物(24)把手付甕



第209図 物原1出土遺物(25)鉢



第210図 物原1出土遺物(26)鉢

鉢 (第209・210図)

123・124は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、「T」字状につくるものである。123は外側に折れた口縁部が胴部についた形状を呈する。どちらも口唇部は内側を高く外側を溝縁状につくるもので、口唇部には貝目が残る。胴部に把手が付く可能性も考えられる。

125は、口縁部が「L」字状を呈するもので、鉢としたが大形の蓋の可能性も考えられる。

126は、口縁部が外側に折り返され断面三角形を呈するもので、先端は外面口縁部下位で突帯をつくる。口

唇部には貝目が残る。

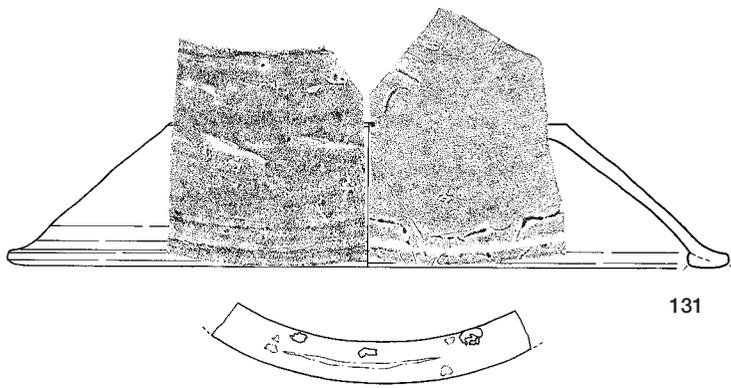
127は、口縁部を内側に折り返してつくるもので、外面下位には数条の沈線が巡る。

128・130は、口縁部が直口するものである。128は外面に3条の沈線が巡り、口唇部に貝目が残る。130は外面に3条の沈線が巡るが、貝目は見られない。どちらも蓋の可能性も考えられる。

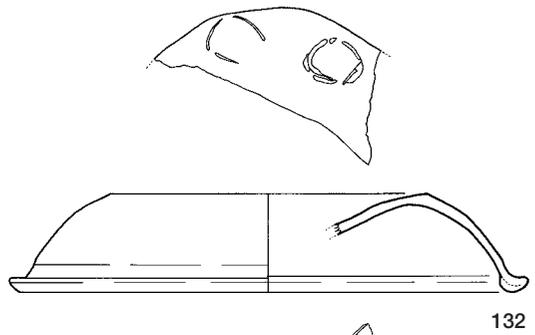
129は、口縁部を外側に折り返し肥厚させたもので、鉢としたが片口等の他の器種の可能性も考えられる。

第115表 物原1 遺物観察表16

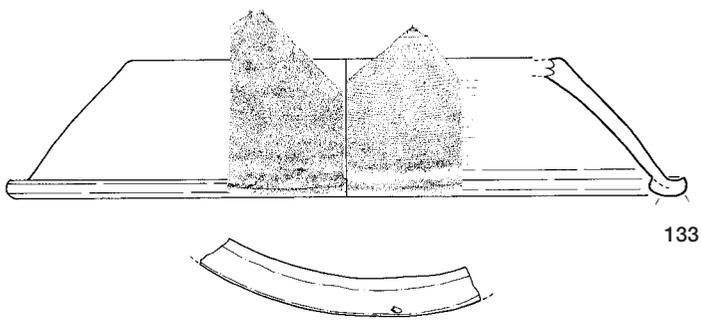
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
123	鉢	物原1 2 E	39.4	—	—	灰赤色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
124	鉢	物原1	45.0	—	—	灰色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	
125	鉢	物原1 2 E	52.0	—	—	灰黄褐色	無釉	—	内面に同心円状タタキ目
126	鉢	物原1 3 F	33.8	—	—	暗灰黄色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
127	鉢	物原1 C D	27.0	—	—	灰黄褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	
128	鉢	物原1 3 D E	26.4	—	—	灰褐色	灰釉 浅黄色	全面施釉	口唇部に貝目
129	鉢	物原1 4 F	20.2	—	—	灰緑色	無釉	—	内面に同心円状タタキ目
130	鉢	物原1 4 E	30.4	—	—	褐灰色	灰釉 浅黄色	畳付以外全面施釉	



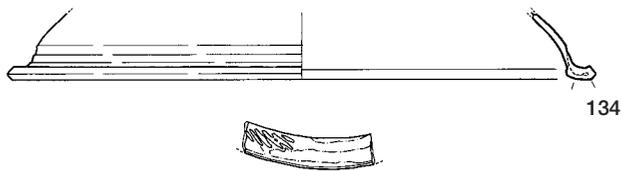
131



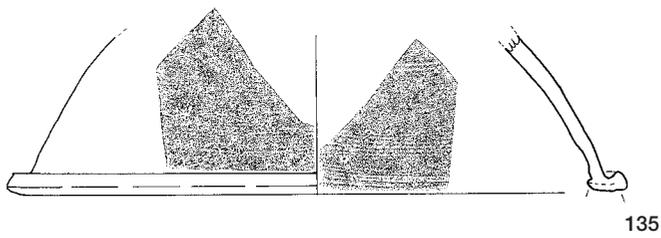
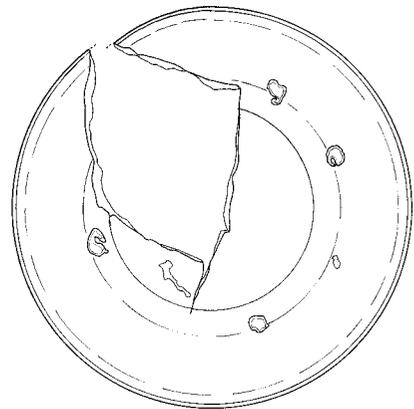
132



133



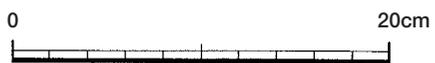
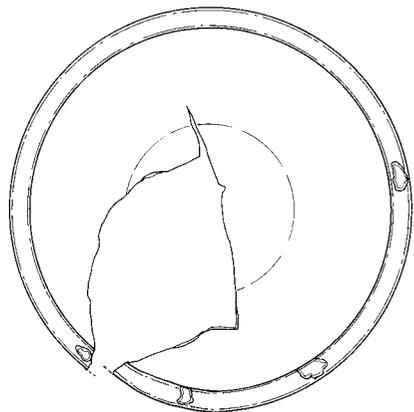
134



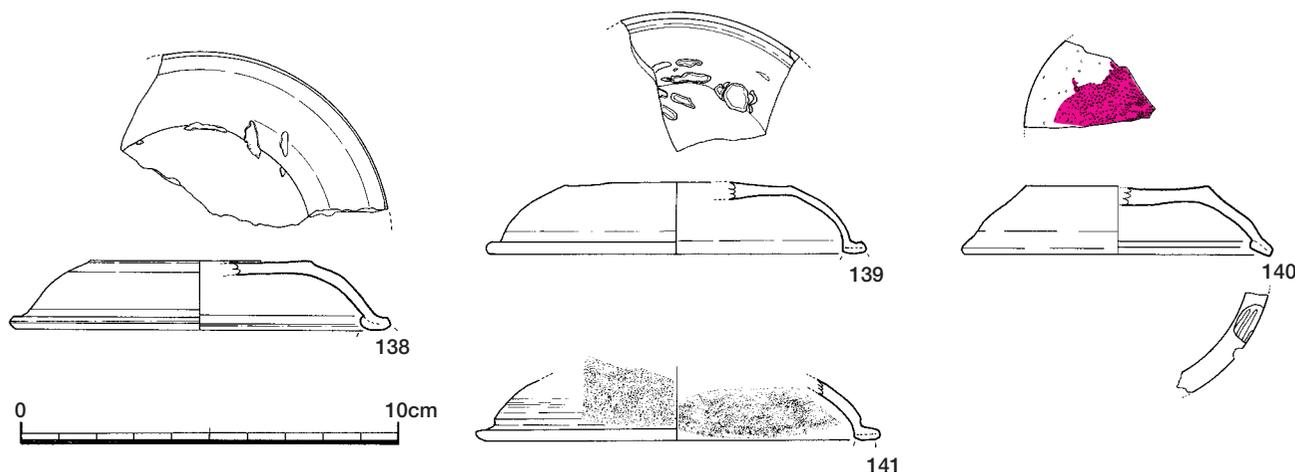
136



137



第211図 物原1出土遺物(27)蓋



第212図 物原1 出土遺物(28)蓋

蓋 (第211~213図)

浅鉢型の蓋は、甕・壺等の蓋として使用されたものと思われる。口縁部の形状から大きく2つに分けることができ、さらに大きさから大形のもの和小形のものに細分化できる。

131~141は、口縁部を外側におり さらに内側に折り返しておさめるもので、口唇部は丸みを帯びる。

131~136は、大形のものである。

131は、内外面にヘラ状工具による調整痕が残るもので、口唇部には貝目も残る。132は、内底面・外底面・口唇部に貝目が残るものである。体部はやや歪みが見られ、丸みを帯びる。133は、内面にヘラ状工具による調整痕が明瞭に残るものである。134・135は、外反した口縁部の先端を丸くおさめず、平坦につくる。また、134は外面口縁部と胴部の境に、浅い凹線が1条巡る。口唇部には、貝殻の放射脈の目跡が残る。135は、内外面ともに筋状の調整痕が明瞭に残るものである。136は、内面にヘラ状工具による調整痕が残る、口唇部に胎土詰貝目が残る。

137~141は、小形のものである。

137は、口縁部の屈曲が強くない資料である。外面腰

部は削り調整される。胎土詰貝目が口唇部と外面腰部に残る。138・139は、上面から胴部にかけてイタヤガイを使用した貝目が残るものである。140は、外面口縁上部に段を有するものである。141は、素焼きの資料である。蓋の中で素焼きのものは非常に少ない。内面にはヘラ状工具による筋状の調整痕が残る、上面には白色砂粒が付着する。口唇部にも胎土詰貝目が残る。

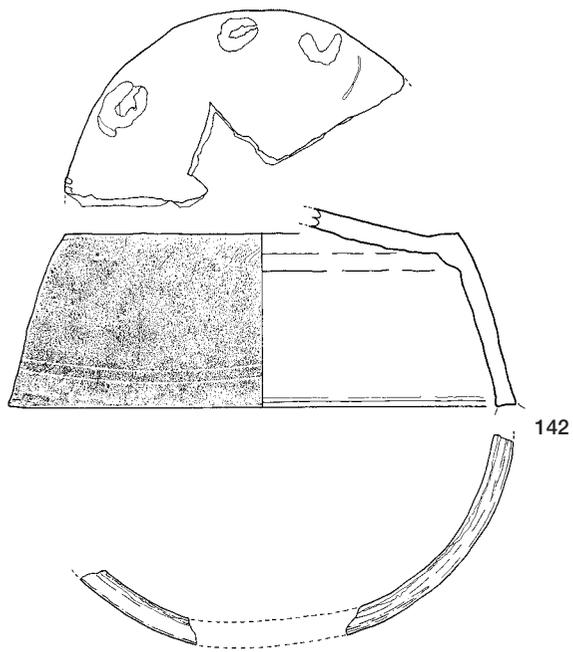
142~147は、口縁部が外反せず、胴部からまっすぐに伸びるもので、口唇部は平坦につくられる。釉は、口唇部のみ拭き取られ、他は全面施釉される。

142・143は、大形のもので、外面にヘラ状工具による調整が施され、口縁上位に2条の沈線を巡らせる。上面には、貝目も残る。また、143は、口唇部にも貝目が残る。

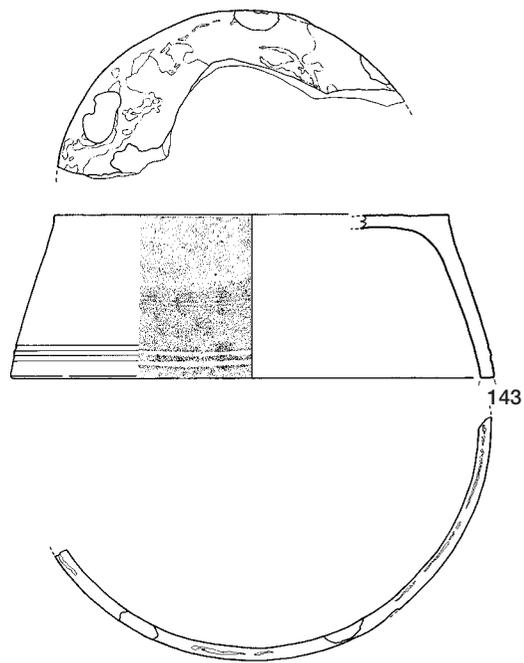
144~147は小形のものである。145を除き、内外面はヘラ状工具による調整が施され、その痕跡が筋状に残る。145は、釉が厚くかかるため観察できない。144は、外面口縁上位に1条の浅い沈線が巡り、上面には貝目が残る。145は、上面に胎土詰貝目が残る。146は、外面口縁上位に1条の浅い沈線が巡り、上面と口唇部に貝目が残る。147は、上面と天井部に貝目が残る。

第116表 物原1 遺物観察表17

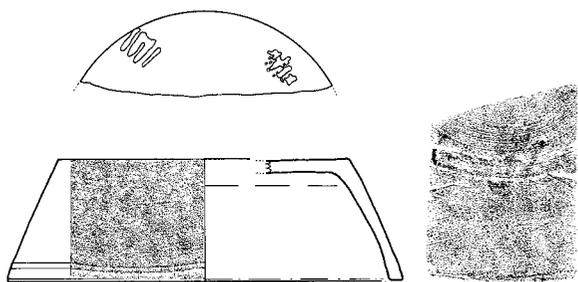
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			上径	口径	器高				
131	蓋	物原1 4 F	21.0	38.2	7.6	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部・外面上部に貝目
132	蓋	物原1 3 F	16.8	27.2	5.1	褐灰色	灰釉 緑灰色	残存部全部施釉	口唇部、天井部・外面上部に貝目
133	蓋	物原1 3 D E	22.8	36.0	7.3	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
134	蓋	物原1 4 E	—	31.2	—	灰赤色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
135	蓋	物原1 2 D	—	32.6	—	灰黄褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	
136	蓋	物原1 3 C	21.4	32.4	5.7	にぶい黄橙色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部・外面上部に貝目
137	蓋	物原1	10.4	21.0	3.9	明赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	外面上部、口唇部に貝目
138	蓋	物原1 2 D	11.6	20.1	3.6	褐灰色	灰釉 緑灰色	口唇部以外全面施釉	外面上部から側面に貝目
139	蓋	物原1 2 E	—	20.0	3.7	褐灰色	灰釉 暗赤褐色	口唇部以外全面施釉	外面上部から側面に貝目
140	蓋	物原1 4 G	9.8	16.4	3.6	にぶい黄橙色	灰釉 赤褐色	外面のみ施釉	口唇部に貝目 外面上部に白い砂粒付着
141	蓋	物原1	—	21.4	—	褐灰色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	



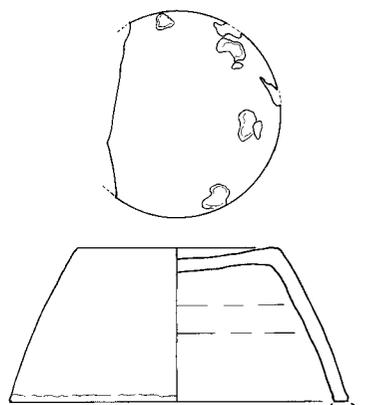
142



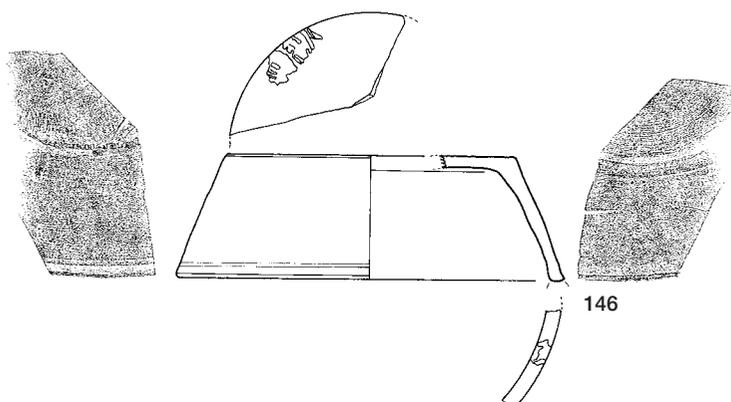
143



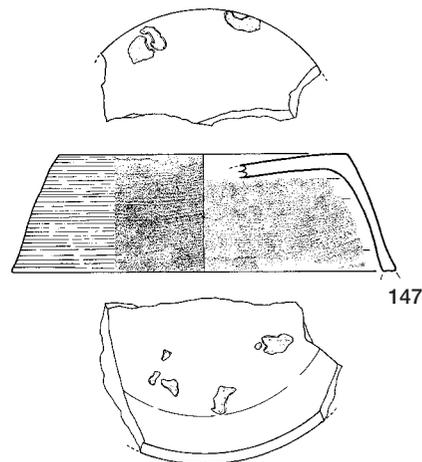
144



145



146



147



第213図 物原1出土遺物(29)蓋

甕 (第214~225図)

第2地点の物原1から多くの甕が出土したが、その形状は第1地点の物原で見られた口縁部を外側に折り返して肥厚させ「T」字状につくるものとは違い、口縁部を断面三角形状につくるものが大部分を占める。

口縁部の形状から大きく4つに分けることができ、さらに器形により細分化できる。

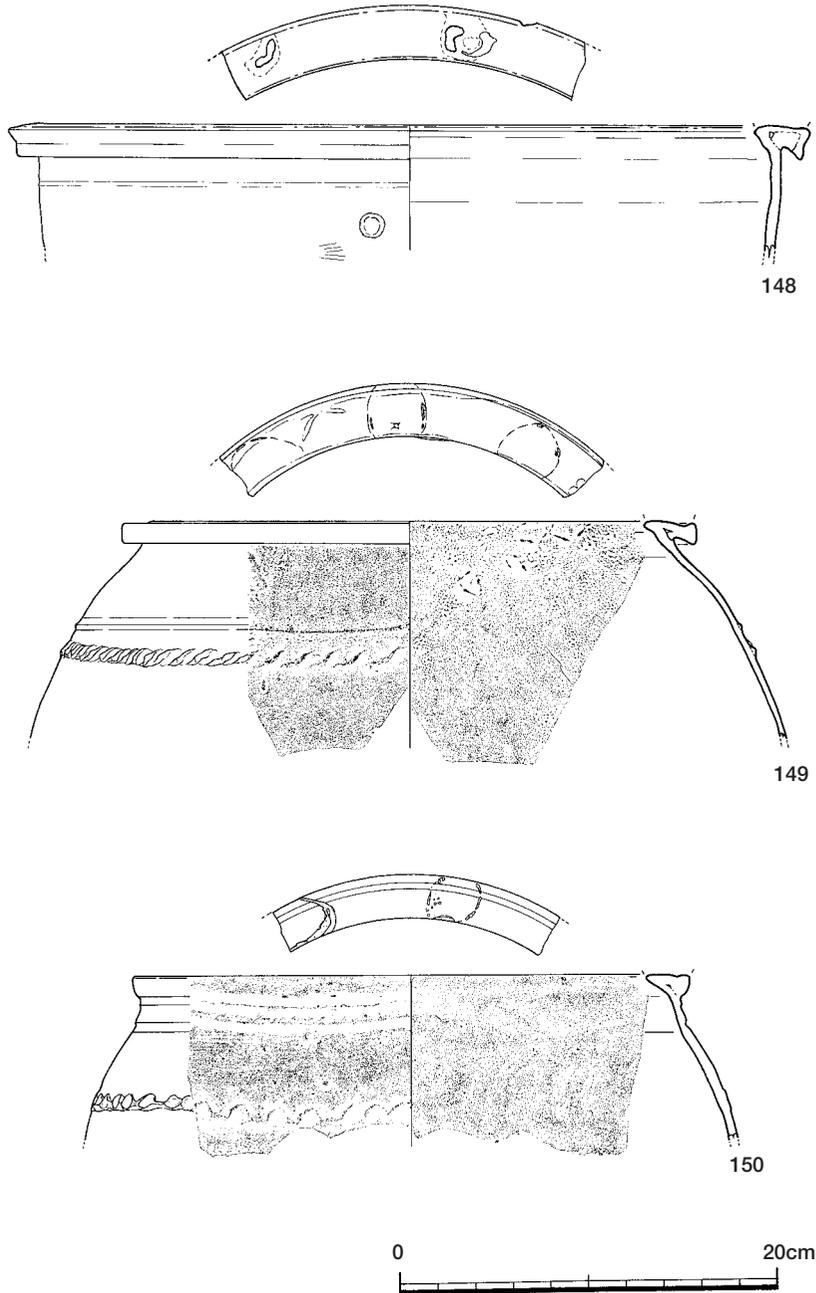
148~154は口縁部を外側に折り返して肥厚させ、「T」字状につくるもので、口唇部が内側は高く、外側は溝縁状につくられる。胴部の形状から、バケツ状の器形を呈するものと、肩部が膨らむものに分けることができる。

148は、バケツ状の器形を呈するもので、外面口縁下位には、金属器の留め具を模造したと思われる円形の突起が付く。口唇部には貝目も残る。

149~153は、胴部が肩部で膨らむ形状を呈するもので、外面には縄状の突帯を有するものである。釉は口唇部のみ拭い取られ、貝目が付く。

149は、縄状の突帯の上に、さらに1条の突帯が巡るもので、釉が厚くかかるため、内面のタタキ目は不明瞭である。

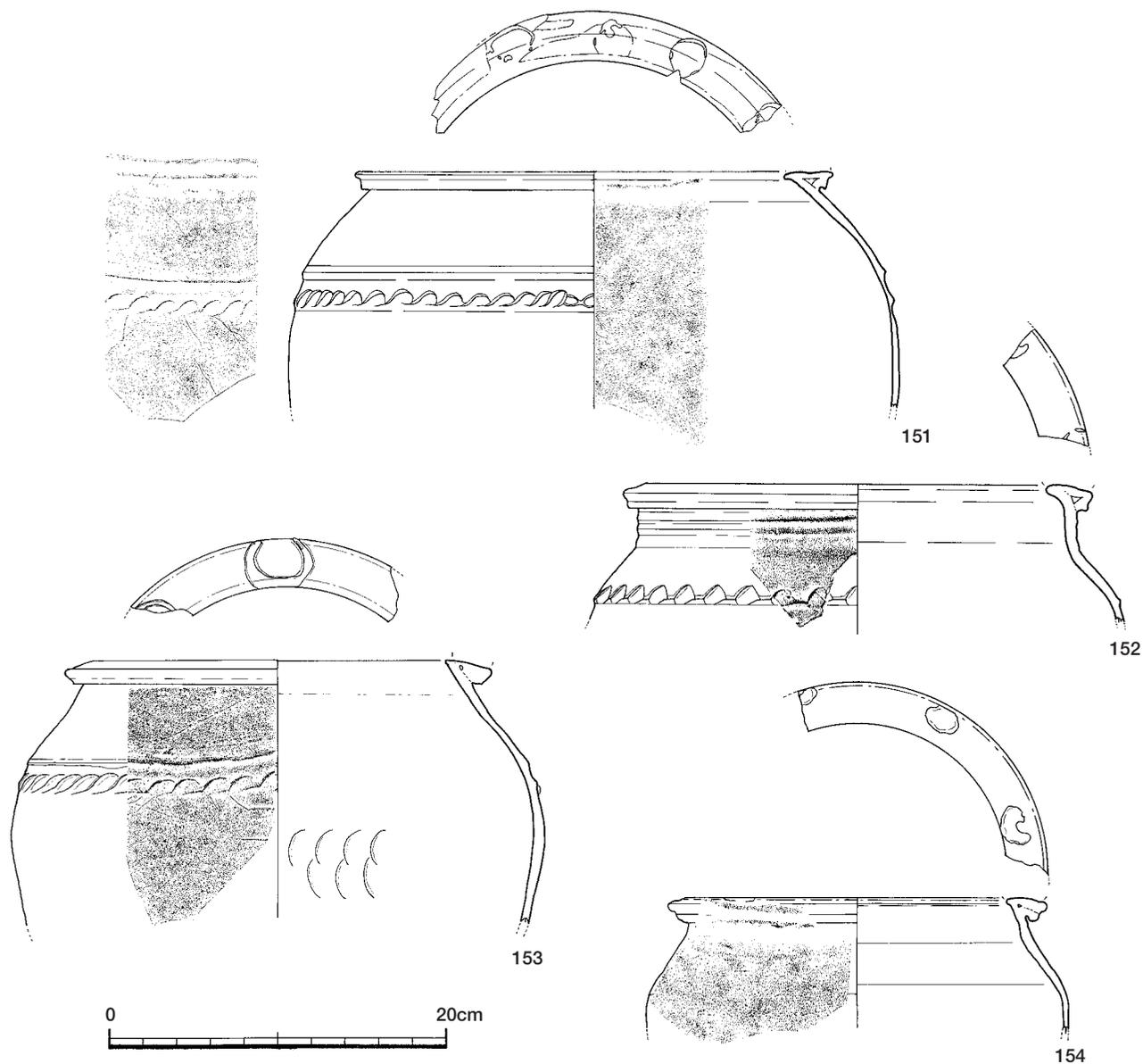
150は、口縁部の下部分が胴部に付着した形状を呈する。外面には、ヘラ状工具による筋状の調整痕が残り、口縁部下位には2条の低い稜が巡る。内面には、タタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。釉は、口唇部のみ拭い取られ、貝目が残る。



第214図 物原1出土遺物(30)甕

第117表 物原1 遺物観察表18

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			上径	口径	器高				
142	蓋	物原1 3 F	20.7	26.8	9.1	灰黄褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	外面上部に貝目
143	蓋	物原1 3 F	20.8	25.5	8.6	暗褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部・外面上部に貝目
144	蓋	物原1 3 E	15.2	20.2	6.3	にぶい褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外面上部に貝目
145	蓋	物原1 2 D	10.7	17.9	8.1	橙色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外面上部に貝目
146	蓋	物原1 3 E	15.0	20.4	6.5	褐灰色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部・外面上部に貝目
147	蓋	物原1 4 F	15.4	20.2	6.1	灰褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外面上部・天井部に貝目
148	甕	物原1 4 D	□径22.4	—	—	にぶい橙色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
149	甕	物原1 2 E	□径30.0	—	—	褐灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
150	甕	物原1 4 F	□径29.2	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面に同心円状タタキ目



第215図 物原1 出土遺物(3)甕

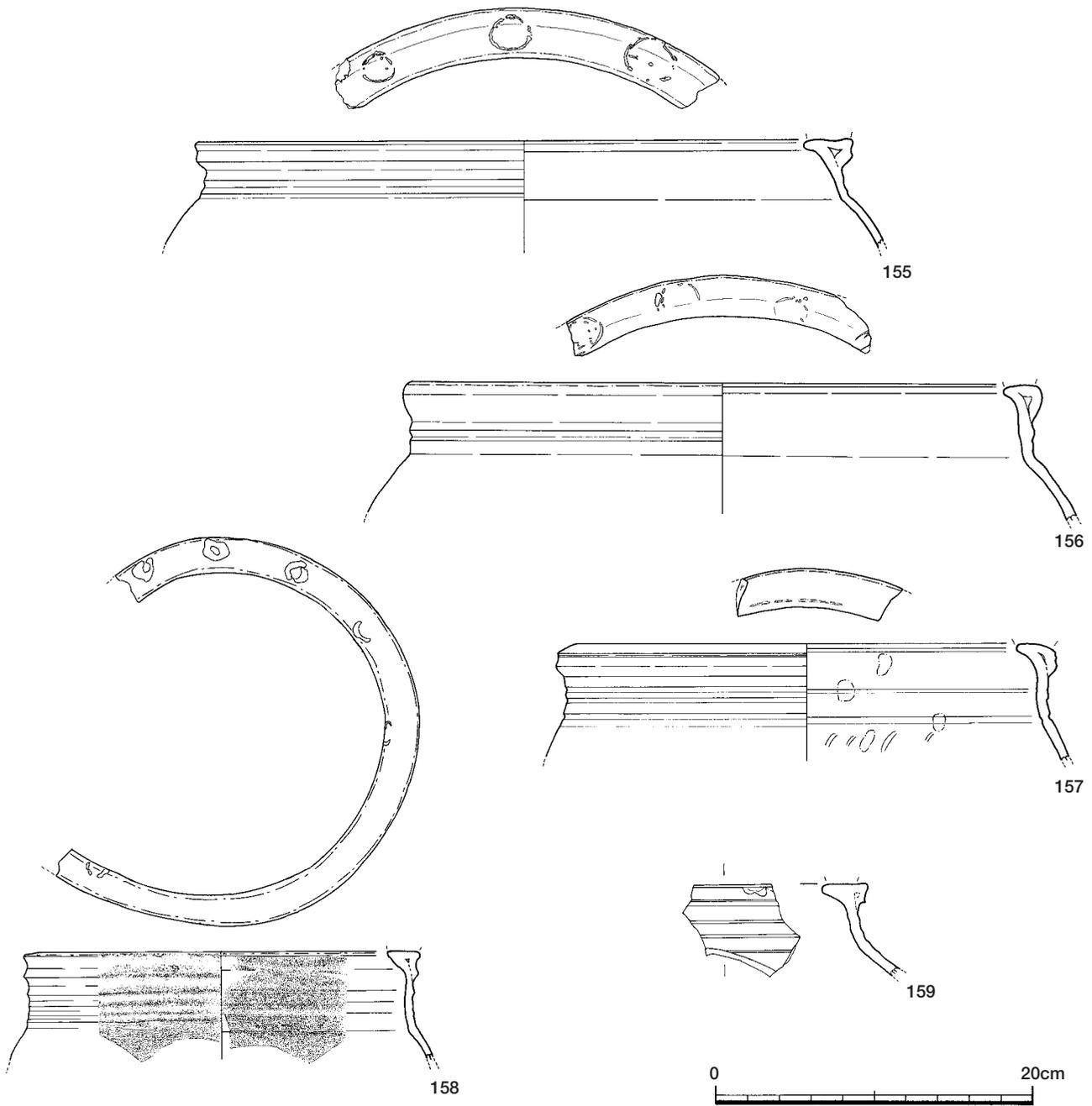
151は、縄状の突帯の上に、さらに1条の突帯が巡るもので、内面には同心円状のタタキ目が残る。口唇部の釉は拭い取られ、貝目が残る。152は頸部が伸び、外面には低い稜が2条巡る。また外面にはヘラ状工具による調整痕が筋状に看取される。口唇部の釉は拭い取られ貝目が残る。153は、縄状の突帯の上に、さらに1条の突帯が巡

るものである。外面にヘラ状工具による調整痕が筋状に看取され、内面には同心円状のタタキ目が残る。口唇部の釉は拭い取られ貝目が残る。

154は、外面肩部に縄状の突帯が巡らないものである。口縁端部に段を有し、外面にはヘラ状工具による調整痕が看取される。無釉ではないかと思われる。

第118表 物原1 遺物観察表19

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
151	甕	物原1 3 E	—	—	—	灰色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面にタタキ目
152	甕	物原1 4 E	27.8	—	—	褐灰色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
153	甕	物原1 3 C	25.2	—	—	暗灰色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
154	甕	物原1 4 F	22.4	—	—	にぶい黄橙色	無釉?	?	口唇部に貝目



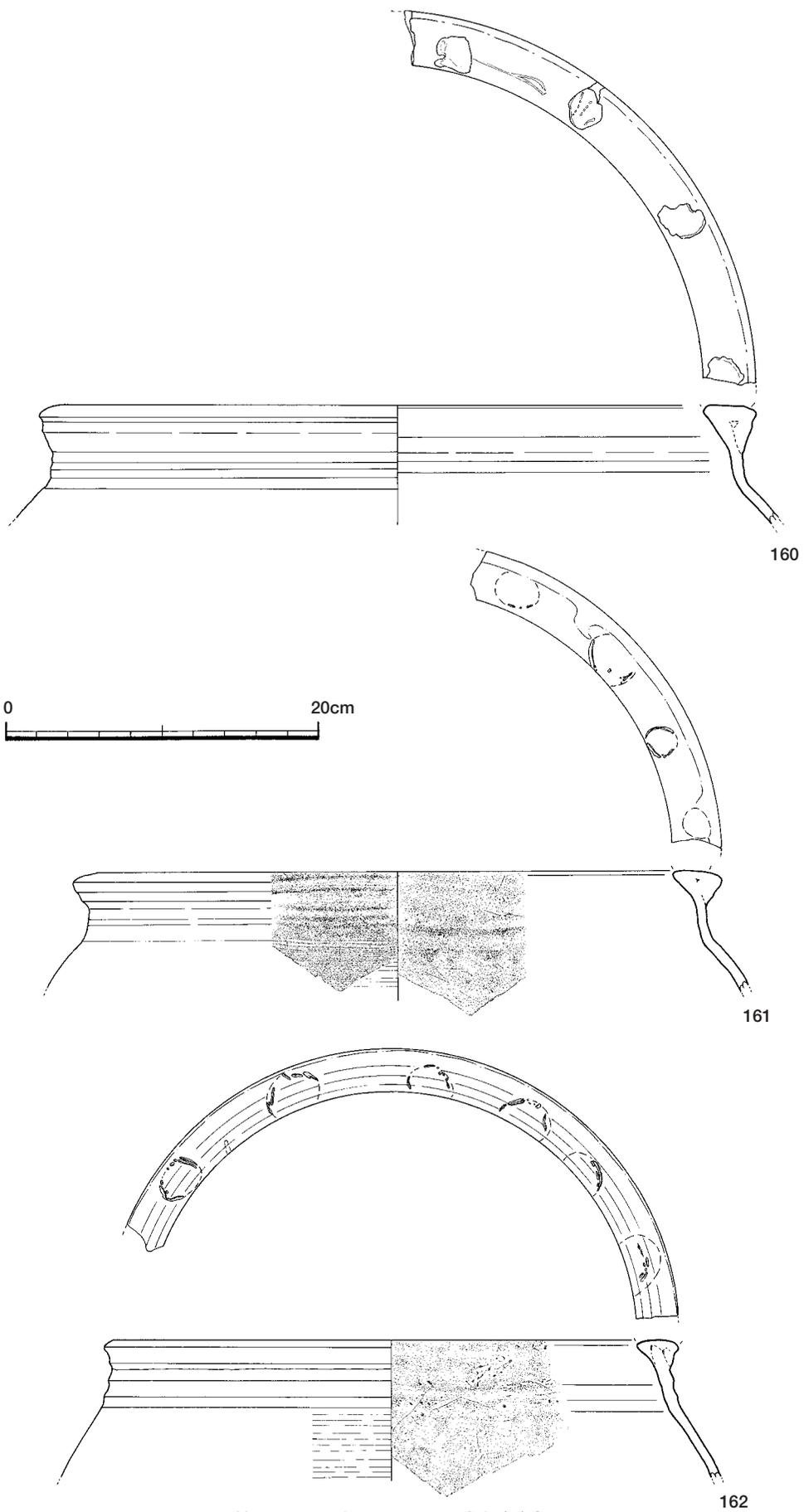
第216図 物原1 出土遺物(32)甕

155~159は、「T」字状の口縁部が胴部に密着し、内側は丸く内湾するもので、頸部は、口縁部にかけてまっす

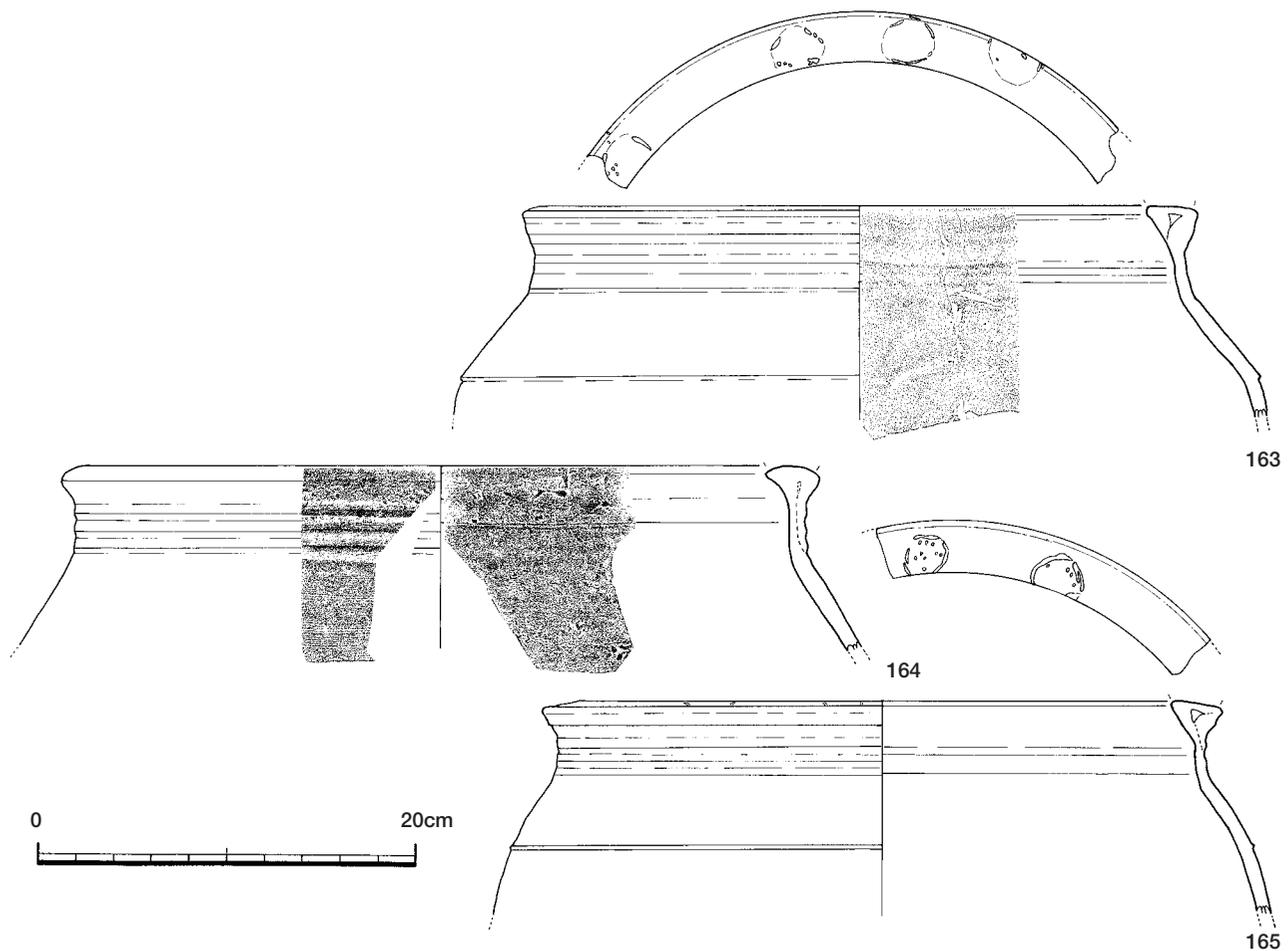
ぐに伸びる形状を呈する。外面口縁部下位には、弱い稜を有する。口唇部の釉は拭い取られ、貝目が残る。

第119表 物原1 遺物観察表20

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 葉	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
155	甕	物原1 4 E	41.0	—	—	褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
156	甕	物原1 3 G	40.0	—	—	褐色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
157	甕	物原1 4 E	31.4	—	—	にぶい褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目
158	甕	物原1	25.0	—	—	にぶい橙色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
159	甕	物原1 3 E	—	—	—	暗灰黄色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目



第217図 物原1 出土遺物(33)甕



第218図 物原1出土遺物(34)甕

160~173は、口縁部を外側に折り返して、断面三角形につくるものである。頸部から口縁部にかけてのラインは、やや開き気味につくられ、口縁部の内側は丸く内湾し、口唇部の外縁がやや丸みを帯びる。また、外面口縁部下位から頸部にかけては、弱い稜が2条巡る。口唇部のみ釉が拭い取られ、貝目が残る。

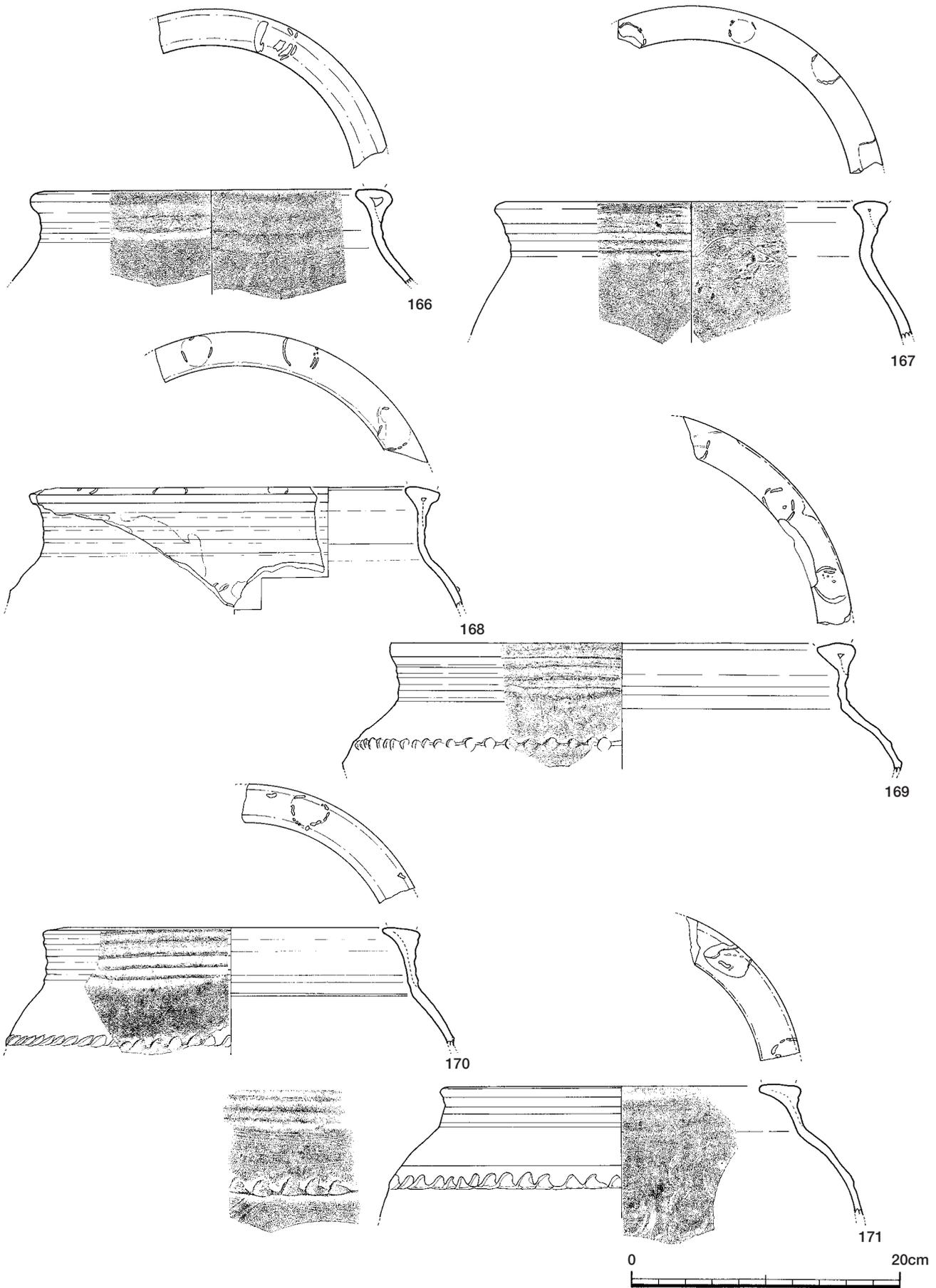
160~167は、肩部に縄状の突起が巡らないものである。外面は、ヘラ状工具による調整が施されており、強弱の差はあるものの筋状の調整痕が看取される。内面は、タタキ成形が施されていると思われるが、あて具痕

は不明瞭なものが多い。

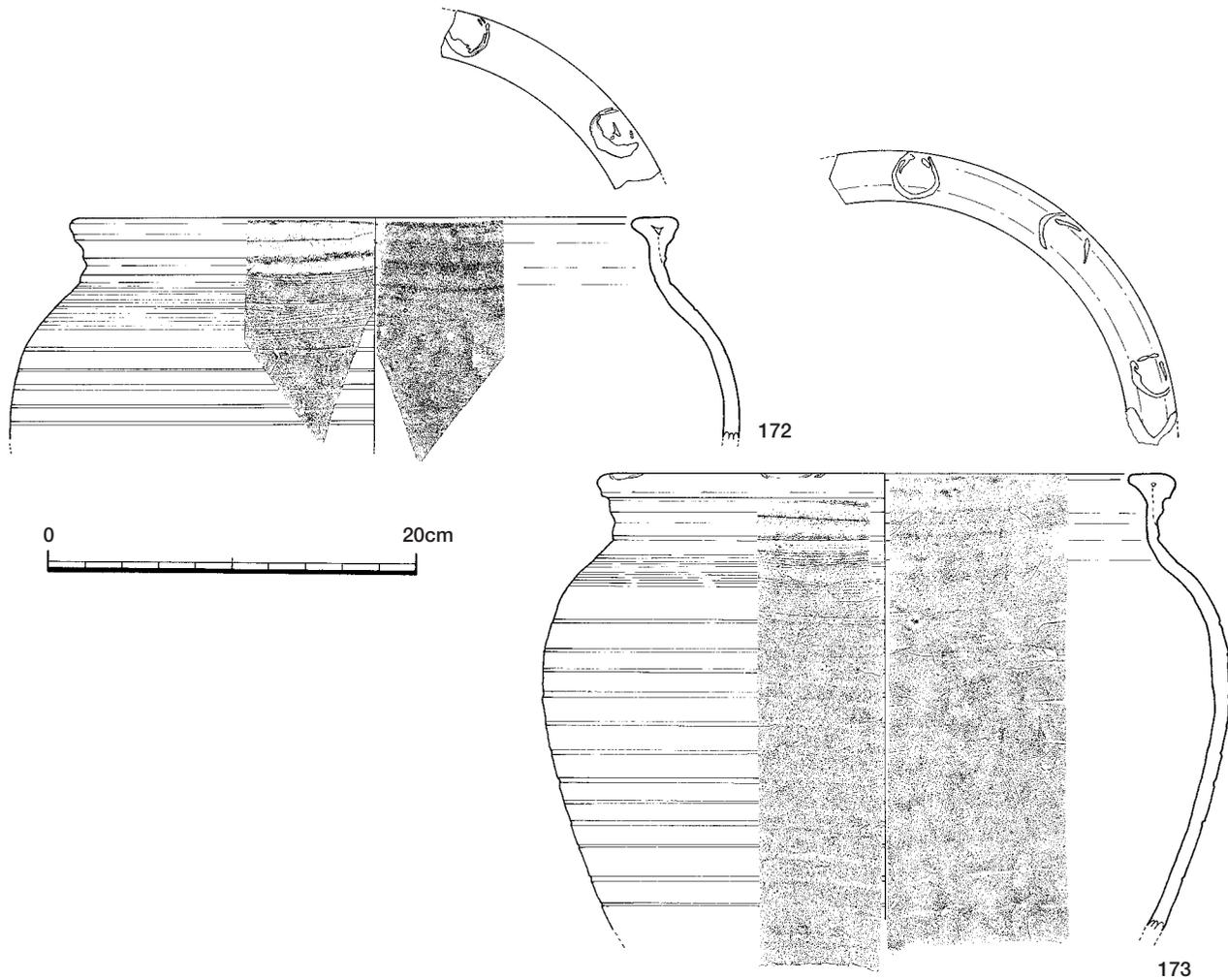
160・161・164は、口径が40cmを超える大型のものである。161・162は、外面に筋状の調整痕が明瞭に残る。163・165は、外面肩部に1条の突帯を有するもので、欠損しているため不明であるが、突帯の下位に縄状の突帯も巡る可能性も考えられる。

第120表 物原1 遺物観察表21

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
160	甕	物原1 4 E	45.6	—	—	にぶい褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
161	甕	物原1 3 E	41.2	—	—	にぶい橙色	灰釉 黄灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
162	甕	物原1 3 F	36.6	—	—	にぶい橙色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
163	甕	物原1 3 G	35.5	—	—	赤褐色	灰釉 暗灰黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
164	甕	物原1	40.0	—	—	灰褐色	灰釉 灰黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
165	甕	物原1 2.3	35.9	—	—	明赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第219図 物原1出土遺物(35)甕



第220図 物原1出土遺物(36)甕

168~171は、肩部に縄状の突帯が巡るものである。外面はへら状工具による調整が施され、筋状の痕跡が残る。内面はタタキ成形されると思われるが、171を除き不明瞭である。

172・173は、内面のみ施釉されていると思われる資料である。外面はへら状工具により調整が施され、胴部全面に浅い沈線が巡る。内面は、同心円状のタタキ目が看取される。

第121表 物原1 遺物観察表22

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
166	甕	物原1 3 F	26.8	—	—	灰褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
167	甕	物原1 2 E	29.2	—	—	灰褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
168	甕	物原1 4 E	30.3	—	—	灰褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
169	甕	物原1 3.4E F表	34.4	—	—	にぶい褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
170	甕	物原1	28.0	—	—	褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
171	甕	物原1	26.8	—	—	にぶい黄褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
172	甕	物原1	33.2	—	—	にぶい橙色	灰釉 にぶい赤褐色	内面のみ施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
173	甕	物原1 3 E	31.6	—	—	にぶい橙色	灰釉 暗赤褐色	内面のみ施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目

174~180は、口縁部の断面が三角形状を呈するものの、口唇部外縁は丸みを帯びずシャープにつくられ、内縁は内側へ伸びるものである。口唇部は、平坦につくられるものがほとんどであるが、外側を溝縁状につくるものも見られる。また、外面口縁部から頸部にかけては、弱い稜をつくる。釉は、口唇部のみ拭い取られ、貝目が残る。

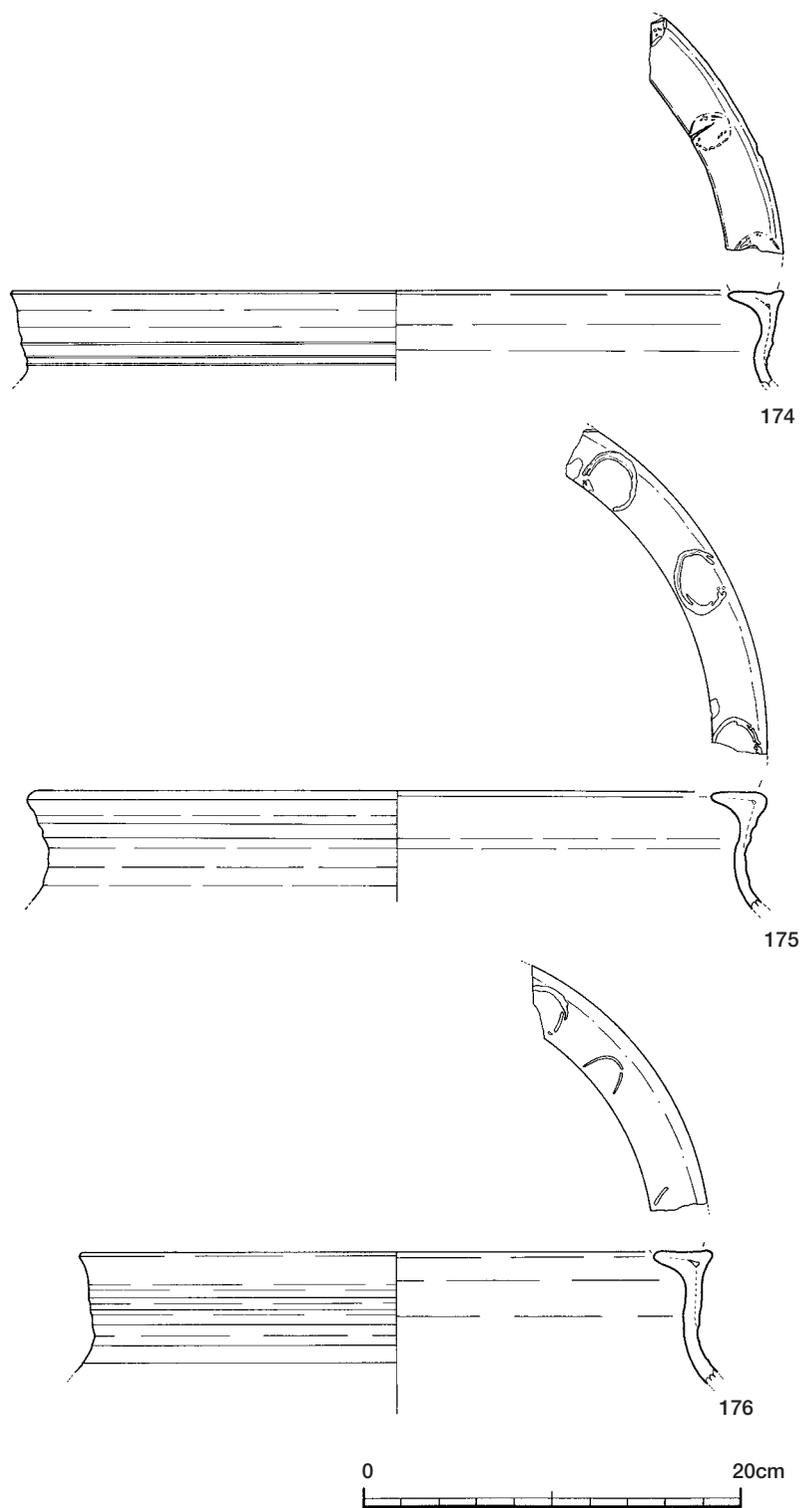
器形は、口縁部から頸部にかけてやや窄まり、肩部にかけて膨らむ形状を呈するものと、口縁部から胴部にかけてほぼまっすぐにのびるバケツ状を呈するものの2つに細分化できる。

174は、口唇部の外側が溝縁状につくられるものである。175・176は、口縁部が平坦につくられるものである。

177・178は、口唇部の外側が溝縁状につくられるもので、外面肩部には、縄状の突帯が巡る。どちらも、外面にはヘラ状工具による調整が施され、内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。

179・180は、器形が口縁部から胴部にかけてほぼまっすぐにのびるバケツ状を呈するものである。

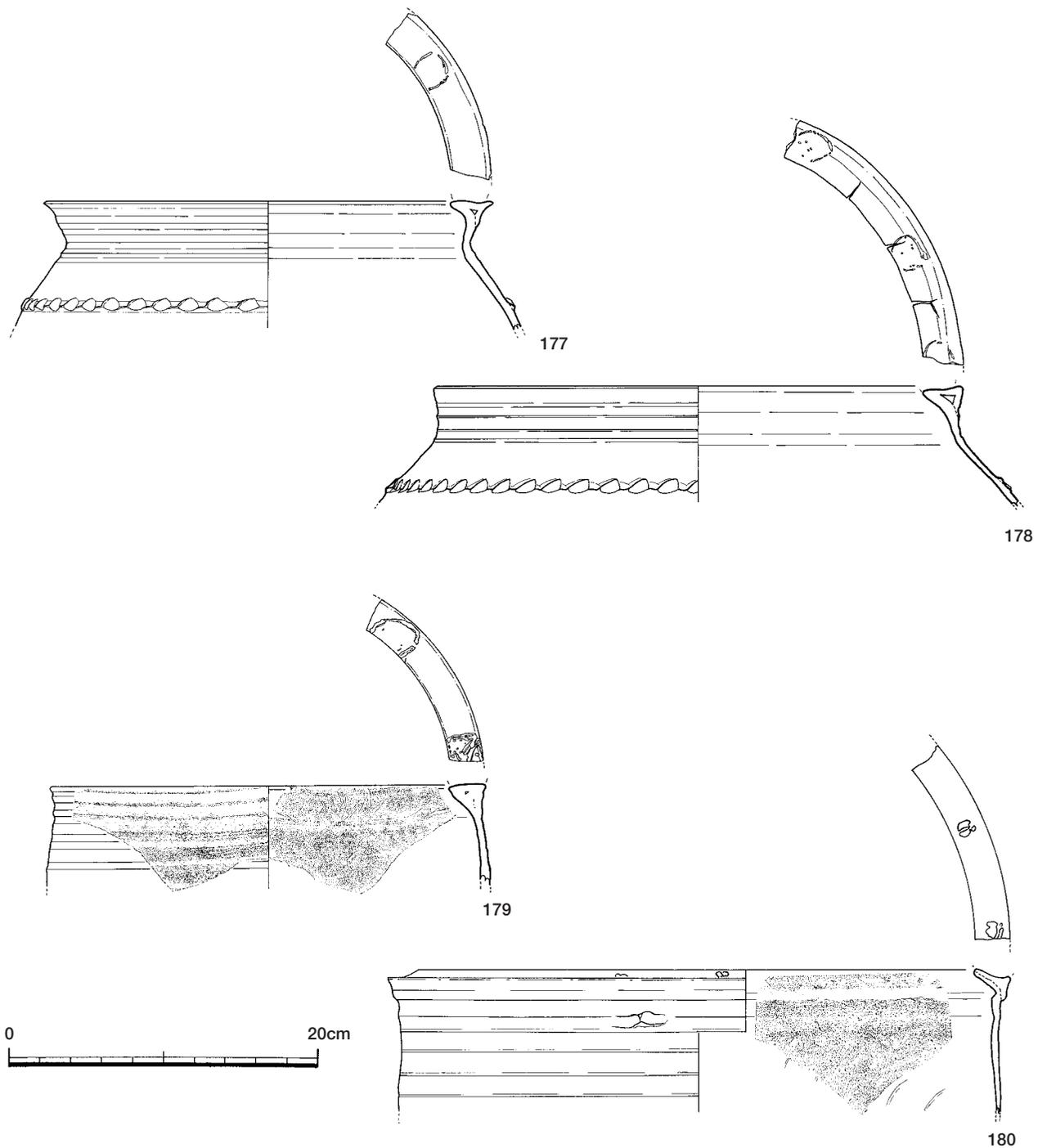
179は、外面胴部に浅い沈線が巡る。180は、口唇部の外側を溝縁状につくるもので、内側は高く仕上げる。比較的器壁は薄く、外面には沈線が巡り、金属器の留め具等の模造と思われる突起が付く。内面は、タタキ成形時のあて具痕が同心円状に明瞭に残る。



第221図 物原1 出土遺物(37)甕

第122表 物原1 遺物観察表23

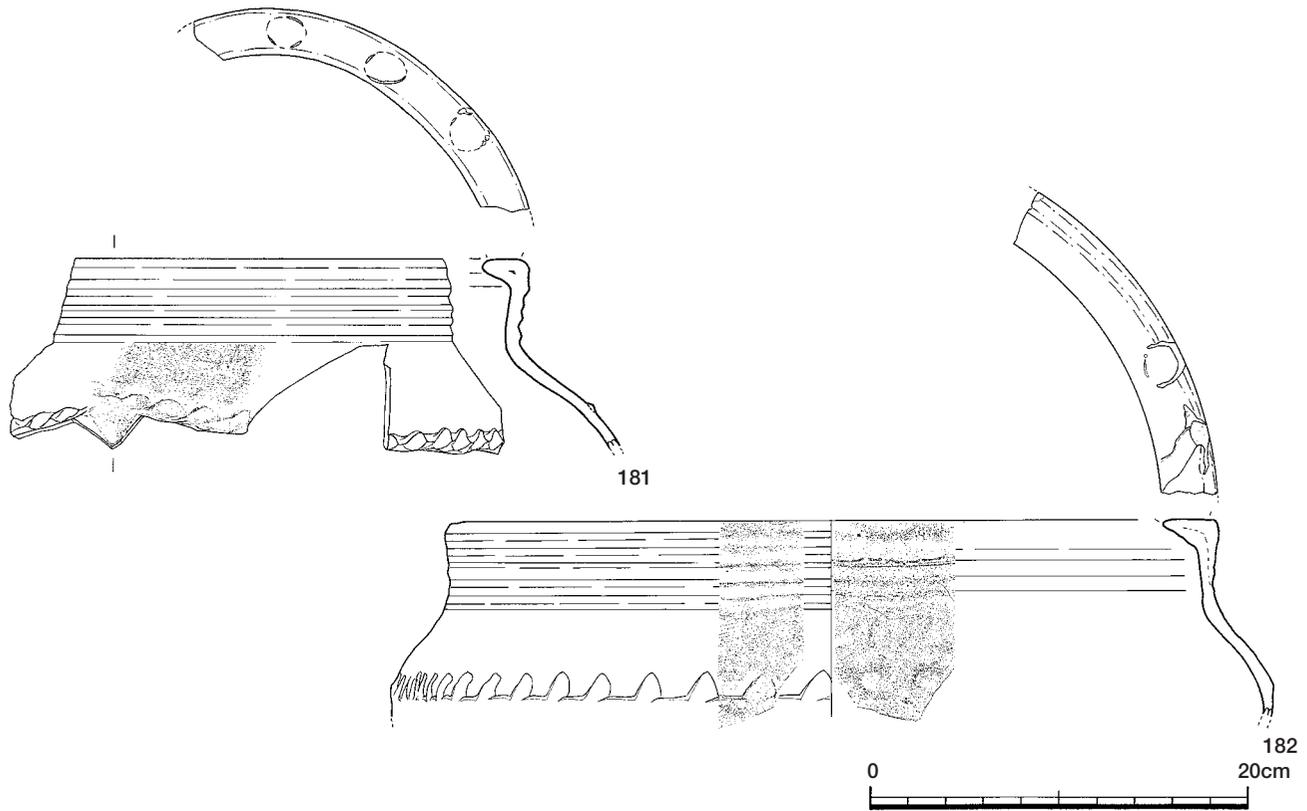
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
174	甕	物原1 4 E	40.6	—	—	にぶい橙色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
175	甕	物原1 4 E	39.2	—	—	灰黄色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
176	甕	物原1	33.4	—	—	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目



第222図 物原1 出土遺物(38)甕

第123表 物原1 遺物観察表24

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
177	甕	物原1 4 D	29.0	—	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
178	甕	物原1 4 E	34.0	—	—	灰黄褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
179	甕	物原1 3 E	28.0	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
180	甕	物原1 3 F	40.1	—	—	灰色	灰釉 灰黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目



第223図 物原1出土遺物(39)甕

181~187は、口縁部が内湾し、先端が内側にまっすぐ伸びるもので、ツルの頭のような形状を呈するものである。口唇部の釉は、拭い取られ貝目が残る。

181~184は、肩部に縄状の突帯が巡るものである。

181は、焼け歪みが見られる資料で、外面口縁部から頸部に掛けて4条の稜が巡り、胴部は筋状の調整痕が看取される。182は、内面に同心円状のタタキ目が残る。184

は、内面に同心円状のタタキ目が残る。

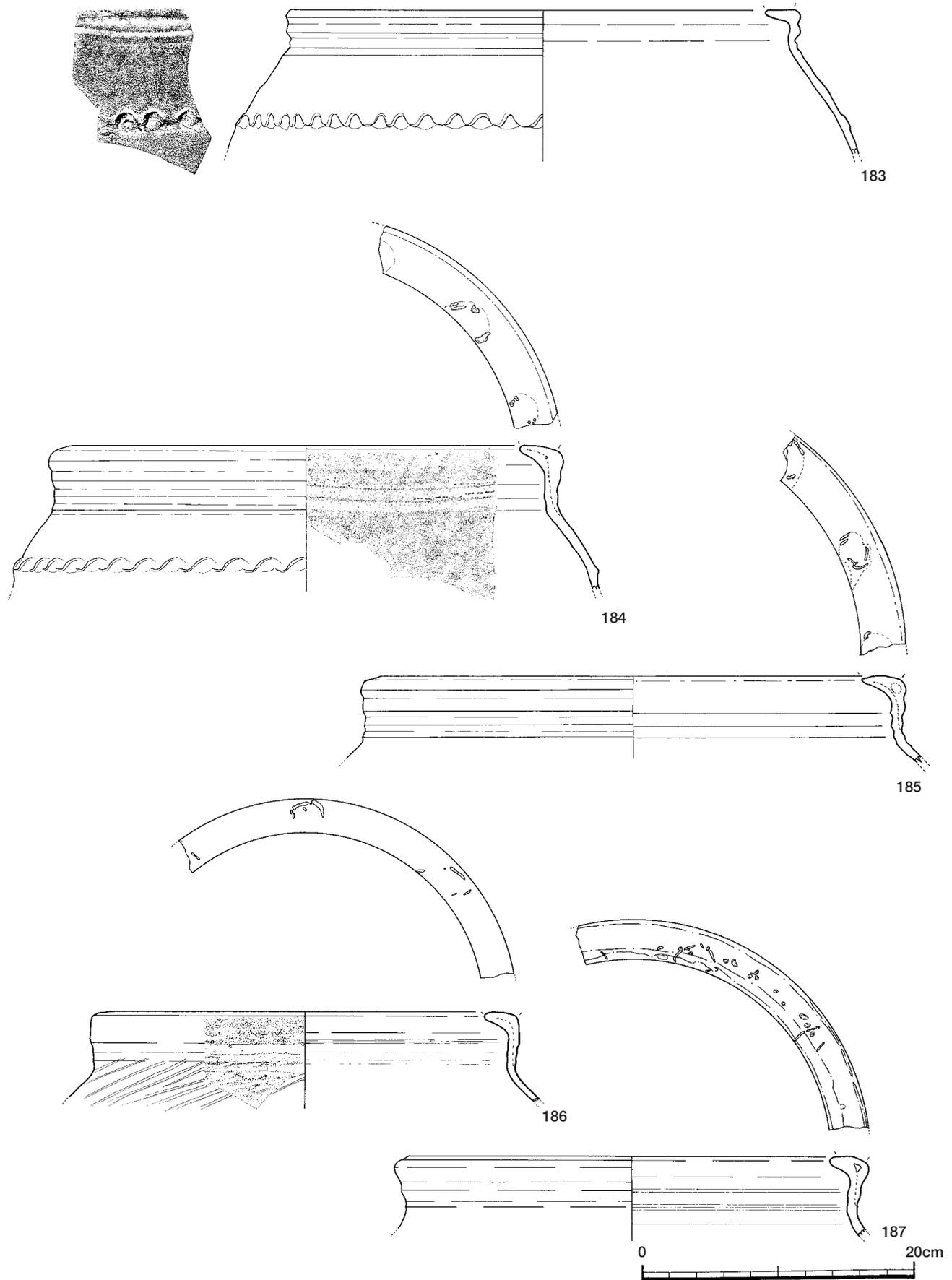
185~187は、頸部から口縁部のみの資料である。

185は、内面にへら状工具による調整痕が看取される。

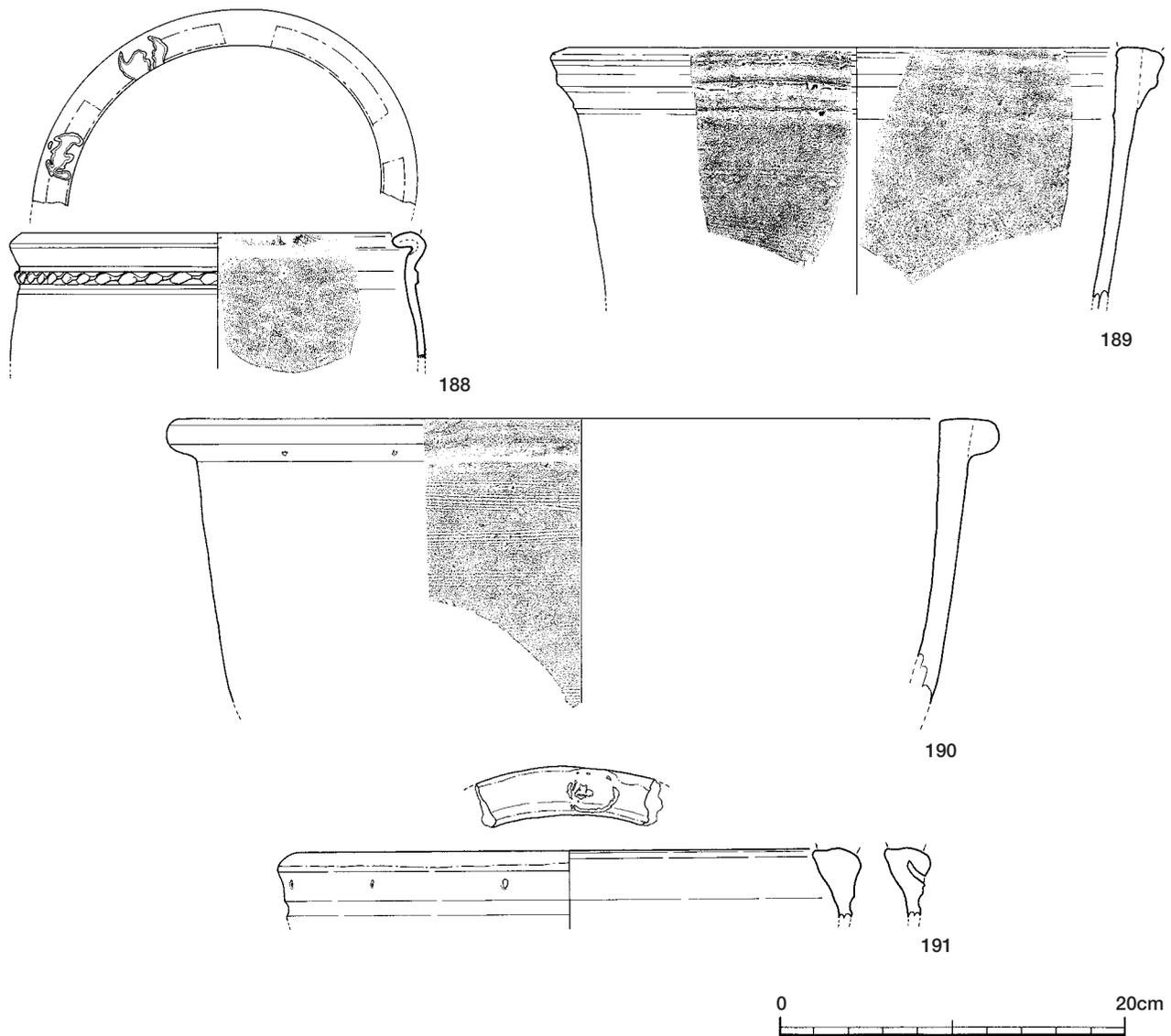
186は、外面にタタキ成形時のあて具痕と思われる平行タタキ目が明瞭に看取される。187は、口唇部に貝目と合わせ口で焼成した際の、他製品の痕跡が残る。

第124表 物原1 遺物観察表25

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
181	甕	物1 2D	—	—	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
182	甕	物原1 3E	40.6	—	—	鈍い赤褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
183	甕	物原1	37.6	—	—	灰褐色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
184	甕	物原1 3E	37.5	—	—	明赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
185	甕	物原1 3E	40.0	—	—	赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
186	甕	物原1 3F	31.0	—	—	灰黄褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
187	甕	物原1 3F	34.8	—	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第224図 物原1出土遺物(40)甕



第225図 物原1出土遺物(4)甕

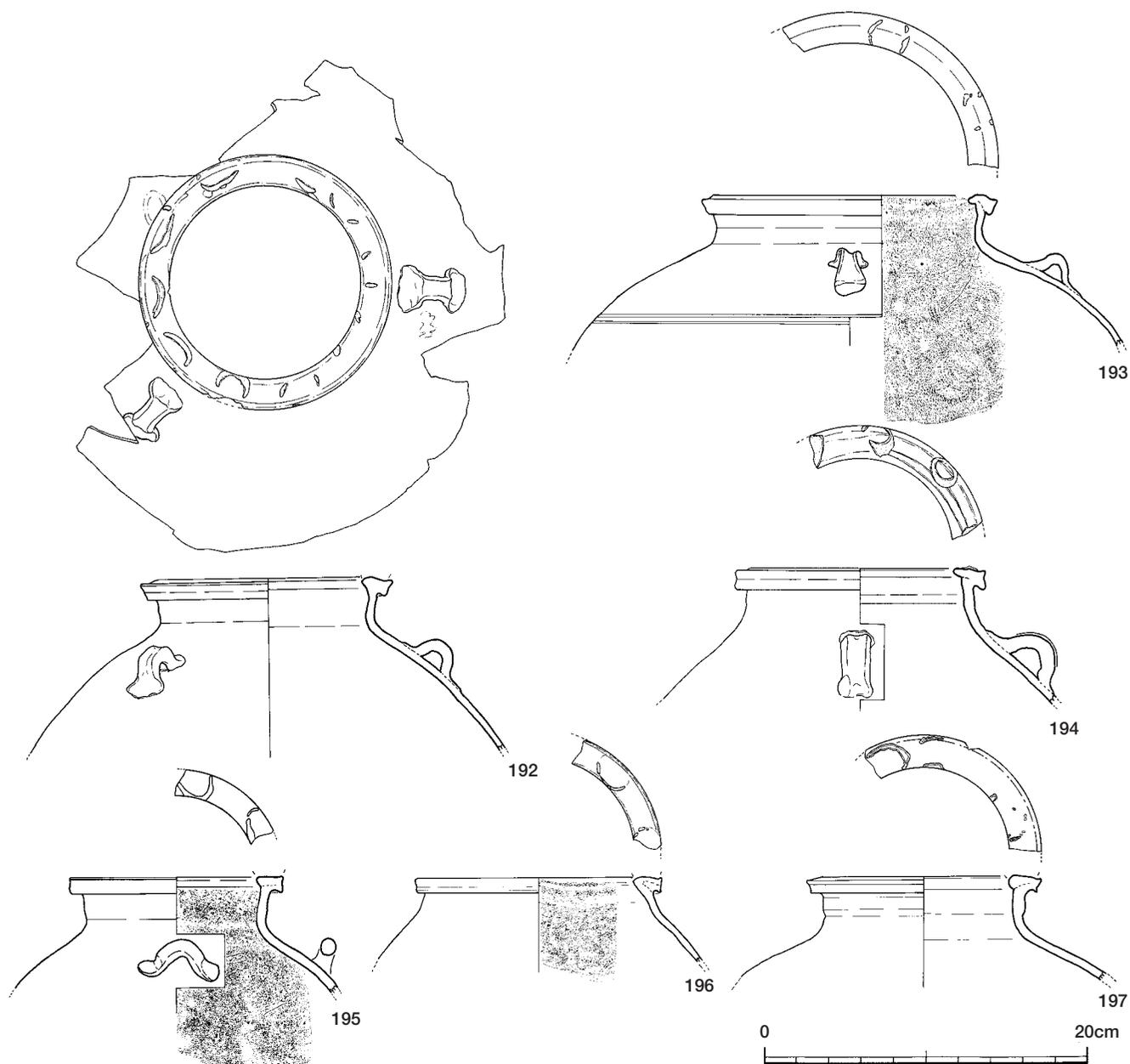
188は、口縁部が内側に丸く内湾する形状のもので、頸部に縄状の突帯が巡る。口唇部の釉は拭い取られ、貝目と合わせ口の痕跡が残る。

189~191は、大形で器壁が厚いものである。189は、内面中位以下にタタキ目、外面に筋状の調整痕が残る。釉

は、口唇部を除き施釉される。190・191は、外面口縁部下位に等間隔で穿孔が施されるものである。190は、外面にヘラ状工具による調整痕が看取される。191は口唇部に貝目が残る。

第125表 物原1 遺物観察表26

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
188	甕	物原1 3 D・4 F D	24.0	—	—	暗赤灰色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
189	甕	物原1 4 F	35.2	—	—	鈍い赤褐色	灰釉 暗灰黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に 同心円状タタキ目
190	甕	物原1 4 E・3 F	48.0	—	—	鈍い黄色	無釉か?	口唇部以外全面施釉	口唇部に粘土附着
191	甕	物原1 4 D	33.6	—	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第226図 物原1 出土遺物(4)壺

壺 (第226～230図)

大形のもの和小形のものに分けることができ、さらに口縁部や口唇部の形状により細分化することができる。

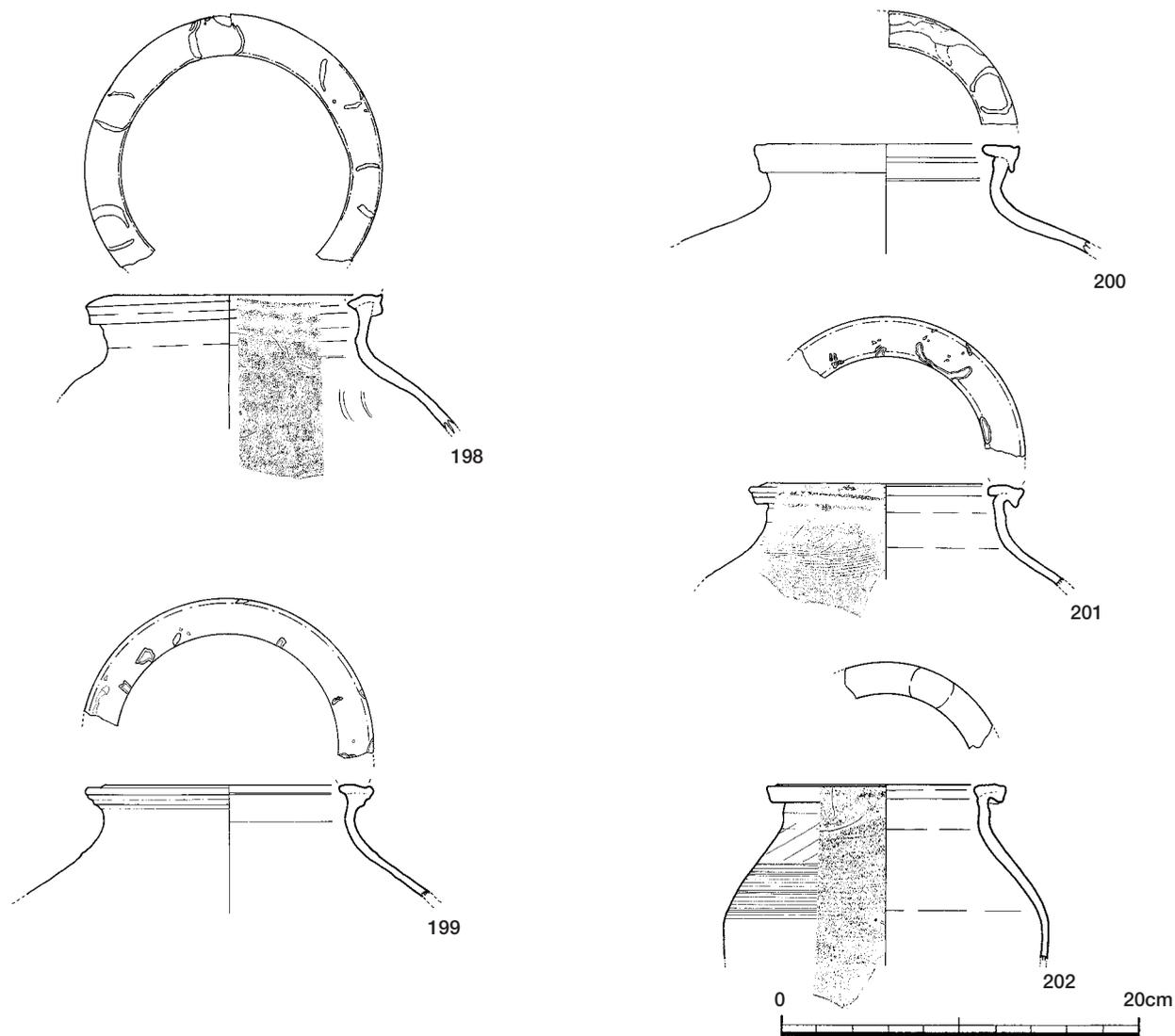
192～215は大形のものである。

192～201は、口縁部を外側に折り返して「T」字状に

つくるもので、口唇部は内側を高く、外側を溝縁状につくる。口唇部の釉は拭い取られ、貝目が残る。内面は、タタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る資料が多い。耳は、192～194は縦耳で、195は、丸みを帯びた横耳である。また、193の肩部には沈線が巡る。

第126表 物原1 遺物観察表27

レイアウト番号	器種	出土地点	法量(cm)			胎土	釉葉	施釉	備考
			口径	底径	器高				
192	壺	物原1 4 E	15.6	—	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
193	壺	物原1 4 F	18.2	—	—	褐灰色	灰釉 暗赤褐色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
194	壺	物原1 3 F	15.5	—	—	褐灰色	鉄釉 暗赤褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
195	壺	物原1 3 F	13.2	—	—	灰褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
196	壺	物原1 3 F	15.3	—	—	明赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
197	壺	物原1 3 F	14.5	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目



第227図 物原1 出土遺物(4)壺

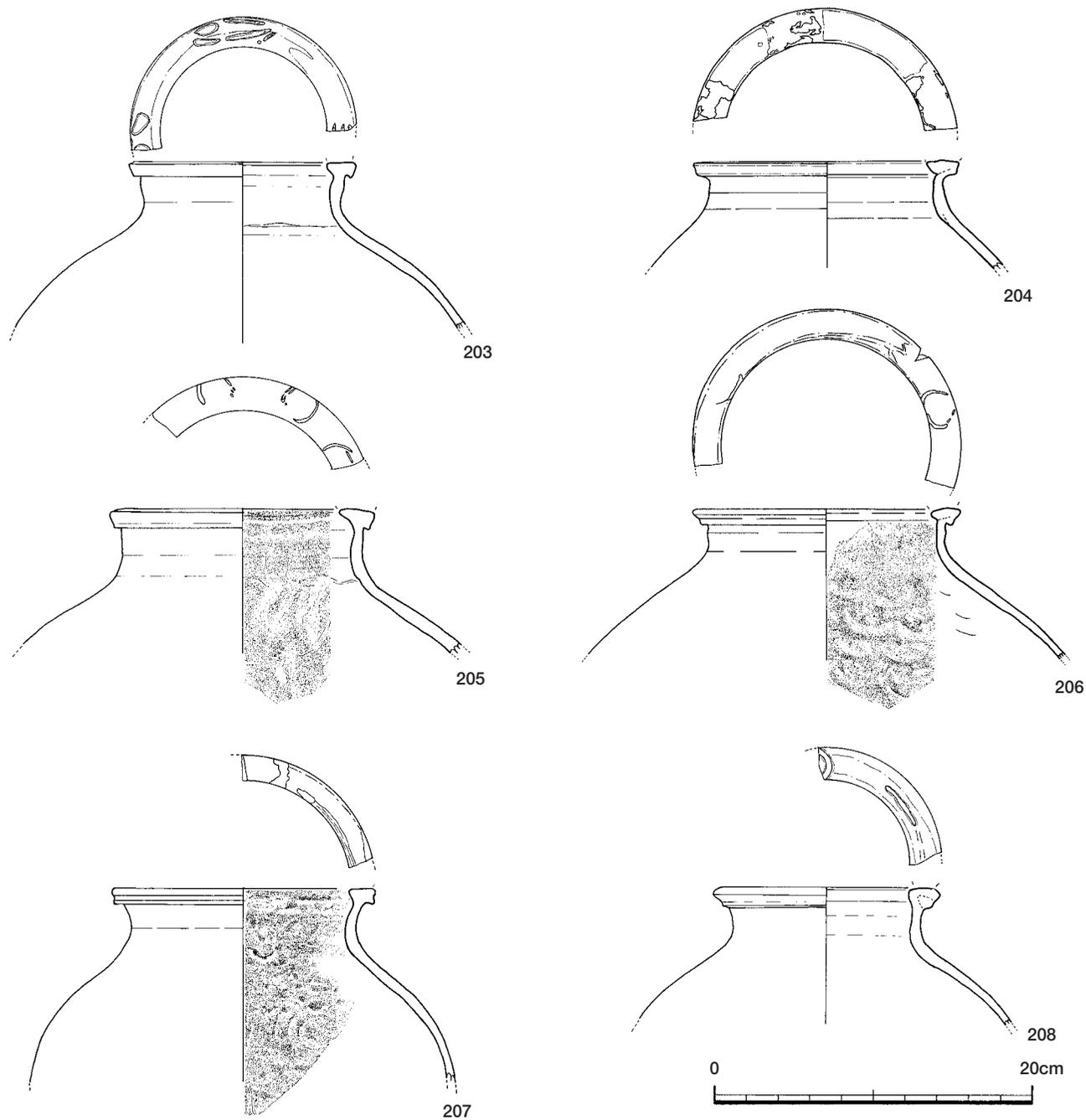
198~202は、前ページに引き続き、口縁部を外側に折り返して「T」字状につくるもので、口唇部は内側を高く、外側を溝縁状につくる。口唇部の釉は拭い取られ、貝目が残る。

203~208は、口縁部を外側に折り返して「T」字状に

つくるもので、口唇部は平坦につくるものである。どの資料も口唇部に貝目が残るが、203は、イタヤガイの貝目が看取される。202は、外面にヘラ状工具による調整痕が筋状に残る。205~207は、内面にタタキ成形時のあて具痕が同心円状に明瞭に残る。

第127表 物原1 遺物観察表28

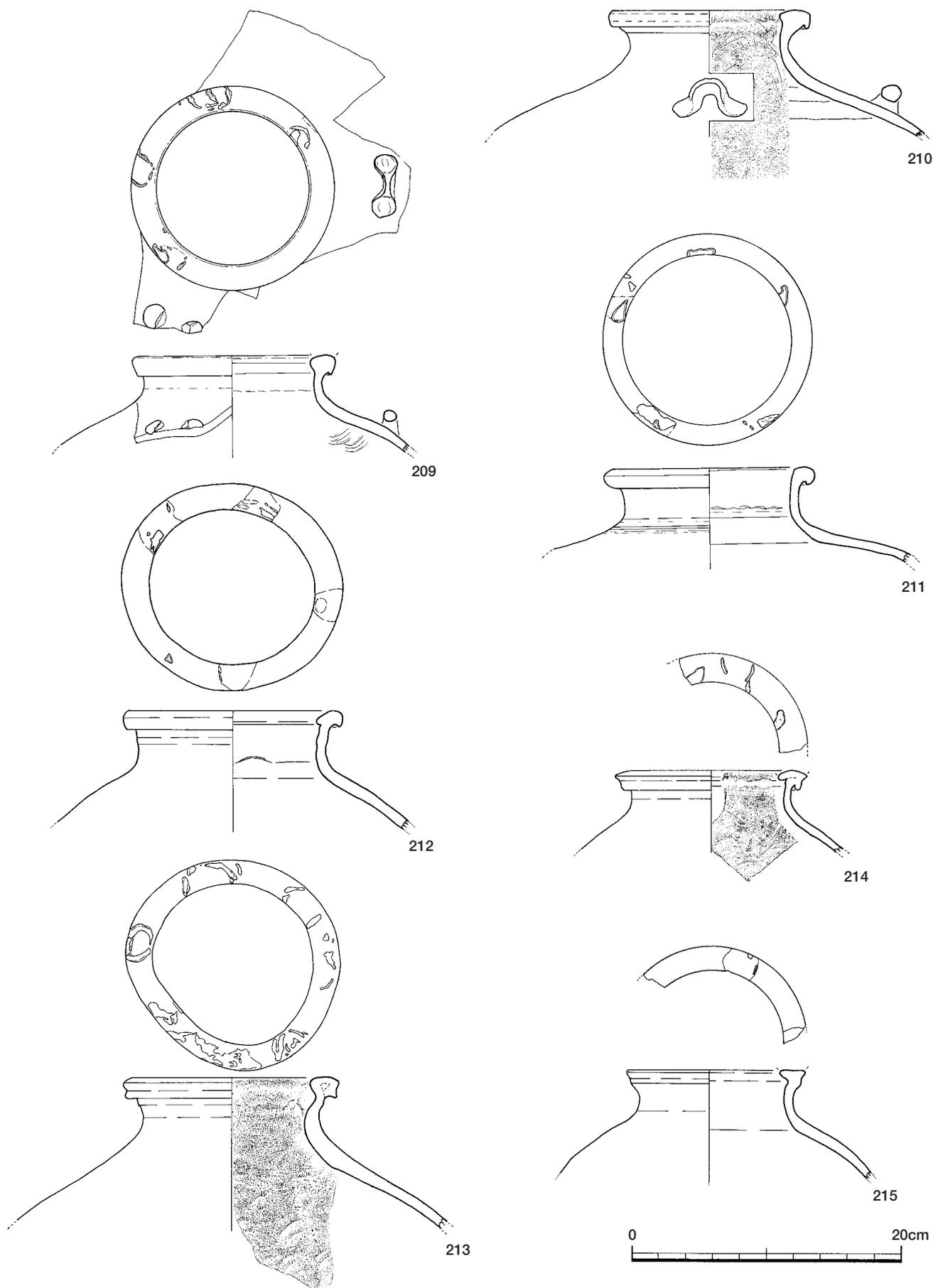
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
198	壺	物原1 4 F	15.2	—	—	灰色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
199	壺	物原1 3 F	16.2	—	—	灰褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
200	壺	物原1 4 E	14.8	—	—	灰黄色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
201	壺	物原1 4 E	15.4	—	—	橙色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
202	壺	物原1 3 D	13.4	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 緑黄色	内面一部以外全面施釉	



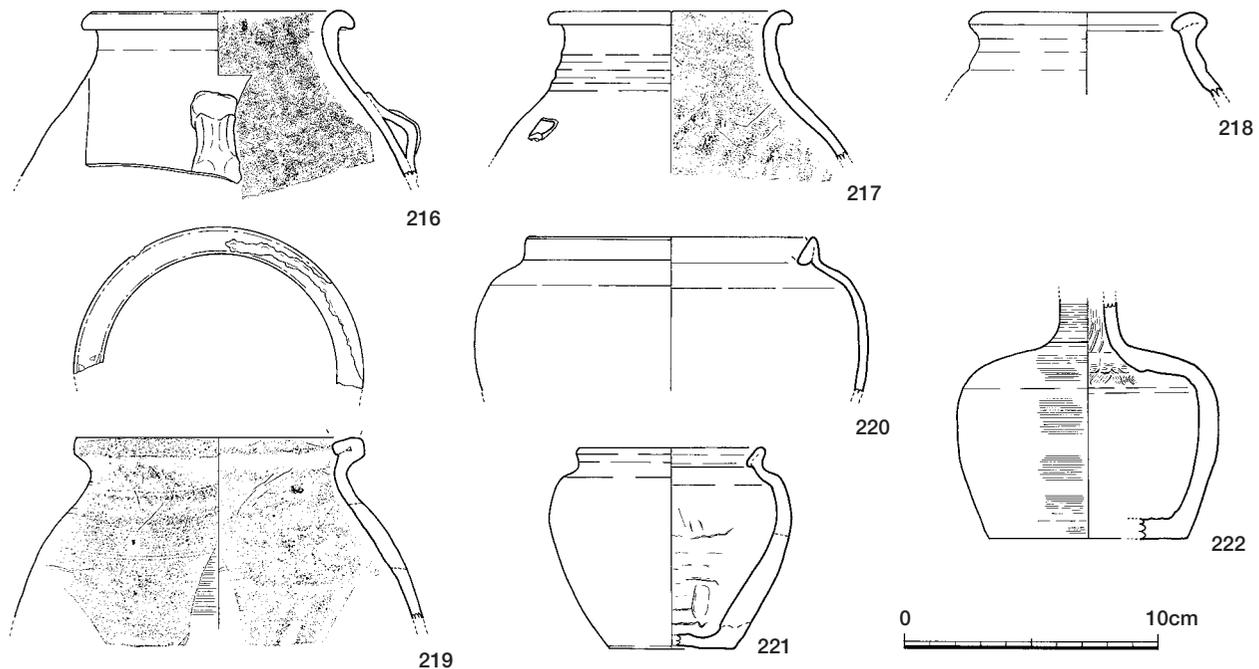
第228図 物原1 出土遺物(4)壺

第128表 物原1 遺物観察表29

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
203	壺	物原1 2 D	14.4	—	—	灰黄色	鉄釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
204	壺	物原1 4 F	16.8	—	—	灰褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
205	壺	物原1 3 E	16.6	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
206	壺	物原1 3 F	17.0	—	—	灰褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
207	壺	物原1 4 F	16.6	—	—	灰褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
208	壺	物原1 4 E	14.4	—	—	にぶい黄橙色	鉄釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第229図 物原1出土遺物(45)壺



第230図 物原1出土遺物(46)壺

209～213は、口縁端部がやや下垂し、口唇部も丸くつくられるものである。209を除き口唇部の釉は拭い取らず、貝目が看取される。209・210は、肩部に丸みを帯びた耳が付き、209は3か所付けられる。213・214は、内面の同心円状のタタキ目が特に明瞭に看取される。

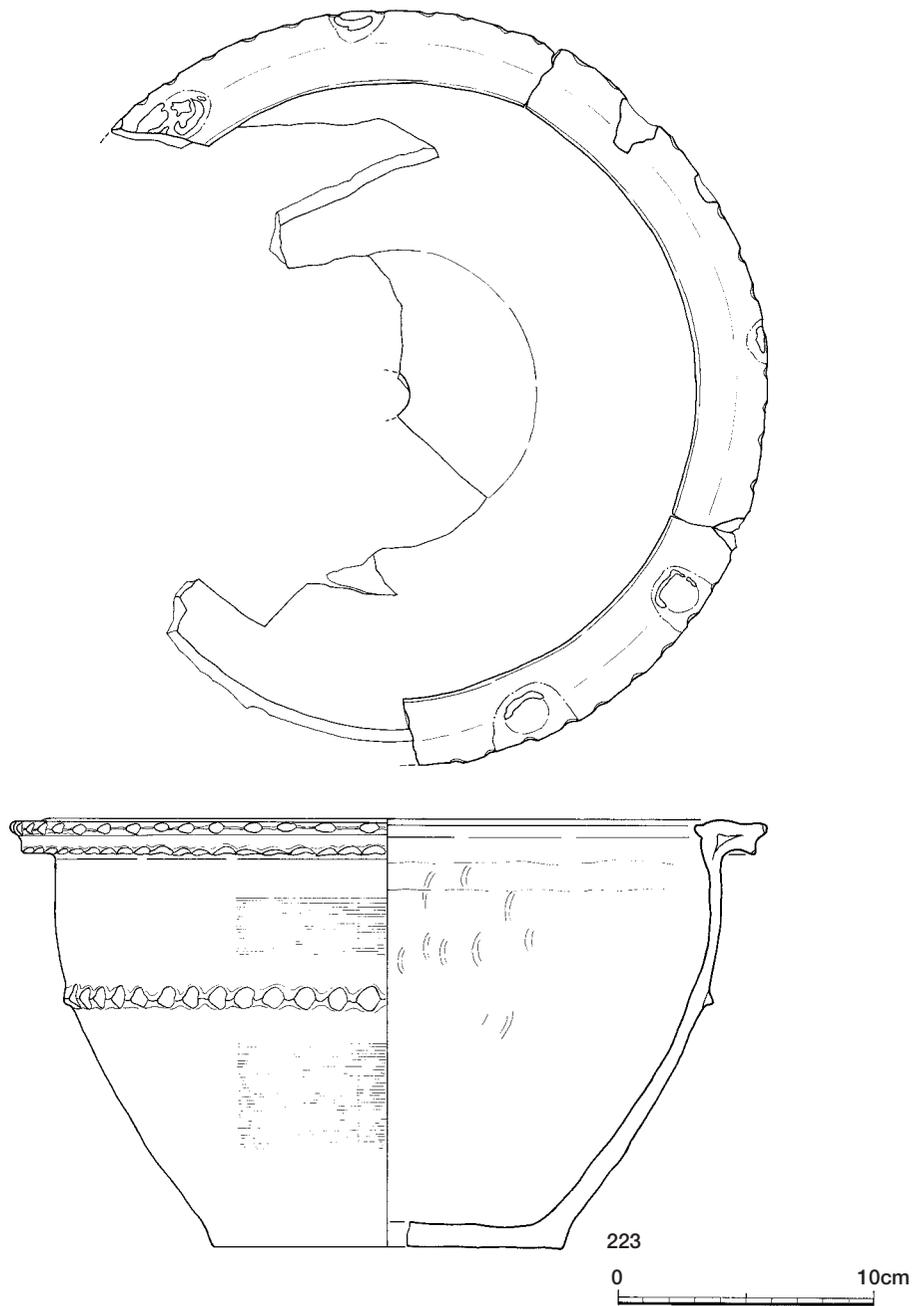
215は、1点のみの資料で、口縁部を外側に折り、さらに内側に折り返して先端を丸くおさめるものである。口唇部は、平坦につくられる。釉は、口唇部のみ拭い取られ貝目が残る。

216～222は、小形の壺である。216・217は、口縁部が丸く外反するもので、釉は、口唇部を含め残存部全面に掛けられる。どちらも個数は不明であるが、縦耳が付

く。218・219は、口縁部を外側に折り、さらに内側に折り返して先端を丸くおさめるものである。219は、合わせ口にして焼成したものと思われ、他製品の口唇部の一部が付着する。外面はヘラ状工具による筋状の調整痕が残り、内面には、同心円状のタタキ目が残る。220は、壺としたが水注の可能性も考えられる。221は、粘土紐巻き上げにより製作した形跡が内面に看取されるものである。口縁部には蓋が被るものと思われる。全面無釉である。222は、頸部が細く締まる形状を呈するものであるが、上部が欠損しているため全体の形状は不明である。外面は筋状の調整痕が看取され、全面無釉である。

第129表 物原1 遺物観察表30

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
209	壺	物原1 3 F	15.2	—	—	褐灰色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
210	壺	物原1 2 D E	15.0	—	—	浅黄色	灰釉 暗赤褐色	残存部全面施釉	内面にタタキ目
211	壺	物原1 4 D	15.6	—	—	灰褐色	灰釉 にぶい黄色	残存部全面施釉	口唇部に貝目
212	壺	物原1 4 E	16.4	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	口唇部に貝目
213	壺	物原1	15.9	—	—	浅黄色	鉄釉 にぶい赤褐色	残存部全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
214	壺	物原1 4 E	14.2	—	—	灰褐色	灰釉 緑灰色	口唇部以外全面施釉	内面タタキ目 口縁部貝目
215	壺	物原1 4 E	14.2	—	—	赤橙色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
216	壺	物原1 3 D	11.0	—	—	黄灰色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	内面タタキ目 口縁部に合わせ口の痕跡
217	壺	物原1 3 F	9.6	—	—	褐灰色	灰釉 褐色	残存部全面施釉	内面にタタキ目
218	壺	物原1 3 F	4.7	—	—	褐灰色	灰釉 灰黄色	残存部全面施釉	
219	壺	物原1 4 E	11.4	—	—	褐灰色	灰釉 灰褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目・合わせ口の痕跡 内面にタタキ目 粘土紐巻き上げ痕跡
220	壺	物原1 3 F	11.4	—	—	暗赤褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	
221	壺	物原1 4 F	7.4	5.0	7.9	にぶい赤褐色	無釉	—	内面にタタキ目 粘土紐巻き上げ痕跡
222	壺	物原1 4 F	—	7.8	—	灰色	無釉	—	



第231図 物原1出土遺物(47)植木鉢

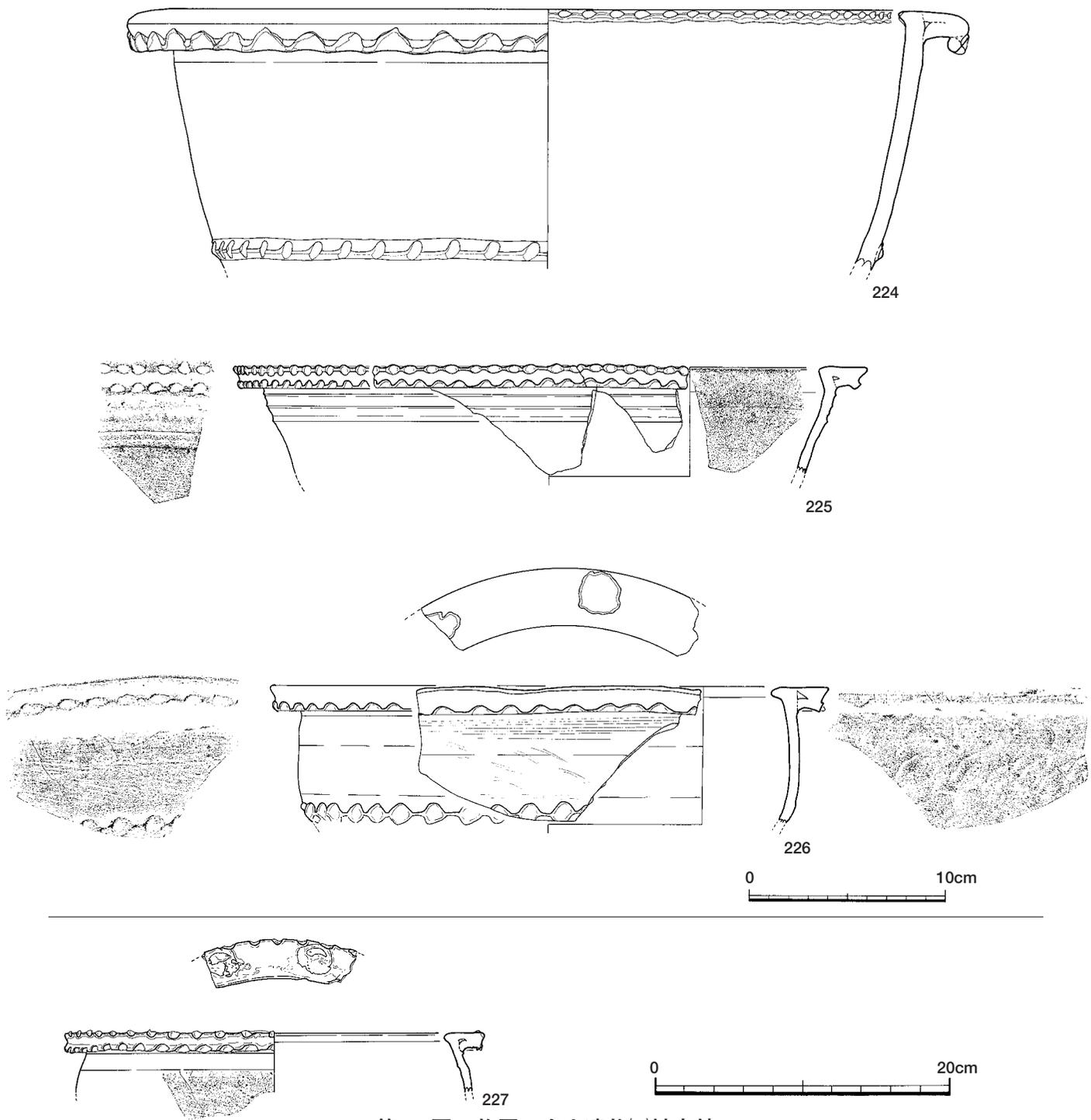
植木鉢（第231～236図）

223～238は植木鉢である。すべて素焼きである。大形のもの和小形で吊り下げて使用すると思われるものの2種に分けることができる。

223～230は大形の植木鉢で、口縁部の外縁や胴部に装飾を施すものである。

223は底面に水ぬきのための穿孔を有するものである。外面は、へら状工具による横方向の調整が施され、その痕跡が明瞭に残る。内面は、タタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。また、口唇部には、貝目が残る。226・

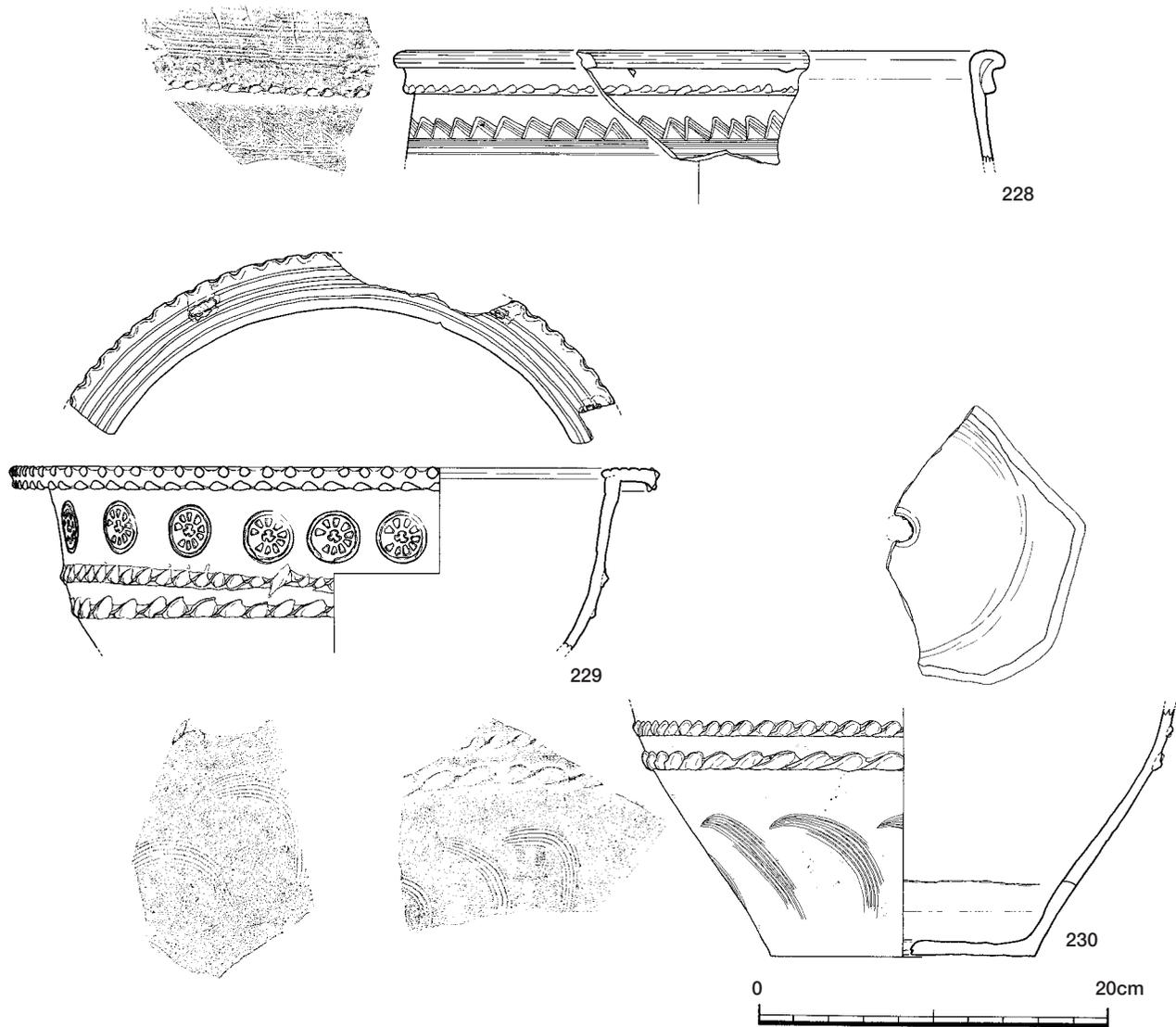
227は、胴部が丸みを帯びるもので、外面に平行タタキ目の痕跡が明瞭に残る。口唇部には貝目が残る。226は、内面にも同心円状のタタキ目が看取される。



第232図 物原1 出土遺物(48)植木鉢

第130表 物原1 遺物観察表31

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
223	植木鉢	物原1 2 D	29.6	13.8	16.8	にぶい赤褐色	無釉	—	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
224	植木鉢	物原1 3 E	42.8	—	—	橙色	無釉	—	内面に同心円状タタキ目 内面に指痕
225	植木鉢	物原1 4 E	32.2	—	—	灰黄色	無釉	—	
226	植木鉢	物原 2 F	28.4	—	—	褐灰色	無釉	—	口唇部貝目 合わせ口の痕跡 内面に同心円状タタキ目
227	植木鉢	物原1 4 E	28.4	—	—	黄灰褐色	無釉	—	口唇部貝目 合わせ口の痕跡 内面に同心円状タタキ目



第233図 物原1 出土遺物(49)植木鉢

228は、口縁部を外側に折り返し肥厚させ、1条の突帯を巡らせるもので、突帯の先端には装飾を施す。また、外面には、波状文を施し、口唇部には筋状の装飾を施す。

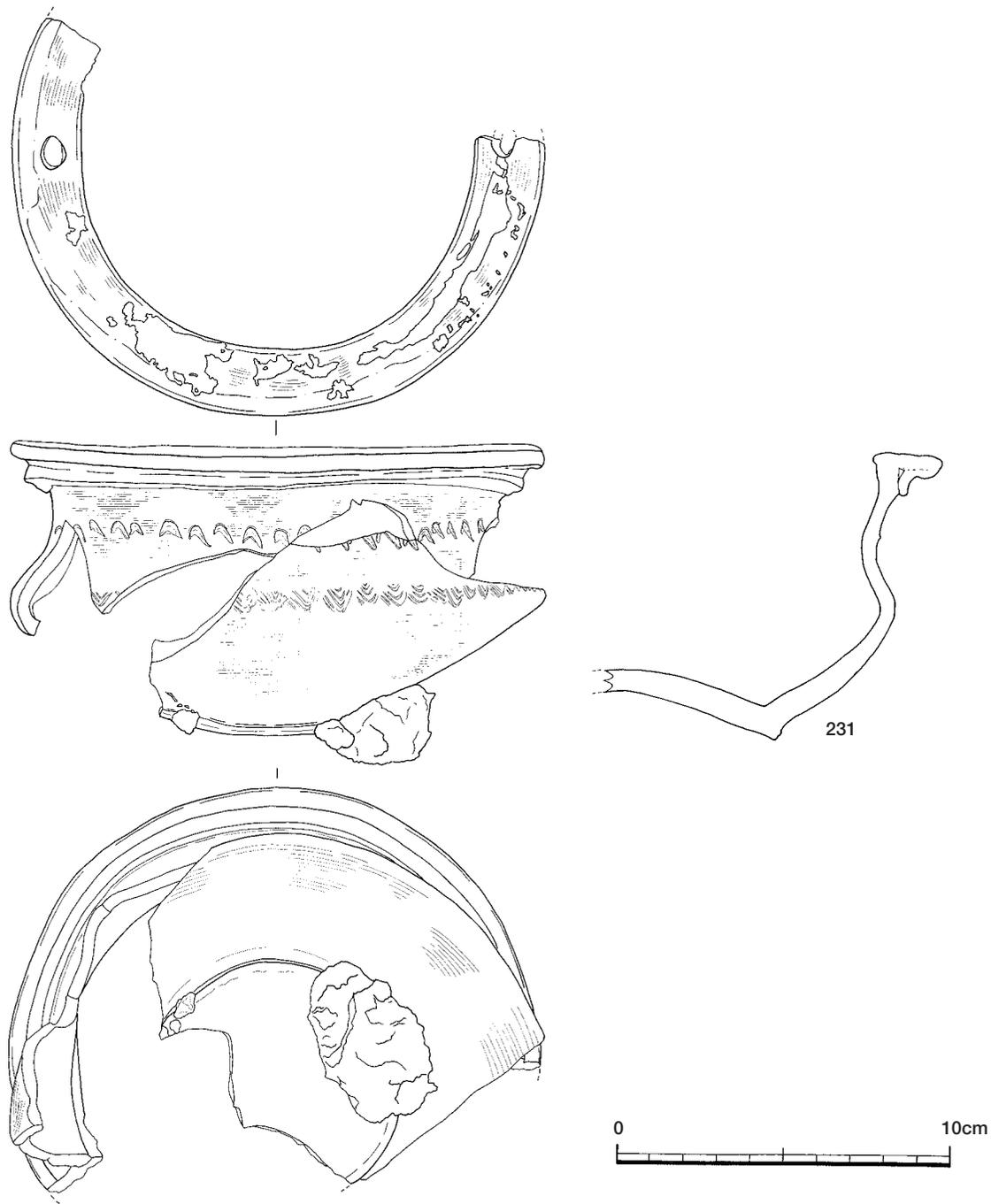
229は、外面に2条の縄状の突帯を貼り付け、花形のスタンプ文が押印されたもので、スタンプの間隔はやや雑である。その他、口縁部先端にも装飾が施され、口唇部

には4条の沈線が巡る。

230は、外面にくし書きの文様が施され、2条の縄状の突帯が貼り付けられたものである。同一個体と考えられる資料が数片あったため、図上復元を試みた資料である。底面に穿孔が看取できる資料で、外面のくし書きの文様は数個体あった同一個体より図上復元を試みた。底面には、水抜き穴と思われる穿孔が看取される。

第131表 物原1 遺物観察表32

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
228	植木鉢	物原2 3 E	35.0	—	—	橙色	無釉	—	口唇部に貝目 内面にたたき目
229	植木鉢	物原1 4 E	37.0	—	—	明赤褐色	無釉	—	口唇部に貝目 内面に同 心円状タタキ目
230	植木鉢	物原1 4 E	—	15.2	—	赤橙色	無釉	—	外面底部に目跡



第234図 物原1 出土遺物(50)植木鉢

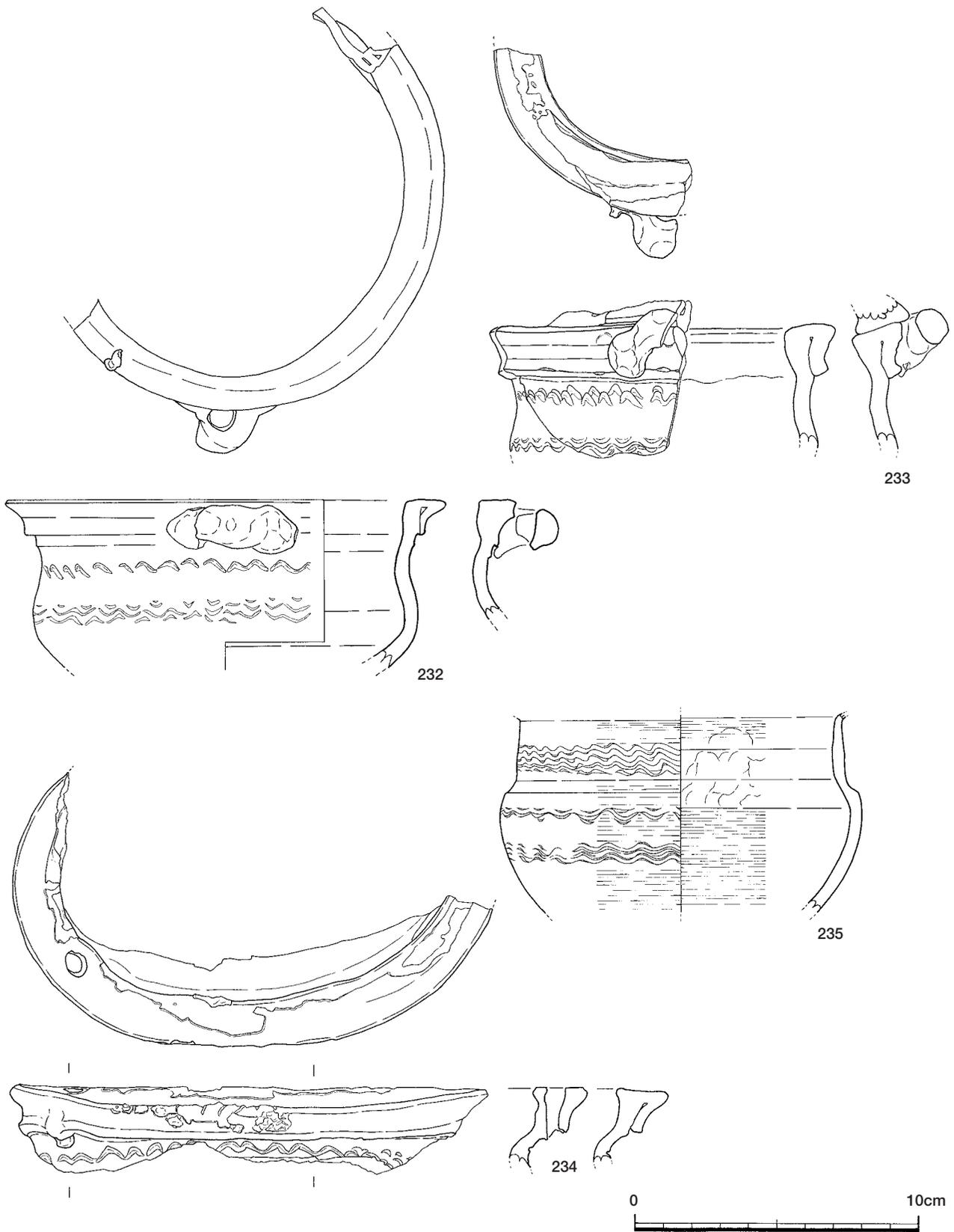
231～238は、口唇部に2か所穿孔が施された小形の吊り下げタイプの植木鉢である。

231は、焼け歪みが激しく、歪に変形した資料である。

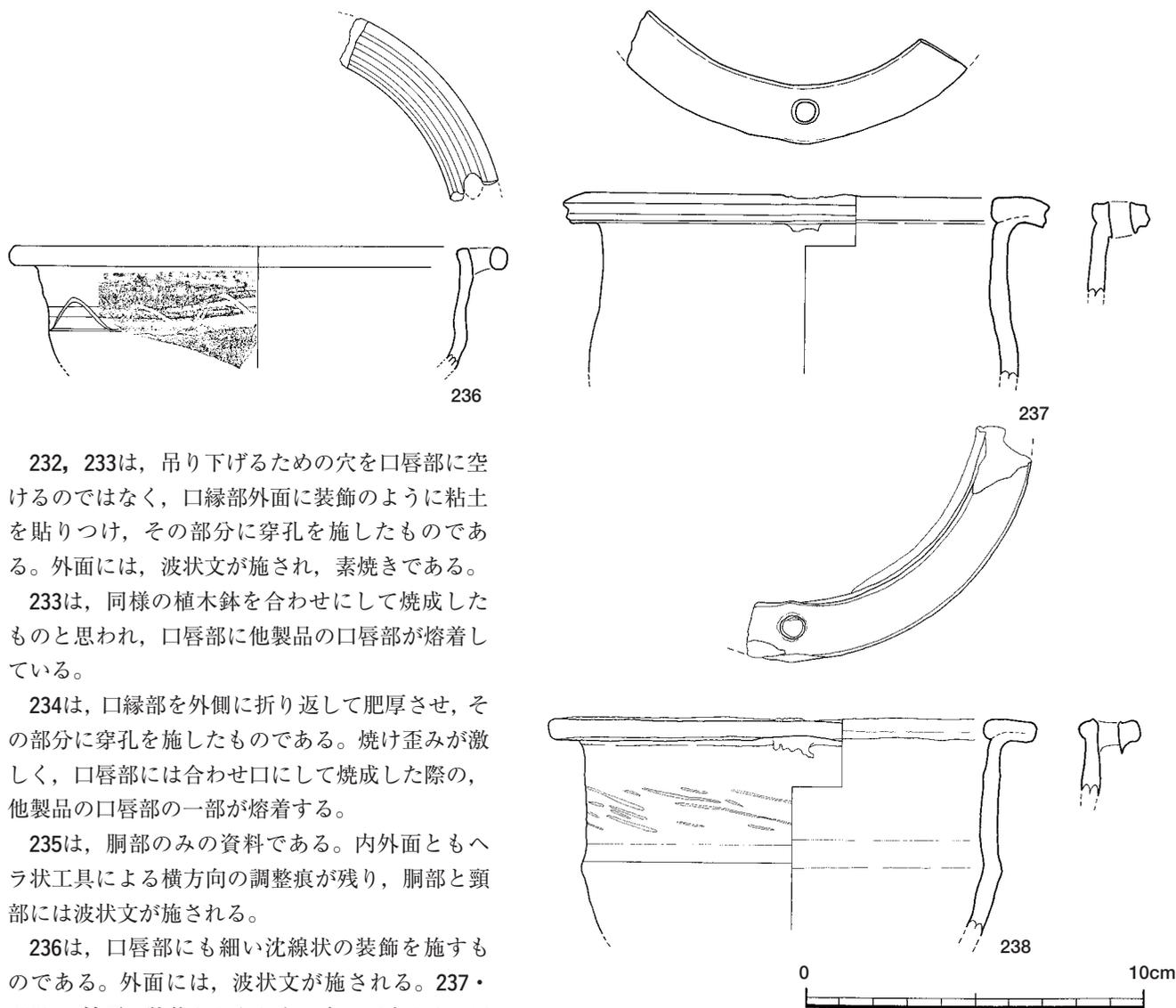
外面には細かい波状文が2条巡り、横方向の調整痕も看取される。外底面にハマの一部が熔着している。また、口唇部には合わせ口で焼成したと思われる痕跡が残る。

第132表 物原1 遺物観察表33

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
231	植木鉢	物1 2D	16.0	—	—	灰褐色	無釉	—	口唇部に貝目 底部にハマ付着



第235図 物原1出土遺物(5)植木鉢



第236図 物原1 出土遺物(52)植木鉢

232, 233は、吊り下げるための穴を口唇部に空けるのではなく、口縁部外面に装飾のように粘土を貼りつけ、その部分に穿孔を施したものである。外面には、波状文が施され、素焼きである。

233は、同様の植木鉢を合わせにして焼成したものと思われ、口唇部に他製品の口唇部が熔着している。

234は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、その部分に穿孔を施したものである。焼け歪みが激しく、口唇部には合わせ口にして焼成した際の、他製品の口唇部の一部が熔着する。

235は、胴部のみ資料である。内外面ともヘラ状工具による横方向の調整痕が残り、胴部と頸部には波状文が施される。

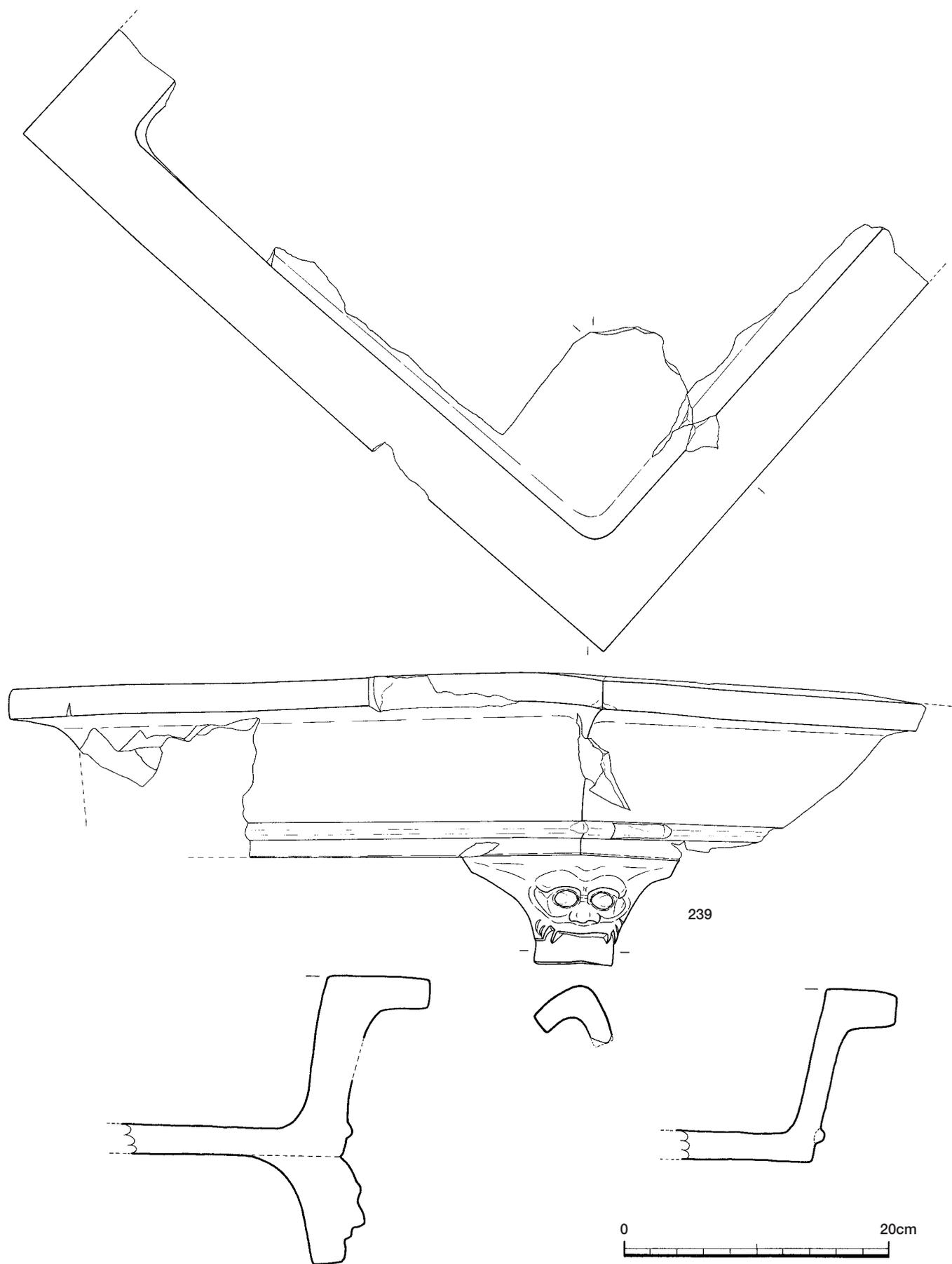
236は、口唇部にも細い沈線状の装飾を施すものである。外面には、波状文が施される。237・238は、外面に装飾がみられないものであるが、口唇部に穿孔が施されているため、吊り下げ式の植木鉢と思われる資料である。

237は、素焼きのもので、内外面とも丁寧にナデ調整が施される。

238は、外面上位にタタキ成形時の平行タタキ目が残る。

第133表 物原1 遺物観察表34

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
232	植木鉢	物原1 2D	15.6	—	—	黄灰色	無釉	—	
233	植木鉢	物原1 2D	12.2	—	—	褐灰色	無釉	—	合わせ口の痕跡
234	植木鉢	物原1 2D	—	—	—	浅黄色	無釉	—	合わせ口の痕跡
235	植木鉢	物原2 2E	—	—	—	にぶい褐色	無釉	—	内面に同心円状タタキ目
236	植木鉢	物原1 3F	14.7	—	—	橙色	無釉	—	
237	植木鉢	物原1 4D	14.4	—	—	黄灰色	無釉	—	内面に同心円状タタキ目
238	植木鉢	物原1下3E	14.6	—	—	黄灰色	無釉	—	

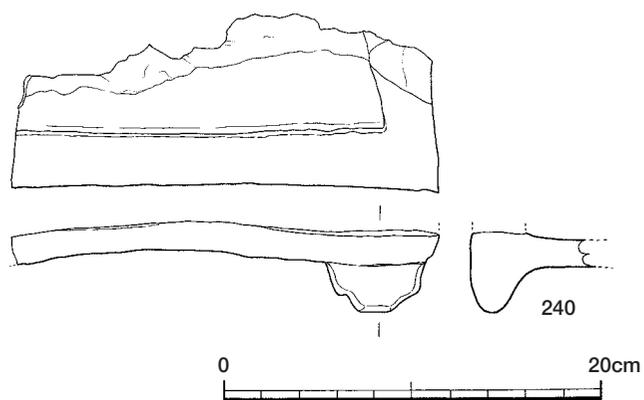


第237図 物原1出土遺物(53)盆栽鉢

盆栽鉢（第237・238図）

239は、大形の盆栽鉢と思われるものである。平面は長方形の形状を呈するものと思われ、残存している一辺は短辺のほうである。外面下位に突帯を1条巡らし、底面には獅子頭の獣足を有する。4脚あるものと思われる。

240は、239と比較して小さいが、方形を呈する盆栽鉢の底部と思われる資料である。外底面に半円状の脚部を有する。

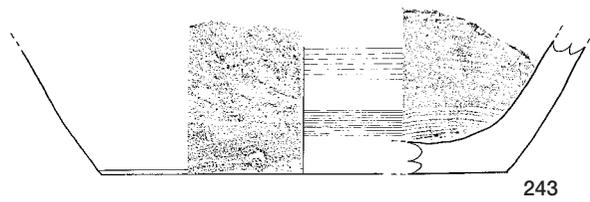
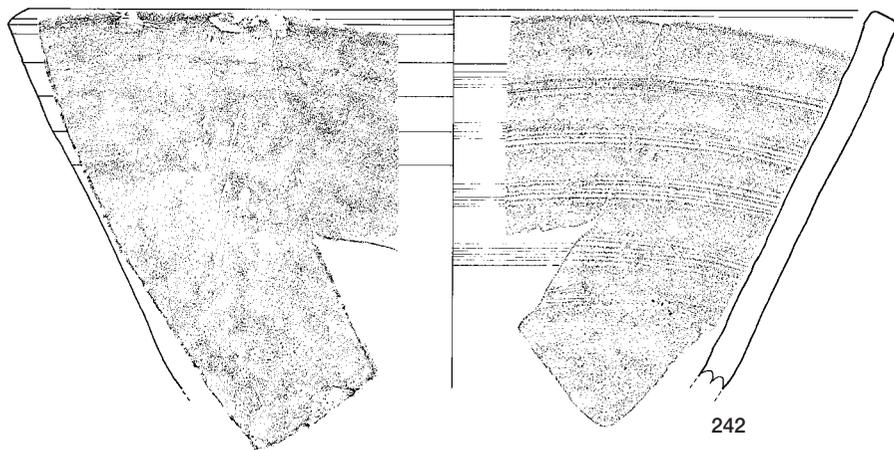
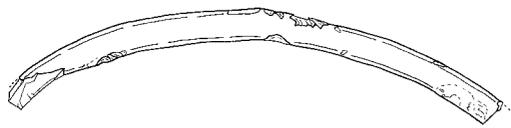
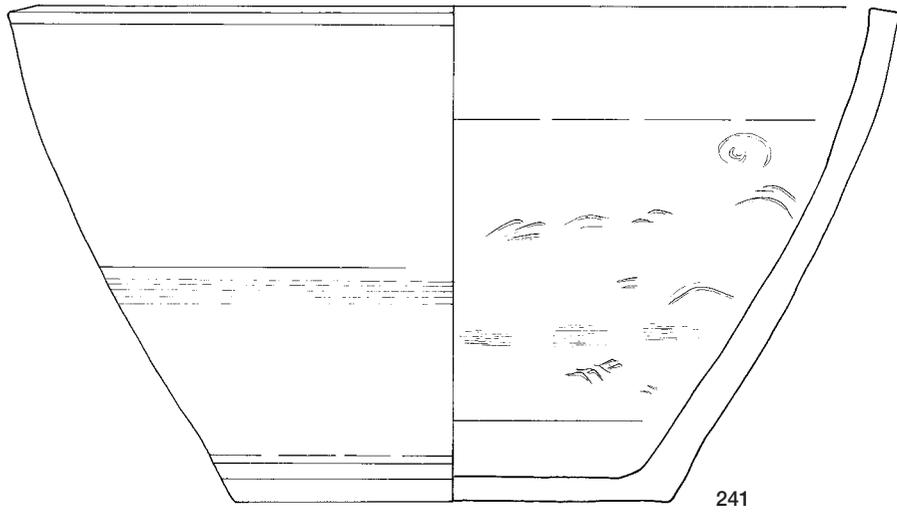


第238図 物原1 出土遺物(54)盆栽鉢

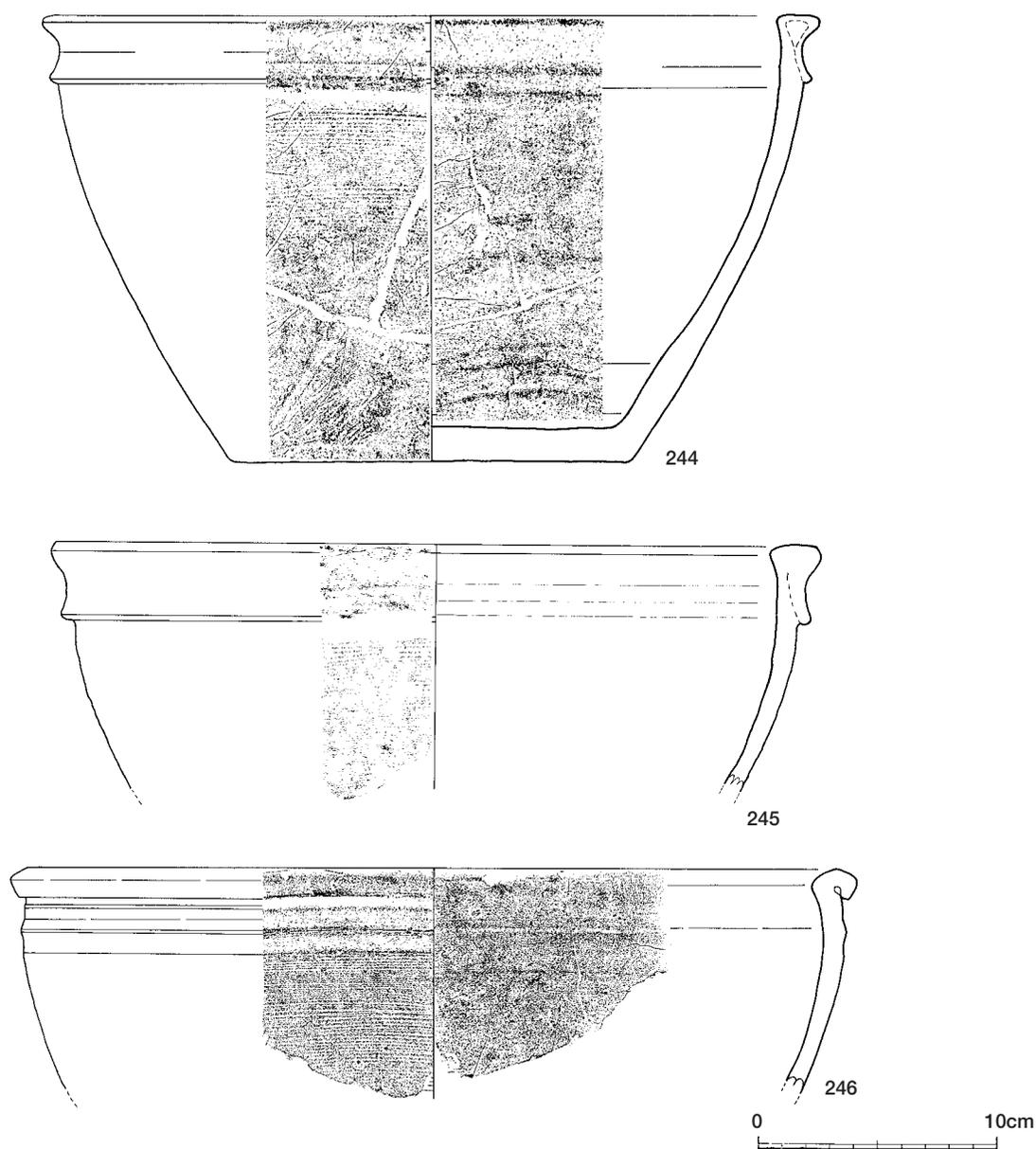
第134表 物原1 遺物観察表35

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
239	盆栽鉢	物原1 3.4 E F 物原1 4 E	長さ58.2	—	21.7	灰赤色	灰釉 緑黄色	脚内部以外全部施釉？	獅子頭
240	盆栽鉢	物原1 4 E	—	—	5.7	灰黄褐色	無釉	—	





第239図 物原1出土遺物(55)鉢



第240図 物原1出土遺物(56)鉢

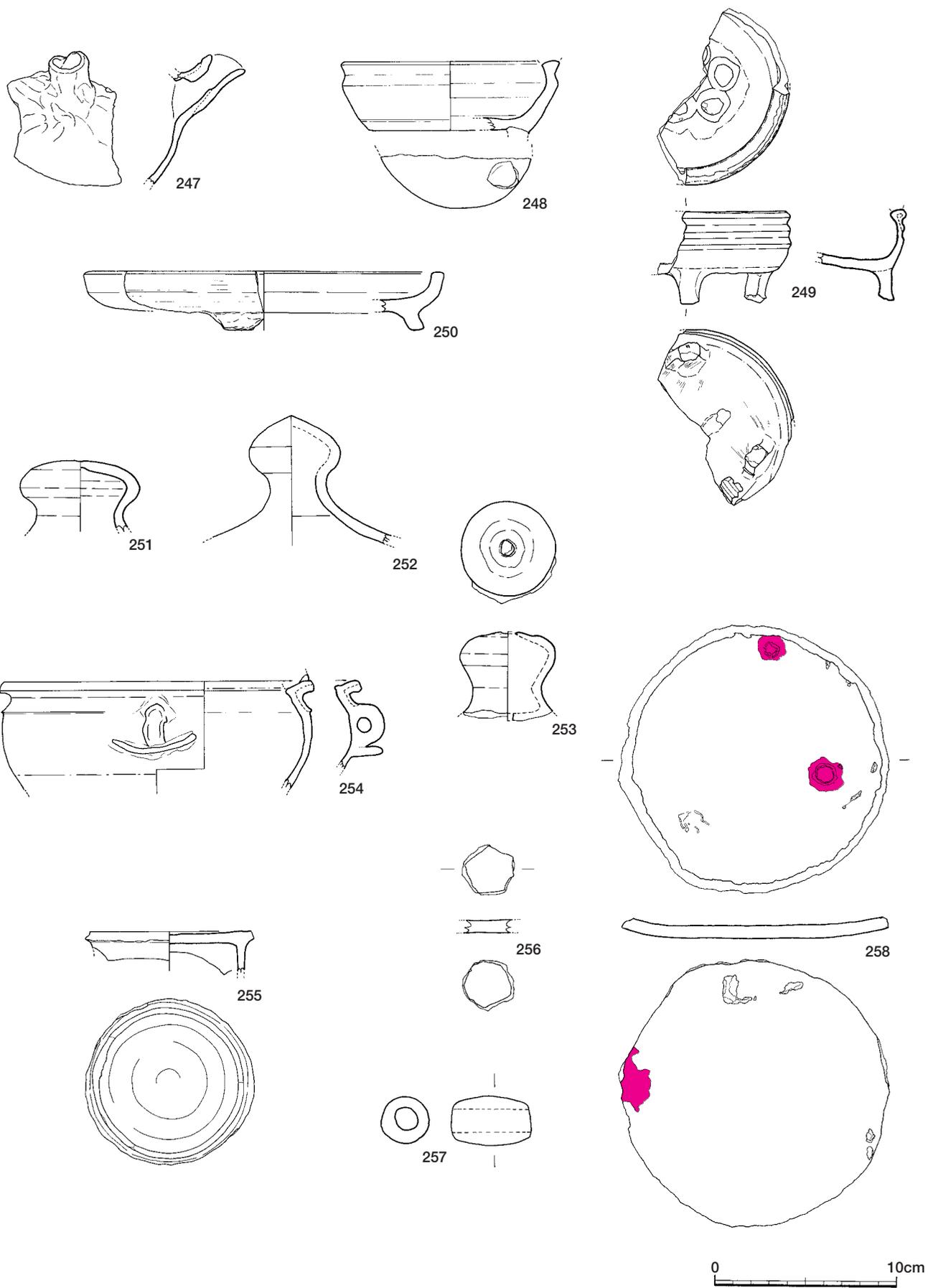
鉢（第239・240図）

241～246は素焼きの鉢である。第2地点で多く出土している。242・243は同一個体と思われる資料である。241は内面に同心円状のタタキ目が残るが、他は内外面ともヘラ状工具による横方向の調整痕が残るものがほと

んどである。口縁部の形状から3つに分けることができる。241・242は、口縁部が直行するものである。244・245は、外側に折り返して肥厚させ、1条の突帯をつきうるものである。246は、外側に丸く外反させるものである。

第135表 物原1 遺物観察表36

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
241	鉢	物原1 4F下 4E	35.0	16.0	19.9	橙色	無釉	—	
242	鉢	物原1 4D	35.2	—	—	橙色	無釉	—	口唇部に貝目
243	鉢	物原1 4D	—	16.0	—	橙色	無釉	—	
244	鉢	物原1 4D	33.0	—	—	橙色	無釉	—	
245	鉢	物原1 4D	32.0	—	—	にぶい黄橙色	無釉	—	
246	鉢	物原1 3EF	35.4	—	—	橙色	無釉	—	



第241図 物原1 出土遺物(57)その他

その他の出土遺物（第247～263図）

第2地点の物原1からは、1点もの、もしくは、数点しか出土していない器種のものが多く出土している。特注品等、様々な種類の製品を製作していたものと思われる。

247は、水注の注口部である。水注の出土量は遺物量の多い物原1の中で非常に少なく、ほとんどみられない。水注であると判断でき、図化できたものは、この1点のみであった。注口は他の物原から出土しているものと同様に巻き口のつくりである。外面には胴部と注口部を接合させた痕跡が残る。把手部はどのような形状のものかは不明である。

248・249は香炉と思われる資料である。248は、焼き歪みが見られ楕円形に変形している。外底面には脚がついていたと思われる痕跡が残る、脚部は3か所ついていたものと思われる。249は2本の脚部が残存しているが、実際は3本あったものと思われる。また内底面には数個の貝目が残っており、他の製品を内側に入れて重ね焼きをしたものと思われる。また外底面にも貝目が看取される。

250は皿のような形状のものの底部に、やや平たい足がつくものである。何か所付けられるのかは残存部が少ないため不明である。

251, 252は、澁瓶のつまみ部である。内面は無釉である。253は、蓋のつまみと思われる資料である。つまみ部は中空につくられ、頂部と蓋の上部にかけて穿孔が施される。ガスや蒸気を逃がすための穴と思われる。

254は、縦型の耳のしたに受け皿のような形状をしたものが付着する資料である。釉は外面中位まで掛けられ、内面と外面下位は露胎し、口唇部の釉も拭い取られている。また、合わせ口で焼成されたものと思われ、口唇部には他製品の口唇部が一部熔着する。把手の形態から茶釜の可能性も考えられる。

255は、上面端部を打ち欠いて円形に整えたもので、用途は不明である。釉は上面のみ無釉である。

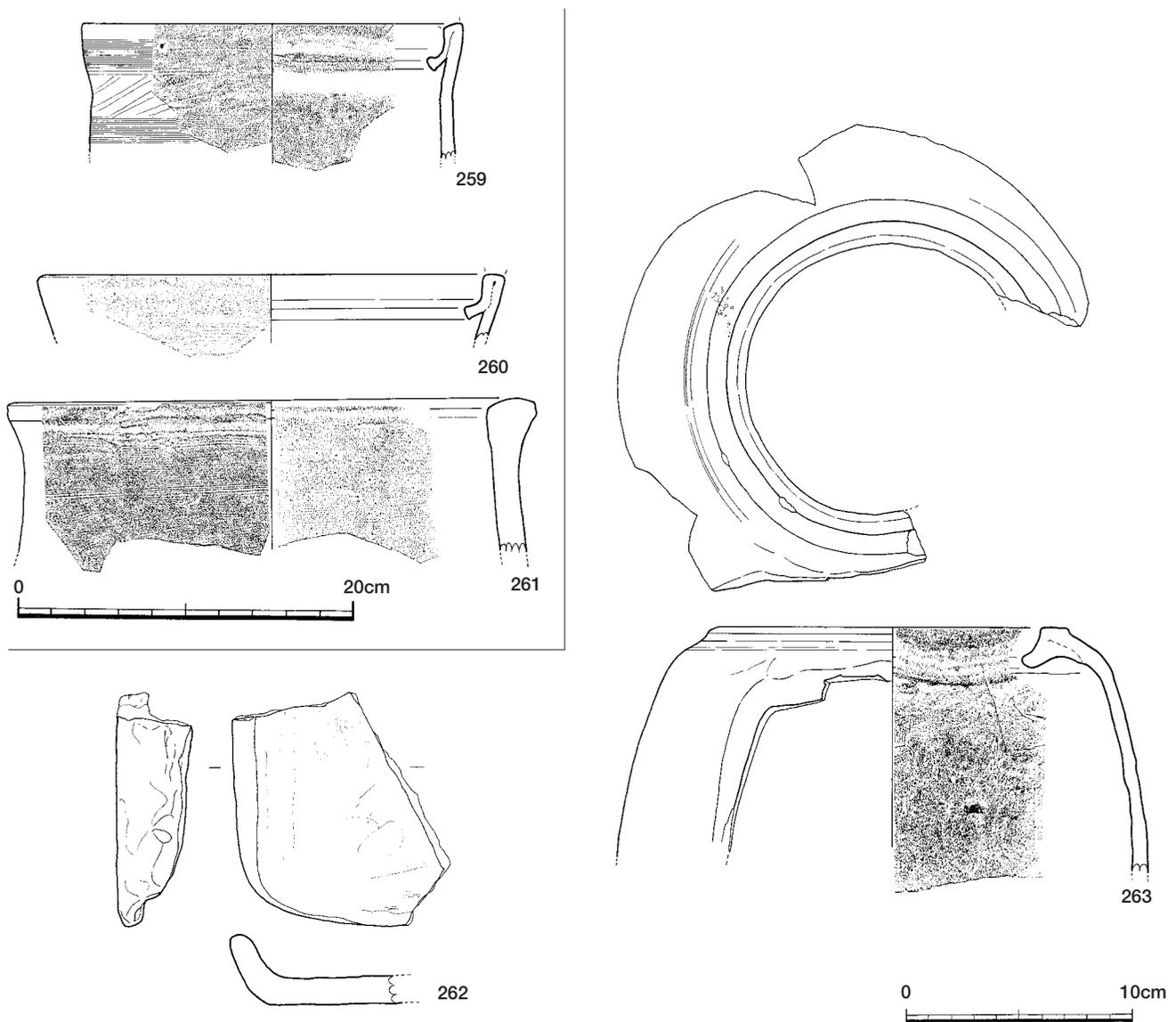
256は、胴部又は底部をメンコに転用したものである。

257は素焼きの土錘である。

258は、底部を他のものに転用したと思われる資料である。内面にはタタキ成形のあて具痕が残る。

第136表 物原1 遺物観察表37

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
247	注口	物原1 3 F	—	—	—	にぶい橙色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	
248	香炉	物原1 3 D	12.0	8.7	—	暗赤褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	
249	香炉	物原1 2 F	13.0	—	5.9	灰黄褐色	鉄釉 黒褐色	側面のみ施釉	内外底面に貝目 脚部底面に貝目
250	香炉	物原1 4 D	19.8	—	—	灰黄褐色	無釉	—	
251	澁瓶	物原1 3 F	つまみ径6.5	—	—	灰黄褐色	鉄釉 黒褐色	外部全面施釉	
252	澁瓶	物原1 3 E	つまみ径5.0	—	—	灰黄色	灰釉 浅黄色	外部全面施釉	内面にタタキ目
253	蓋	物原1 3 E	つまみ径5.2	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 暗灰黄色	外部全面施釉	
254	茶釜?	物原1 2 D	23.2	—	—	褐灰色	灰釉 黒褐色	口唇部, 内面以外全面施釉	口唇部に合わせ口の痕跡
255	不明	物原1 3 C	上径8.85	—	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	上面以外全面施釉	
256	メンコ	物原1 4 D	—	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰黄色	残存部全面施釉	
257	土錘	物原1 3 F	2.5	長さ4.3	—	赤灰色	無釉	—	
258	不明	物原1 2 E	—	—	—	灰黄褐色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	上面に目跡・タタキ目 下面に粘土付着



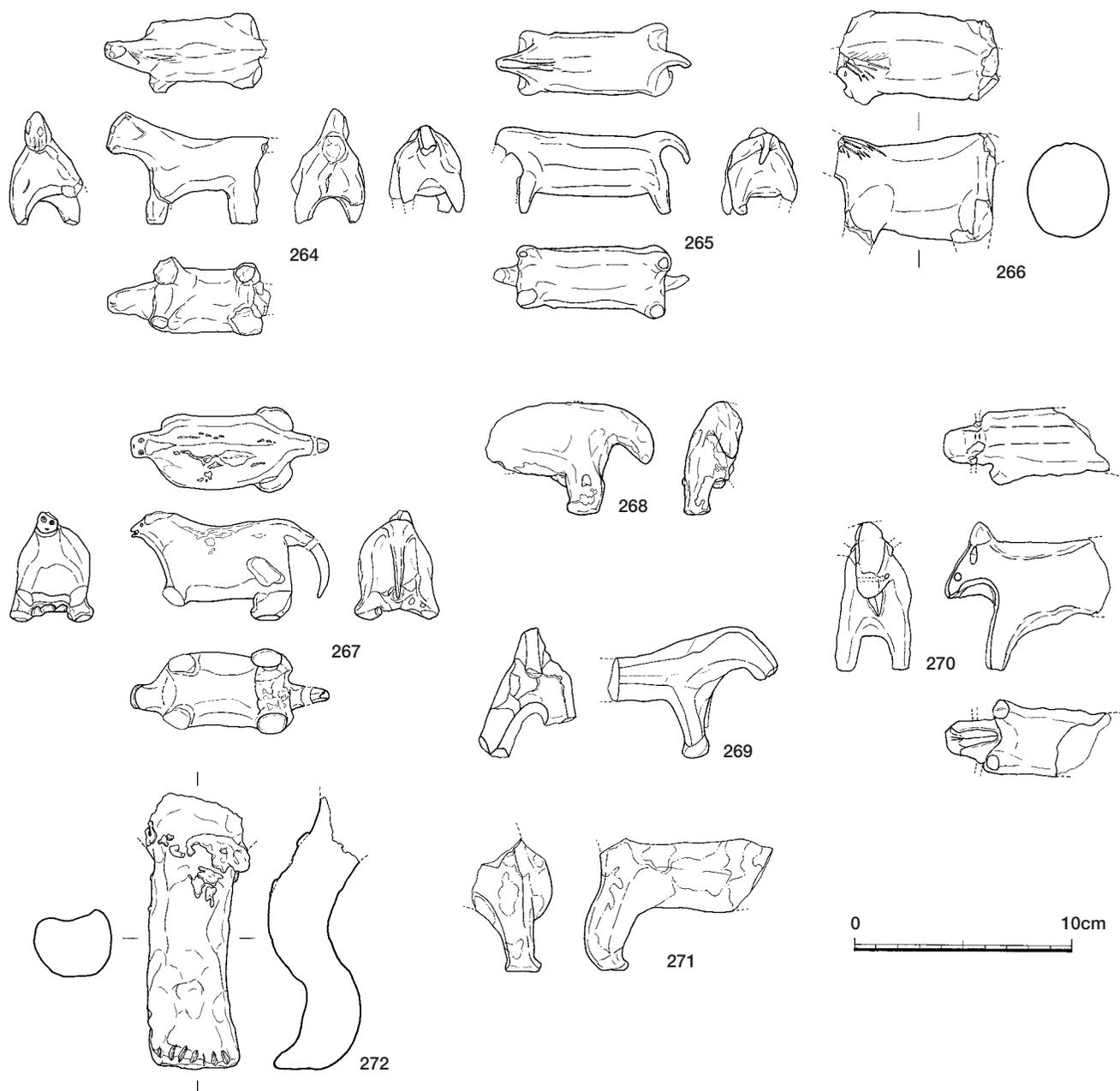
第242図 物原1 出土遺物(58)その他

259, 260は、口縁部を内側に折り返しておさめるもので、蓋が被るものと思われる。どちらも口唇部を除き、残存部には灰釉が掛けられる。259は内外面に、260は外面にヘラ状工具による調整痕が残る。261は、器壁が厚く素焼きの資料で、用途は不明である。内外面にヘラ状

工具による調整痕が残る。262も、素焼きのもので用途不明である。内面に筋状の調整痕が看取される。263は、小形のかまどと考えられる資料である。内面には同心円状のあて具痕が残る。

第137表 物原1 遺物観察表38

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
259	火消壺?	物原1 3・4 D・3 E	22.6	—	—	にぶい橙色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	
260	火消壺?	物原1 4 E	27.6	—	—	橙色	灰釉 にぶい橙色	口唇部以外全面施釉	
261	甕	物原1 3 F・4 E	31.3	—	—	暗灰黄色	無釉	—	
262	不明	物原1 3 G		—	3.2	にぶい黄橙色	無釉	—	
263	かまど	物原1一表3.4 E F 物原1 3 G	15.3	—	3.2	にぶい黄橙色	無釉	—	内面にタタキ目



第243図 物原1 出土遺物(59)動物型土製品

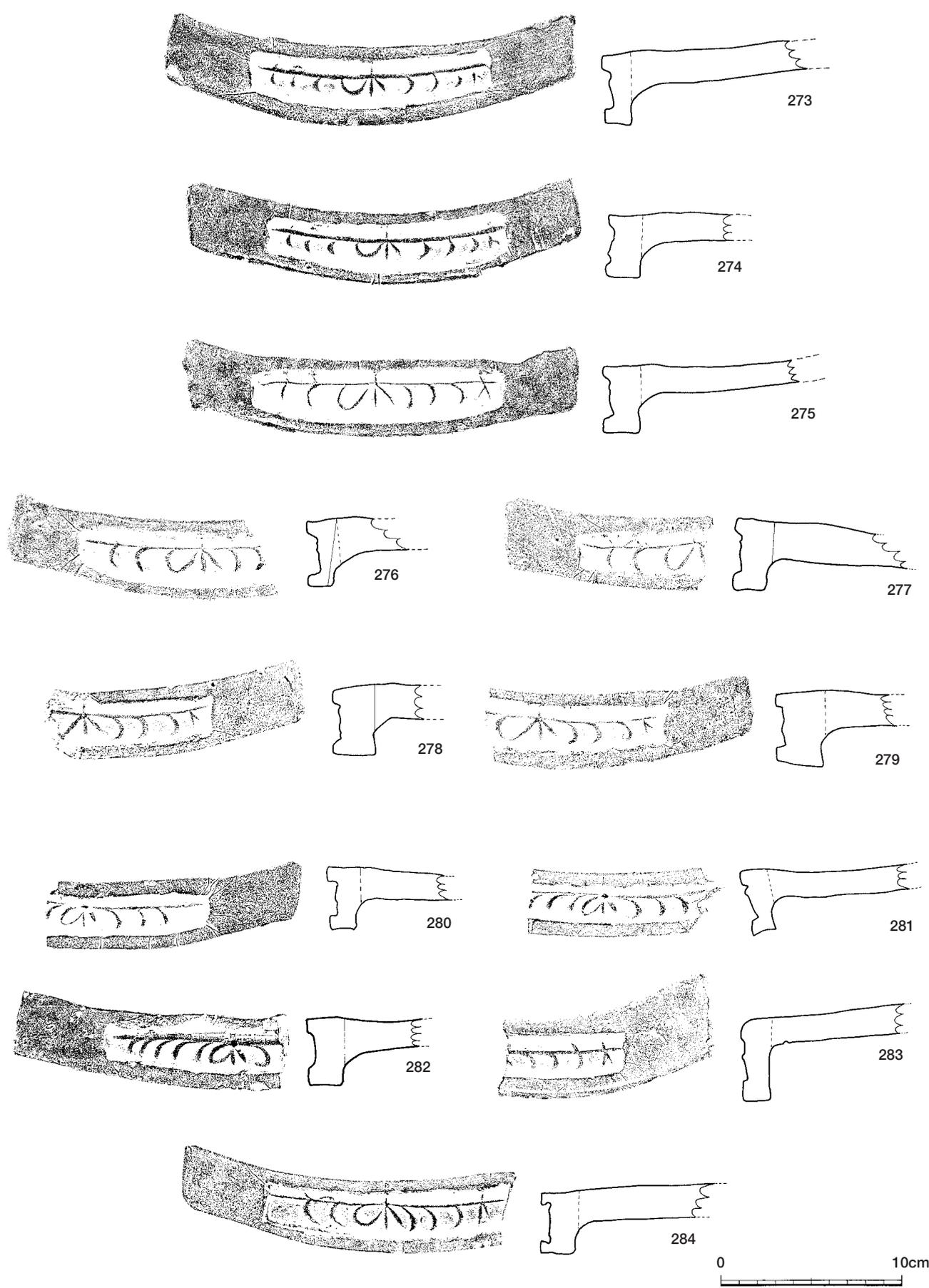
動物型土製品 (第243図)

264~272は動物型土製品である。266は胴が太く牛のようであるが、鬣が表現されているため、馬ではないかと思われる。267は尾が長く表現される。270は、顔に髭

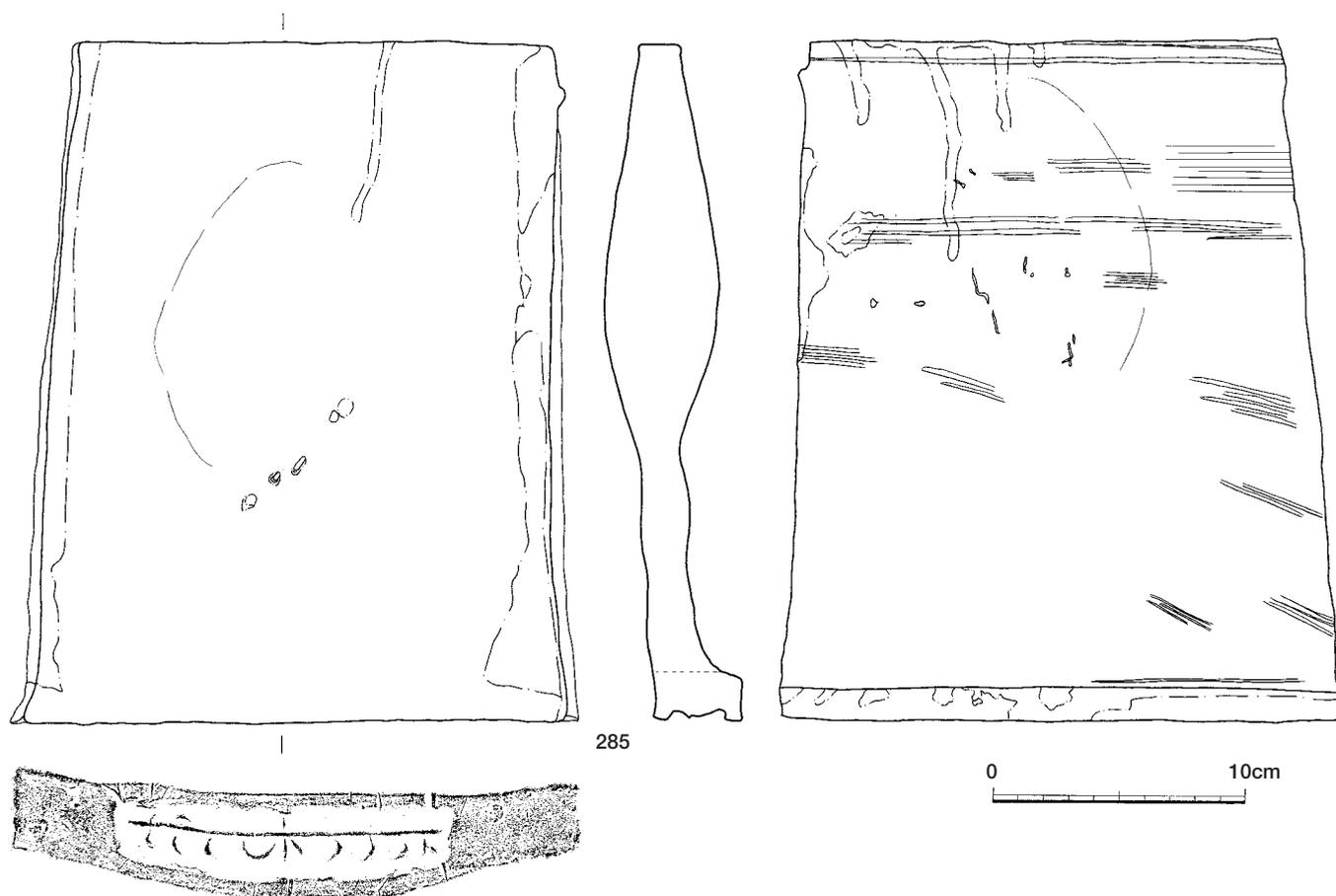
のようなものが表現されており、鼻にが穴が空けられている。272は、脚部と思われる土製品である。他は欠損しているため、全体像は不明である。足の指が7本つられている。

第138表 物原1 遺物観察表39

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	幅	高さ				
264	動物型土製品	物原1 4 F	—	—	5.2	灰褐色	無釉	—	
265	動物型土製品	物原1 4 E	—	—	—	浅黄色	無釉	—	
266	動物型土製品	物原1 4 E	—	—	—	褐灰色	無釉	—	
267	動物型土製品	物原1 4 D	—	—	—	にぶい橙色	鉄釉 暗褐色	残存部全面施釉	
268	動物型土製品	物原1 4 D	—	—	—	青灰色	無釉	—	
269	動物型土製品	物原1 3 G	—	4.4	6.0	にぶい黄色	灰釉 灰褐色	残存部全面施釉	
270	動物型土製品	物原1 2 E	—	—	6.8	黒褐色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	
271	動物型土製品	物原1 2 F	—	—	—	褐色	灰釉 緑黄色	残存部全面施釉	
272	土製品	物原1 2 F	—	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 にぶい褐色	残存部全面施釉	



第244図 物原1出土遺物(60)瓦



第245図 物原1 出土遺物(61)瓦

瓦 (第244～250図)

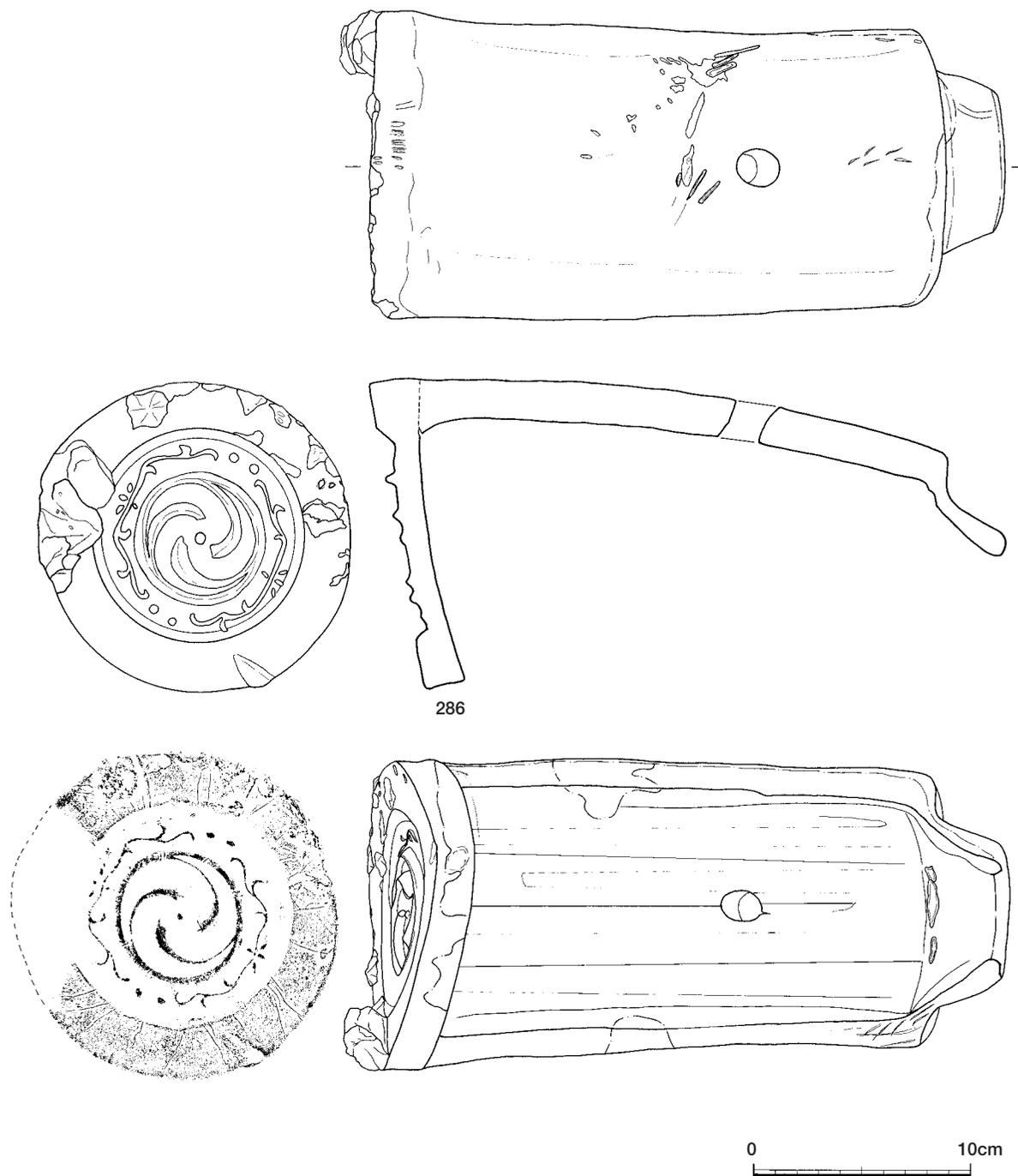
物原1 からは陶片と一緒に大量の瓦が出土した。

273～285は軒平瓦である。瓦頭部内の文様は、273・274・285のタイプ、275～277のタイプ、278・279のタイプ、

280～282のタイプ、283のタイプ、284のタイプの6つに分けることができ、瓦頭部内の文様を作成するための型が6種類はあったものと思われ、これが同時期に存在したものであるのか時期差があるのかは不明である。

第139表 物原1 遺物観察表40

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			厚さ	頸厚	瓦頭厚				
273	軒平瓦	物原1 4 E	1.8	1.5	3.7	明黄褐色	灰釉 黄褐色	上面・瓦頭部に施釉	
274	軒平瓦	物原1 3 E	1.4	1.9	3.4	橙色	灰釉 浅黄色	上面・瓦頭部に施釉	
275	軒平瓦	物原1 4 F	1.8	2.0	3.7	橙色	灰釉 浅黄色	上面・瓦頭部に施釉	
276	軒平瓦	物原1 2 D 物1	1.9	2.4	3.5	橙色	灰釉 灰緑色	上面・瓦頭部に施釉	
277	軒平瓦	物原1 2 E 物1	1.9	2.5	3.7	橙色	灰釉 灰黄色	上面・瓦頭部に施釉	
278	軒平瓦	物原1 2 D	1.9	1.5	3.7	にぶい黄橙色	灰釉 灰黄褐色	残存部全面施釉	
279	軒平瓦	物原1 2 C D 表	2.3	1.7	4.0	にぶい赤褐色	灰釉 緑黄色	上面・瓦頭部に施釉	
280	軒平瓦	物原1 4 E	1.3	1.4	3.5	赤褐色	灰釉 灰緑色	上面・瓦頭部に施釉	
281	軒平瓦	物原1 4 G	1.4	1.2	3.3	暗灰黄色	灰釉 浅黄色	上面・瓦頭部に施釉	
282	軒平瓦	物原1 4 C	1.4	1.9	3.6	にぶい褐色	灰釉 浅黄色	上面・瓦頭部に施釉	
283	軒平瓦	物原1 3 E	1.4	1.5	4.4	明赤褐色	灰釉 灰緑色	上面・瓦頭部に施釉	
284	軒平瓦	物原1 3 E 物1	1.8	1.9	3.4	にぶい赤褐色	灰釉 灰緑色	上面・瓦頭部に施釉	
285	軒平瓦	物原1	1.7	1.6	3.6	暗赤褐色	灰釉 黄灰色	上面・瓦頭部に施釉	



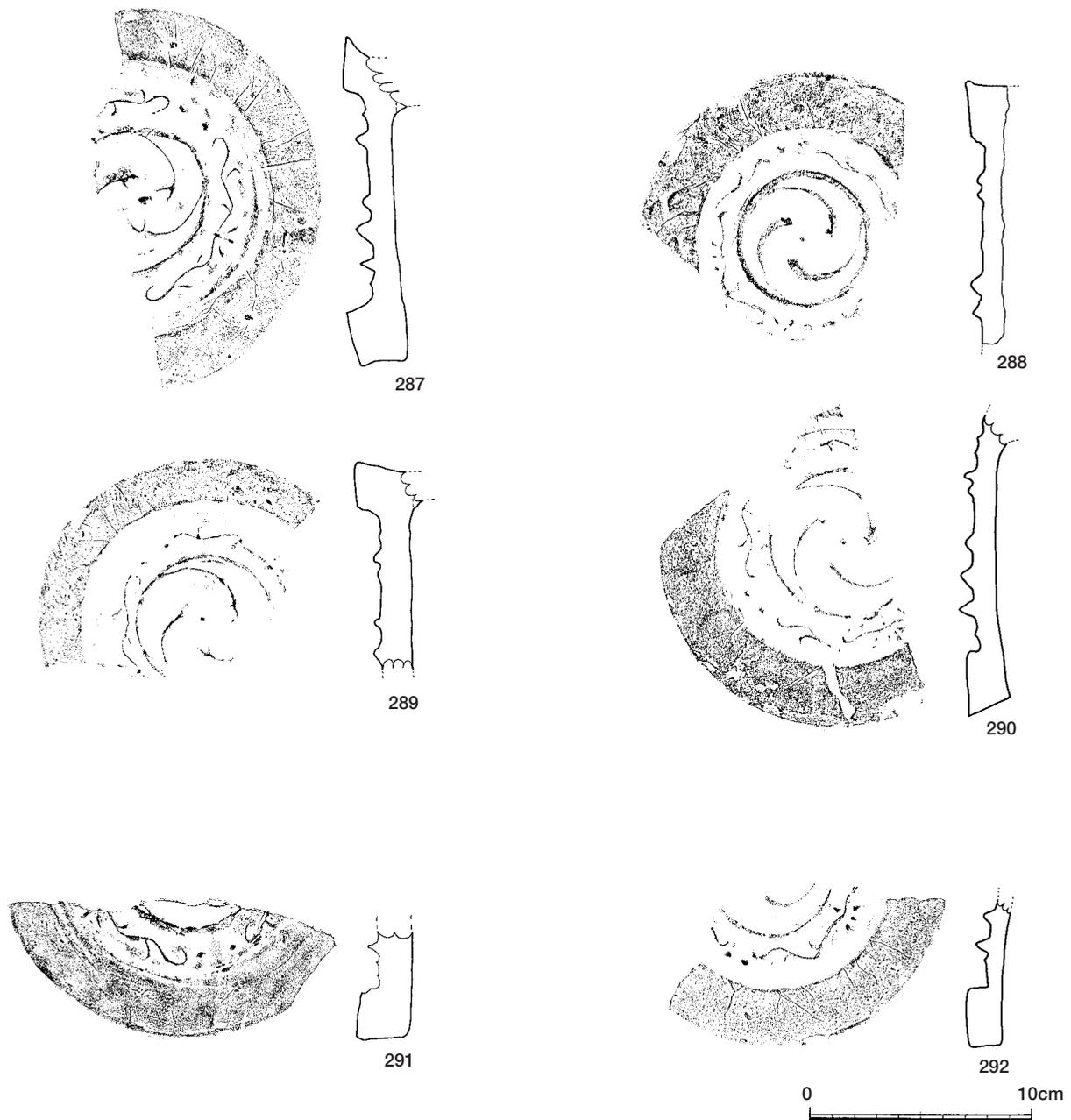
第246図 物原1出土遺物(62)瓦

286~292は、軒丸瓦である。瓦頭部の文様の違いから、2種類の型が存在したと思われる。

286~288は、中心の区分部分がやや太めにつくられているもので、289~291は細めである。

286は、完形のものであるが焼け歪みも見られる。丸瓦部の玉縁寄りには穿孔が施され、上面には貝目も見ら

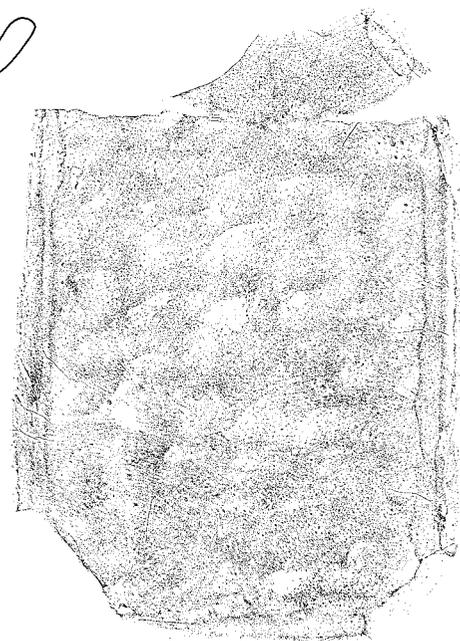
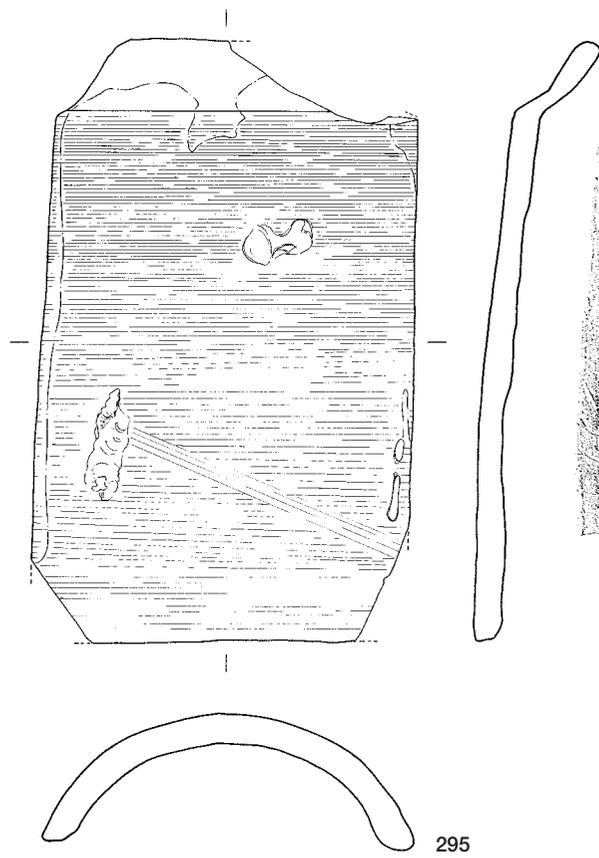
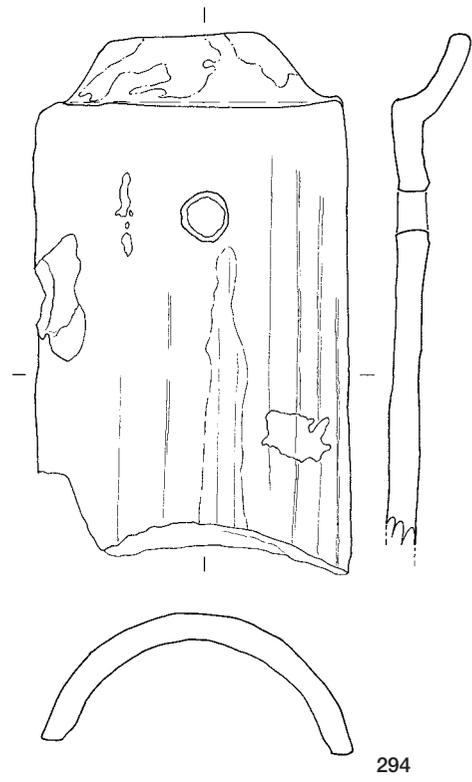
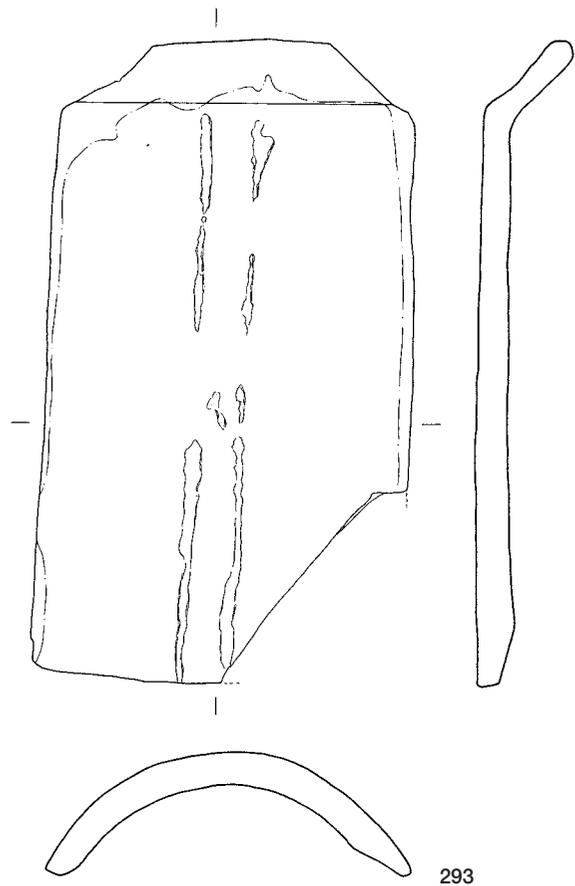
れる。瓦頭部には、ハマの一部と思われる粘土塊が熔着する。内面は、ヘラ状工具により縦方向に削り調整が施されており、その痕跡が看取される。また、瓦を焼成する際に使用したと思われる、平面が楕円形で断面が逆「T」の字型をしたハマの痕跡も2か所見られる。



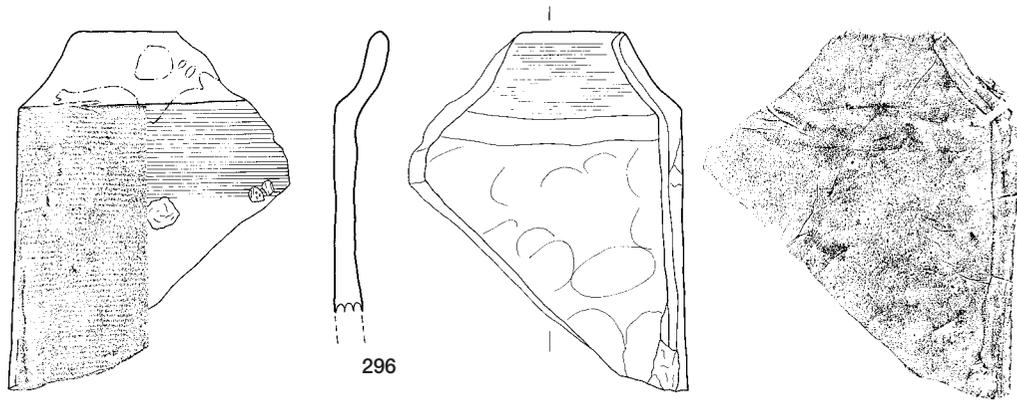
第247図 物原1 出土遺物(63)瓦

第140表 物原1 遺物観察表41

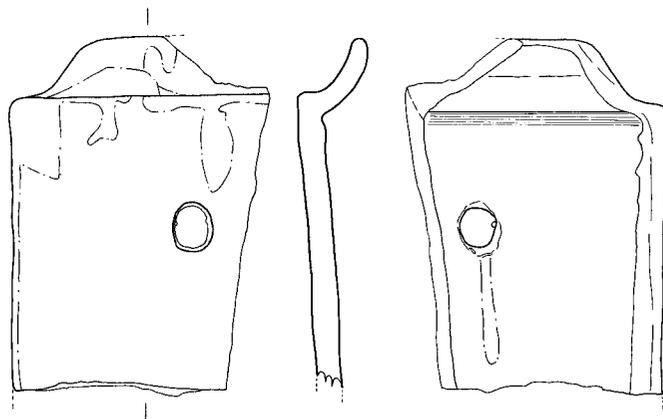
レイアウト 番号	器種	出土地点	法量 (cm)			胎土	釉薬	施釉	備考
			厚さ	頸厚	瓦頭厚				
286	軒丸瓦	物原1	1.8	1.9	(小巴厚)14.3	褐色	灰釉 緑褐色	上面・瓦頭部に施釉	丸瓦部の下面に貝目(長さ29.2cm)
287	軒丸瓦	物原1 3 E	2.3	2.8	(小巴厚)14.7	褐灰色	灰釉 緑黒色	上面・瓦頭部に施釉	
288	軒丸瓦	物原1 4 G	—	—	—	橙色	灰釉 灰白色	上面・瓦頭部に施釉	
289	軒丸瓦	物原1 3 E 物1	—	—	—	にぶい橙色	灰釉 灰黒色	上面・瓦頭部に施釉	
290	軒丸瓦	物原1 3 G	—	2.0	—	橙色	灰釉 浅黄色	上面・瓦頭部に施釉	
291	軒丸瓦	物原1 4 E	—	2.4	—	橙色	灰釉 黄緑色	上面・瓦頭部に施釉	
292	軒丸瓦	物原1	—	1.6	—	にぶい黄橙色	灰釉 浅黄色	上面・瓦頭部に施釉	



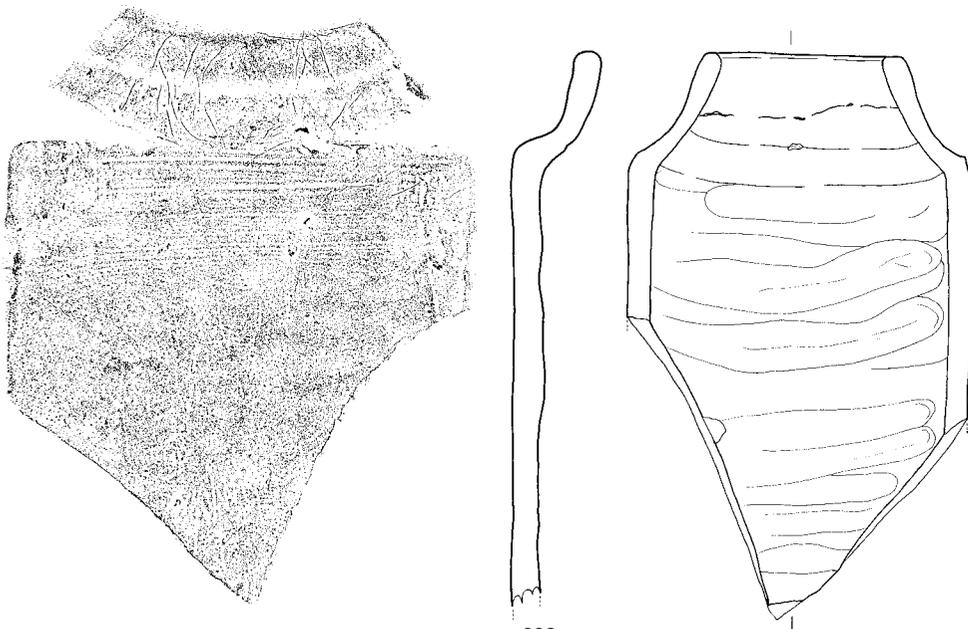
第248図 物原1出土遺物(64)瓦



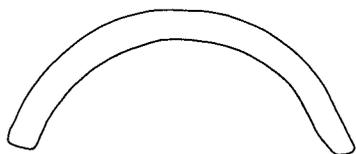
296



297

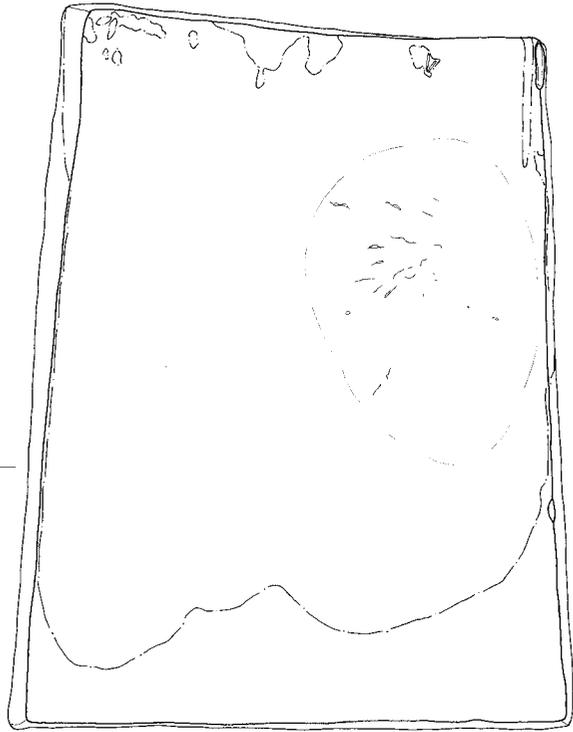


298

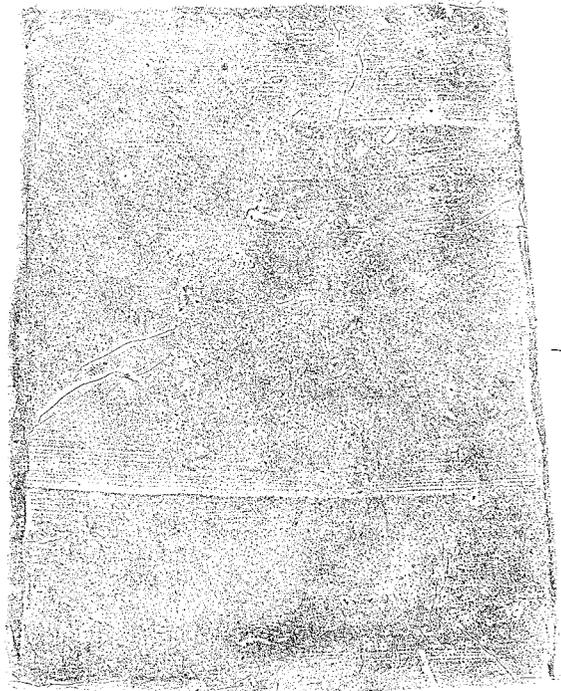


0 10cm

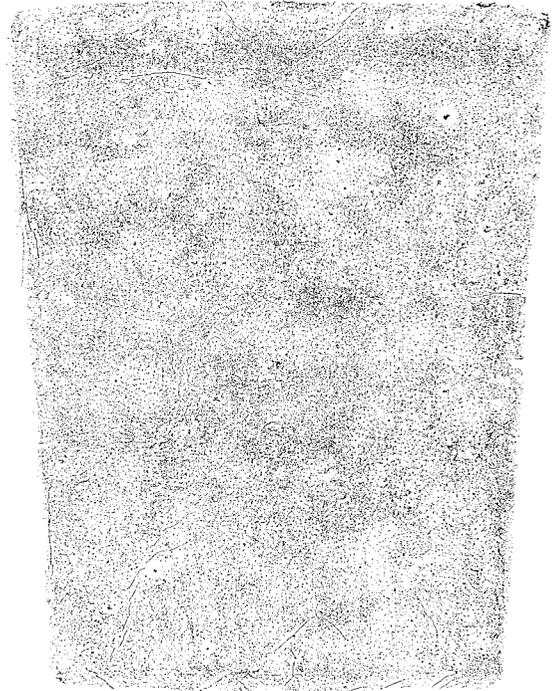
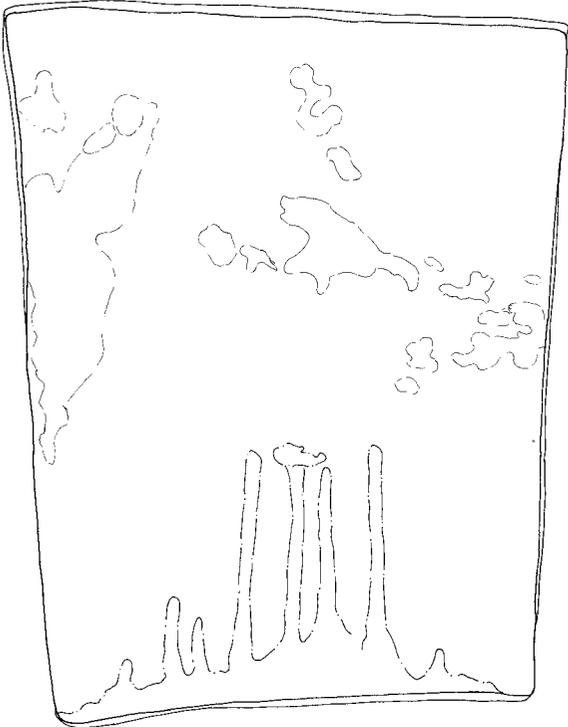
第249図 物原1出土遺物(65)瓦



299



300



0 10cm

第250図 物原1出土遺物(66)瓦

293～298は丸瓦である。基本的な製作方法は、粘土紐を巻き上げ、タタキ成形を行っているものと思われるが、最終的な調整に関しては、個体差が見られる。釉は、玉縁部を除き上面のみ施釉される。

293は上面に他の瓦が接触していた痕跡が残る。294は、玉縁部寄りに穿孔が施されるもので、上面には他の瓦が接触していた痕跡が残る。295・296は下面に同心円状のあて具痕が残る資料で、外面にはヘラ状工具による横方向の調整痕が残る。297は、内面に丸瓦に玉縁部を

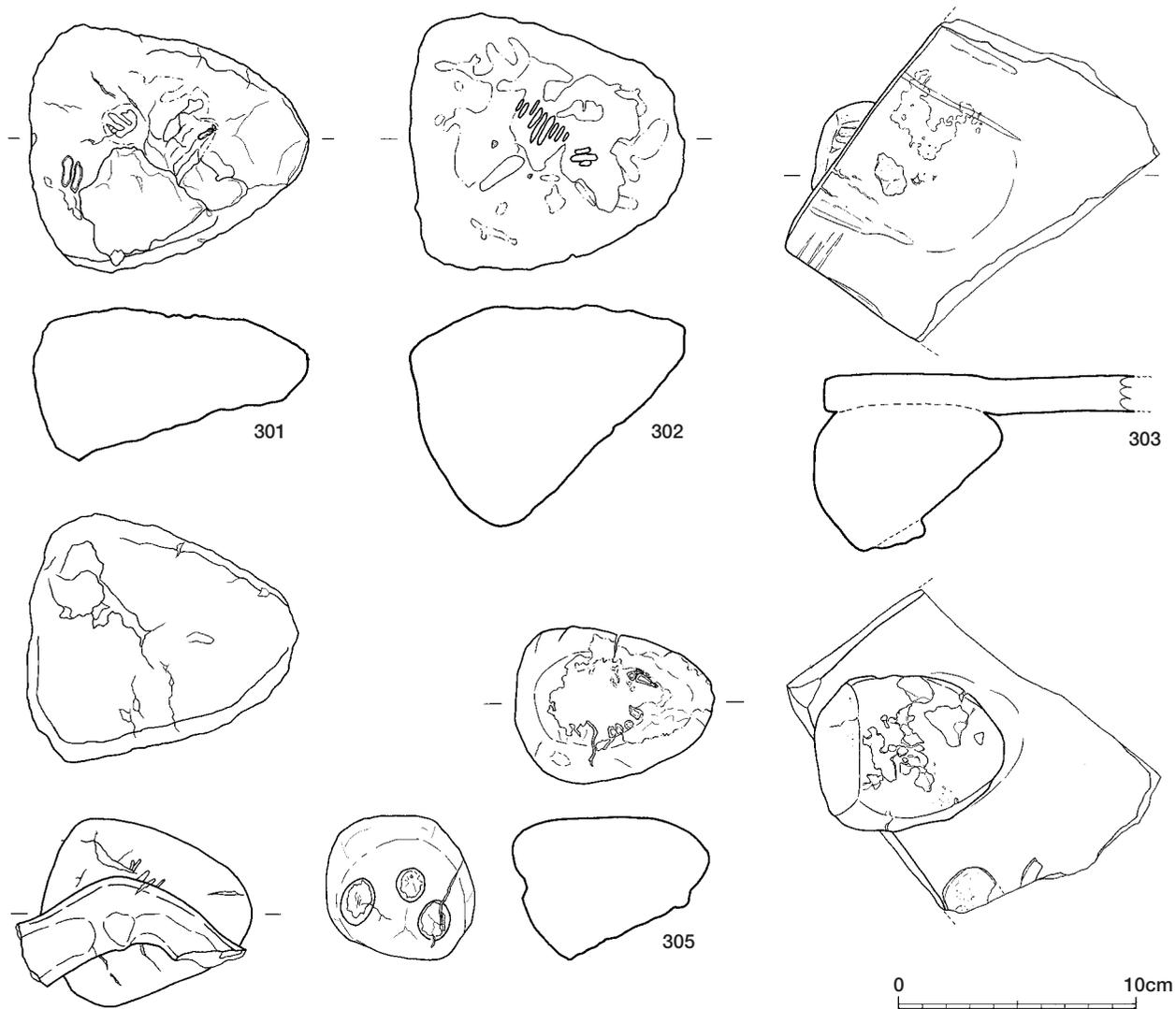
接合した際の横ナデ痕が看取される資料である。298は内面に粘土紐を巻き上げた痕跡が観察できるものである。上面にはヘラ状工具による調整が施され、さらに、落書きのような線が看取される。

299・300は、平瓦である。施釉は上面のみで、そのなかでも瓦が重なる前の部分は施釉されていない。299は両面とも調整痕は見られないが、300は両面ともヘラ状工具による調整痕が看取される。

第141表 物原1 遺物観察表42

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			幅	厚さ	長さ					
293	丸瓦	物原1 4 G	14.3	1.2	25.2	にぶい赤褐色	灰釉 灰緑色	上面(玉縁以外)施釉	上面に目跡 (高さ4.8cm)	
294	丸瓦	物原1 4 D	12.3	1.0	—	にぶい橙色	灰釉 灰黄色	上面施釉	(高さ5.6cm)	
295	丸瓦	物原1 3 G 物2 F	14.6	1.1	23.5	灰褐色	灰釉 灰緑色	玉縁の一部以外上面施釉	下面にタタキ目 (高さ5.1cm)	
296	丸瓦	物原1 4 F	—	0.9	—	赤褐色	灰釉 灰白色	上面施釉	下面にタタキ目	
297	丸瓦	物原1 3 C	—	1.1	—	暗灰黄色	灰釉 灰黄色	上面施釉		
298	丸瓦	物原1 4 E	13.7	1.1	—	明赤褐色	灰釉 灰緑色	上面(玉縁以外)施釉	上面に落書き? (高さ4.6cm)	
299	平瓦	物原1 4 D	—	1.9	27.4	橙色	灰釉 浅黄色	上面施釉		
300	平瓦	物原1 3 G	20.1	1.4	27.0	にぶい黄橙色	灰釉 灰黄褐色	上面施釉		





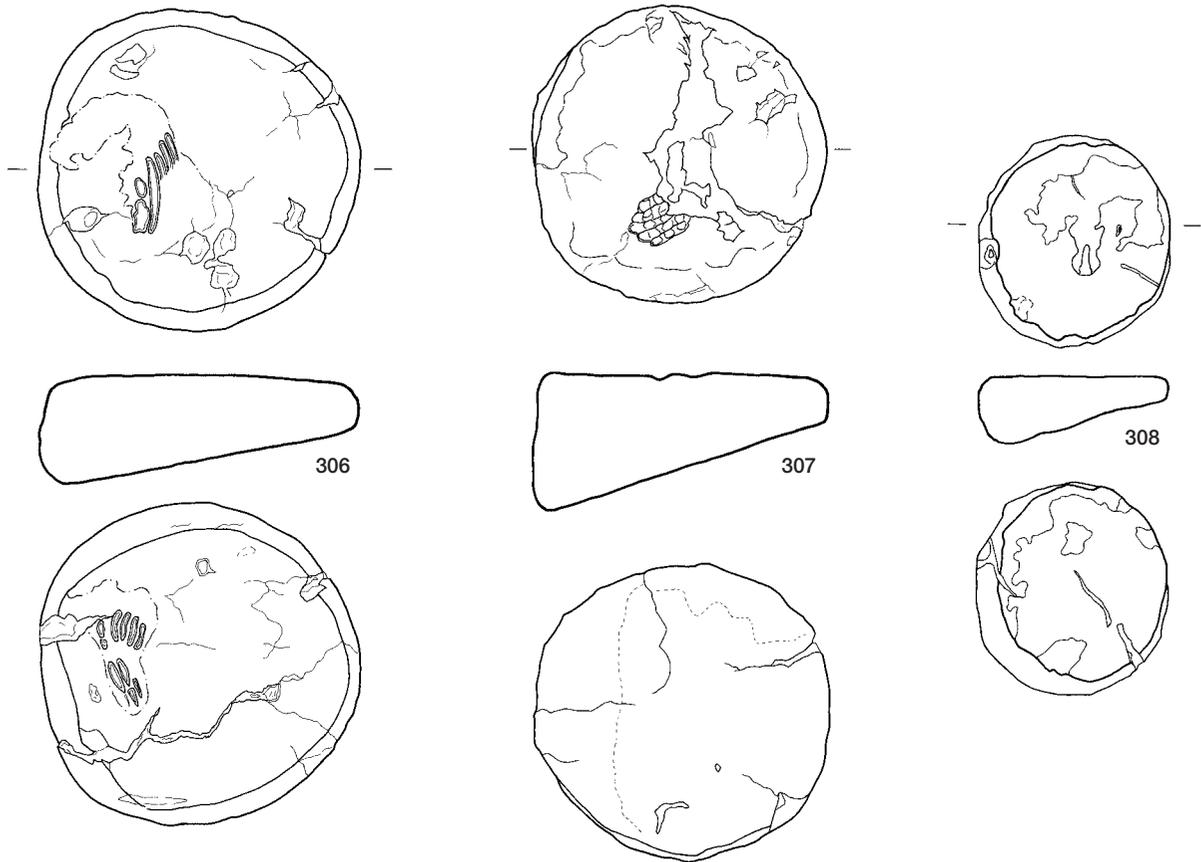
第251図 物原1 出土遺物(6)窯道具

窯道具 (第251～263図)

窯道具は、大きく4つに分けることができる。大部分を占めるものはハマで、その他、詳細な使用方法が不明であるが、窯道具であろうと考えられる資料や、瓦と瓦の間に挟んで使用したのではないかと考えられる窯道具も見られる。また、トチンやサヤ鉢も出土している。

第142表 物原1 遺物観察表43

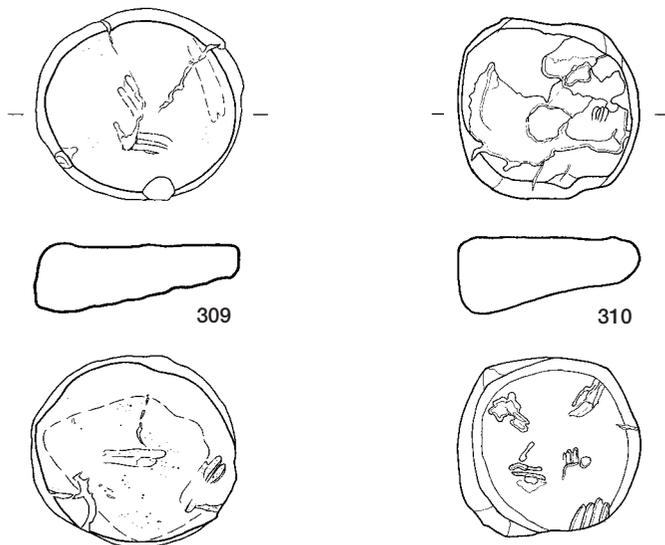
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			幅	長さ	器高				
301	ハマ	物原1 3 G	—	11.7	6.6	にぶい赤褐色	無釉	—	上面に貝目
302	ハマ	物原1 4 D	—	11.5	9.2	にぶい橙色	無釉	—	上面に貝目
303	ハマ	物原1 2 E	—	7.0	5.9	灰色	無釉	—	上面に瓦付着
304	ハマ	物原1 3 E	—	8.8	上5.2 下2.0	赤褐色	無釉	—	指痕
305	ハマ	物原1 4 F	—	8.3	6.0	灰色	無釉	—	上面に貝目 側面に3か所の穿孔
306	ハマ	物原1 3 C	—	12.5	4.2	にぶい黄褐色	無釉	—	上・下面に貝目
307	ハマ	物原1 4 E	—	11.8	5.2	褐色	無釉	—	上面に貝目
308	ハマ	物原1 4 E	—	7.5	2.6	灰色	無釉	—	
309	ハマ	物原1 4 F	—	2.7	8.1	黄灰色	無釉	—	上・下面に貝目
310	ハマ	物原1	—	7.2	3.0	暗赤灰色	無釉	—	下面に貝目



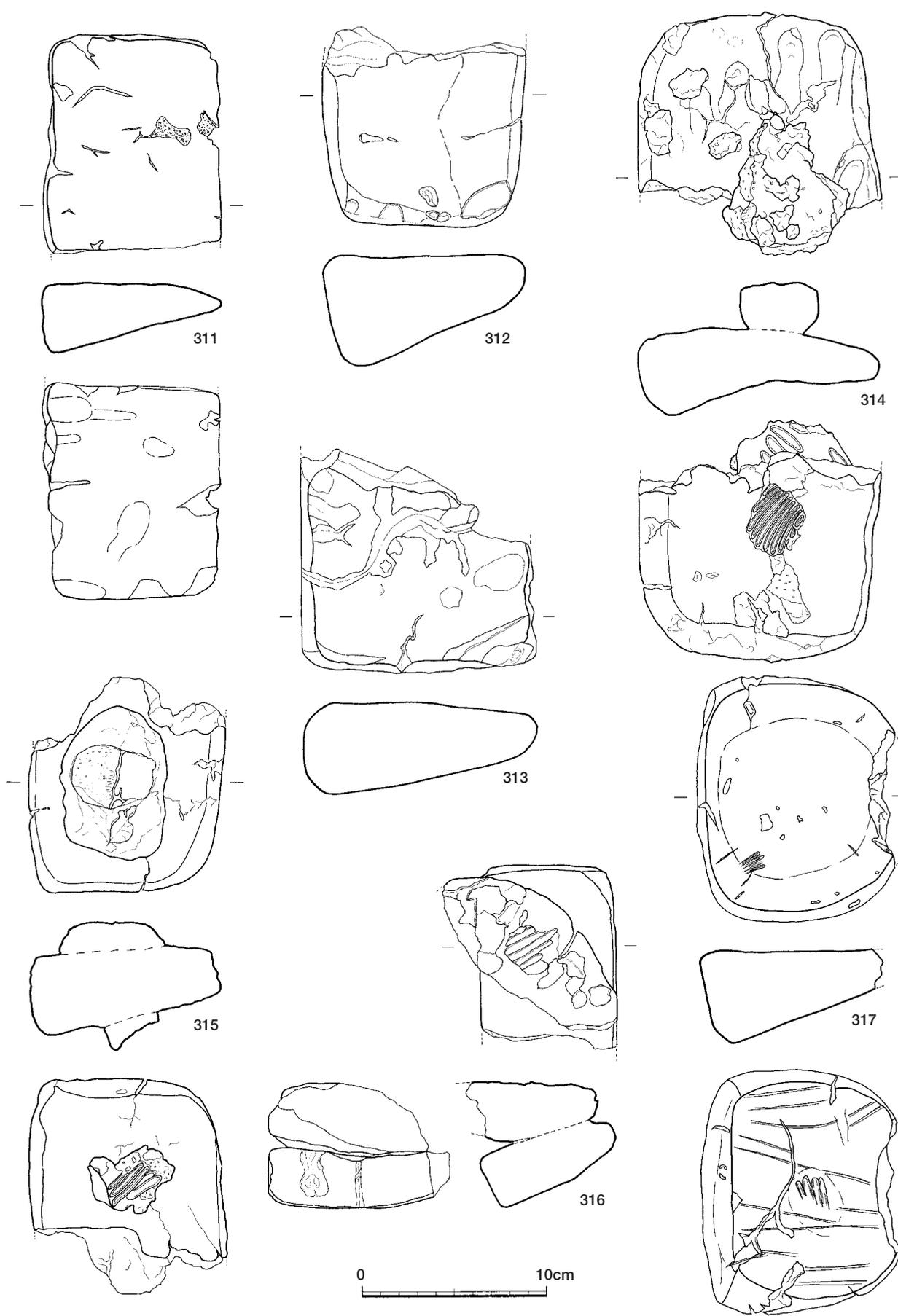
301～361は、ハマで、形状から次の4つに細分化できる。平面が三角形・円形・長方形状で、断面が馬蹄形を呈するもの、粘土を棒状に握って使用したもの、窯壁や粘土塊を転用した大形のもの、本来は窯の内部の様子を見るための色見孔の蓋として使用されたものを転用した平面ドーナツ形状のものである。

301～305は、平面が三角形、断面が馬蹄形を呈するものである。301・302は上面に貝目が残る。303は上面に瓦、304は棒状のハマが熔着したものである。305は側面に3か所穿孔が施される。

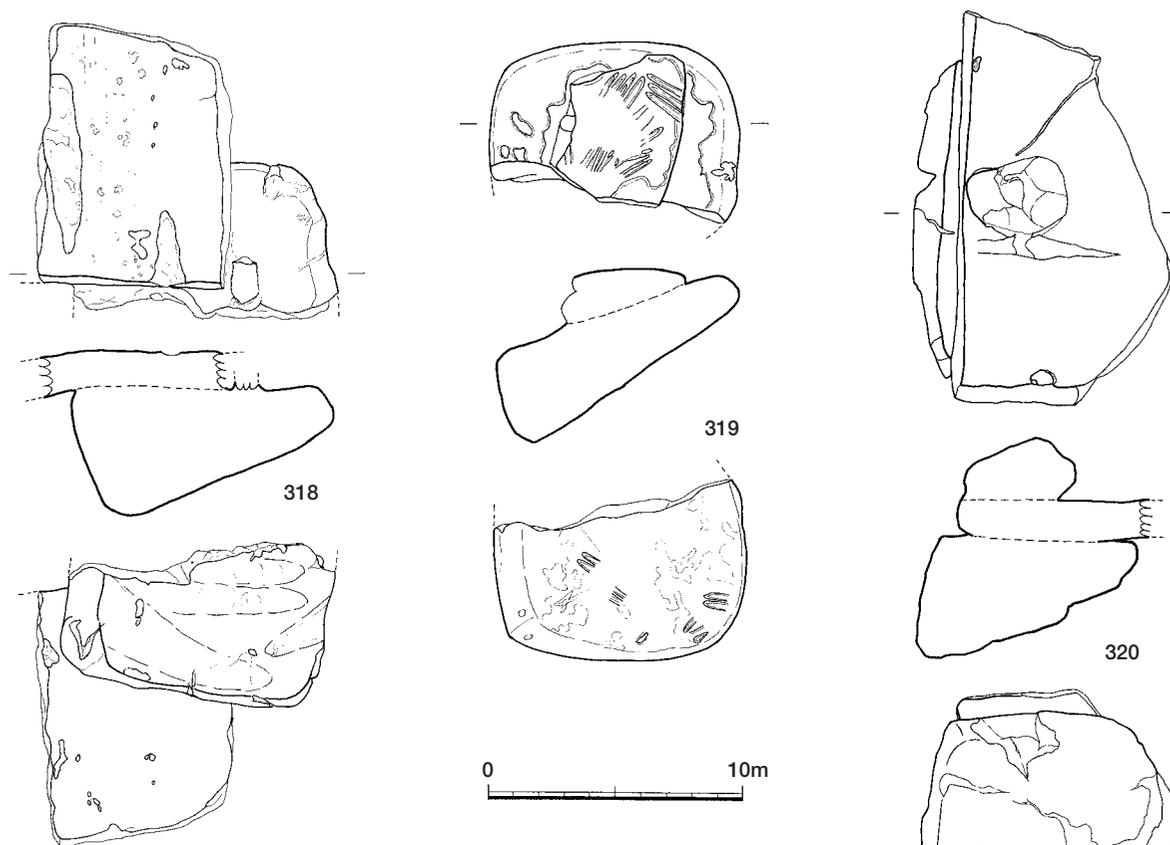
306～310は、平面が円形、断面が馬蹄形を呈するものである。306・307は、比較的大形のもので、306は両面に貝目が残る。307は、上面にのみ貝目が残る。308～310は小形のもので、3点とも両面に貝目や黄褐色の目跡などが看取される。



第252図 物原1 出土遺物(68)窯道具



第253図 物原1出土遺物(69)窯道具



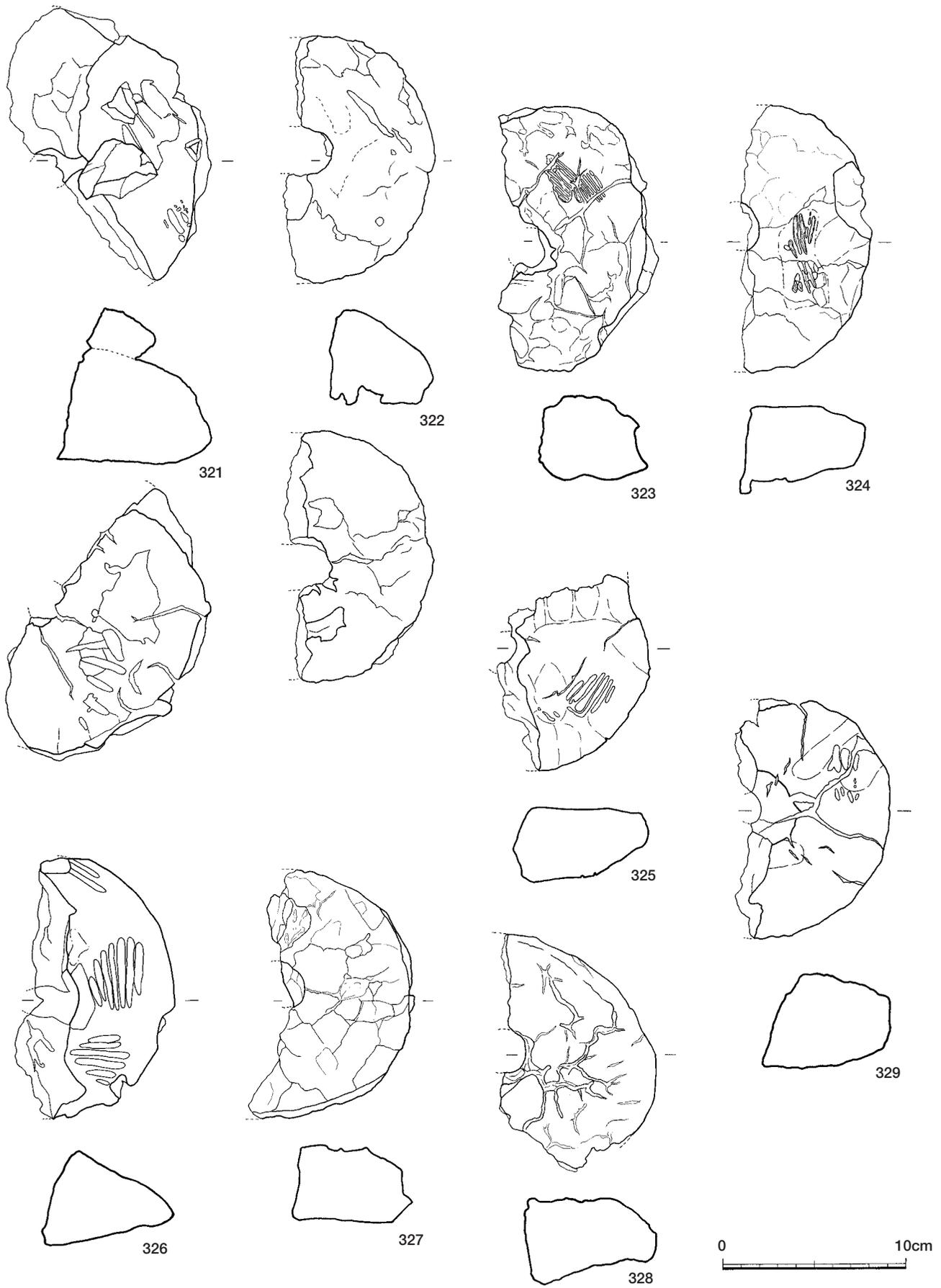
第254図 物原1 出土遺物(70)窯道具

311~320は、上面が長方形、断面が馬蹄形を呈するハマである。

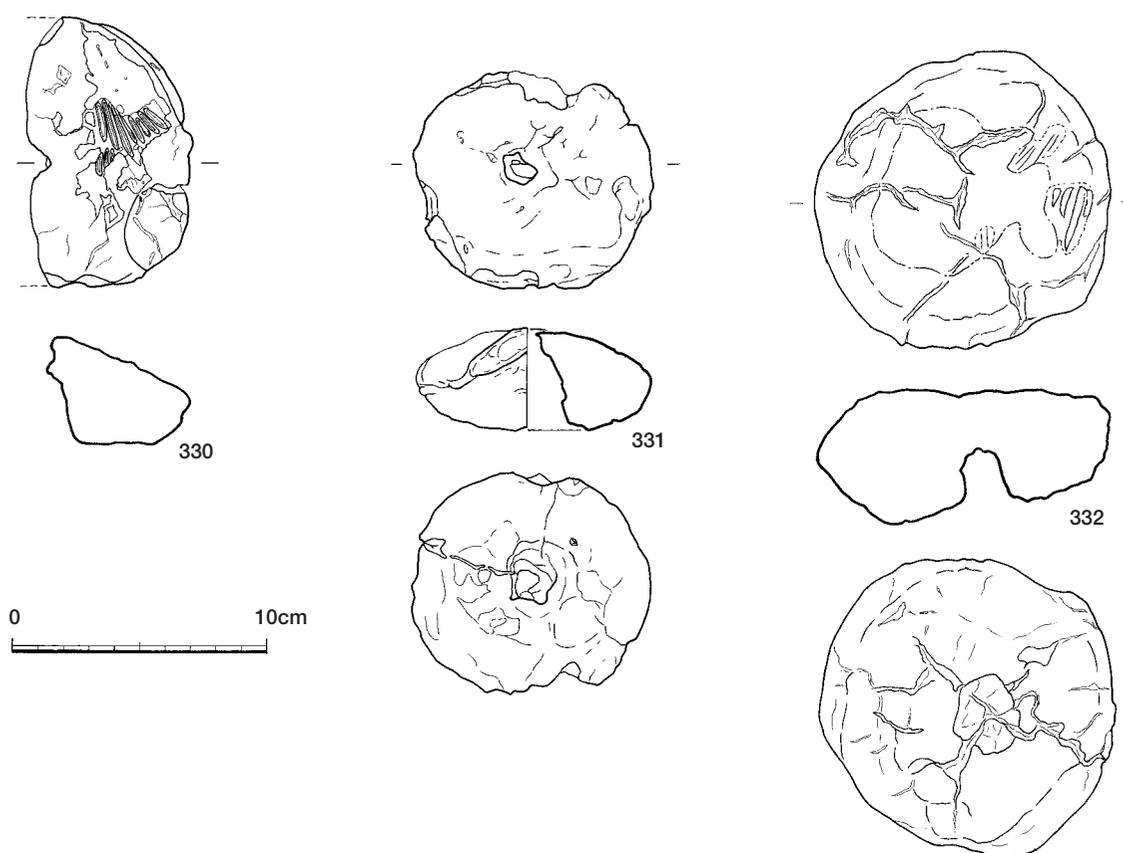
311は上面に砂粒が付着する。314・315は上面に平面が三角形で断面が馬蹄形のハマの一部が熔着するものである。314は下面に貝目が残る。315は下面にもハマの一部が熔着しその上に貝目が残る。316は上面に棒状のハマが熔着しており、その上に貝目が残る。317は上面に製品をのせたと思われる目跡が残り、下面には貝目が残る。318・320は上面に瓦が熔着している資料である。319は、上面にハマの一部が熔着し、その上に貝目が残る。

第143表 物原1 遺物観察表44

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			幅	長さ	器高				
311	ハマ	物原1 4 F	—	9.6	3.8	橙色	無釉	—	上面に砂粒付着 下面に指痕
312	ハマ	物原1 3 F	—	11.0	6.0	にぶい黄橙色	無釉	—	
313	ハマ	物原1 2 D	—	12.2	5.0	橙色	無釉	—	
314	ハマ	物原1 3 E	—	13.0	4.7	灰赤色	無釉	—	上面にハマ付着？ 上面に指痕底面に貝目
315	ハマ	物原1 3 F	—	10.5	6.9	橙色	無釉	—	ハマ付着 下面に貝目
316	ハマ	物原1 3 E	—	7.3	2.6	浅黄色	無釉	—	ハマ付着 上面に貝目
317	ハマ	物原1 3 F	—	—	5.0	灰黄褐色	無釉	—	上面に白い砂粒付着 下面に粘土付着
318	ハマ	物原1 3 G	—	—	5.0	にぶい赤褐色	無釉	—	上面に瓦付着 下面に指痕
319	ハマ	物原1 4 E	—	—	4.0	灰色	無釉	—	上・下面に貝目 上面に他ハマ付着
320	ハマ	物原1	—	8.2	4.7	橙色	無釉	—	瓦付着



第255図 物原1出土遺物(7)窯道具



第256図 物原1 出土遺物(72)窯道具

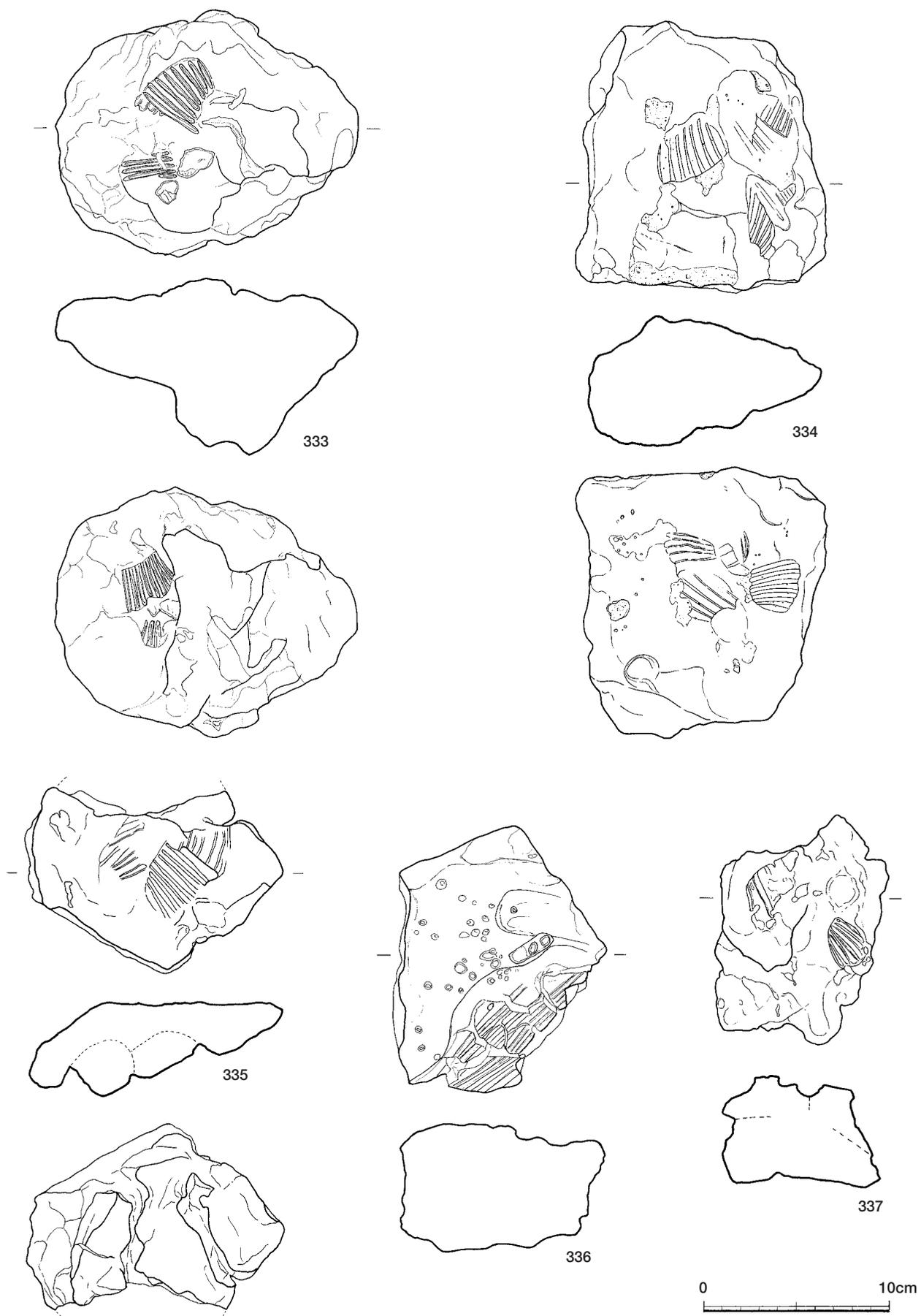
321～332は本来の用途は色見孔の蓋と思われるが、ハマとして転用したものと考えられるため、ここに掲載した。本来の形状は、平面がドーナツ状を呈するものである。

321～329は直径20cm弱程度で比較的大きいものである。322を除き上面には貝目が残っている。321はさらに上面に他のハマの一部が熔着している。

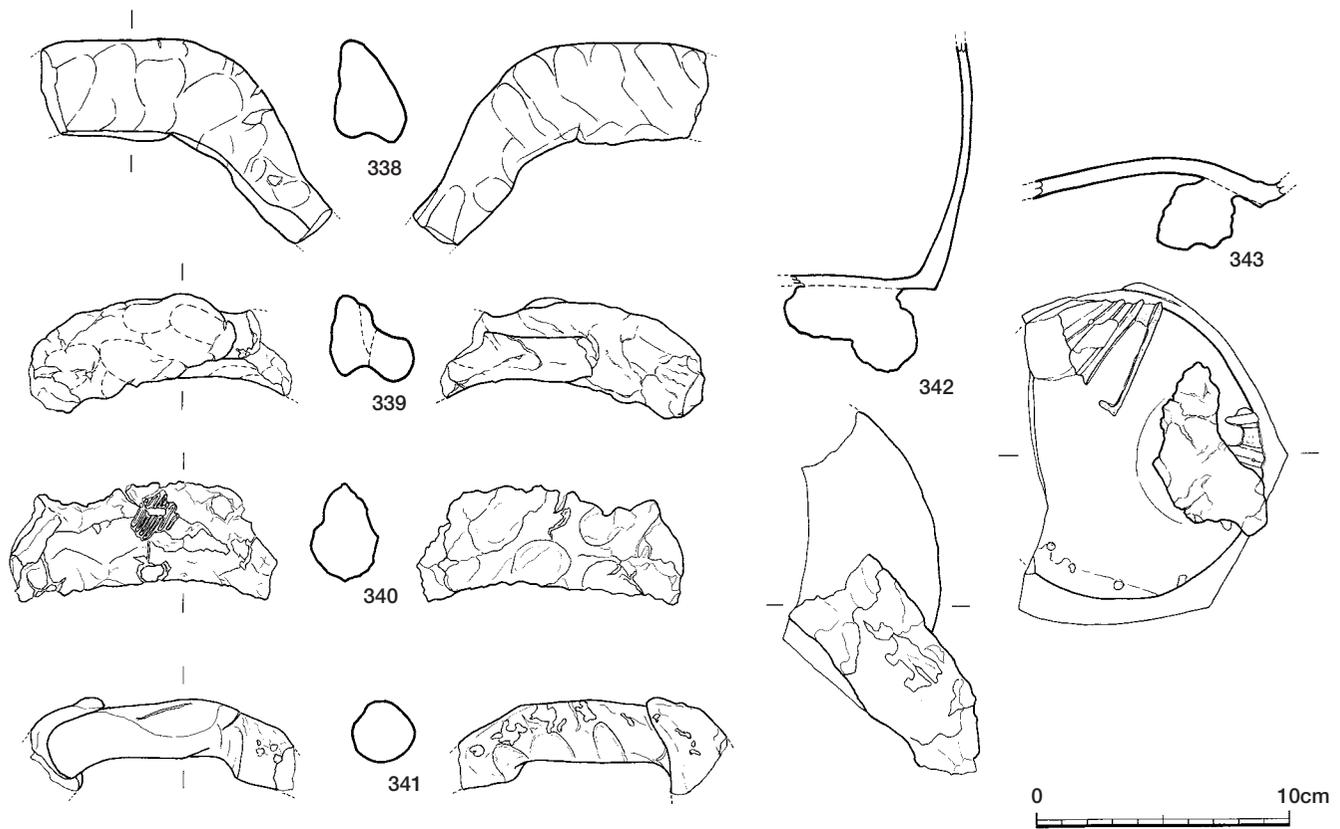
330～332はやや小形のものである。330・332の上面には貝目が残る。331は見られない。332は中心の穿孔が貫通していないものである。

第144表 物原1 遺物観察表45

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			幅	長さ	器高				
321	ハマ	物原1 3 E	—	8.4	上2.2 下6.3	にぶい黄橙色	無釉	—	上・底面に貝目
322	ハマ	物原1 3 F	—	—	5.2	にぶい褐色	無釉	—	
323	ハマ	物原1 3 E	—	—	4.7	にぶい橙色	無釉	—	上面に貝目
324	ハマ	物原1 2 D	—	—	4.8	灰赤色	無釉	—	上面に貝目
325	ハマ	物原1 3 E	—	—	4.0	灰赤色	無釉	—	上面に貝目 上面に指痕
326	ハマ	物原1 4 G	—	7.2	5.2	にぶい橙色	無釉	—	上面に貝目
327	ハマ	物原1 2 D	—	—	4.0	灰褐色	無釉	—	
328	ハマ	物原1 3 E表	—	—	4.6	橙色	無釉	—	
329	ハマ	物原1 3 G	—	—	5.1	明赤褐色	無釉	—	上面に貝目 指痕
330	ハマ	物原1 3 F	—	—	4.2	暗灰色	無釉	—	上面に貝目
331	ハマ	物原1 4 F	9.5	8.5	4.0	にぶい橙色	無釉	—	
332	ハマ	物原1 3 G	—	11.5	5.2	にぶい橙色	無釉	—	上面に貝目



第257図 物原1出土遺物(73)窯道具



第258図 物原1 出土遺物(74)窯道具

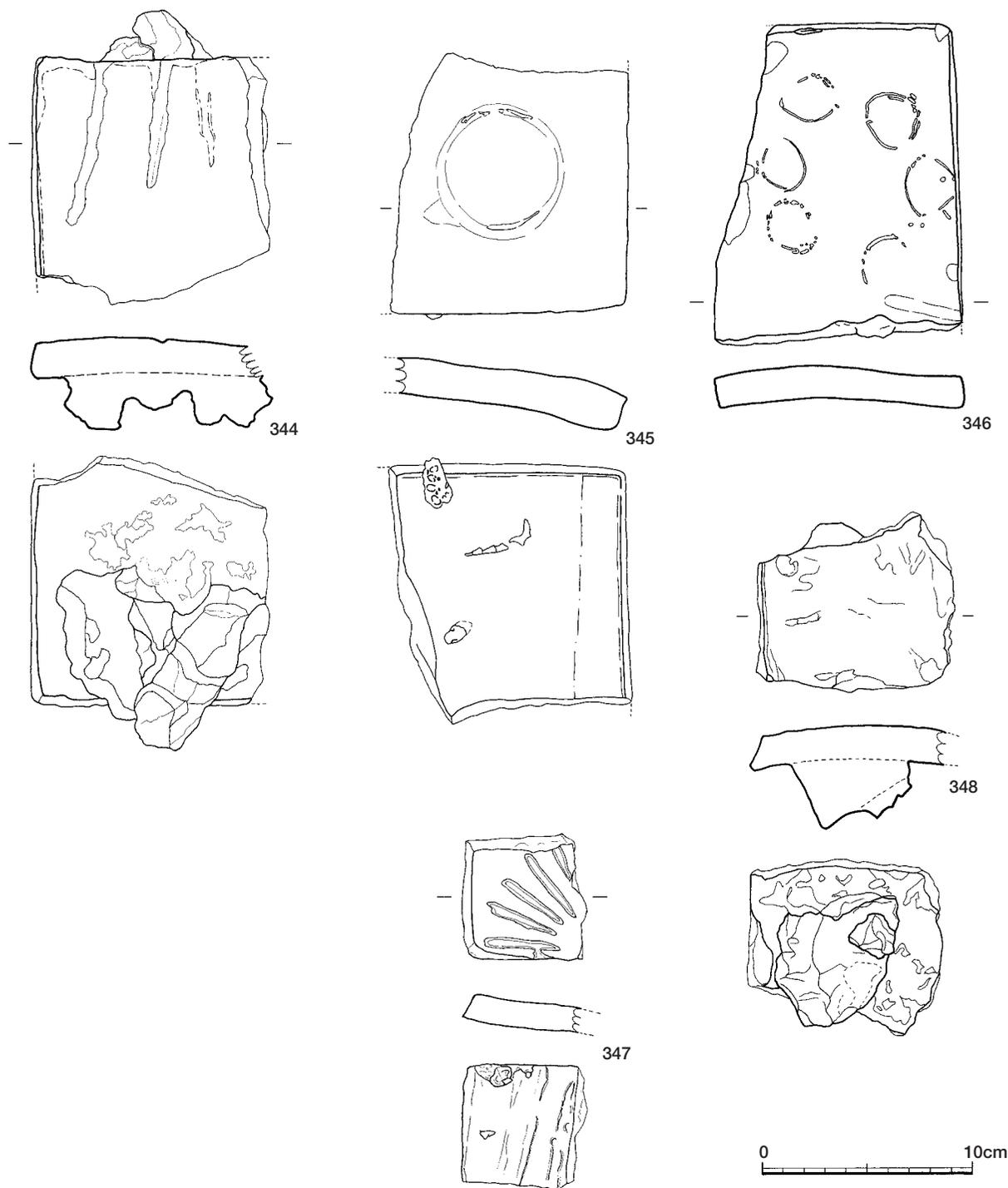
333~337は粘土塊をハマとして用いたと思われる資料である。333, 334は上面にも下面にも貝目が残る。335は下面に棒状のハマが2本熔着したものである。水平をとる微調整のために併用したものと思われる。上面には貝目が残る。337は2つの粘土塊と棒状のハマを合わせて用いられたものである。

338~341は棒状を呈するハマである。底部に挟んで使用するためか、ややカーブした形状のものが多い。手で簡単に握って作られたものと思われ、表面に指痕が看取される。340は貝目も残る。342, 343は製品の底部に棒

状のハマが熔着したものである。343はイタヤガイの貝目も残る。

第145表 物原1 遺物観察表46

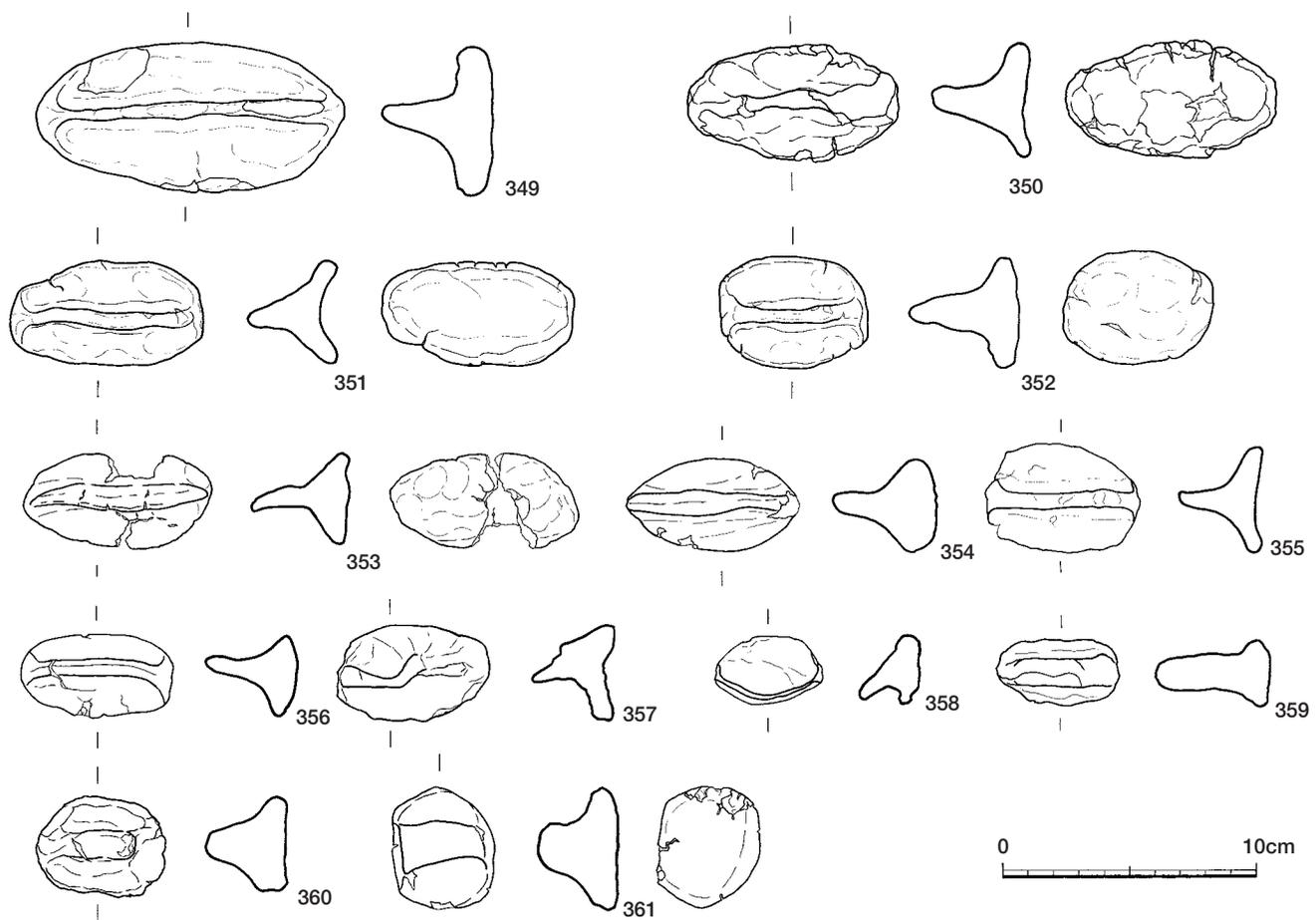
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			幅	長さ	器高				
333	ハマ	物原1 3 G		16.2	13.3	黒色	無釉	—	上底面に貝目
334	ハマ	物原1 3 C	最大幅 13.9	—	6.9	暗灰色	無釉	—	上底面に貝目
335	ハマ	物原1 4 D	—	—	—	黒色	無釉	—	上面に貝目
336	ハマ	物原1 2 D	—	—	6.8	黄灰色	無釉	—	鉄釉付着 上面に貝目
337	ハマ	物原1 3 E	—	—	6.8	黒色	無釉	—	上面に貝目
338	ハマ	物原1 2 D	—	—	4.0	褐灰色	無釉	—	両面に指痕
339	ハマ	物原1 2 D	—	—	3.3	橙色	無釉	—	側面に指痕
340	ハマ	物原1 2 D	—	10.4	3.7	にぶい赤褐色	無釉	—	側面に指痕・貝目
341	ハマ	物原1 2 D	—	—	2.5	にぶい褐色	無釉	—	上面に指痕
342	ハマ	物原1 3 F	—	—	3.2	浅黄色	無釉	—	上面に他製品付着 ハマ付着
343	ハマ	物原1 4 E	—	—	—	灰黄褐色	無釉	—	上面に他製品付着



第259図 物原1出土遺物(75)窯道具

第146表 物原1 遺物観察表47

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			幅	長さ	器高		灰釉	暗赤褐色		
344	ハマ	物原1 2D	—	—	—	暗赤褐色	灰釉 暗赤灰色	瓦残存部全面施釉	ハマ付着	
345	ハマ	物原1	—	—	—	褐色	灰釉 暗褐色	下面施釉	上面に高台痕	
346	ハマ	物原1 2D	11.8	15.2	2.0	赤褐色	灰釉 赤褐色	残存部全面施釉	上面に貝目	
347	ハマ	物原1 2D	—	—	1.4	暗赤褐色	灰釉 暗赤褐色	残存部全面施釉	上面に貝目	
348	ハマ	物原1 2D	—	—	瓦1.6 ハマ3.3	にぶい赤褐色	鉄釉 暗赤褐色	瓦残存部全面施釉	他のハマ付着	



第260図 物原1 出土遺物(76)窯道具

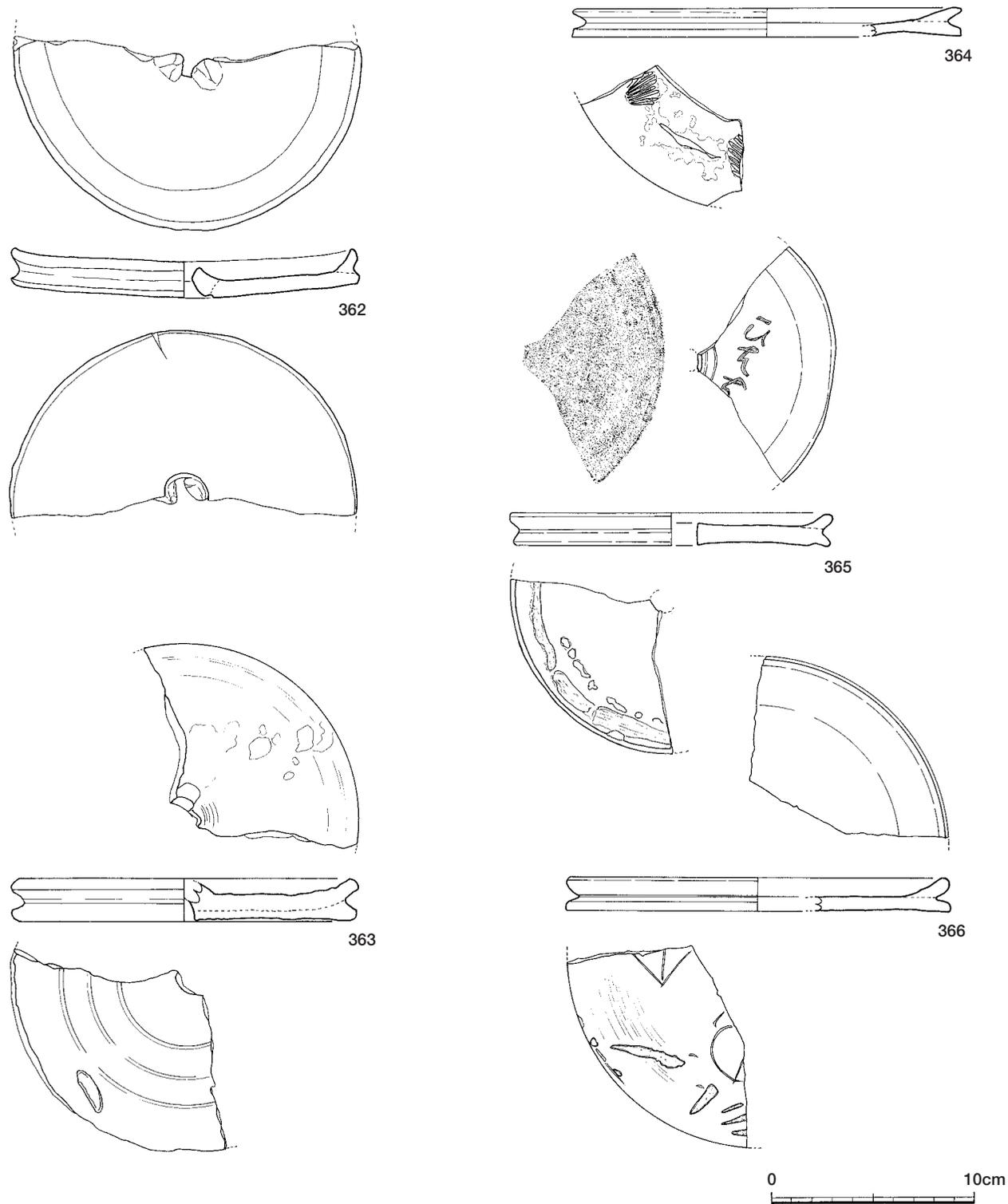
344~348は瓦に様々な目跡が残る資料である。瓦を窯道具として転用して用いているのか、瓦を平積みにして焼成し、さらに最上部の面に他の製品を置いて焼成したのか、詳細は不明であるが、346のように断面に釉が付着しているものもあり、明らかに転用とみなされる資料もある。344は瓦の下位に粘土塊のハマと棒状のハマが熔着したものである。345は白色の高台畳付の痕跡が残るものである。346は1か所に6つの貝目が残るもので、

割れ口が火をうけていることから、瓦をハマとして転用したものと思われる。347はイタヤガイの貝目が残るものである。348は下面にハマの一部が熔着する。

349~361は平面が楕円形、断面が「+」の形状を呈する窯道具である。瓦に熔着して出土している例もあり、瓦を焼成する際用いられたと思われる。大小様々な大きさのものが存在する。貝目等の痕跡が残るものは見られない。

第147表 物原1 遺物観察表48

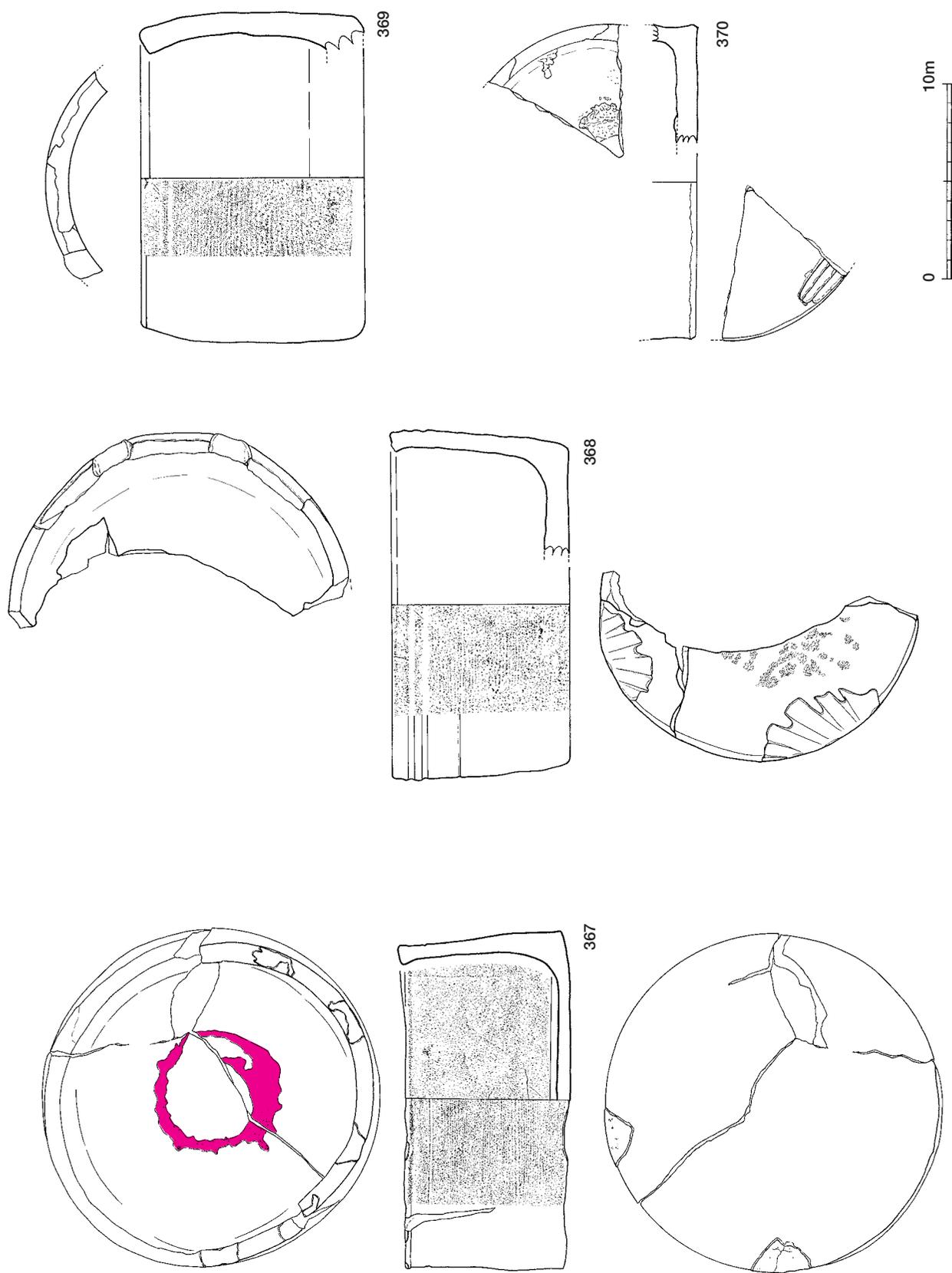
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			幅	長さ	器高				
349	ハマ	物原1 4 F	5.8	12.2	4.4	灰褐色	無釉	—	
350	ハマ	物原1 4 G	4.5	8.3	3.9	灰黄褐色	無釉	—	指痕
351	ハマ	物原1 4 F	4.0	7.7	3.6	にぶい黄橙色	無釉	—	指痕
352	ハマ	物原1 4 F	4.3	5.9	4.4	灰黄色	無釉	—	指痕
353	ハマ	物原1 3 F	3.0	7.5	4.0	灰褐色	無釉	—	指痕
354	ハマ	物原1 3 F	3.1	6.8	4.1	浅黄色	無釉	—	
355	ハマ	物原1 3 F	4.2	6.0	3.3	にぶい褐色	無釉	—	
356	ハマ	物原1 2 D	3.3	6.4	4.7	にぶい褐色	無釉	—	
357	ハマ	物原1 2 F	3.7	6.1	3.3	黄褐色	無釉	—	
358	ハマ	物原1 2 D	2.7	4.2	2.3	灰色	無釉	—	
359	ハマ	物原1 2 D	2.6	4.7	4.6	暗灰黄色	無釉	—	
360	ハマ	物原1 4 F	3.7	5.1	3.2	灰白色	無釉	—	
361	ハマ	物原1 3 F	5.2	4.0	3.2	灰白色	無釉	—	



第261図 物原1出土遺物(7)窯道具

第148表 物原1 遺物観察表49

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			上径	底径	器高				
362	窯道具	物原1 2 D	17.2	17.2	2.6	灰黄褐色	無釉	—	
363	窯道具	物原1 3 G	—	17.2	2.1	にぶい黄橙色	無釉	—	下面に貝目
364	窯道具	物原1 2 D	19.2	19.2	1.4	黄灰色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	下面に貝目
365	窯道具	物原1 4 F	15.8	15.6	1.6	にぶい赤褐色	無釉	—	上面に文字
366	窯道具	物原2 5.6 E F	—	19.0	1.7	褐灰色	無釉	—	下面に貝目・文字か?

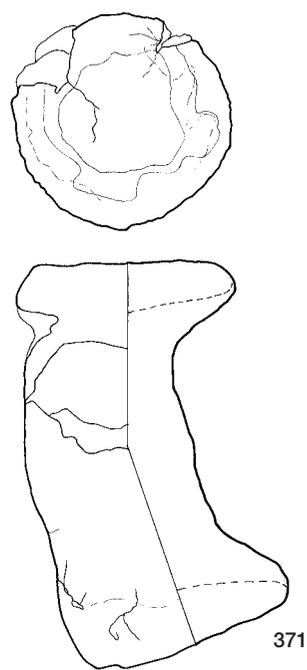


第262図 物原1出土遺物(78)窯道具

362～366は詳細な用途は不明であるが、窯道具と思われる資料である。平坦な円板をつくり、その縁に粘土紐を斜め上方に向けて貼り付けたもので、中心は穿孔が施され、その周辺に3か所突起をつける。363は、下面に3条の沈線が巡る。364は下面に貝目が残る。365は上面に文字と思われる釘彫りが刻まれるが、判読が難しい。366は下面に釘彫りが刻まれ、貝目も残る。

367～370はサヤ鉢である。内外面はヘラ状工具による横方向の調整が施される。367は内面に白色の高台痕が残る。また口唇部と外底面に貝目も残る。368は、口縁部と外底面に貝目が残るが、外底面はイタヤガイを使用している。369は、口唇部に重ね焼きの痕跡が残る。370は、内面に白色の砂粒混じりの胎土目が熔着し、外底面には貝目が残る。

371はトチンである。上面には白色の高台痕が看取される。



第263図 物原1出土遺物(79)窯道具

第149表 物原1 遺物観察表50

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
367	サヤ鉢	物原1 4 G	16.5	17.2	8.5	黄灰色	無釉	—	口唇部・底部に貝目
368	サヤ鉢	物原1 4 F下	17.6	16.0	9.2	暗灰黄色	無釉	—	口唇部・底部に貝目
369	サヤ鉢	物原1 4 F	—	16.5	11.5	灰黄色	無釉	—	口唇部に貝目
370	サヤ鉢	物原1 4 D	—	16.0	—	褐灰色	無釉	—	内底面に砂粒付着 外底面に貝目
371	トチン	物原1 4F・4Dモノ2	上径 6.5	8.5	15.8	赤褐	無釉	—	上面に高台痕

堂平窯製品以外（第264図）

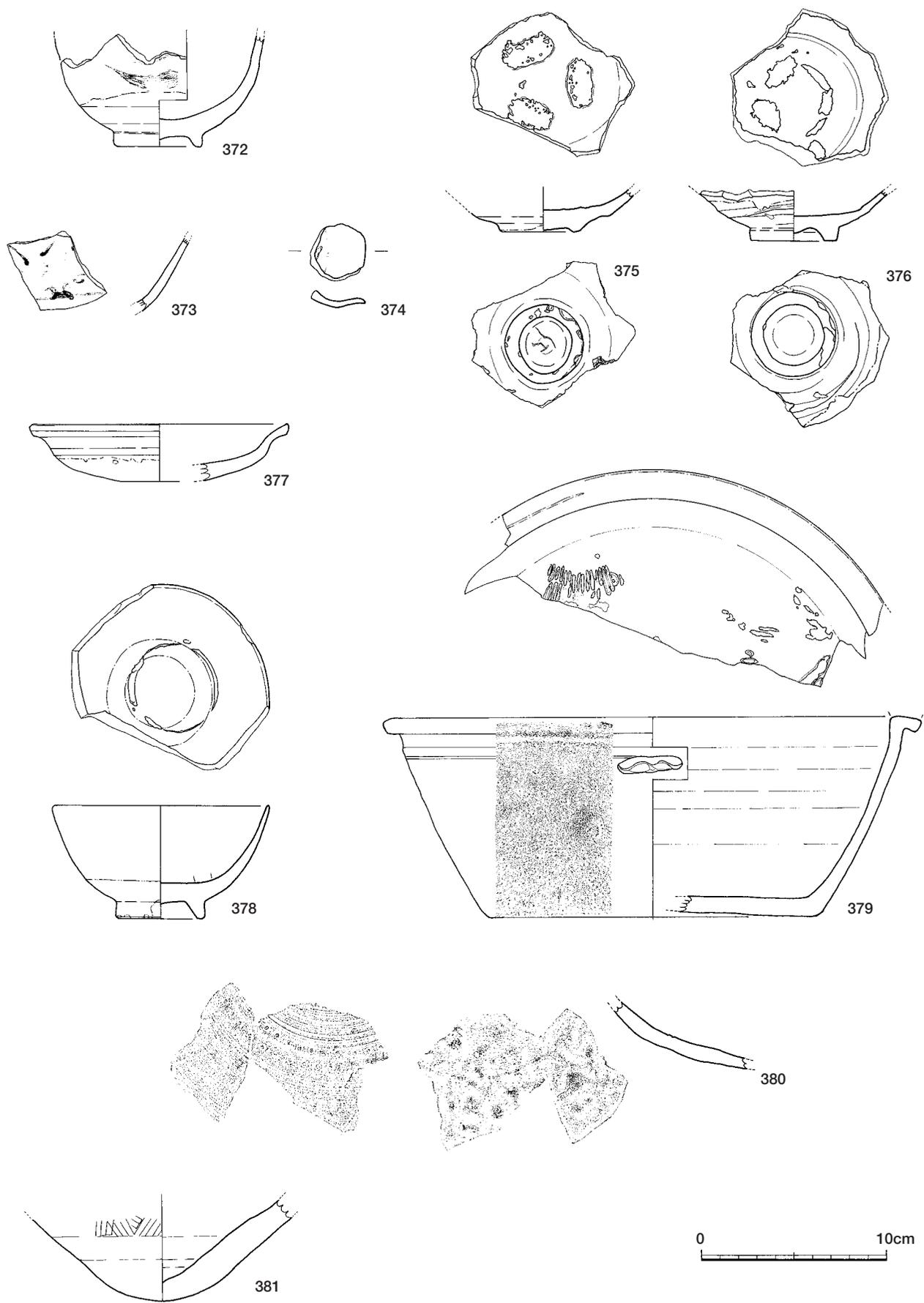
372は肥前系陶器の碗で、外面に鉄絵が描かれる。373は、中国青花の碗である。374は、中国青花の皿を転用してメンコにしたものである。375～377は、肥前系陶器の皿である。375・376は、見込みに砂目が残る。378は、竜門司焼の碗である。見込みは重ね焼きのための蛇ノ目釉

剥ぎが施される。379は浅鉢である。外面口縁部下に装飾が付けられ、内底面には貝目が残る。

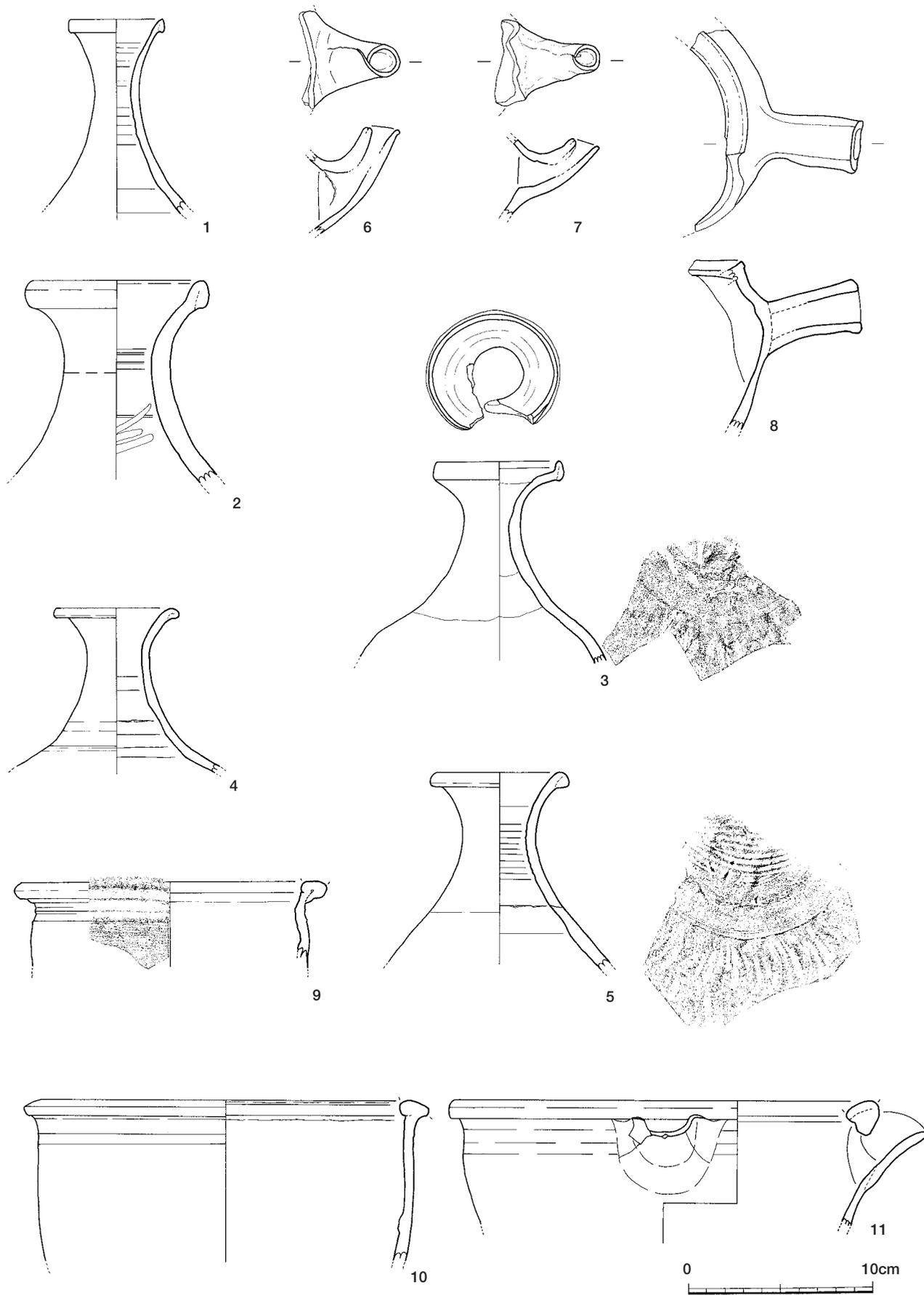
380は縄文土器、381は成川式土器の底部である。他の物原からも同時代の遺物が出土していることから、窯を造る際、破壊されたものと思われる。

第150表 物原1 遺物観察表51

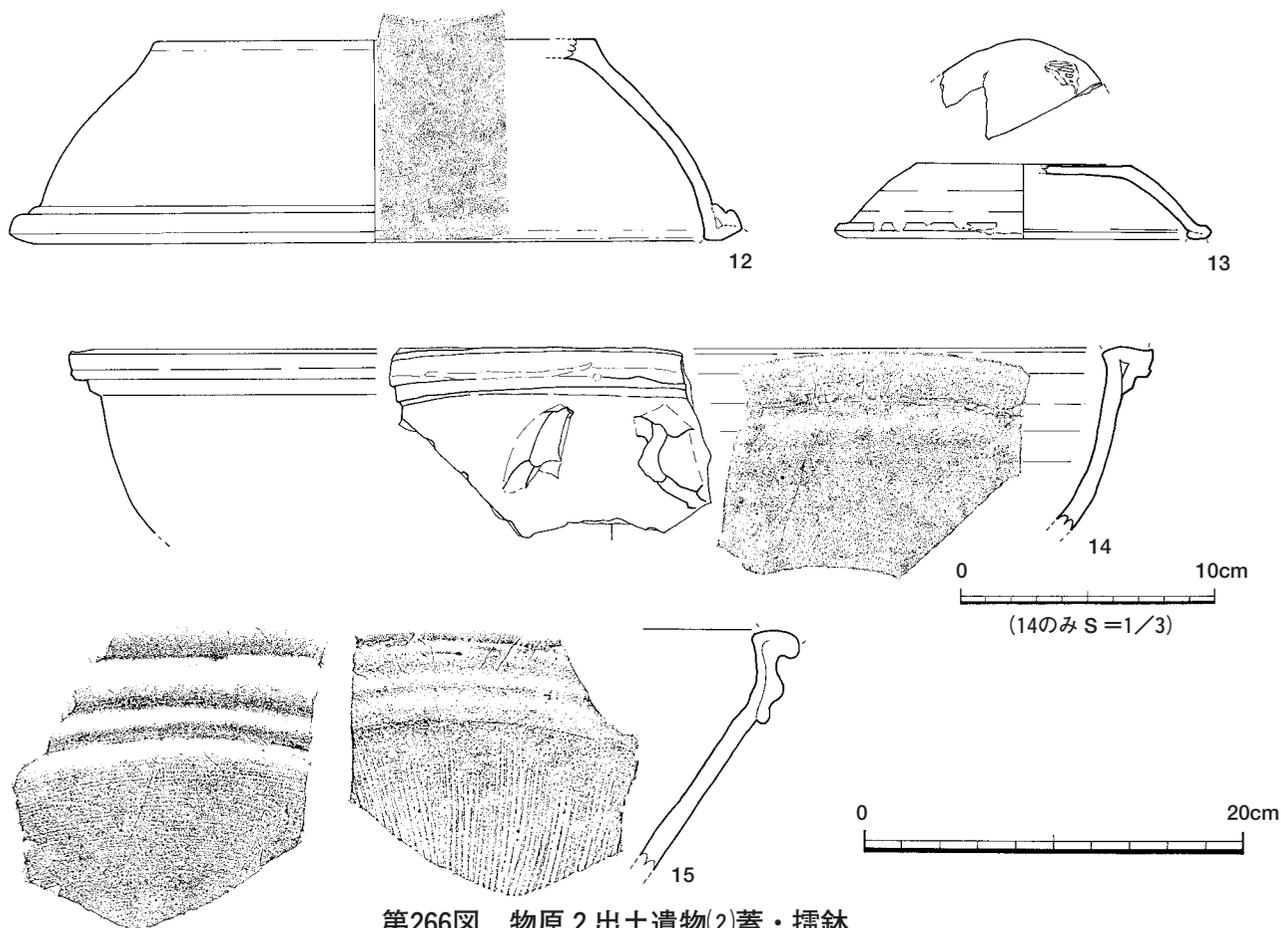
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
372	碗	物原1 表上	—	4.6	—	にぶい黄橙色	灰釉 灰色	畳付と高台内面以外 全面施釉	
373	碗	物原1 4 F	—	—	—	灰白色	透明釉 明緑色	全面施釉	
374	メンコ	物原1 2 E	径2.9	—	厚さ3.5	灰白色	透明釉 灰白色	全面施釉	
375	皿	物原1 3 E	—	4.4	—	にぶい黄橙色	灰釉 灰白色	畳付以外全面施釉	見込みに目跡
376	皿	物原1 3 F	—	4.6	—	にぶい黄橙色	灰釉 灰色	畳付と高台内面以外 全面施釉	見込みに目跡
377	皿	物原1 3.4 E F	14.0	—	3.1	灰褐色	灰釉 灰緑色	底部付近以外施釉	
378	碗	物原1 4 E	11.5	4.8	6.1	灰色	白化粧土 透明釉	畳付と高台内面以外 全面施釉	竜門司焼
379	鉢	物原1 4 D	29.0	22.8	10.7	にぶい褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部と外底面以外施釉	内底面に貝目
380	土器	物原1 3 F	—	—	—	にぶい橙色	無釉	—	
381	土器	物原1 2 F	—	—	—	灰色	無釉	—	ヘラ調整



第264図 物原1 出土遺物(80)堂平窯製品以外



第265图 物原2出土遺物(1)德利・水注・片口



第266図 物原2 出土遺物(2)蓋・擂鉢

第2 地点物原2の出土遺物

德利・片口・蓋・鉢・擂鉢 (第265・266図)

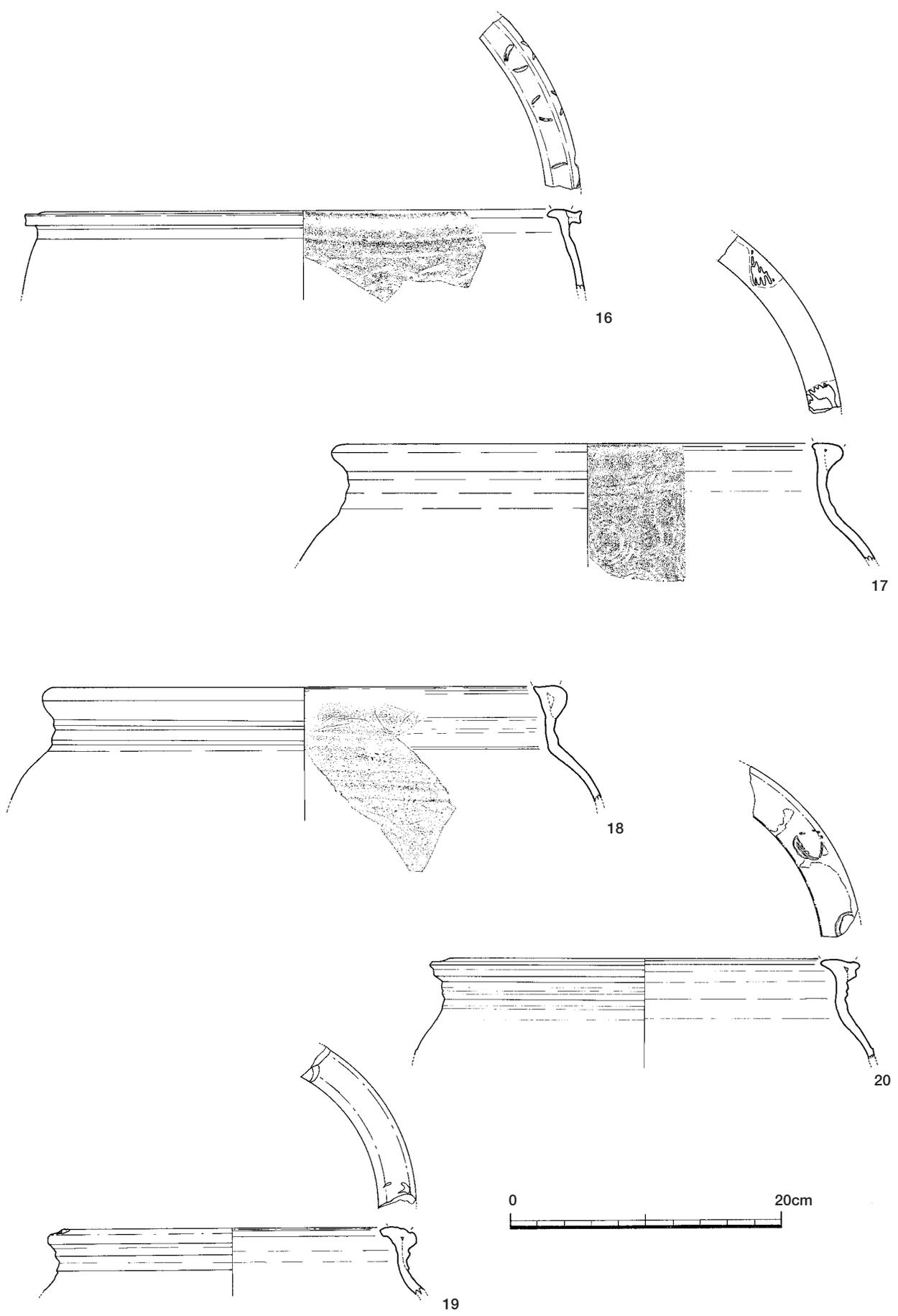
1～5は德利である。1は、頸部が細長い形状を呈する「鶴首」型の資料である。2～5は、口縁部先端の形状はそれぞれ異なるが、全体的に肉厚の形状の資料が多く見られる。5は、内面頸部に同心円状のタタキ目が密に残る。6～8は水注で、6・7は注口部、8は把手部である。注口はどちらも巻き口である。8の把手部は中空である。9～11は片口である。9は小形のもので、10・

11は大形のものである。9・10は片口部が欠損している。

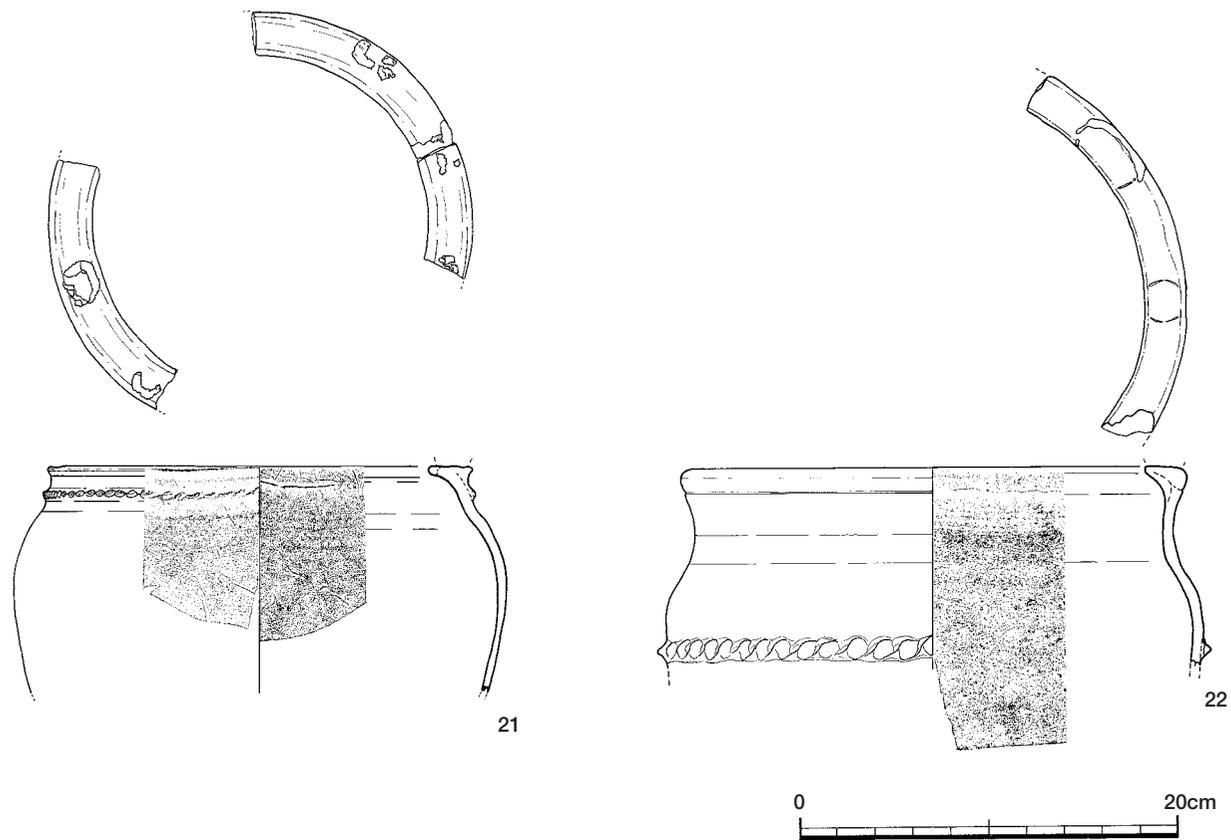
12, 13は浅鉢型の蓋である。12は蓋でない可能性も考えられる。内面は、同心円状のタタキ目が横ナデにより消されていることが看取される。13は上面に貝目が残る。外面胴部には筋状の調整痕が残る。14は把手付きの甕である。把手部は欠損している。内面は、かすかに同心円状のタタキ目が残る。15は擂鉢である。擂り目は細く密に入り、外面にはヘラ状工具よる横方向の調整痕が入る。

第151表 物原2 遺物観察表1

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上径	器高				
1	德利	物原2 5 E	5.2	—	—	灰色	灰釉 灰緑色	内面の一部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目
2	德利	物原2 5D表下	10.0	—	—	灰色	灰釉 暗赤褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
3	德利	物原2	6.8	—	—	褐灰色	灰釉 にぶい黄色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
4	德利	物原2	6.8	—	—	赤灰色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	
5	德利	物原2 5 D表	7.4	—	—	暗赤褐色	灰釉 灰緑色	内面の一部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目
6	水注	物原2 6 E	—	—	—	褐灰色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	
7	水注	物原2 5 E	—	—	—	にぶい黄橙色	灰釉 黒褐色	外面と注口施釉	
8	水注	物原2 5.6D	12.6	—	—	浅黄色	灰釉 灰緑色	内外面下位以外施釉	
9	鉢	物原2 5 E	22.8	—	—	にぶい黄橙色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	合わせ口の痕跡
10	片口	物原2 5 D	22.0	—	—	褐灰色	灰緑色	口唇部以外全面施釉	
11	片口	物原2 5.6 E F	23.4	—	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
12	蓋	物原2 5 E	38.7	23.4	10.6	明赤褐色	灰釉 灰黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面にタタキ目
13	蓋	物原2 5 E	20.0	11.4	3.9	灰黄褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	上面に貝目
14	鉢	物原2 5 E	42.8	—	—	橙色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面にタタキ目
15	擂鉢	物原2 5.6 E F	—	—	—	暗灰黄色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	



第267図 物原 2 出土遺物(3)甕



第268図 物原2出土遺物(4)甕

甕 (第267・268図)

16～22は甕である。口縁部の形状から大きく4つに分けることができる。

16は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、「T」字状につくるもので、口唇部は内側を高く、外を溝縁状につくる。口唇部の釉は拭い取られ、貝目が残る。

17～19は、口縁部を外側に折り返し、断面三角形状におさめるもので、口唇部外側の縁はやや丸みを帯びる。また口縁部外面は低い段を2～3条有する。口唇部の釉は拭い取られ貝目が残る。17は、口唇部に貝殻の背面利用したもので、放射脈の痕跡が残る。内面には同心円状

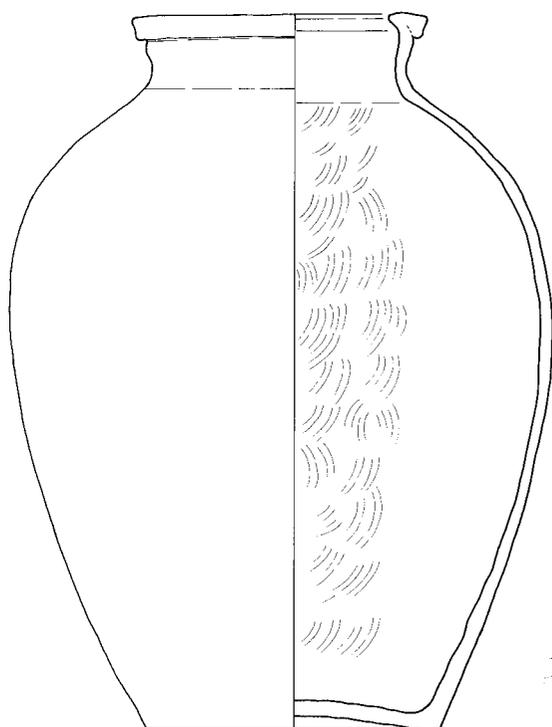
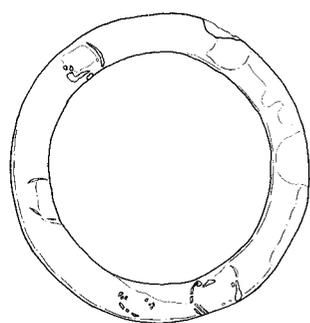
のタタキ目が明瞭に残る。18は、横方向の調整痕が残る。

19は、口縁部を外側に折り返し、「T」字状につくるが、やや甘くなったものである。口唇部は内側を高く、外を溝縁状につくり、釉は拭い取られ、貝目が残る。

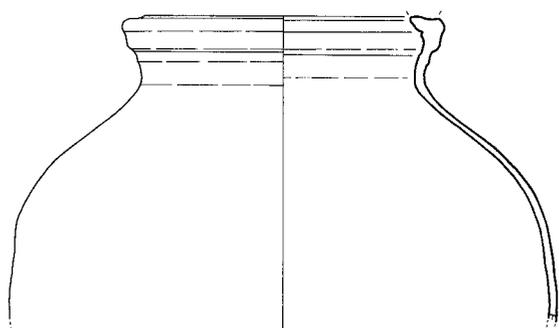
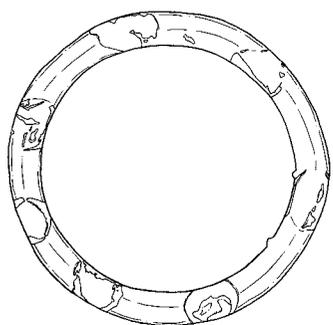
21・22は口縁部の断面は17～19と同様であるが、口縁部外面には段を有しないタイプの資料である。どちらも内面は、横ナデ調整が施されているため、同心円状のタタキ目はかすかに看取されるのみである。21は、外面口縁部直下に縄状の突帯を有する。外面は横ナデ調整痕が残る。22は、肩部に縄状の突帯が巡る。

第152表 物原2 遺物観察表2

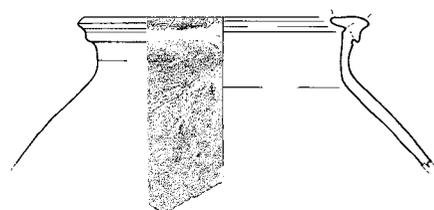
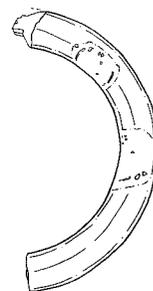
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
16	甕	物原2 5 E	41.0	—	—	褐灰色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状のタタキ目 口唇部に貝目
17	甕	物原2 5 E	37.6	—	—	赤色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に 同心円状のタタキ目
18	甕	物原2 5.6 E F	38.7	—	—	浅黄色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目
19	甕	物原2 5 E	33.4	—	—	にぶい橙色	灰釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
20	甕	物原2 5 E	31.6	—	—	灰褐色	灰釉 淡黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
21	甕	物原2 5 D 表	22.4	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に 同心円状タタキ目
22	甕	物原2 2.6 E	26.6	—	—	褐灰色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に 同心円状タタキ目



23



24



25



第269図 物原 2 出土遺物(5)壺

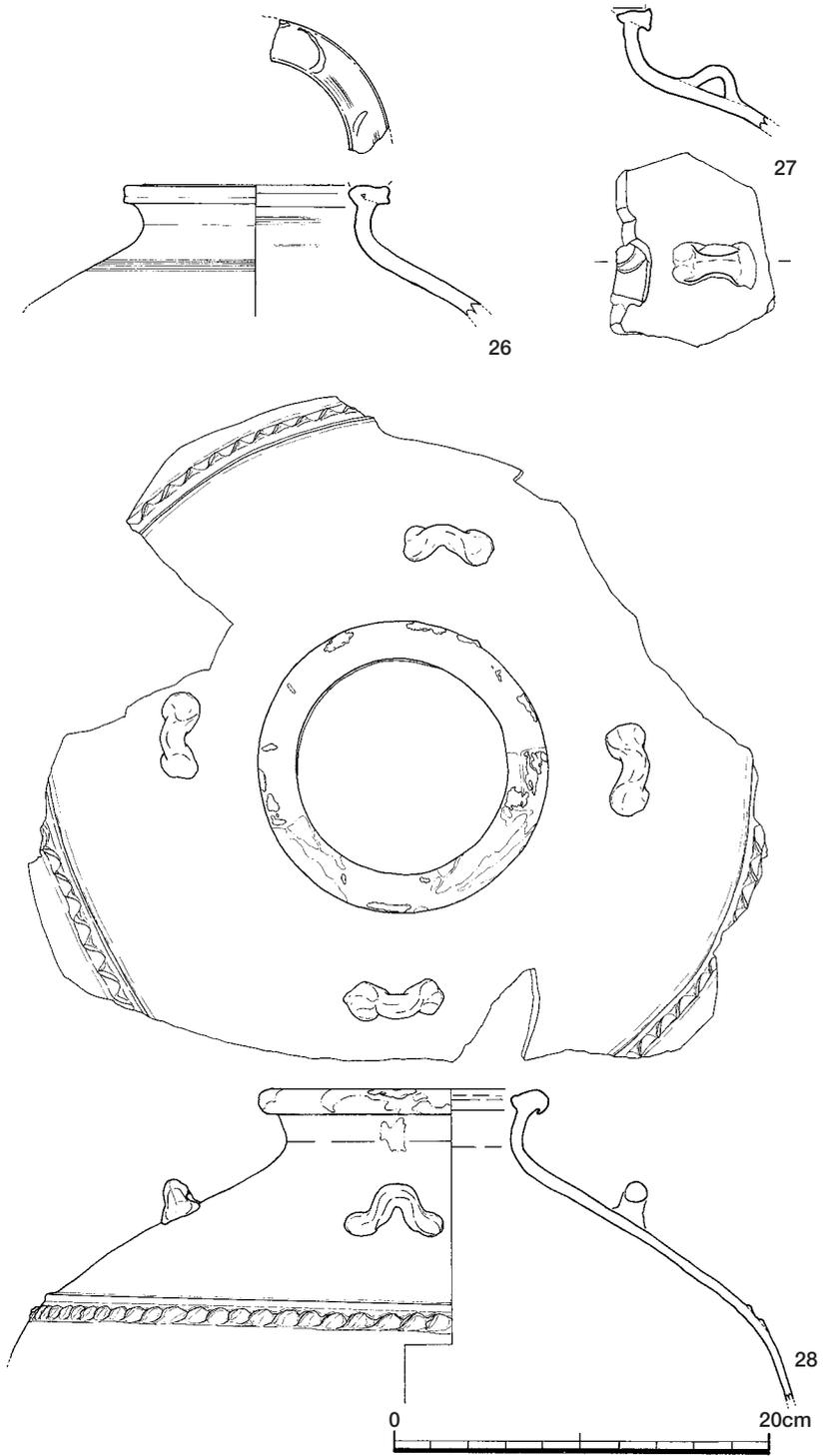
壺（第269～270図）

23～28は壺である。口縁部と口唇部の形状により、大きく3つに分けることができる。

23～25は、外側に折り返した口縁部が、外面口縁部下位に付く形状を呈する。23は、ほぼ完形に復元できた資料で、内面全体に同心円状のタタキ目が明瞭に残る。口唇部には貝目が残る。24は、口唇部に貝目が7か所残る。25は、口縁部の内側への張り出しが強いもので、内面には同心円状のタタキ目が残るが、釉が厚くかかるためはっきりとしない。

26・27は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、「T」字状につくり、口唇部を内側は高く、外側は溝縁状につくるものである。26は、肩部に、ヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。27は、肩部に縦耳が付くもので、全体の個数は不明である。

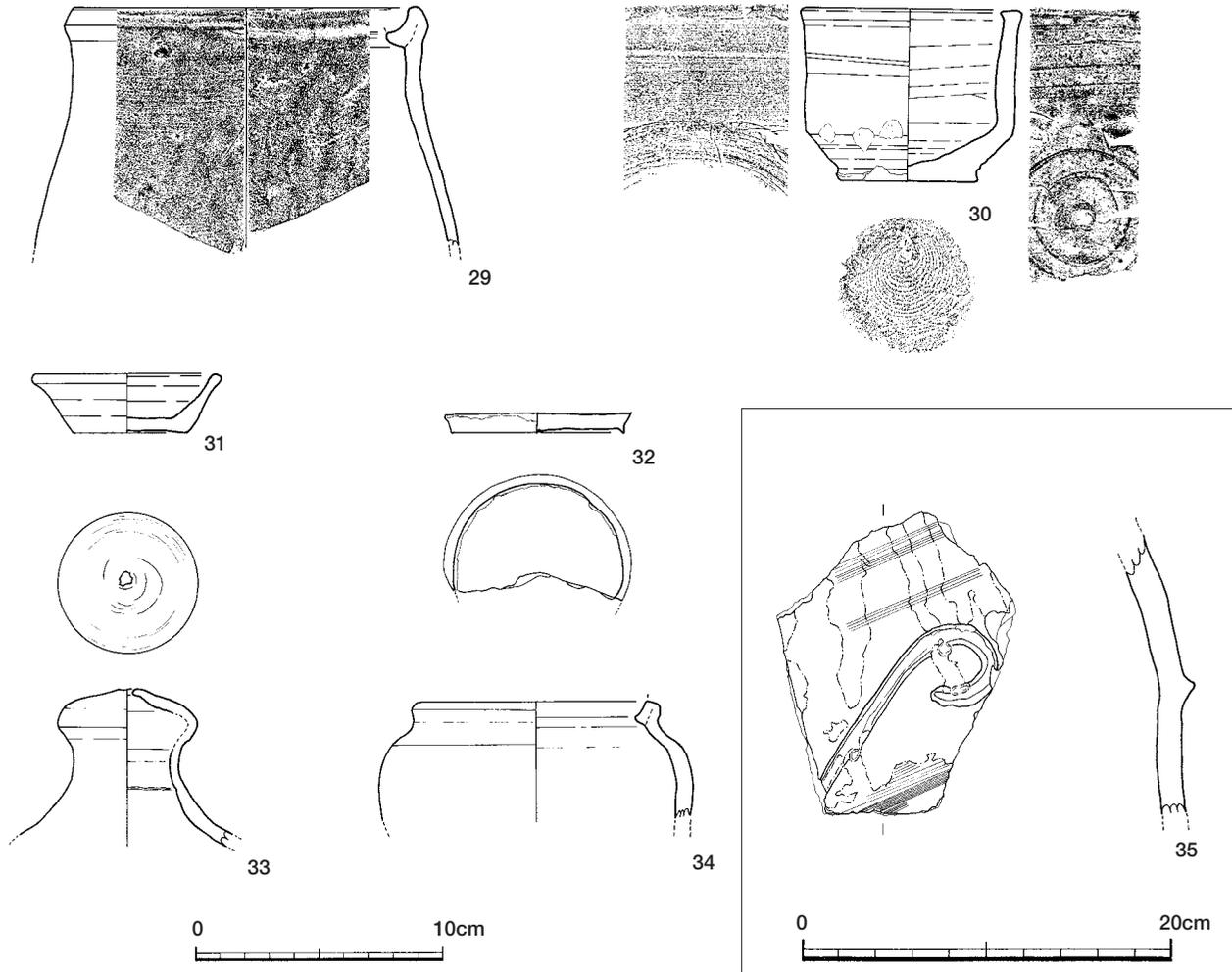
28は、肩部以下は欠損しているが、大形になる資料である。口縁を外側に折り返して肥厚させ、端部を下垂気味につくるもので、口唇部はやや丸みを帯びる。耳は、丸みを帯びた横耳が4か所つく。肩部には、縄状の突帯とその上位に突帯が巡る。外面には、ヘラ状工具による横方向の調整痕が看取されるが、内面にはタタキ目は見られない。



第270図 物原2出土遺物(6)壺

第153表 物原2 遺物観察表3

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
23	壺	物原2 3 G	15.7	15.7	37.5	灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
24	壺	物原2 3 G	17.0	—	—	暗灰黄色	灰釉 明黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
25	壺	物原2 5 E	15.4	—	—	灰赤色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
26	壺	物原2 6 E	14.0	—	—	にぶい黄橙色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
27	壺	物原2 5 E	—	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
28	壺	物原2 2 D 物1	15.4	—	—	黒褐色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	口唇部に貝目



第271図 物原2出土遺物(7)その他

その他 (第271図)

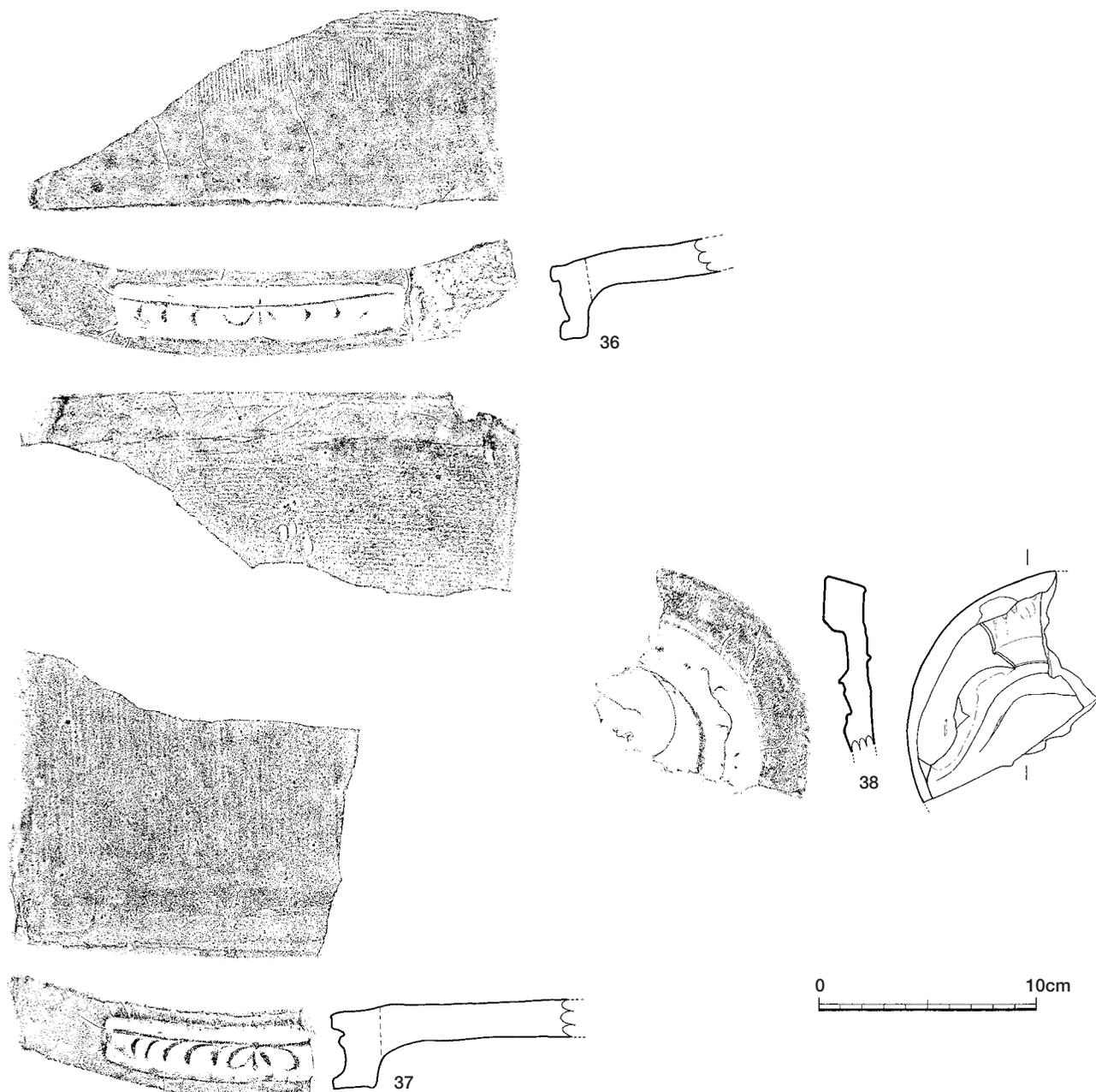
器種が不明なものや、1点のみの資料を掲載した。

29は、口縁部に蓋受け部がつけられるもので、器種や用途は不明である。内面は施釉されるが、外面は無釉で、横方向の調整痕が残る。内面は、ヘラ状工具による削り調整の痕跡が筋状に残り、外面は横方向の調整痕が残る。30は、半筒碗のような器形を呈する資料で、素焼きである。外底面は糸切りである。31は、小皿か窯道具か用途不明の資料である。外面に削り調整を施す。32は、円板状の形状を呈する資料で、蓋のようでもあるが、

上面につまみは付かず、用途不明である。33は、澆瓶のつまみ部分である。中心に穿孔が施される。外面には、施釉時に付いたと思われる指跡が看取される。内面は無釉である。34は、口唇部に蓋受け部をつくるもので、小壺もしくは水注の可能性が考えられる。肩部が張る器形を呈する。外面は灰釉が施釉されるが、内面は無釉で横ナデ調整が施される。35は大形の植木鉢の一部と思われる。外面には貼り付けの文様が装飾され、ヘラ状工具による筋状の器面調整も施される。

第154表 物原2 遺物観察表4

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
29	火消 壺?	物原2 5 D表下	14.2	—	—	褐灰色	鉄釉 灰緑色	内面のみ施釉	内面に同心円状のタタ キ目
30	不明	物原2 6 E	8.8	5.7	6.9	にぶい黄橙色	無釉	—	外面に指ナデ痕 外底面糸切り
31	不明	物原2 5 D	7.6	4.6	2.4	褐灰色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	
32	蓋?	物原2 5 E	7.5	—	0.6	灰色	無釉	—	
33	澆瓶	物原2 5.6EF	—	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰緑色	つまみ内部と外部全面施釉	
34	水注?	物原2 6 E	10.0	—	—	褐灰色	灰釉 黄灰色	外面のみ施釉	
35	不明	物原2 5 E	—	—	—	にぶい橙色	鉄釉 黒緑色	残存部全面施釉	



第272図 物原2出土遺物(8)瓦

瓦 (第272図)

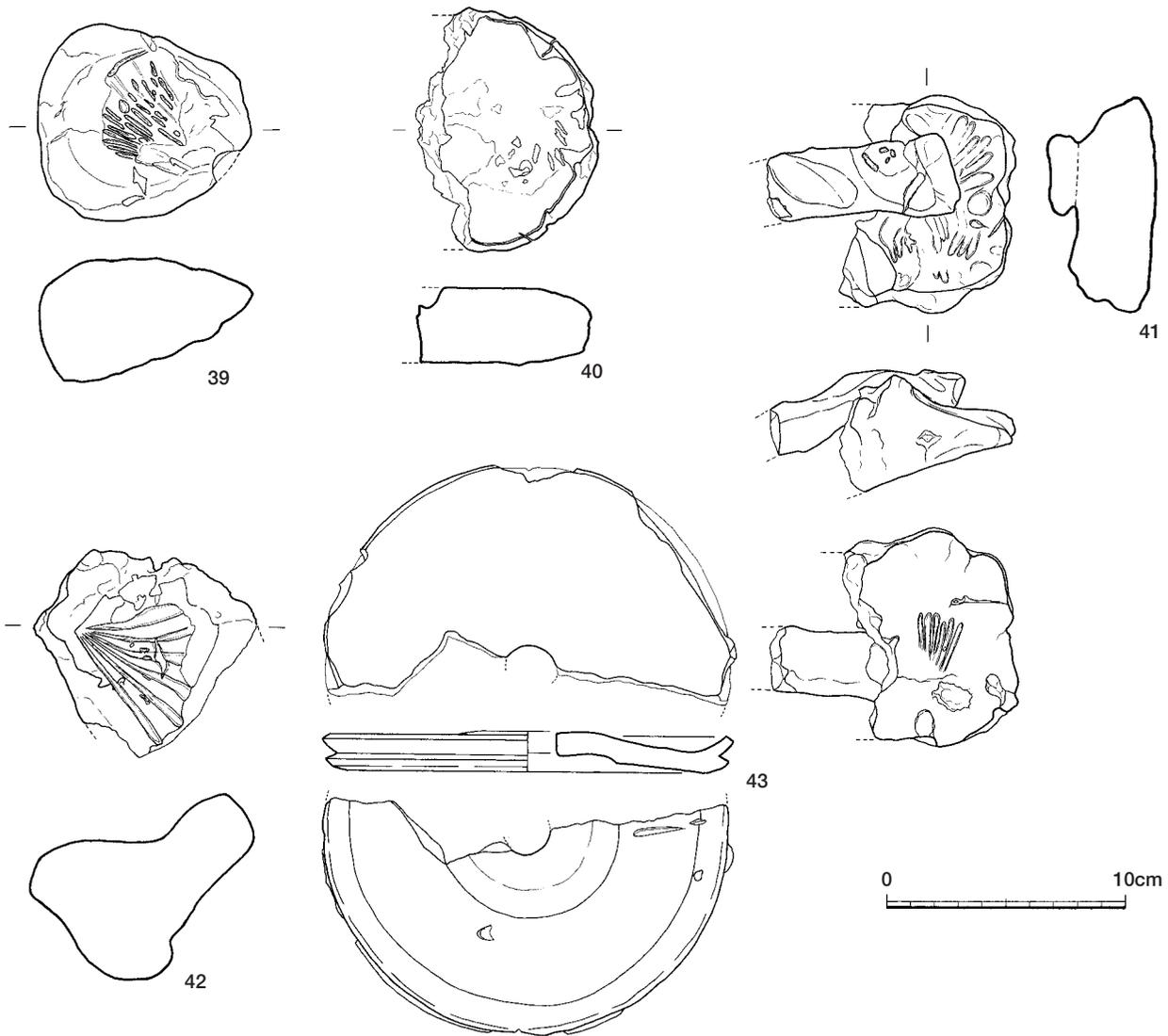
36・37は軒平瓦である。瓦頭部の文様がそれぞれ異なるものである。36は、平瓦部分の上面にヘラ状工具による調整痕が、縦方向に残るが、下面は横方向に残る。施釉は、灰釉が上面の脇を除く部分と、瓦頭部前面から裏面にかけてかかる。37は、瓦頭部が厚手のものである。

平瓦部分の上面は、縦方向の調整痕が施されるが、下面はナデ消していて痕跡は見られない。施釉は、灰釉が上面の脇を除く部分と、瓦頭部前面と下部のみかけられ、裏面にはかからない。

38は軒丸瓦である。灰釉が、瓦頭部全面にかかる。

第155表 物原2 遺物観察表5

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			厚さ	顎厚	瓦頭厚				
36	軒平瓦	物原2 4 E	1.5	1.2	3.4	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	上面・瓦頭部施釉	
37	軒平瓦	物原2 D5.6	1.7	2.0	3.4	橙色	灰釉 灰黄色	上面・瓦頭部のみ施釉	
38	軒丸瓦	物原2 E5.6	—	—	—	橙色	灰釉 灰白色	残存部全面施釉	



第273図 物原2出土遺物(9)窯道具

窯道具（第273図）

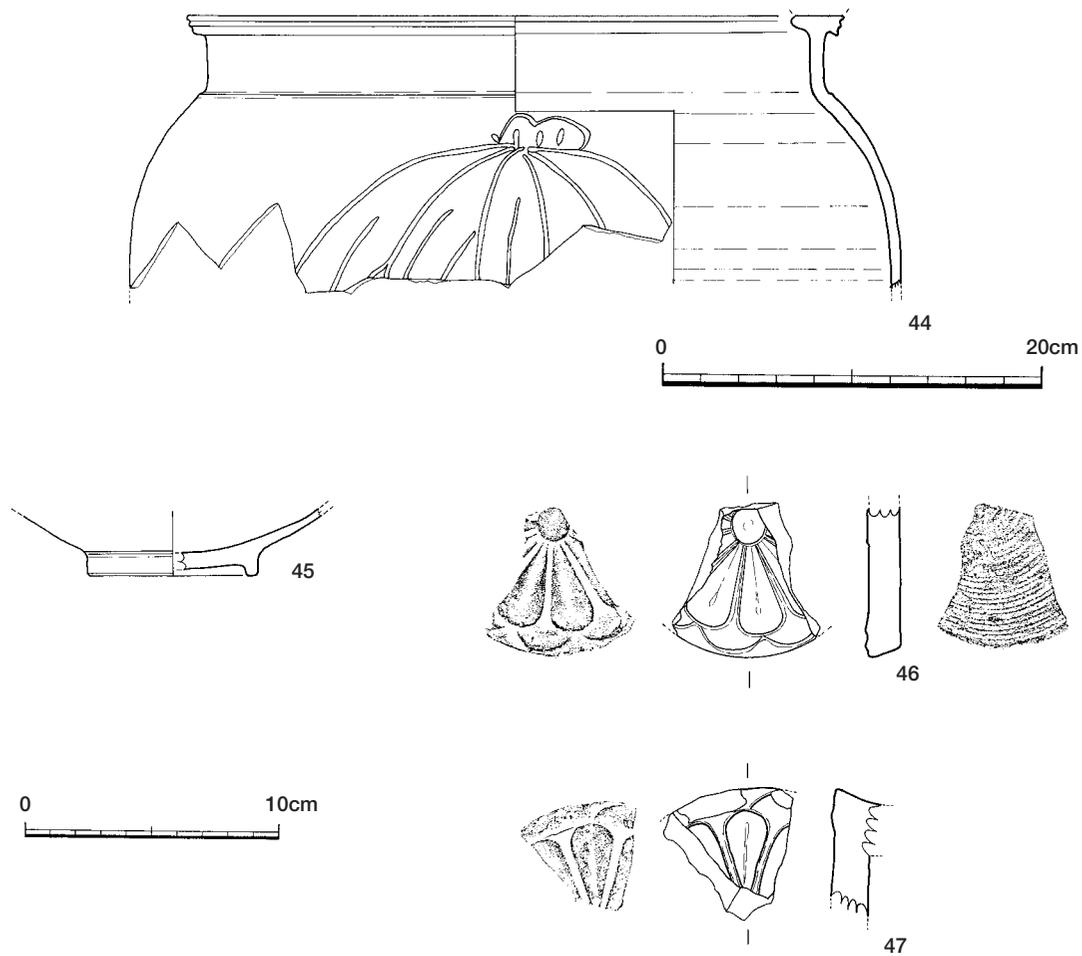
39～43は窯道具である。

39は断面が馬蹄形，平面が三角形の形状を呈するハマである。上面には貝目が残る。40は，本来の用途は色見孔の蓋であるが，ハマに転用したものである。上面に貝目が残る。41は，39の形状を呈するハマと粘土を手で棒状に握ってつくったものが熔着したものである。棒状の窯道具は，高さを微調整するために使用されたものと思

われ，それを示す資料である。42は，粘土塊をハマとして使用したもので，上面にイタヤガイの貝目が看取される。43は窯道具と思われる資料で，中心部に穿孔が施されているが，他の物原で出土した同様の窯道具では，上面に突起が3か所付くが，この資料には見られない。上面には，筋状の調整痕が看取される。また，下面中央は，窪みを有し段をつくる。

第156表 物原2 遺物観察表6

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			幅	長さ	器高				
39	ハマ	物原2 5 E	8.9	—	5.1	暗赤灰色	無釉	—	上面に貝目
40	ハマ	物原2 5 E	9.9	—	3.2	にぶい赤褐色	無釉	—	上面に貝目
41	ハマ	物原2 6 E	9.0	—	5.1	灰色	無釉	—	上，底面に貝目
42	ハマ	物原2 7 D	9.4	—	7.8	暗灰色	無釉	—	上面に貝目
43	窯道具	物原2 4・6 E	—	底径16.8	1.7	灰黄褐	無釉	—	



第274図 物原2出土遺物(10)堂平窯製品以外

堂平窯製品以外（第274図）

44～47は、堂平窯の製品ではないと思われる資料を掲載した。

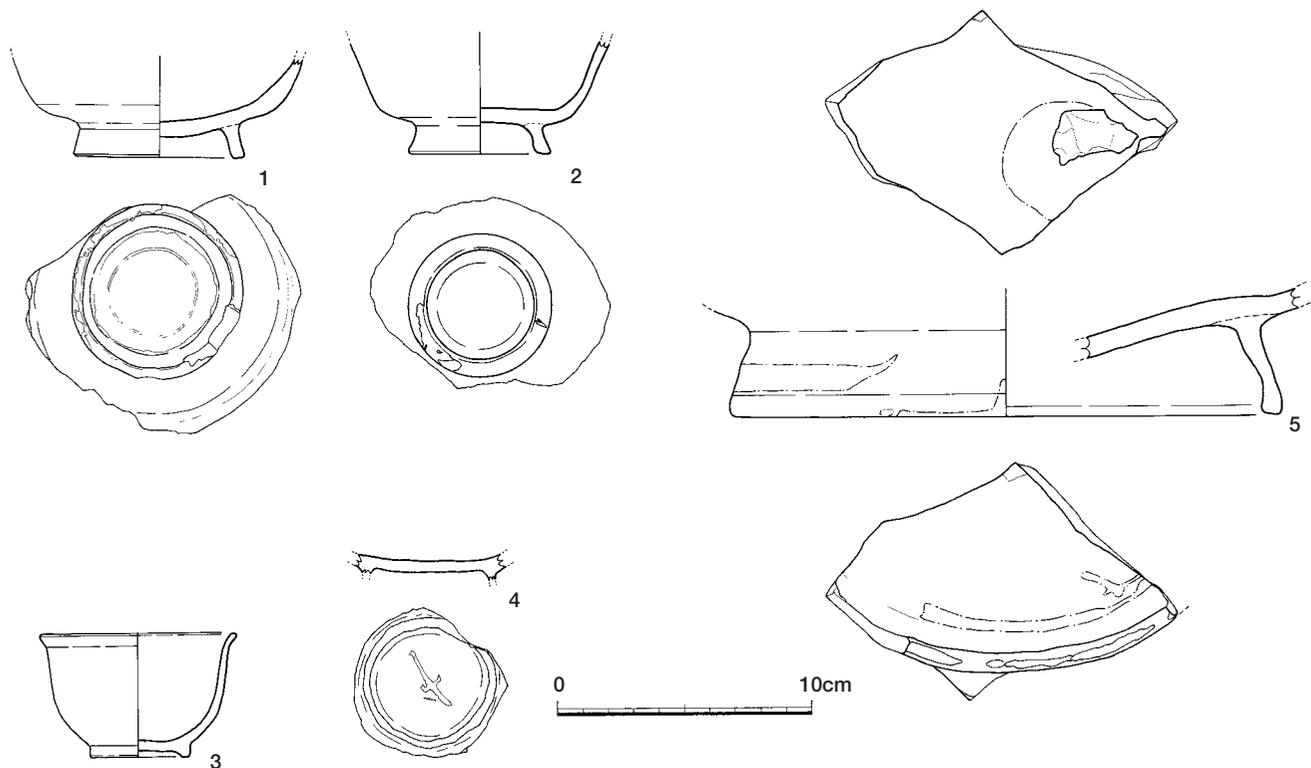
44は外面に笹の搔き落とし文が施された甕である。19世紀代の苗代川焼と考えられる。釉は、口唇部を除き、残存部は全面に施釉される。胎土は、堂平窯の製品と比べて粗い。

45は、底部のみの資料である。皿である。胎土は緻密で、砂粒等も含まずよく焼き締まっている。高台は削り出しでつくられる。内外面には、細い筋状の調整痕が看取される。無釉であると思われる。

46・47は軒丸瓦の一部である。瓦頭部の前面と脇には灰釉が施釉される。同一個体の可能性がある。46の瓦頭部の裏面には、筋状の調整痕が施される。

第157表 物原2 遺物観察表7

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
44	甕	物原2 3.6E F	34.8	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 緑黒色	口唇部のみ釉剥ぎ	
45	皿	物原2 5.6D	—	6.8	—	灰褐色	無釉	—	
46	軒丸瓦	物原2 4 E	径10.0	—	—	にぶい褐色	灰釉 緑黒色	表面・側面のみ施釉	
47	軒丸瓦	物原2 5 E	—	—	—	にぶい褐色	灰釉 緑黒色	表面のみ施釉	



第275図 第1地点表層出土遺物(1)碗

第5節 表層の出土遺物

第1地点表層出土遺物

第1地点から出土した遺物で、表層として取り上げたもののうち、特徴的な資料を掲載しておく。

碗(第275・276図)

1～5は、高台を削り出しでつくらず、底面に粘土紐を貼り付けて付け高台にする。

1・2は、腰部が張る形状のもので、高台畳付には貝目が残る。釉は、灰釉が畳付も含め、残存部前面に施釉される。

3は1・2に比べて小形の資料で、碗の中に分類したが、一般的な碗としての用途ではないものと思われる。高台は低くつくられ、施釉は、総釉である。

4は、碗の底部で、体部や高台部は欠損している。打ち欠いたものと思われる。高台内面には「メ」の字状の釘彫りが刻まれている。

5は、1・2の碗と比べると大形のもので、碗の中に分類したが、鉢もしくは盤のような器種である可能性も考えられる。見込みには、他製品の一部分が熔着する。また、畳付には貝目が残り、高台内面には、一部釉が削られたような痕跡が残る。残存部は全面施釉される。

第158表 第1地点表層 遺物観察表1

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
1	碗	第1地点3G表	—	6.8	—	黒褐色	灰釉 黄褐色	残存部全面施釉	
2	碗	第1地点3G表	—	5.4	—	黄灰色	灰釉 浅黄色	残存部全面施釉	
3	碗	第1地点表層	7.8	3.9	—	暗灰黄色	灰釉 緑黄色	残存部全面施釉	
4	碗	第1地点3G表	—	—	—	黄灰色	灰釉 にぶい黄色	残存部全面施釉	
5	碗	第1地点1E表	—	21.8	—	にぶい赤褐色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	畳付に貝目 他製品の痕跡
6	碗	第1地点表層	14.0	5.0	8.4	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	畳付に白い砂粒付着 見込みに目跡と高台痕
7	碗	第1地点表層	—	5.5	—	淡黄色	透明釉	畳付以外全面施釉	
8	碗	第1地点6C表	—	5.6	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	畳付に白い砂粒付着 見込みに目跡
9	碗	第1地点3G表	—	5.0	—	浅黄色	透明釉	畳付以外全面施釉	高台に砂粒付着 見込 みに目跡
10	碗	第1地点6C表	—	5.2	—	淡黄色	透明釉	畳付以外全面施釉	畳付に白い砂粒付着 見込みに目跡
11	碗	第1地点3G表	—	4.8	—	淡黄色	透明釉	畳付以外全面施釉	見込みに目跡

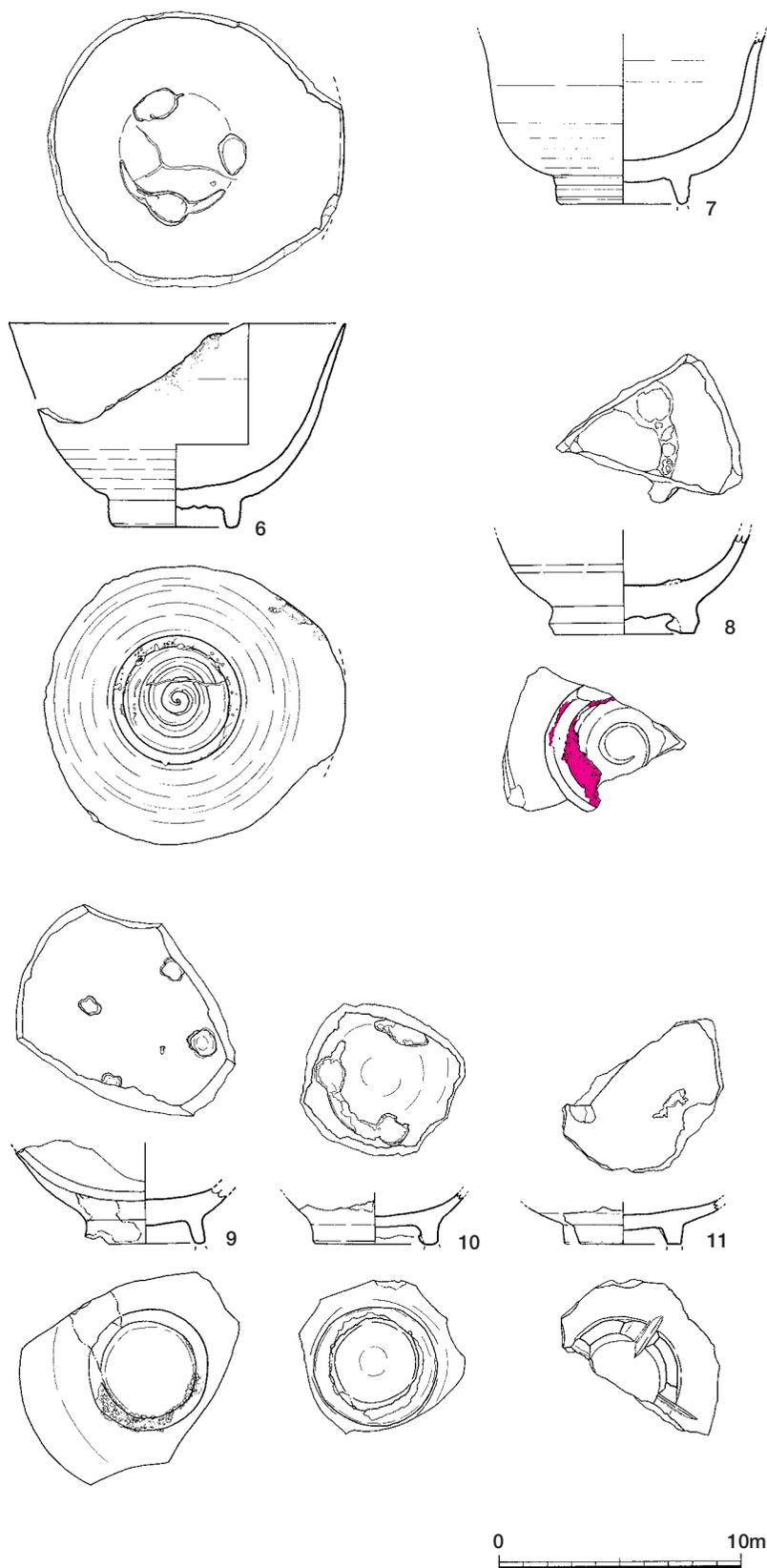
白色陶胎（第276図）

6～11は白色陶胎の碗である。すべて畳付以外、透明釉がかけられている。これらの碗は見込みに白色の胎土目を数か所置き、その上に別の製品の高台をのせるといった「重ね焼き」の技法で焼成されており、見込みや畳付に胎土目が看取される。

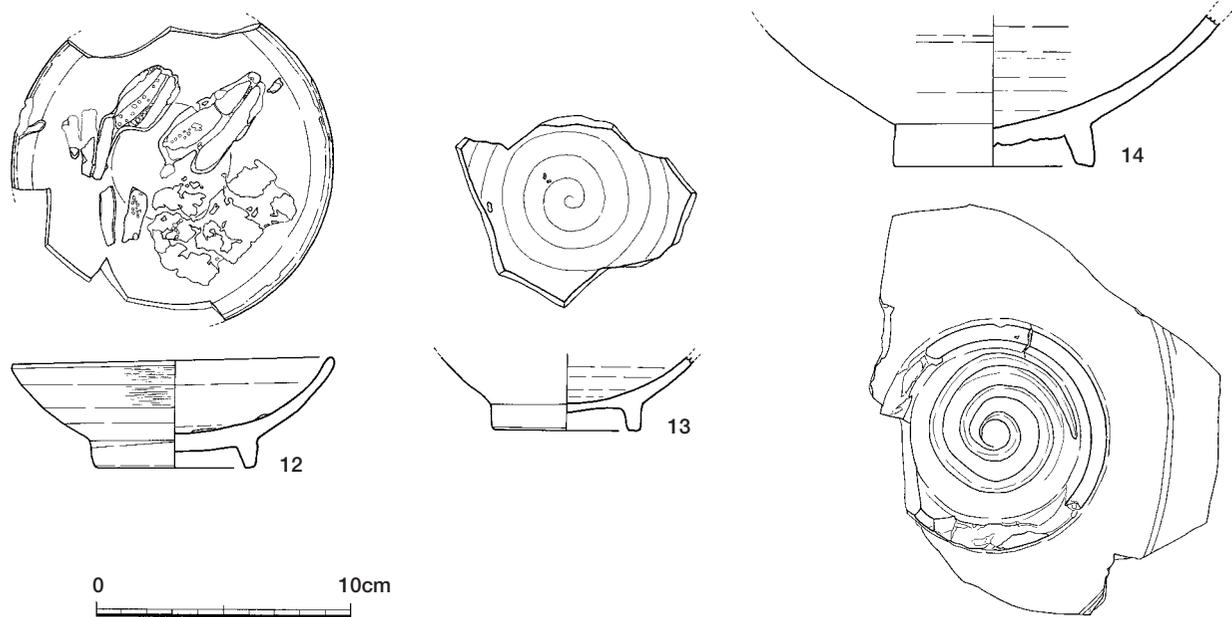
6は外面の一部に、鉄釉がかけられており、「けしき」が施されている。見込みには胎土目と畳付の痕跡が残り、高台内面には削り出しの巴が看取される。

7は外面腰部に削り出しの痕跡が稜線となって強く残る資料である。

8は見込みに胎土目と畳付痕が残り、畳付から高台内面にかけて白色砂粒まじりの胎土目が付着している。9は、見込みにやや小さめの胎土目が残り、畳付には、白色砂粒まじりの胎土目が付着する。10は、見込みに胎土目と畳付痕が残る。11は、切り高台となる資料である。見込みにやや小さめの胎土目が残る。



第276図 第1地点表層出土遺物(2)白色陶胎 碗



第277図 第1地点表層出土遺物(3)白色陶胎 皿

白色陶胎 皿 (第277図)

12は、胎土は白物と同様の白色胎土を用いるが、釉は鉄釉が暈付と高台内面を除き全面にかけられた資料である。見込みにはイタヤガイを用いた貝目が鮮明に看取される。13は、暈付も含め総釉である。

14は、大形の皿もしくは盤になるものと思われる資料である。高台内面には削り出しの痕跡が巴状に深く残る。素焼きの段階であるのか、焼成不良のため釉の発色が悪いのか不明である。

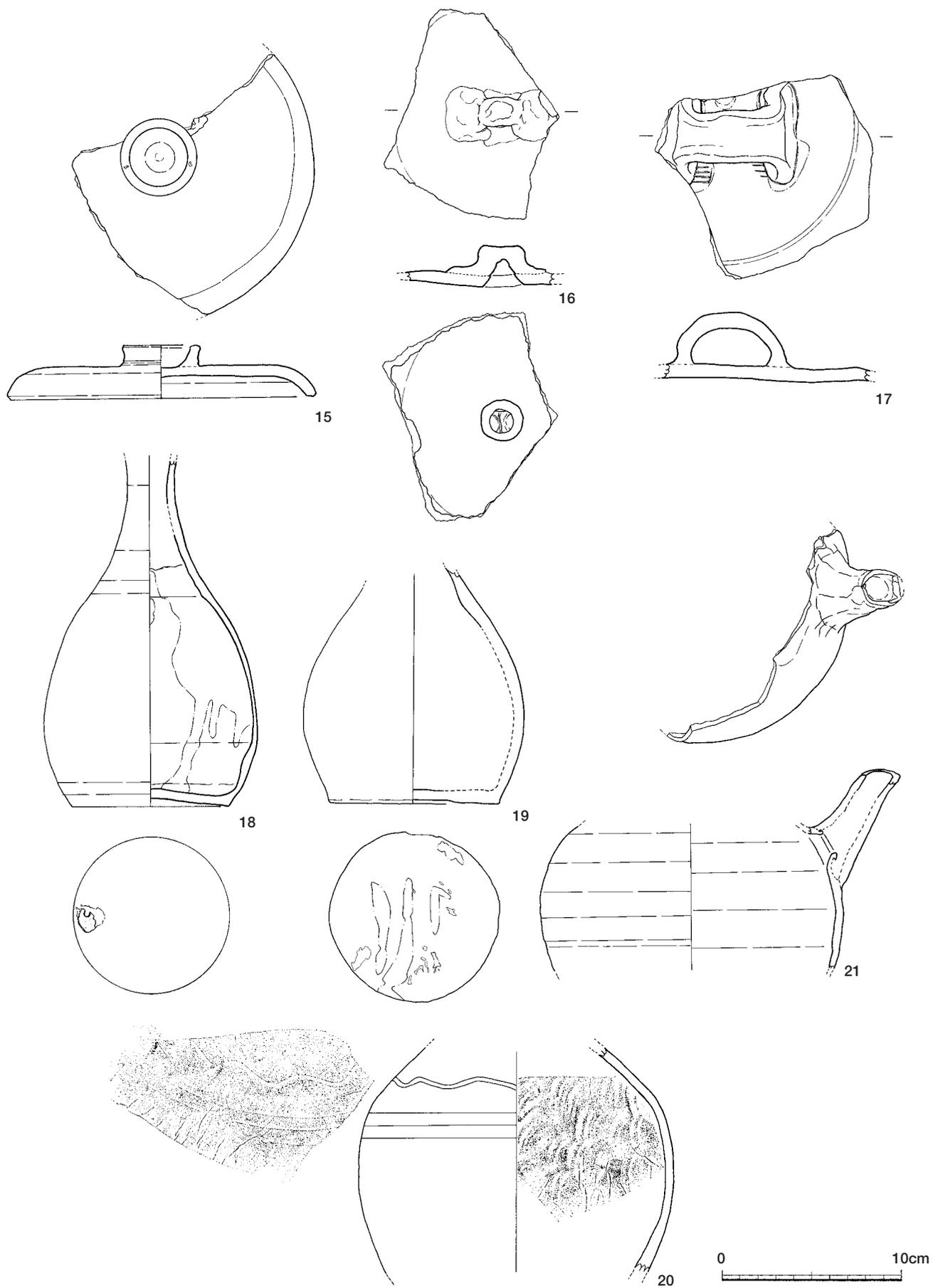
15～17は蓋である。15・16は上面に灰釉がかかり、17は上面に鉄釉がかかる。また16は、中央を穿孔し、その上につまみを付けている。

18～20は徳利である。18・19は頸部が長いタイプの資料と思われる、薄い灰釉がかかる。18は、外底面に1か所貝目が残る。20は胴部のみであるが、外面には波状文と3条の沈線が巡り、内面には同心円状のタタキ目が残る。

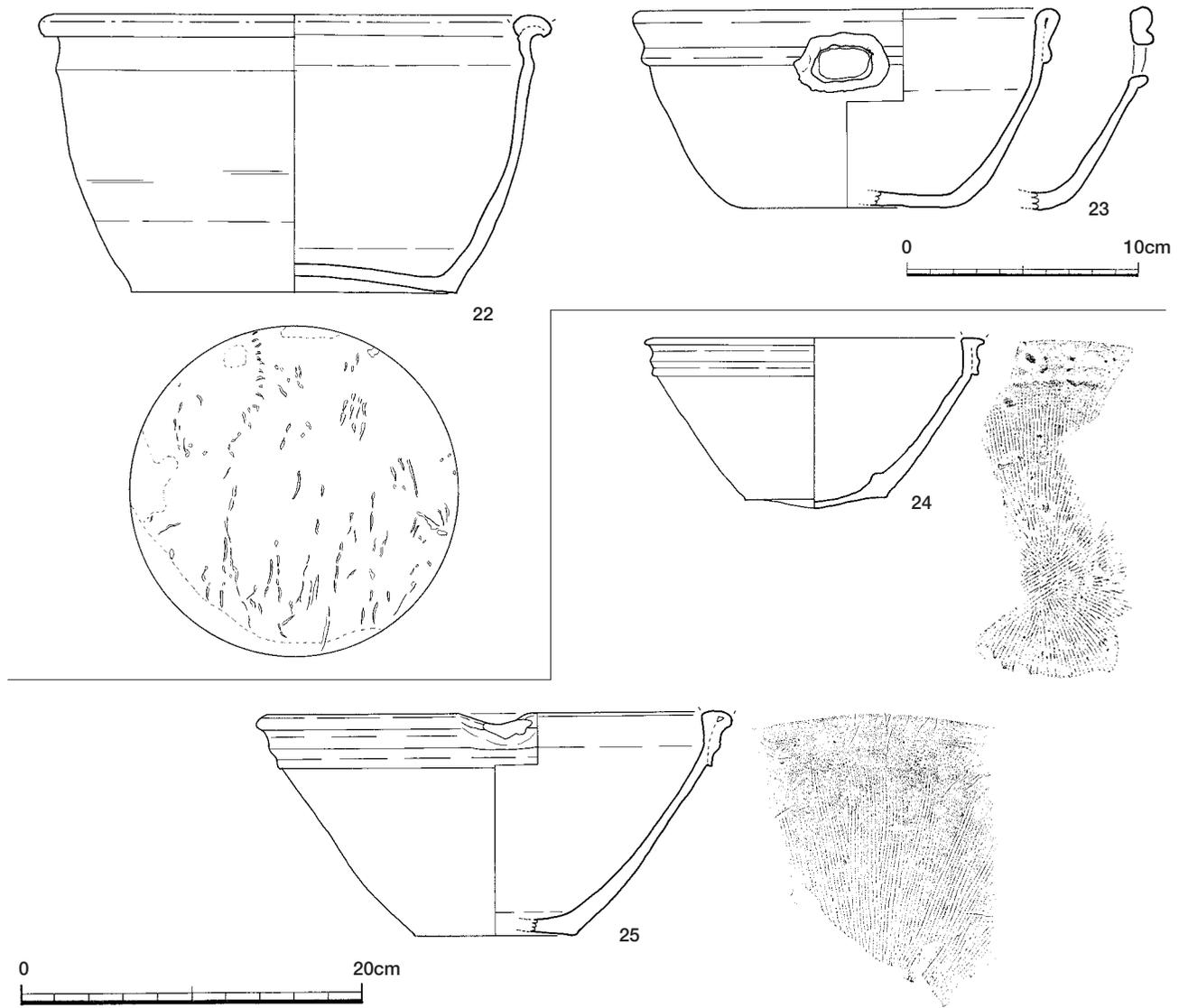
21は水注と思われる。胴部は球形を呈し、注口部は巻き口である。

第159表 第1地点表層 遺物観察表2

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
12	皿	第1地点3G表	12.7	6.2	4.3	灰白色	鉄釉 暗褐色	口唇部と高台脇から高台内部以外施釉	
13	皿	第1地点3G表	—	5.9	—	淡黄色	鉄釉? 緑褐色	残存部のほぼ全面施釉	
14	皿	第1地点3G表	—	7.8	—	灰白色	無釉	—	
15	蓋	第1地点3G表	17.2	—	2.9	にぶい赤褐色	灰釉 黒褐色	残存部の上面ほぼ全面に施釉	
16	蓋	第1地点表層	—	—	—	明赤褐色	灰釉 灰緑色	残存部の上面施釉	
17	蓋	第1地点3G表	—	—	3.7	灰褐色	鉄釉 緑黒色	残存部外面のみ施釉	
18	徳利	第1地点表層	—	8.6	—	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	外面と内面の一部施釉	外底面に貝目
19	徳利	第1地点3G表	—	9.5	—	暗灰黄色	灰釉 灰緑色	残存部ほぼ全面施釉	外底面に貝目 内面に同心円状タタキ目
20	徳利	第1地点表層	—	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 浅黄色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
21	水注	第1地点表層	—	—	—	褐灰色	灰釉 褐灰色	外面全面施釉	内面に同心円状タタキ目



第278図 第1地点表層出土遺物(4)蓋・德利・水注



第279図 第1地点表層出土遺物(5)片口・播鉢

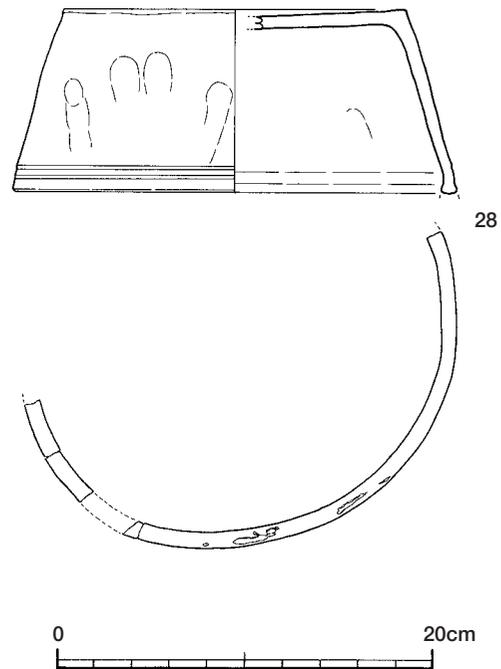
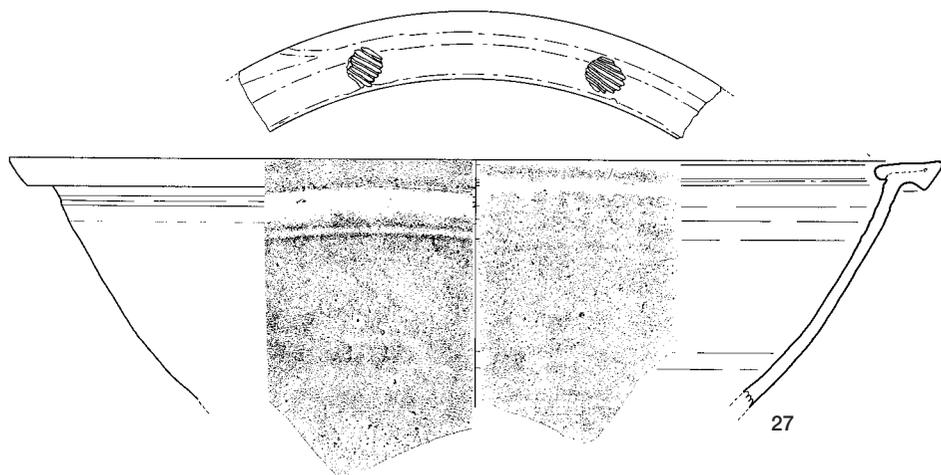
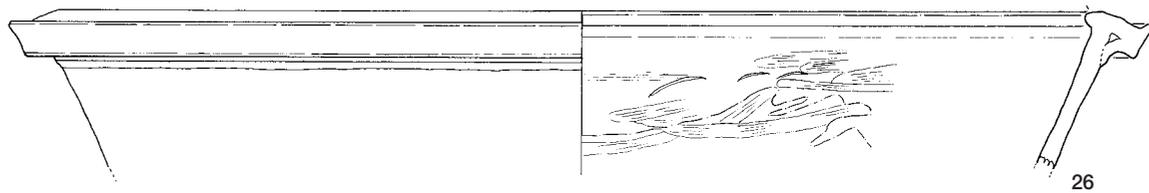
片口・播鉢 (第279図)

22・23は、片口である。22は、片口部が欠損しており、内外面とも横方向の調整が施される。23は、片口と分類したが、一般的な片口部がつくタイプとは異なり、口縁部下位に穴を開け、外面の穴の周囲をやや肥厚させるものである。釉は、全面無釉である。

24・25は播鉢である。口縁部は外側に折り返して肥厚させ、2条の突帯をつくる。口唇部はやや平坦で広くつくる。播り目は細くシャープで密に入り、口縁の上部にやや余白を残す。24は、内面に横方向の調整を施した後、播り目を入れている。

第160表 第1地点表層 遺物観察表3

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
22	鉢?	第1地点表層	22.4	14.2	12.0	灰褐色	灰釉 黒緑色	口唇部以外全面施釉	
23	片口	第1地点表層	18.0	9.0	8.6	橙色	無釉	—	
24	播鉢	第1地点3G表	20.0	8.6	10.0	灰黄褐色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に目跡
25	播鉢	第1地点3G表	27.8	9.4	13.0	灰色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	口唇部に目跡



鉢・蓋 (第280図)

26・27は、口径が40cm以上と大形の資料で、胴部の傾きや深さが甕ほど深くならないことから鉢として分類したが、大形の蓋の可能性も考えられる。

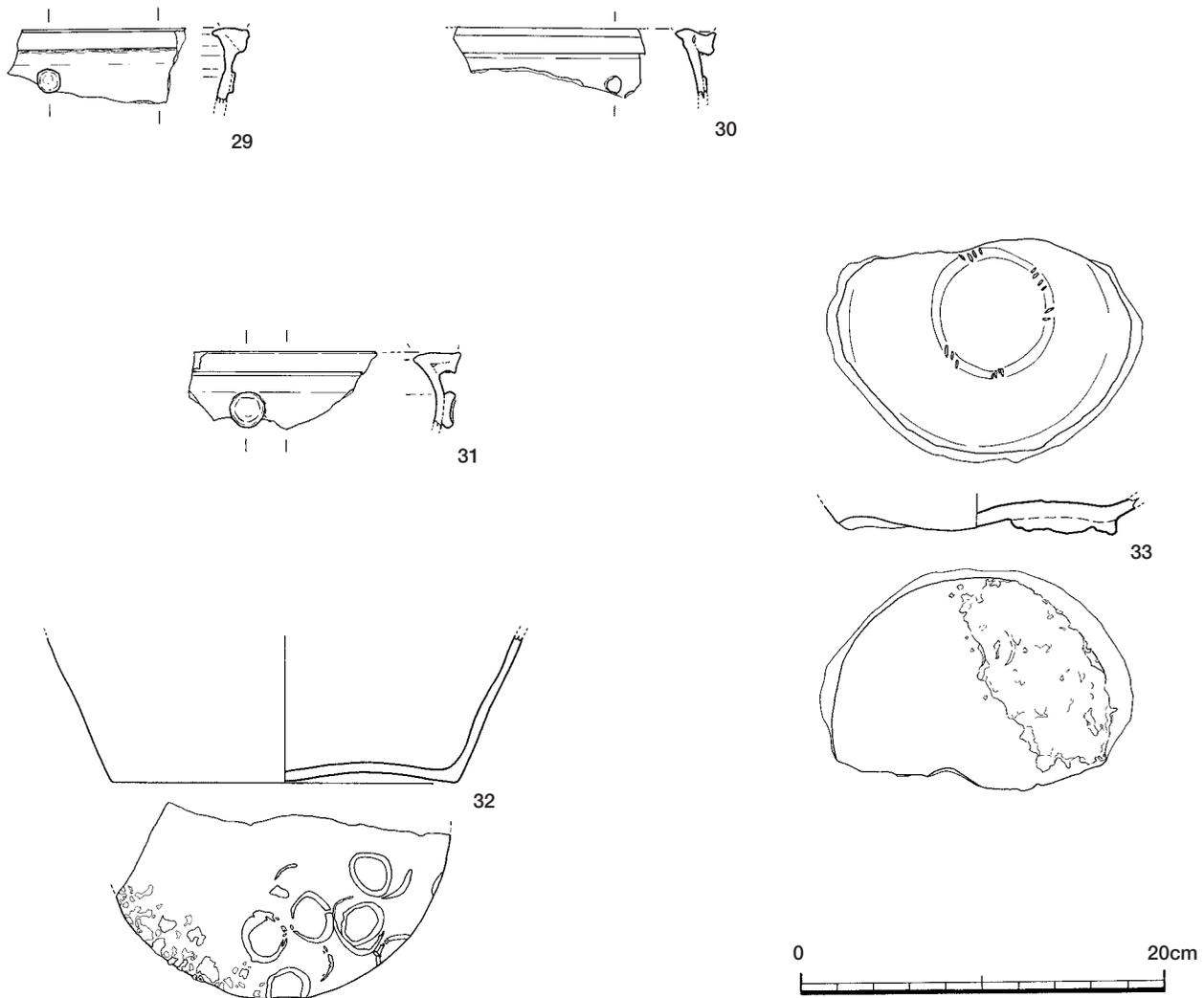
26は、内面にヘラ状工具による横方向の調整痕が残る。27は、口唇部に貝目があり、内外面はヘラ状工具による調整痕が施される資料である。口唇部を除き、黒色に発色した鉄釉がかかる。

28は、浅鉢型の形状を呈する蓋である。口縁部は、先端で折り返さず、口唇部は平坦につくられるタイプのものである。外面には施釉時の指跡が看取され、口縁部に2条の沈線が巡る。また、口唇部には貝目が残る。

第280図 第1地点表層出土遺物(6)鉢・蓋

第161表 第1地点表層 遺物観察表 4

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
26	鉢	第1地点3G表	60.8	—	—	灰褐色	鉄釉 褐色	内面のみ施釉	内面にたたき目とハケ目
27	鉢	第1地点3G表	49.2	—	—	褐灰色 白い砂粒入る	鉄釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
28	蓋	第1地点表層	23.4	上径18.1	9.6	褐色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第281図 第1地点表層出土遺物(7)甕・底部

甕・底部（第281図）

29～31は、甕の口縁部である。

3点とも、口縁部は外側に折り返して肥厚させ、口唇部を内側は高く、外側は溝縁状に仕上げるもので、貝目も看取される。外面口縁部下位には、金属器の金具の模倣と思われる円形の装飾が付けられている。全体で何個付けられるのかは不明である。

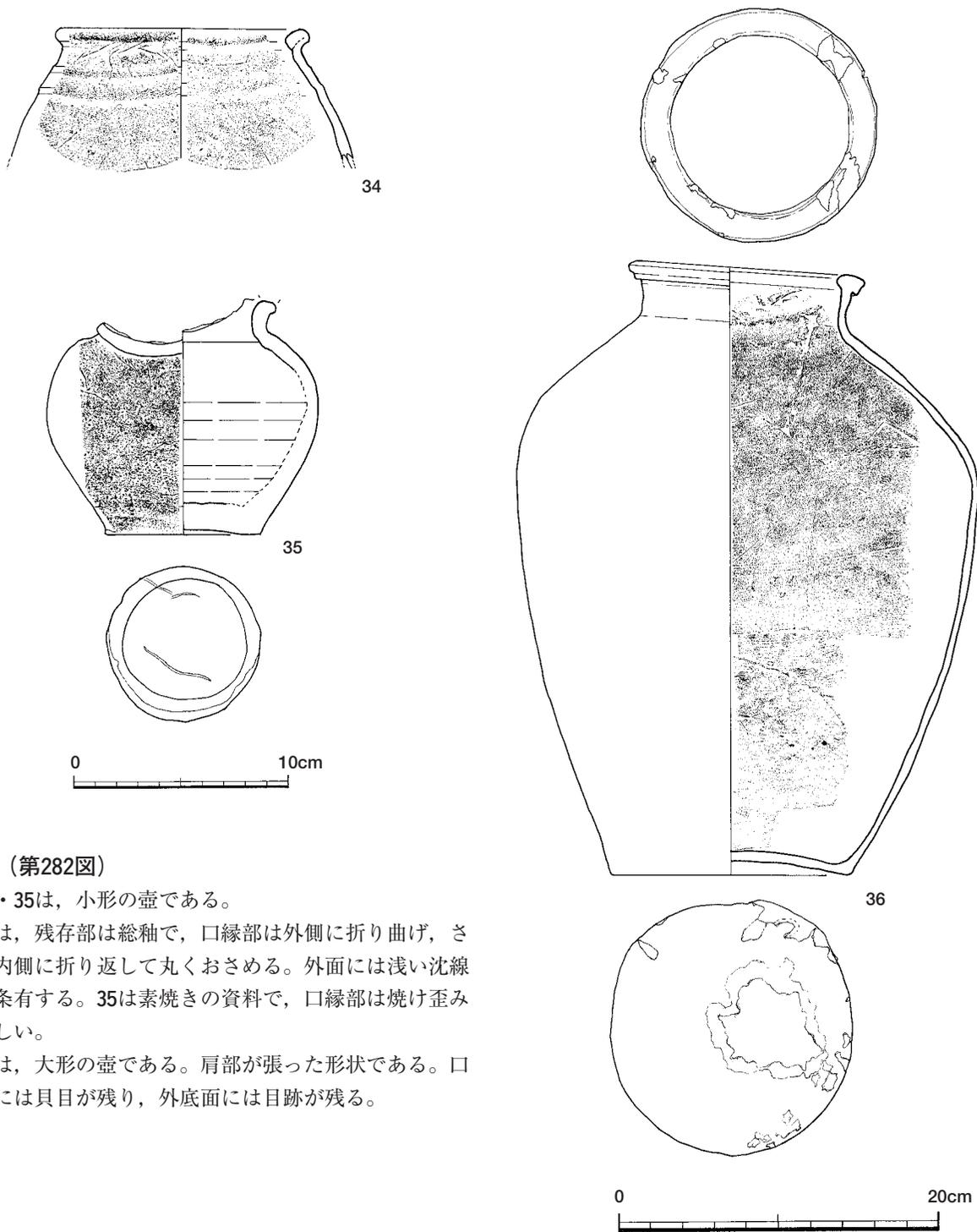
32・33は底部である。

32は、甕又は壺の底部と思われるもので、外底面に白色の砂粒が付着し、また、貝殻を1か所に集めて使用しており、数個の貝目が看取される。

33は、片口の底部の可能性が考えられる。内底面には、白色の高台痕が残り、外底面にハマが熔着する。

第162表 第1地点表層 遺物観察表 5

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
29	甕	第1地点3G表	40.0	—	—	赤灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口縁部に貝目
30	甕	第1地点3G表	39.6	—	—	灰褐色	灰釉 暗灰黄色	口唇部以外全面施釉	口縁部に貝目
31	甕	第1地点3G表	44.0	—	—	灰褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口縁部に貝目
32	底部	第1地点3G表	—	19.0	—	灰褐色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	外底面に貝目 内面に同心円状タタキ目
33	底部	第1地点3G表	—	—	—	褐灰	灰釉 黄褐色	残存部の外面のみ施釉	見込みに白色の目跡 外底面に粘土付着



壺 (第282図)

34・35は、小形の壺である。

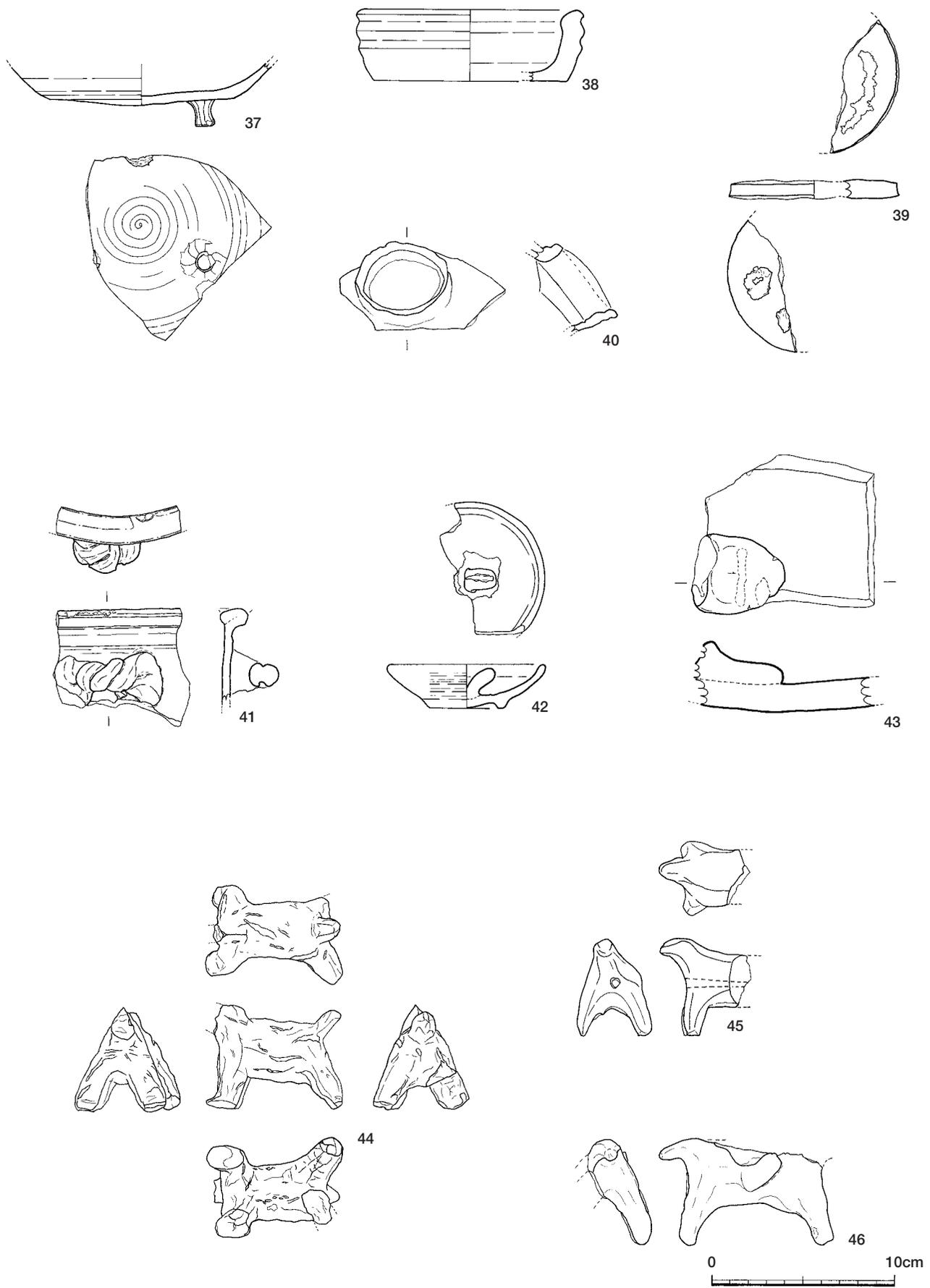
34は、残存部は総釉で、口縁部は外側に折り曲げ、さらに内側に折り返して丸くおさめる。外面には浅い沈線を2条有する。35は素焼きの資料で、口縁部は焼け歪みが激しい。

36は、大形の壺である。肩部が張った形状である。口唇部には貝目が残る、外底面には目跡が残る。

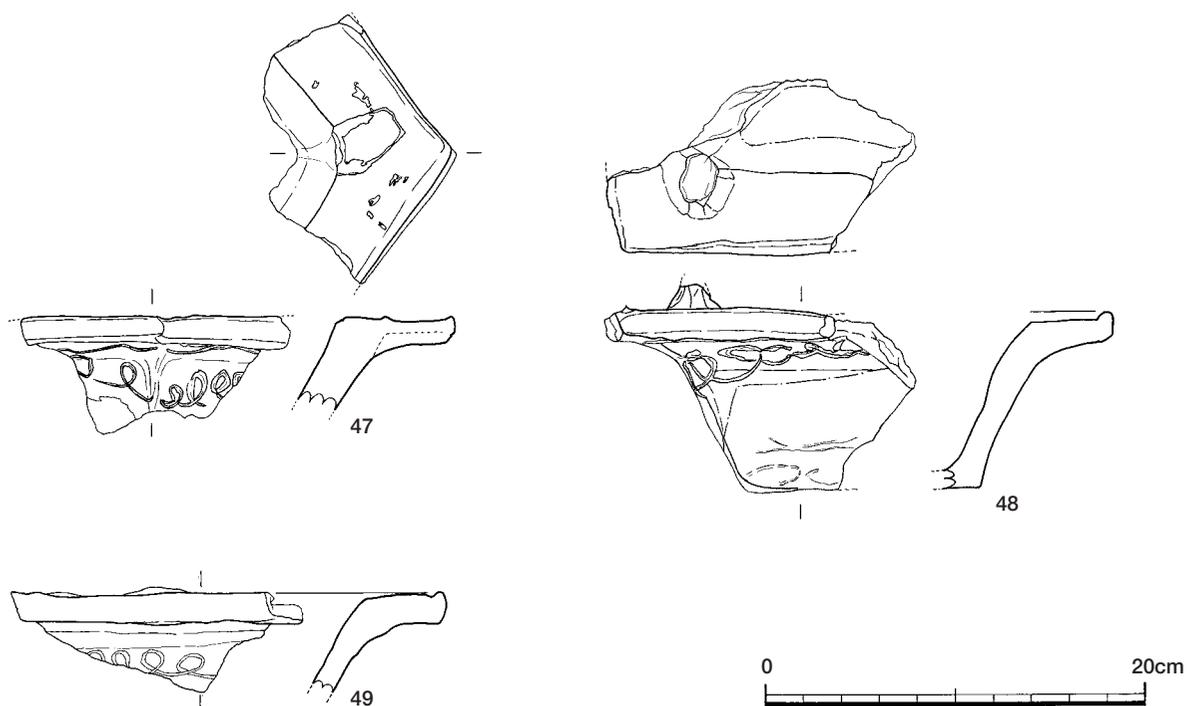
第282図 第1地点表層出土遺物(8)壺

第163表 第1地点表層 遺物観察表6

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
34	小壺	第1地点表層	11.8	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 にぶい黄色	残存部全面施釉	内面に同心円状のタタキ目
35	小壺	第1地点表層	—	7.2	9.0	暗灰黄色	無釉	—	口縁部・底部には重ね焼きの痕跡
36	壺	第1地点表層	14.8	15.0	37.8	暗赤褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	口唇部に貝目・外底部に目跡



第283図 第1地点表層出土遺物(9)その他



第284図 第1地点表層出土遺物(10)その他

その他 (第283・284図)

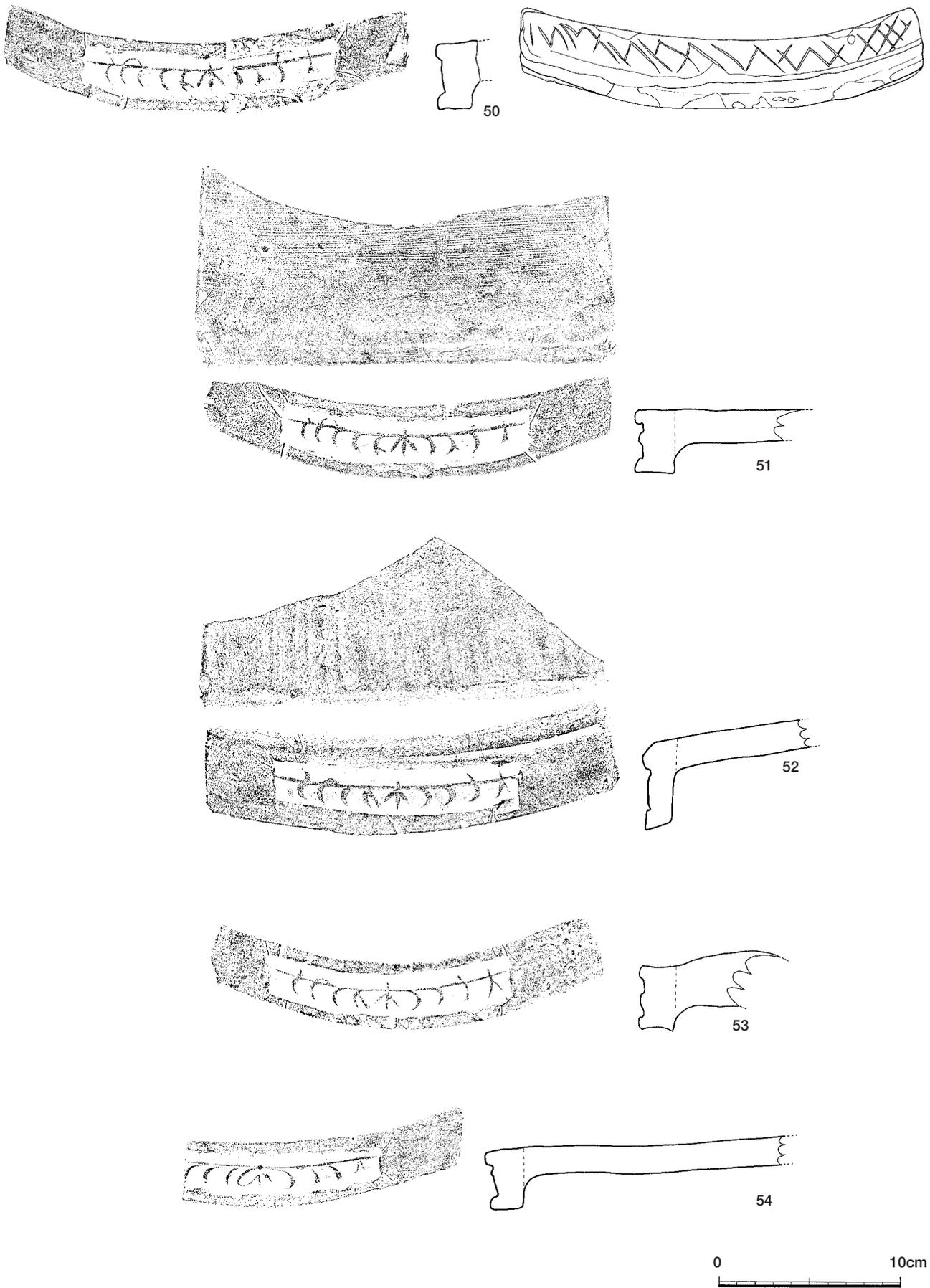
37は、外底面に3か所脚が付く形状のものである。用途等詳細は不明である。38は、素焼きで、用途不明の資料である。39は、上面に高台痕、下面に貝目が残るもので、窯道具の可能性も考えられる。40は、甕瓶の口縁部である。41は、甕もしくは鉢の口縁部と思われるが、ねじった把手が付けられる。42は、灯明皿である。灰色の緻密な胎土で焼き締まり、一見須恵器のように思われる資料である。同様の胎土で製作された製品が他にも数点

出土している。43は、瓦にスタンプ型のハマが熔着した資料である。スタンプ型のハマの使用例を示す貴重な資料である。44~46は、動物型土製品である。44は、前足が特徴的である。45は、臀部に穿孔が施される。雌を表現したものと思われる。

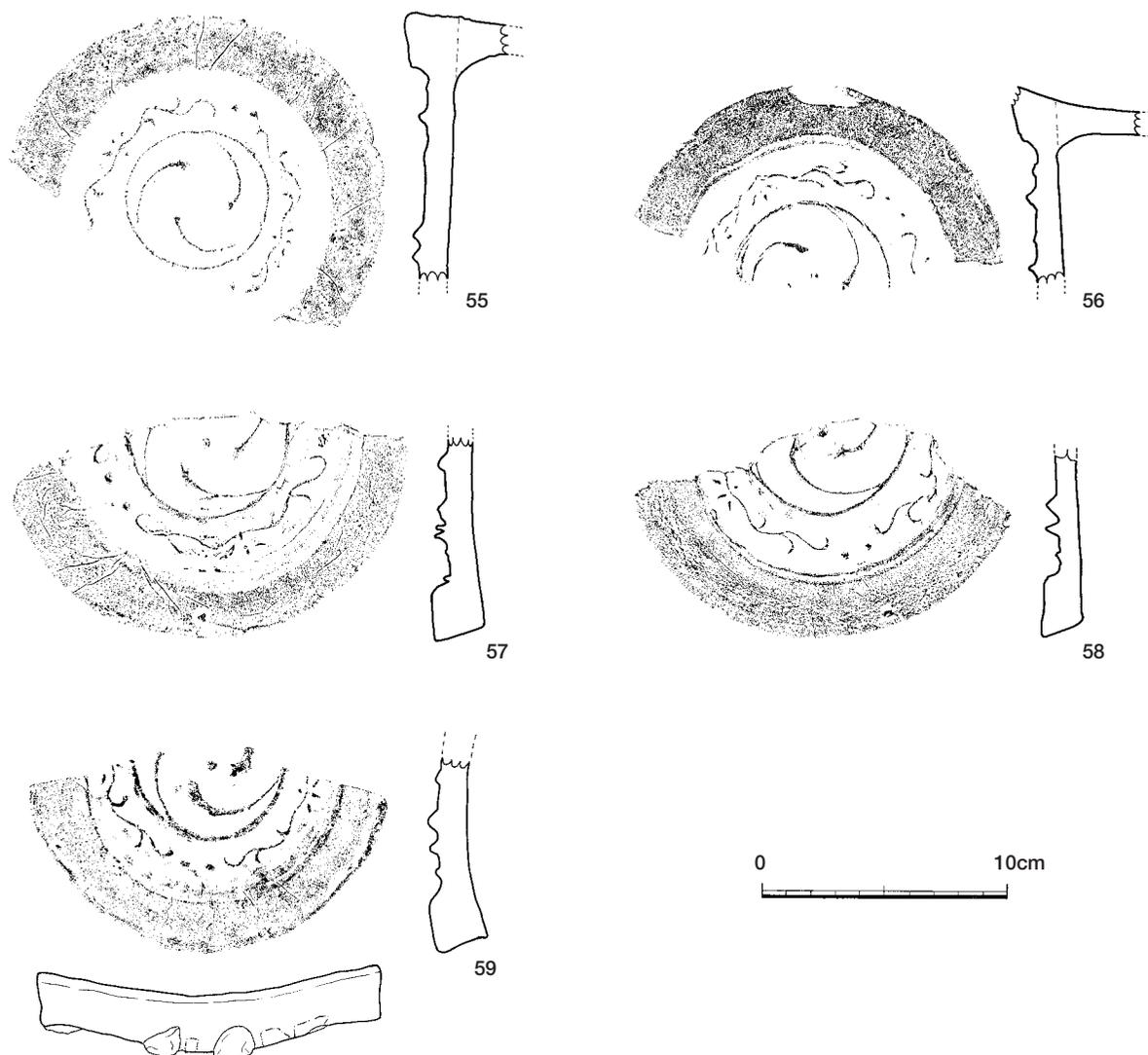
47~49は同一個体と思われる資料である。全体的な器形・器種は不明であるが、角の口唇部からは上方に向けて把手のようなものがのびるものと思われる。外面にはらせん状の沈線で文様が描かれる。

第164表 第1地点表層 遺物観察表7

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
37	不明	第1地点3C表	—	10.1	—	にぶい橙色	無釉	—	
38	不明	第1地点6B表	11.6	10.5	—	浅黄色	無釉	—	
39	不明	第1地点表層 トレンチ	—	—	—	灰色	無釉	—	上下面目跡
40	甕瓶	第1地点表層	—	—	—	にぶい黄色	灰釉 緑黒色	一部釉なし	内面に同心円状タタキ目
41	鉢	第1地点表層 テストトレンチ	—	—	—	明赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
42	灯明皿	第1地点1E表	8.4	4.0	2.4	青灰色	無釉	—	
43	ハマ	第1地点3G表	—	—	—	灰色	無釉	—	瓦にスタンプ型のハマ熔着
44	動物型 土製品	第1地点表層	—	—	幅5.8	にぶい黄褐色	鉄釉 暗褐色	全面施釉	
45	動物型 土製品	第1地点表層	—	—	—	灰黄色	無釉	—	
46	動物型 土製品	第1地点3G表	—	—	—	暗赤褐色	灰釉 緑黄色	残存部全面施釉	
47	大型 製品	第1地点表層	—	—	—	灰白色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	
48	大型 製品	第1地点表層	—	—	—	灰白色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	
49	大型 製品	第1地点3G表	—	—	—	灰色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	



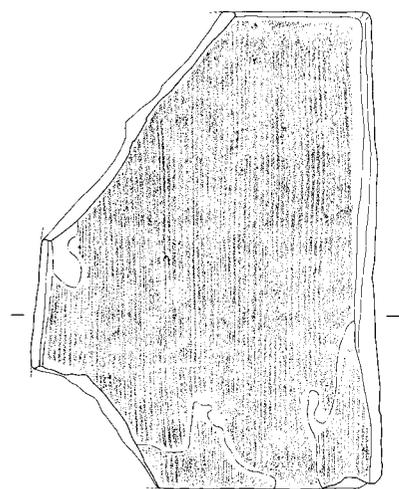
第285图 第1地点表层出土遺物(1)瓦



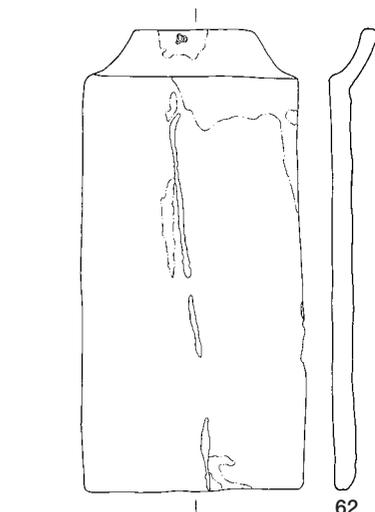
第286図 第1地点表層出土遺物(12)瓦

第165表 第1地点表層 遺物観察表 8

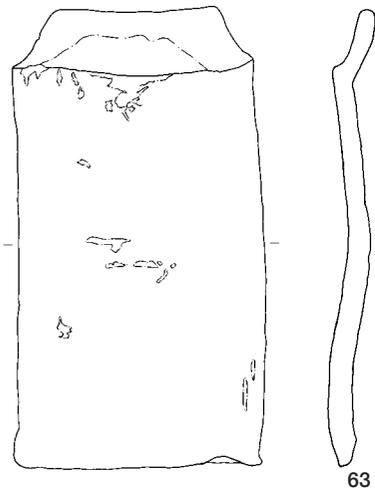
レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	瓦頭厚	頸厚				
50	軒平瓦	第1地点4 D表	—	3.5	1.9	明赤褐色	灰釉 灰白色	瓦頭部外面施釉	
51	軒平瓦	第1地点3 G表	—	3.4	2.1	橙色	灰釉 暗赤褐色	瓦頭部外面と上面に施釉	
52	軒平瓦	第1地点3 G表	—	4.8	1.5	青灰色	灰釉 灰褐色	瓦頭部外面と上面に施釉	
53	軒平瓦	第1地点表層 3 G	7.6	3.8	1.8	黄緑色	鉄釉 暗緑褐色	瓦頭部外面と上面に施釉	
54	軒平瓦	第1地点3 G表	—	3.1	1.8	明赤褐色	灰釉 暗褐色	瓦頭部外面と上面に施釉	
55	軒丸瓦	第1地点表層	—	—	2.3	黄褐色	鉄釉 暗褐色	残存部全面施釉	
56	軒丸瓦	第1地点表層	—	—	—	橙色	灰釉 浅黄色	瓦頭部外面上部に施釉	
57	軒丸瓦	第1地点3 E表	—	2.1	—	橙色	灰釉 緑黄色	瓦頭部外面施釉	
58	軒丸瓦	第1地点3 G表	—	—	—	橙色	灰釉 浅黄色	瓦頭部外面施釉	
59	軒丸瓦	第1地点3 E表	—	2.2	—	にぶい赤褐色	灰釉 緑褐色	瓦頭部外面施釉	瓦頭部分に指痕あり



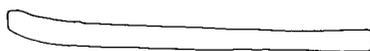
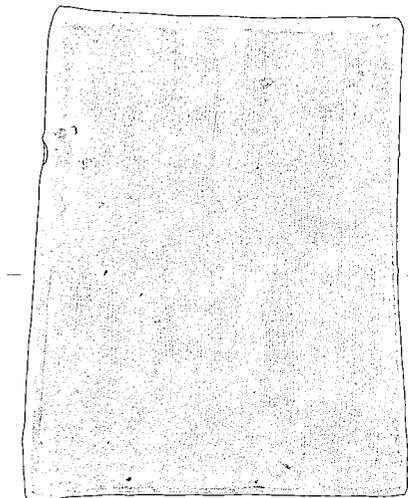
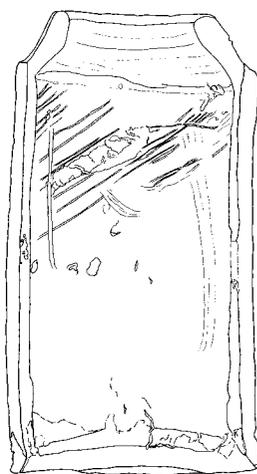
60



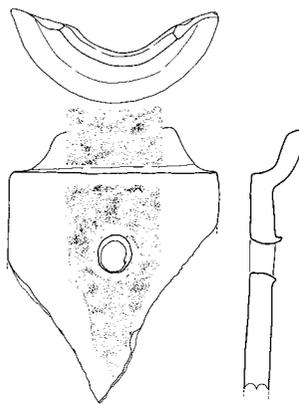
62



63



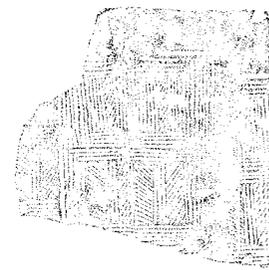
61



64



65



0 10cm

第287图 第1地点表层出土遺物(13)瓦

瓦（第285～287図）

50～54は軒平瓦である。50は、瓦頭部と平瓦部を接合した部分が観察でき、密着するように刻みを入れている様子が看取される。51・52は、瓦頭の型が違うものを使用しており、また上面の調整痕も、51は横方向、52は縦方向と向きが異なる。53・54は、同じ型を用いて瓦頭部の文様をつくっているが、圧力のかけ方の加減に、若干の差異が見られる。

55～59は軒丸瓦である。59は、瓦頭部の下側面に目跡と思われる胎土目が熔着する。

60・61は、平瓦である。60の下面には、ヘラ状工具による横方向の調整痕が残るが、上面には縦方向の調整痕が残る。61は、上面にのみ縦方向の調整痕が残る。

62～64は、丸瓦である。62・63の外面には、他の製品が付着していたような痕跡が残り、内面にヘラ状工具による削りが見られる。64は、1か所穿孔が看取される資料である。65は、下面に格子の文様の残る朝鮮瓦に類似した資料である。桶巻きで製作されたものと思われ、内面には板の痕跡が残る。65と同様の瓦は他にも数点出土しており、化学分析によりこれらの瓦も堂平窯跡の製品であるという結果が出ている。

堂平窯製品以外（第288～291図）

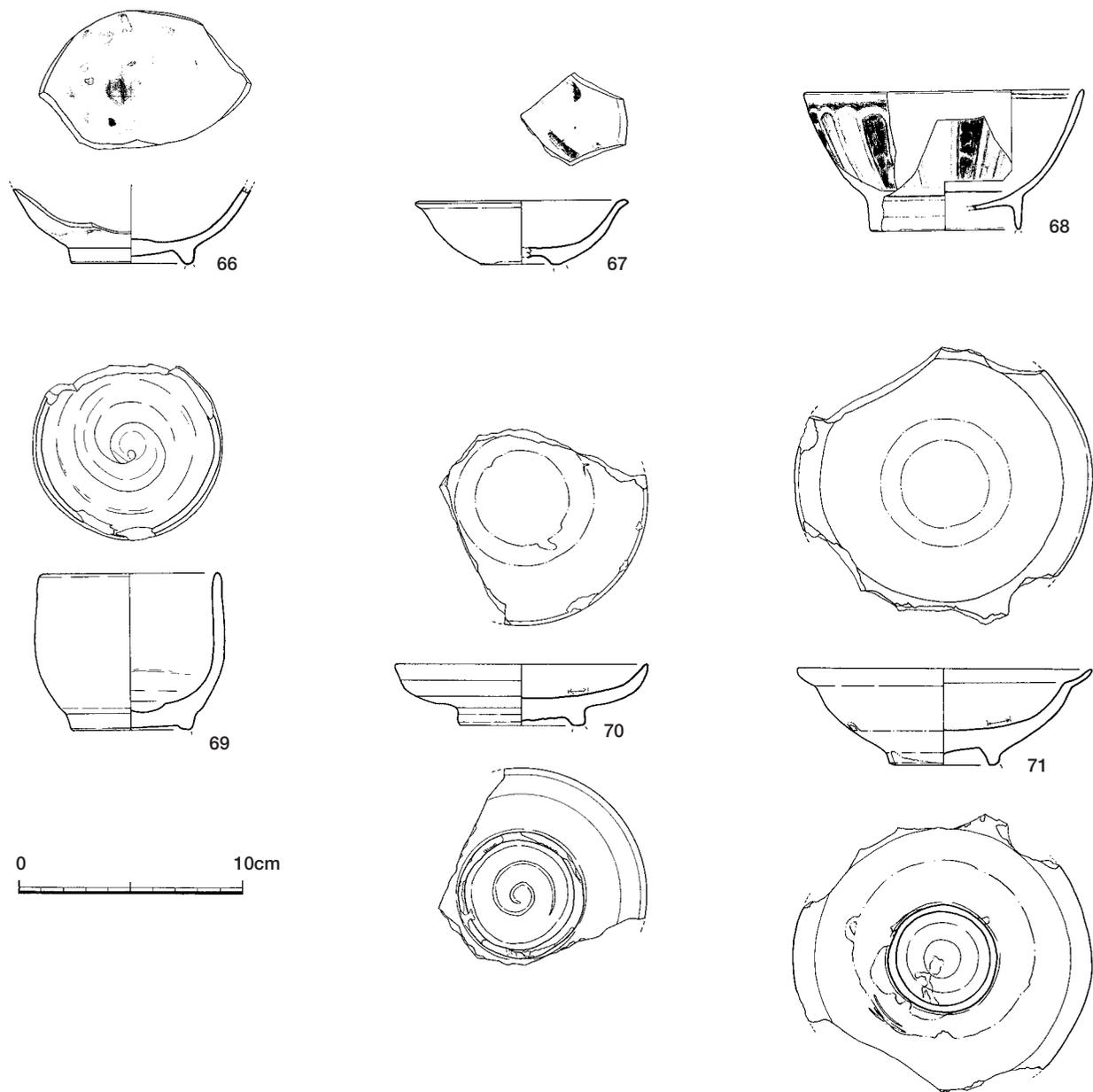
66～90は、堂平窯跡の製品ではないと思われる資料であるが、参考のため掲載しておいた。

66・67は、中国青花の碗である。68は、肥前系の染付碗である。69・70は、19世紀代と思われる苗代川焼である。70は、見込みが蛇ノ目釉剥ぎされる。71は、竜門司焼（始良郡加治木町）の皿である。釉は内面全体と外面中位まで白化粧土をかけた後、畳付と高台内面を除き透明釉をかける。また、見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。

72・73は、徳利の口縁部である。74は、砥石と思われる。75は苗代川焼で、浅鉢型の蓋である。口唇部の上面に貝目が残る。76は、土鍋と思われる。口縁部は蓋受け部を作り、胴部下位から底部にかけては露胎するものと思われる。77は、サヤ鉢である。残存部には穿孔が3か所看取されるが、実際の個数は不明である。78～81は寛永通寶である。

第166表 第1地点表層 遺物観察表9

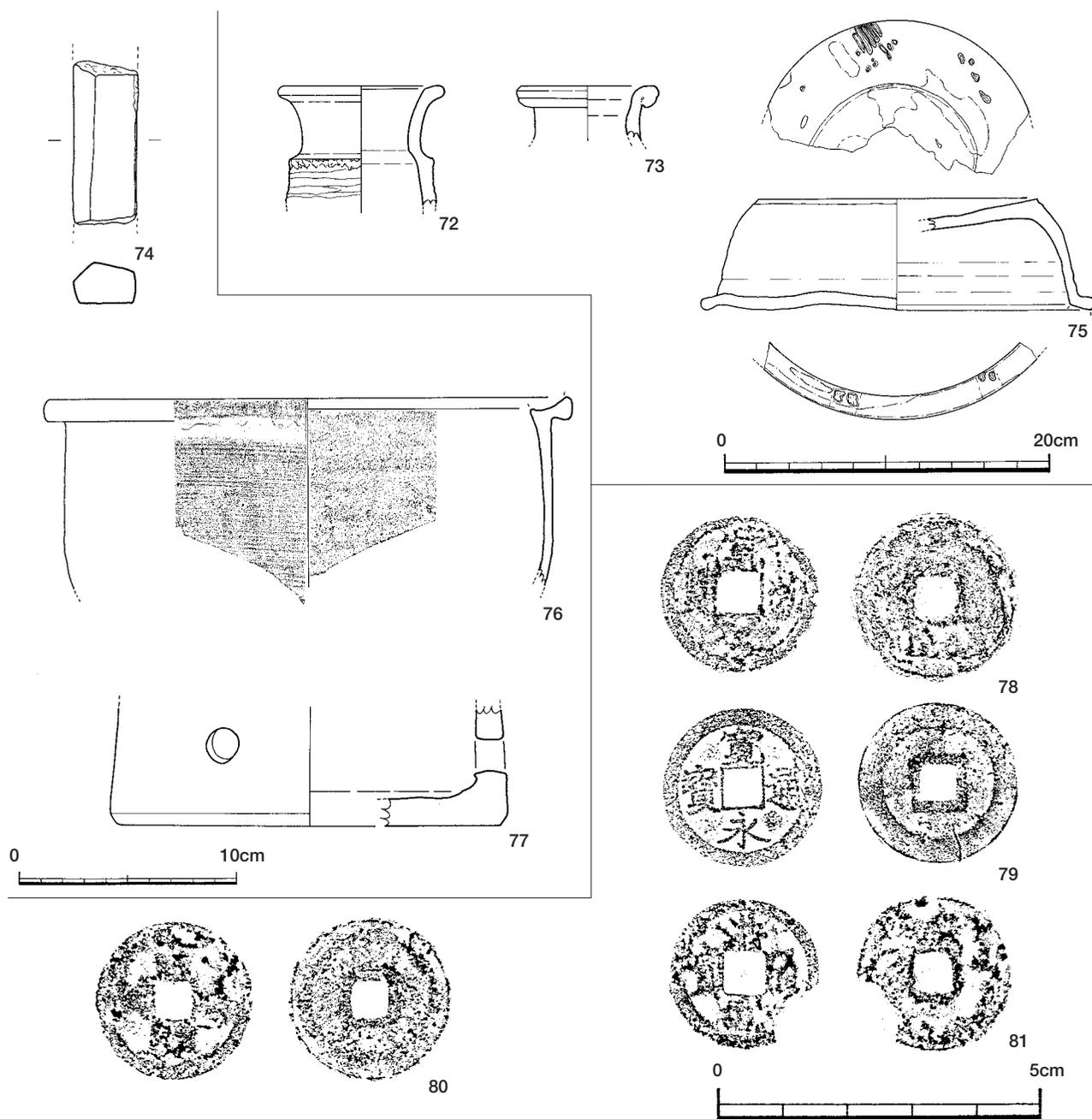
レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法量 (cm)			胎土	釉薬		施釉	備考
			長さ	瓦頭厚	頸厚					
60	平瓦	第1地点3 G表	29.5	—	幅19.8	灰色	灰釉	浅黄色	上面のみ施釉	
61	平瓦	第1地点表層	28.5	厚さ1.4	幅21.1	橙色	灰釉	浅黄色	上面のみ施釉	
62	丸瓦	第1地点表層	26.7	厚さ1.2	高さ4.2 幅12.8	暗赤褐色	灰釉	明黄褐色	下面と上面玉縁部 以外施釉	
63	丸瓦	第1地点表層	26.6	厚さ1.3	高さ4.5 幅14.2	橙色	灰釉	浅黄色	下面と上面玉縁部 以外施釉	
64	丸瓦	第1地点3 G表	—	—	—	橙色	灰釉	浅黄色	下面と上面玉縁部 以外施釉	
65	平瓦	第1地点表層	—	—	—	灰色	無釉	—	下面に格子目	



第288図 第1地点表層出土遺物(14)堂平窯製品以外

第167表 第1地点表層 遺物観察表10

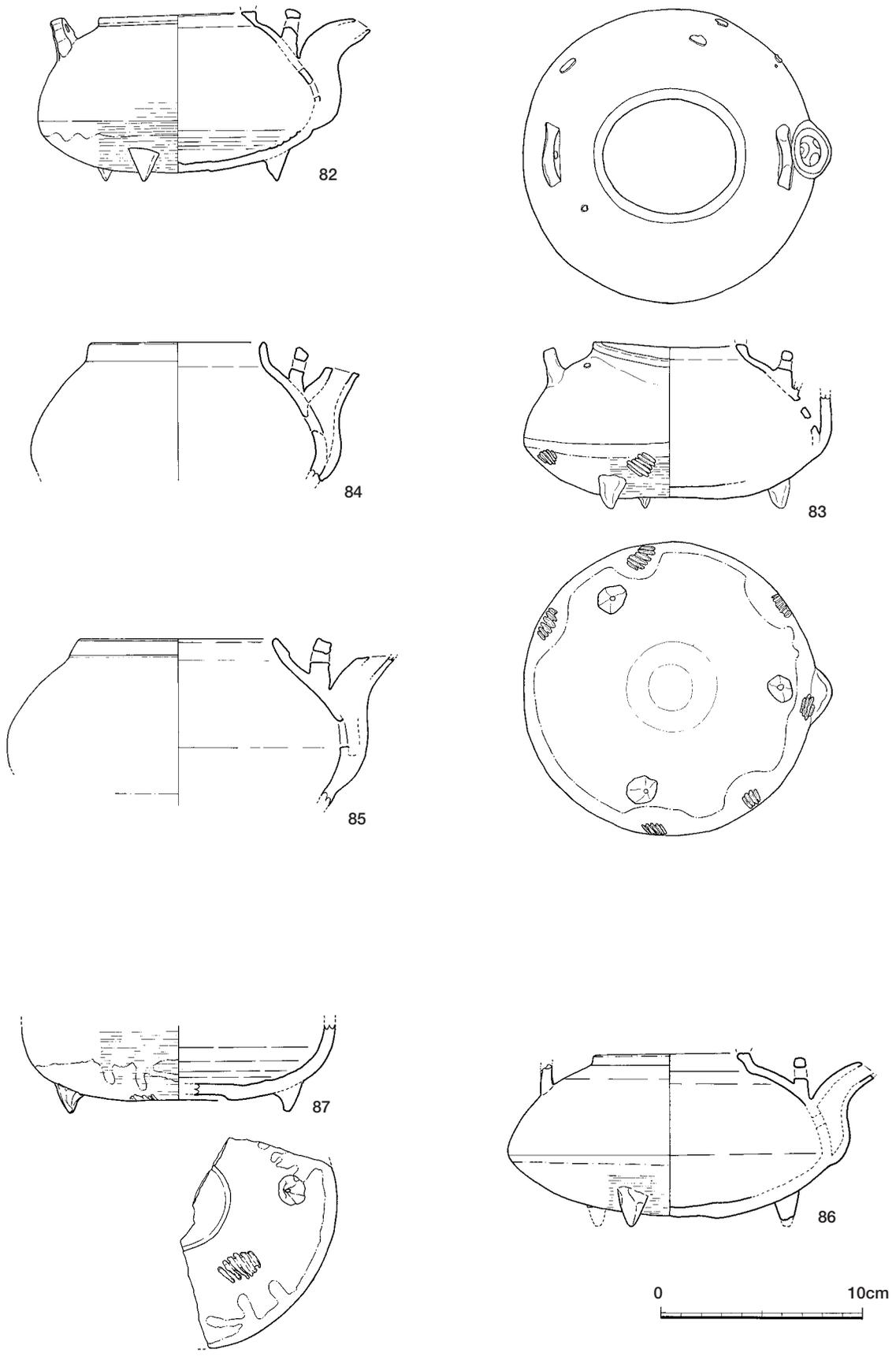
レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
66	碗	第1地点3G表	—	5.4	—	灰白色	透明釉	残存部畳付以外全釉施釉	中国青花
67	皿	第1地点3G表	9.4	5.6	2.8	淡黄色	透明釉	残存部畳付以外全釉施釉	中国青花
68	碗	第1地点3G表	12.5	6.7	6.2	灰白色	透明釉	残存部畳付以外全面施釉	肥前系染め付け
69	碗	第1地点3G表	8.0	5.4	7.0	にぶい橙色	灰釉 緑黒色	底部以外全面施釉	
70	皿	第1地点3G表	11.4	5.6	2.7	灰赤色	灰釉 緑黒色	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	
71	皿	第1地点3G表	13.1	4.5	4.2	灰褐色	透明釉	高台脇から高台内面無釉 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	白化粧土に透明釉をかける 竜門司焼



第289図 第1地点表層出土遺物(15)堂平窯製品以外

第168表 第1地点表層 遺物観察表11

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
72	德利	第1地点3G表	9.6	—	—	にぶい橙色	無釉	—	
73	德利	第1地点表層	8.8	—	—	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	
74	砥石	第1地点表層	—	幅2.9	高さ1.9	—	—	—	
75	蓋	第1地点3G表	24.2	—	6.8	にぶい褐色	鉄釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に目跡
76	土鍋	第1地点3G表	24.2	—	—	明赤褐色	灰釉 浅黄色	残在部口唇部以外全 面施釉	
77	サヤ鉢	第1地点3G表	—	17.6	—	浅黄色	無釉	—	
78	古銭	第1地点6C表	幅2.4	—	厚み1.5	—	—	—	
79	古銭	第1地点4C表	幅2.4	—	厚み1.5	—	—	—	寛永通寶
80	古銭	第1地点2E表	幅2.4	—	厚み1.5	—	—	—	
81	古銭	第1地点7C表	—	—	—	—	—	—	



第290図 第1地点表層出土遺物(16)堂平窯製品以外

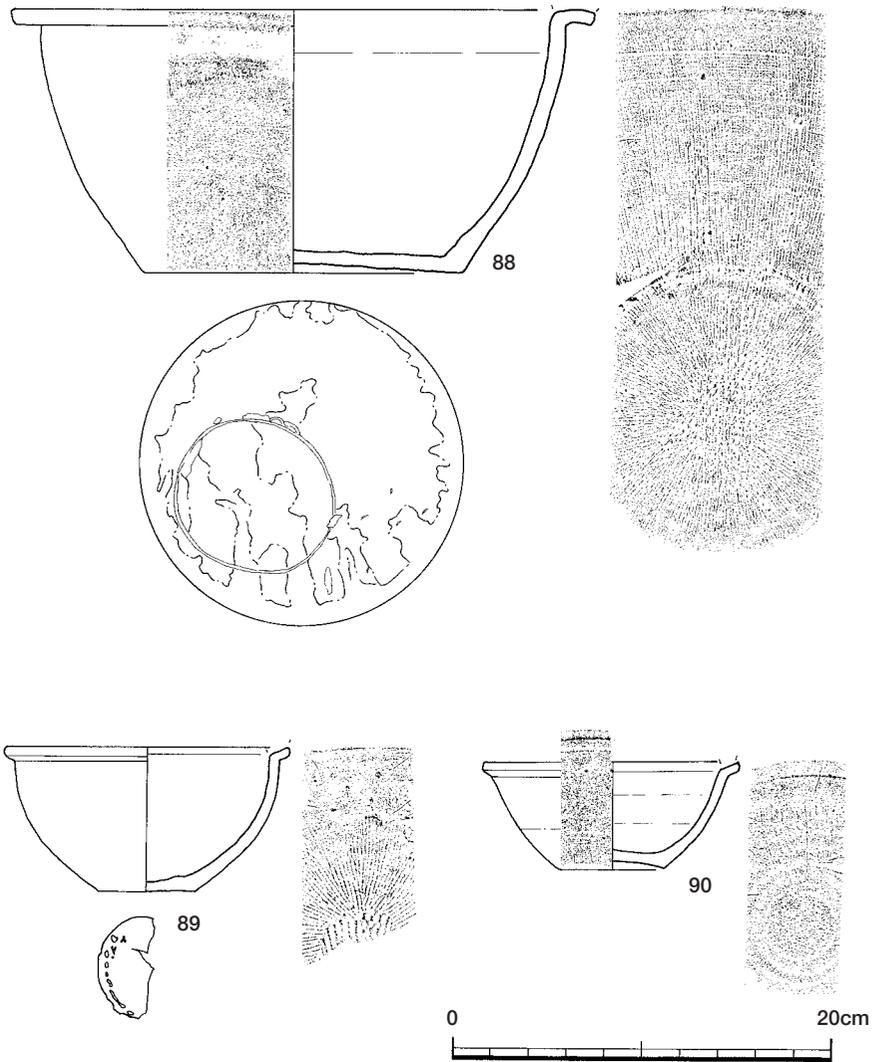
82~87は、土瓶である。

薩摩焼の中で、土瓶がいつ頃から生産されたのかははっきりしていないが、出土遺物の状況から見て、堂平窯では土瓶は生産されていないものと考えられる。したがって。これらの資料は、後世の苗代川焼の製品が混入したものと思われるが、掲載しておきたい。

器形は、86を除き胴部中位より稍下に最大径を有する下垂した平型を呈するもので、胴部の屈曲もそれほど強くはない。86は、ソロバン玉状を呈する平型で、胴部の屈曲も比較的強いものである。注口部が欠損しているものもあるが、注口は巻口ではなく、形状はS字状の溜め口を呈する。釉は、口唇部は剥ぎ取られ、外底面も露胎する。口唇部は、蓋受け部をつくらず、82・83・86は平坦に、84・85は、丸くつくられる。外底面は削り出しでつくられ、ヘラ状工具による筋状の痕跡が残り、中心部には円形の凹みがつくられる。また、円錐状の脚が3か所に設けられ、そのうちの1つは、注口の下位に付けられる。

82は、外面上位の灰被りが激しいものである。茶止め穴は、三角形状に3か所設けられる。83は、外底面に貝目が残る。外面胴部には、他製品の一部分が熔着するものである。茶止め穴は、三角形状に3か所設けられる。口縁部に歪みが見られる。84・85は、茶止め穴が1つのみの資料である。86は、外底面に煤が付着しており、使用されていたものである。87は、内外面共にヘラ状工具による調整痕が明瞭に看取されるもので、外底面には貝目が残る。

88~90は、播鉢である。堂平窯製品の播鉢は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、外面口縁部下位に2~4



第291図 第1地点表層出土遺物(17)堂平窯製品以外

条の突帯を巡らせるものがほとんどで、88~90のようにL字状の口縁を呈するタイプのものは見られない。

88は、播り目が密に内面上位まで入り、その下に横方向の調整痕も看取される。この播鉢は口縁部を下にして焼成されており、外底面には他の製品の底部の痕跡が残る。89・90は、小形のもので餌播鉢と思われる。89は、内底面と外底面に貝目が残るもので、釉は、口唇部を除き全面に掛けられる。90は、外面腰部以下露胎する。

第169表 第1地点表層 遺物観察表12

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
82	土瓶	物原V表層	7.8	—	高さ1.9	暗赤褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部釉剥ぎ・底面無釉	
83	土瓶	第1地点表層	7.6	—	8.3	赤褐色	鉄釉 褐色	口唇部釉剥ぎ・底面無釉	外底面に貝目
84	土瓶	第1地点表層	8.8	—	—	赤褐色	灰釉 暗赤褐色	残存部外面のみ施釉	
85	土瓶	物原III表層	10.0	—	—	明赤褐色	灰釉 黄灰色	残存部全面施釉	
86	土瓶	第1地点表層	7.7	—	8.6	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部釉剥ぎ・底面無釉	外底面にすず付着
87	土瓶	第1地点表層	—	—	—	褐灰色	鉄釉 黒色	残存部底部のみ釉なし	外底面に貝目
88	播鉢	第1地点表層	31.0	17.0	14.9	灰褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	外底面に他製品の付着痕
89	播鉢	第1地点3G表	15.2	5.2	7.6	褐灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	内外底面に貝目
90	播鉢	第1地点表層	13.6	5.4	5.6	にぶい橙色	鉄釉 暗赤褐色	外面体部中位まで施釉	

第2 地点表層出土遺物(第292~297図)

第2 地点からの出土遺物で、表層として取り上げた遺物のうち、特徴的なものについて掲載しておく。

91~114は堂平窯跡の製品と思われる資料である。

91・92は白色陶胎の碗である。91は高台内面に削り出しの巴文が看取される。92は外面に鉄釉による景色が描かれる。また、見込みには胎土目が見え、畳付には白色砂粒が付着している。93・94は蓋である。93は小さい穿孔がつまみの周囲にあけられており、この穿孔は下面まで貫通している。94はつまみのないタイプのもので、上面に貝目が残る。

95は片口である。内面はタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残り、外面はヘラ状工具による調整痕が残る。

96は、片口もしくは鉢と思われる資料である。外底面には貝目が看取される。

97は徳利と思われるが、壺の可能性も考えられる資料である。一般的な形状と違い頸部が短く、器壁もやや厚めである。

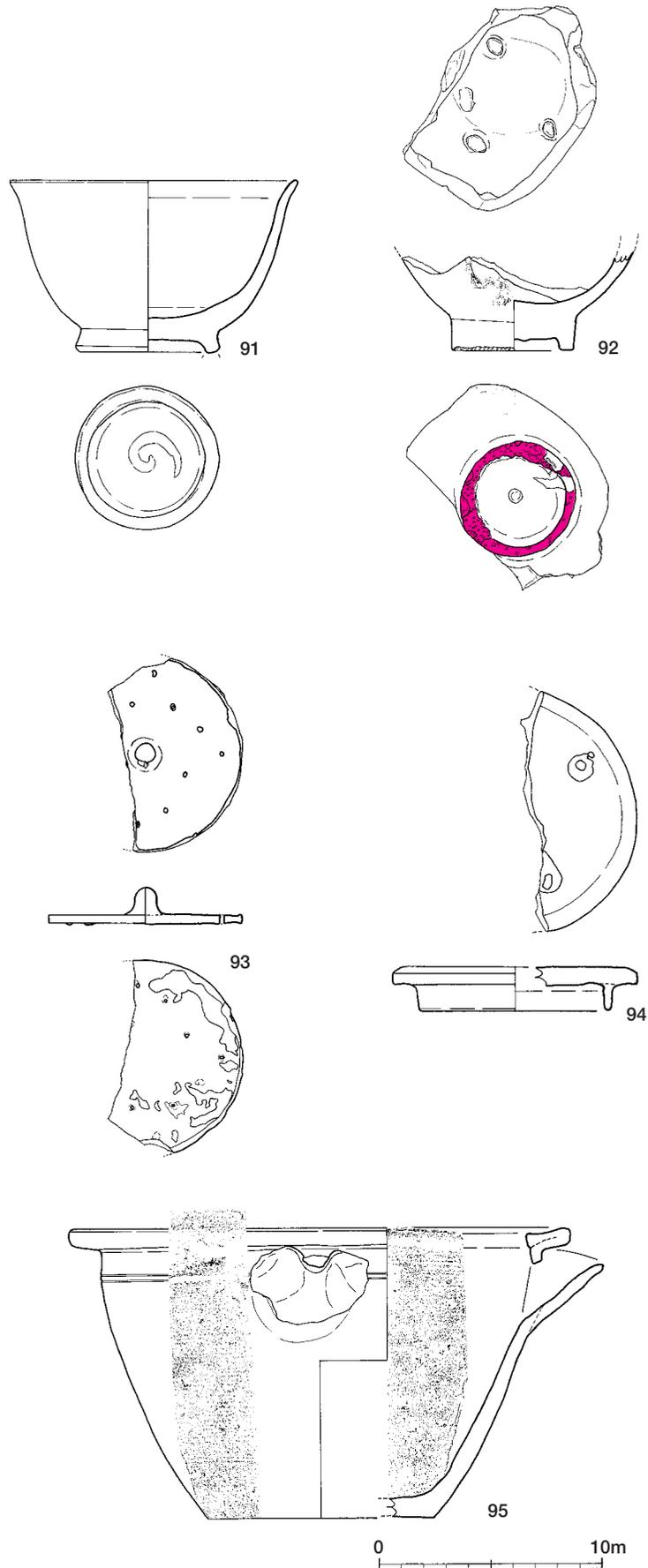
98・99は小形の壺である。どちらも蓋受けを有するため、蓋が被るものと思われる。

98は、外面にはヘラ状工具による調整痕が残り、内面同心円状のタタキ目が残る。

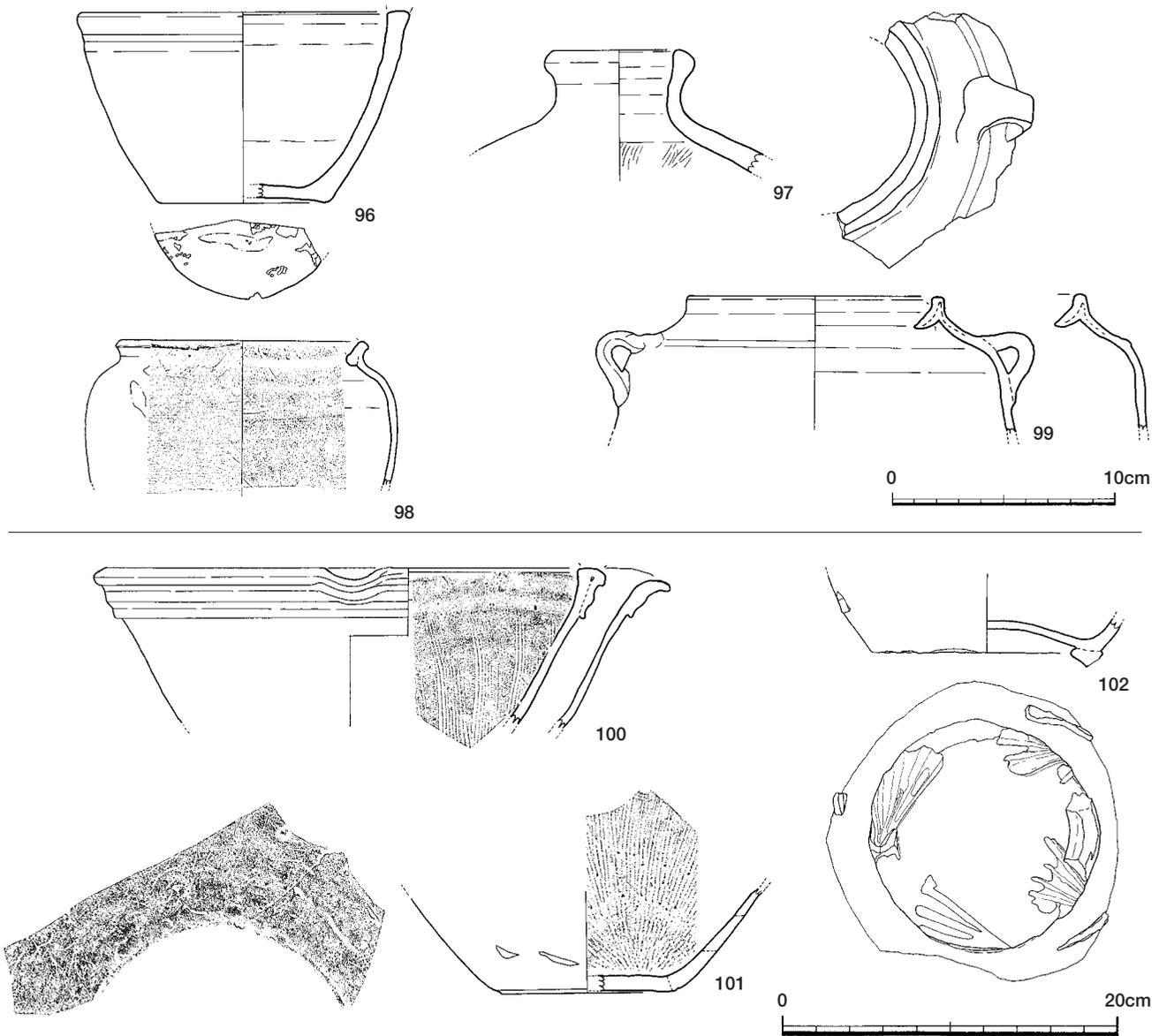
99は、肩部に縦耳がつくが、個数は不明である。

100・101は播鉢である。100は口縁部を外側に折り返して肥厚させ、2条の突帯をつくる。口唇部はやや平坦に中広くつくる。101は、外面胴部に文字が刻まれた資料である。欠損している部分が多いため、内容の詳細は不明であるが、「二十五石」、「八百」といった数量が一部読み取れる。

102は底部である。外底面にはイタヤガイを使用した貝目が看取される。



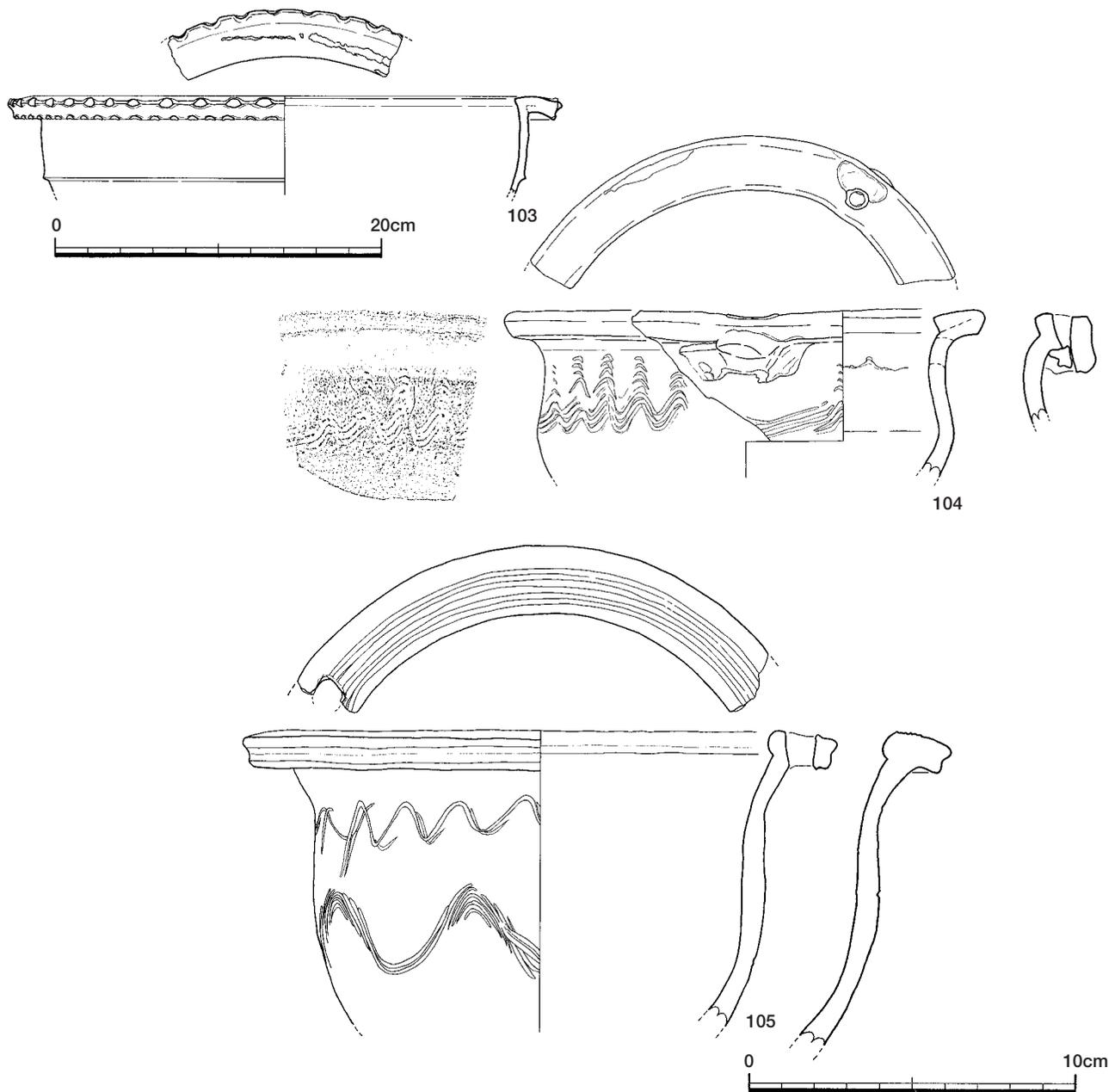
第292図 第2 地点表層出土遺物(1)碗・蓋・片口



第293図 第2地点表層出土遺物(2)片口・德利・壺・搦鉢

第170表 第2地点表層 遺物観察表1

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
91	碗	第2地点表層	12.4	6.5	7.6	にぶい橙色	不明	高台以外全面施釉	
92	碗	第2地点表層	—	6.0	—	浅黄橙色	透明釉 鉄釉	残存部全面施釉	見込みに目跡 畳付に白い砂粒付着
93	蓋	第2地点表層	8.7	—	1.7	にぶい赤褐色	灰釉 にぶい赤褐色	残存部全面施釉	
94	蓋	第2地点表層	11.0	—	2.0	にぶい黄褐色	灰釉 にぶい黄褐色	残存部全面施釉	上面に貝目
95	片口	第2地点表層	22.4	10.2	12.9	灰黄褐色	鉄釉 暗緑灰色	口唇部以外全面施釉	
96	鉢	第2地点表層	14.9	8.0	8.3	にぶい黄色	灰釉 黄灰色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
97	德利?	第2地点表層	6.3	—	—	明赤褐色	灰釉 浅黄色	残存部全面施釉	口唇部に貝目らしきもの 内面にタタキ目
98	壺	第2地点表層	11.3	—	—	にぶい褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
99	壺	第2地点表層	11.6	—	—	褐灰色	灰釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	
100	搦鉢	第2地点表層	30.6	—	—	にぶい黄橙色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	
101	搦鉢	第2地点3・4 EF表	—	10.6	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	全面施釉	外面に文字 外面に貝目
102	底部	第2地点表層	—	13.8	—	黒褐色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	外底面に貝目 他製品の口唇部付着



第294図 第2地点表層出土遺物(3)植木鉢

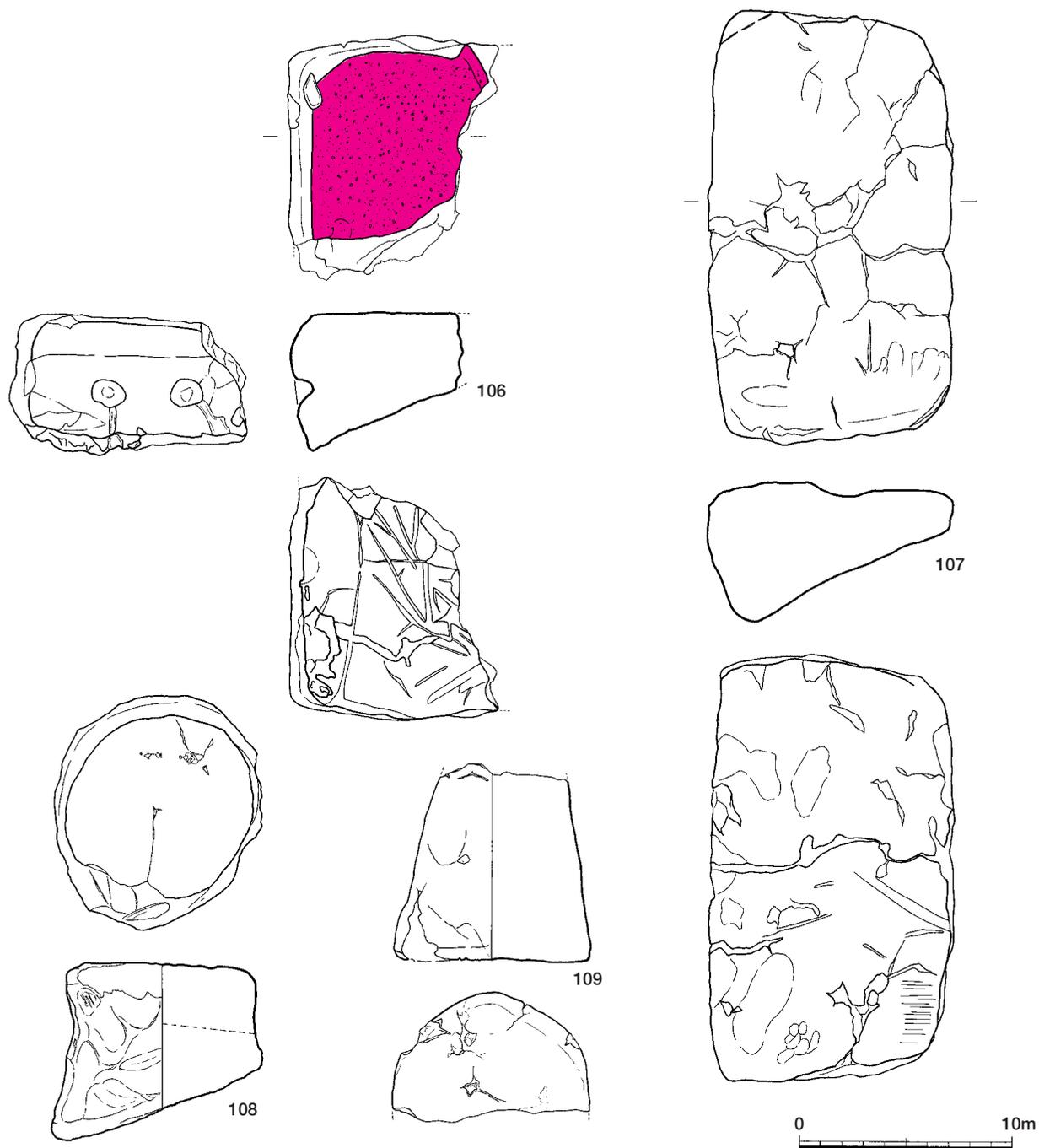
103~105は、素焼きの植木鉢である。

103は大形のもので、L字状の口縁部の先端に装飾を施している。また、外面胴部は、ヘラ状工具による横方向の調整が施され、その上に細い突帯が貼り付けられる。

104・105は、吊り下げ型の小形のものである。紐等を通す穴が、口唇部に対に2か所設けられる。また、内外面とも、ヘラ状工具による横方向の調整が施され、外面胴部には、櫛状工具で波状文が描かれる。105は、口唇部にも櫛目が施されている。

第171表 第2地点表層 遺物観察表2

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
103	植木鉢	第2地点3E表	34.0	—	—	にぶい橙色	無釉	—	口唇部に目跡
104	植木鉢	第2地点表層	15.0	—	—	褐灰色	無釉	—	口唇部に貝目
105	植木鉢	第2地点表層	17.6	—	—	赤灰色	無釉	—	



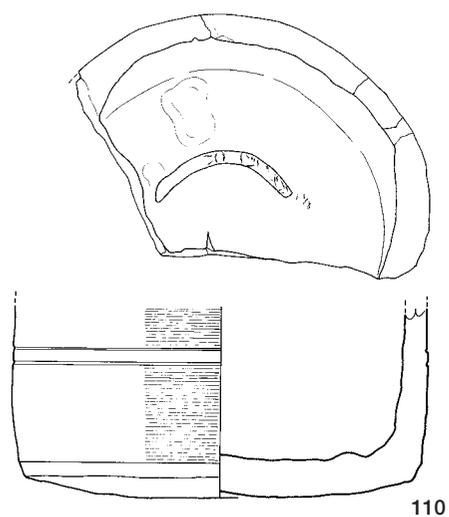
第295図 第2地点表層出土遺物(4)窯道具

106~110は窯道具である。106・107は断面が馬蹄形で、平面が長方形の形状を呈するハマである。106の側面には穿孔が看取され、上面には白色砂粒が一面に付着する。

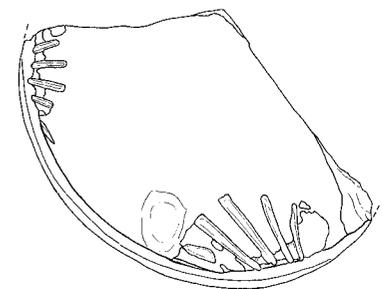
108・109は、トチンと思われる資料で、108の底面は窯床の傾斜に合わせて斜めにつくられる。

第172表 第2地点表層 遺物観察表3

レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	幅	高さ				
106	窯道具	第2地点3・4 E F表	—	—	5.9	赤灰色	無釉	—	上面に白い砂粒付着 側面に穿孔
197	窯道具	第2地点3 E表	19.7	11.3	6.2	灰褐色	無釉	—	下面に指痕
108	窯道具	第2地点表層	10.5	8.8	6.7	にぶい褐色	無釉	—	
109	窯道具	第2地点表層	—	9.1		暗灰黄色	無釉	—	



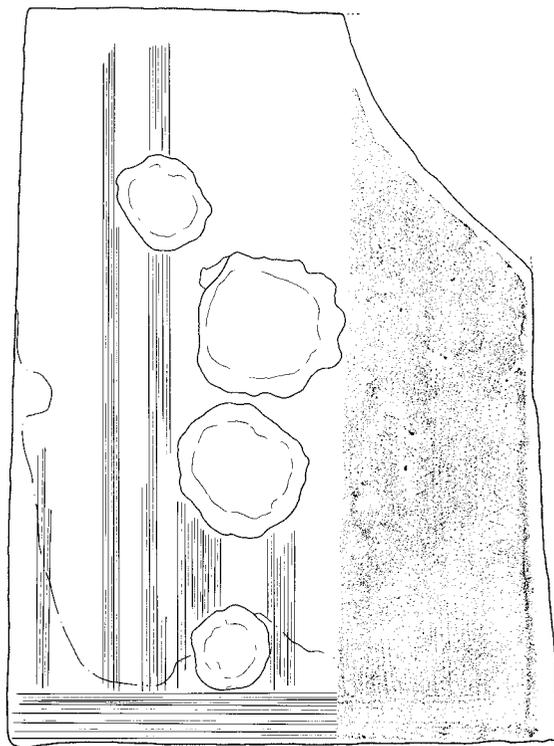
110



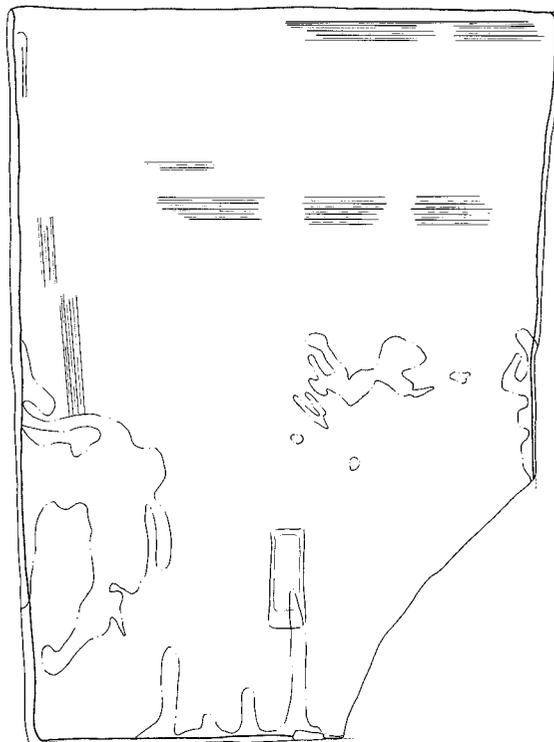
111



112

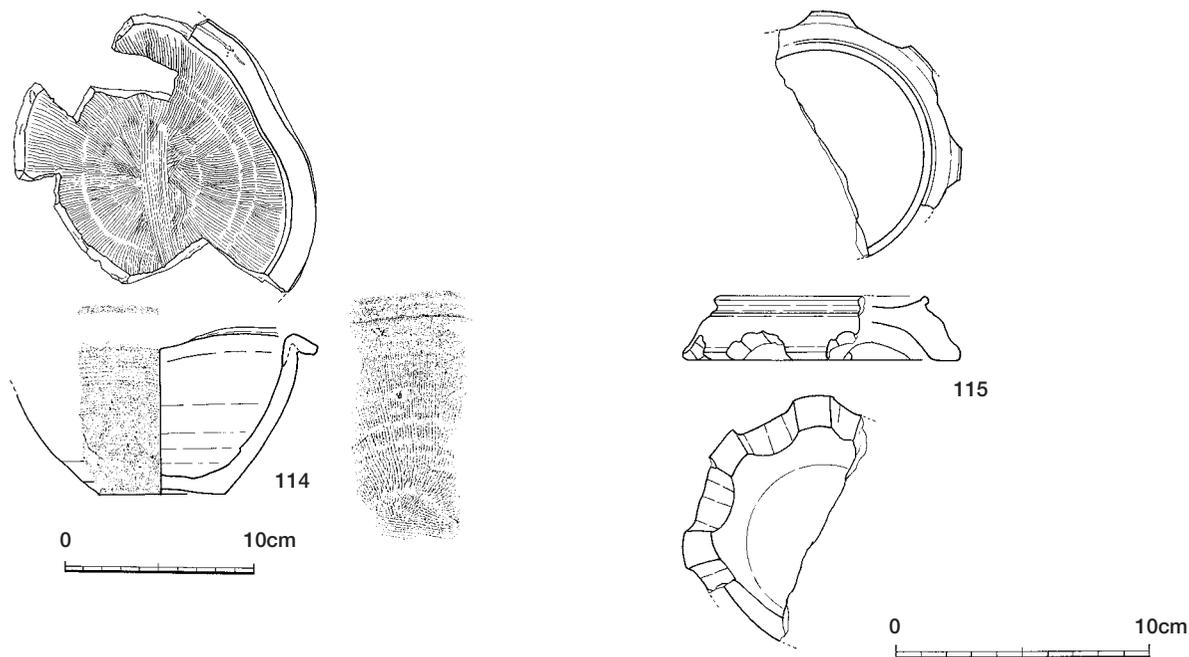


113



0 10cm

第296图 第2地点表层出土遺物(5)窯道具・瓦



第297図 第2地点表層出土遺物(6)堂平窯製品以外

110は、サヤ鉢である。外面にはヘラ状工具による調整痕がみられる。内底面には白色の畳付の痕跡が残り、外底面にはイタヤガイの貝目が残る。

111は、サヤ鉢の蓋と思われる資料である。下面にイタヤガイの貝目が看取される。

112は用途不明の資料である。施釉されておらず、口唇部には貝目が残る。

113は平瓦である。上面にはヘラ状工具による調整痕が看取される。

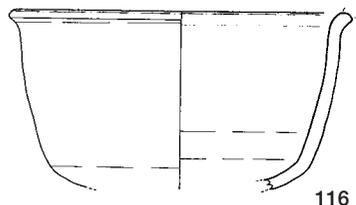
114・115は、堂平窯の製品ではないと思われる資料である。

114は小形播鉢で、餌播鉢と思われる。口縁部はL字状に外反し、播り目は細かく密に入り、上位まで施される。

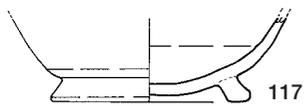
115は、白色陶胎の製品で、硯と思われる資料である。堂平窯の製品である白物と比較すると、胎土も緻密で、透明釉もなめらかで光沢があるため、後世に他窯でつくられた資料と思われる。

第173表 第2地点表層 遺物観察表4

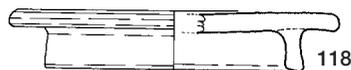
レイアウト 番号	器種	出土地点 層位	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	幅	高さ				
110	サヤ鉢	第2地点表層	—	底径15.3	—	にぶい黄橙色	無釉	—	外底面にイタヤガイの貝目 内底面に高台痕
111	サヤ蓋?	第2地点表層	—	直径17.2	—	灰赤色	無釉	—	下面に貝目
112	窯道具?	第2地点表層	口径12.6	底径6.0	器高2.9	灰赤色	—	—	口唇部貝目
113	平瓦	第2地点3F表層	29.0	21.2	1.7	にぶい黄橙色	灰釉 黄緑色	上面のみ施釉	高さ5.5cm
114	播鉢	第2地点表層	—	底径6.6	—	褐灰色	灰釉 浅黄色	全面施釉	
115	硯?	表層 5D	口径8.6	底径11.0	器高2.5	灰白色	透明釉	全面施釉	白色陶胎



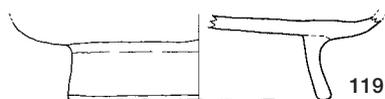
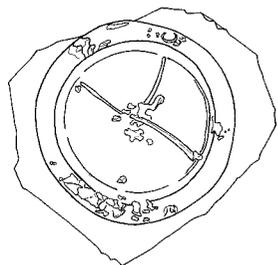
116



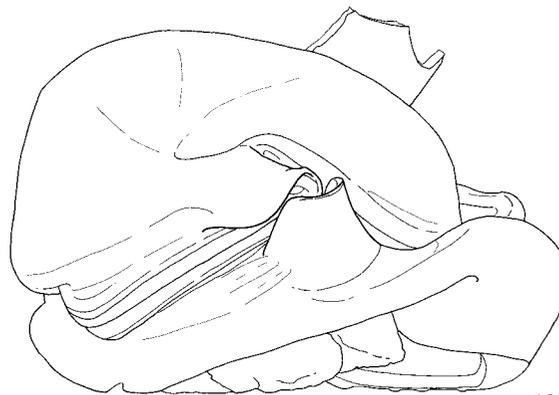
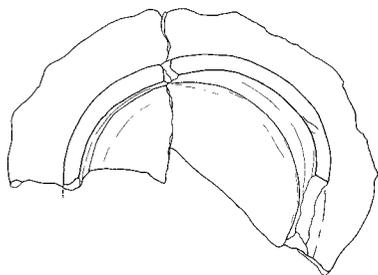
117



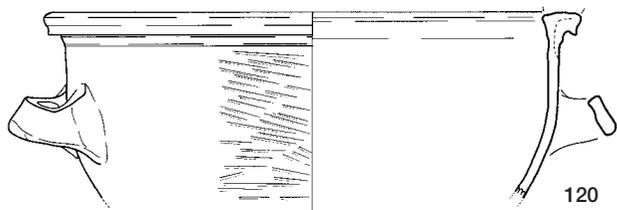
118



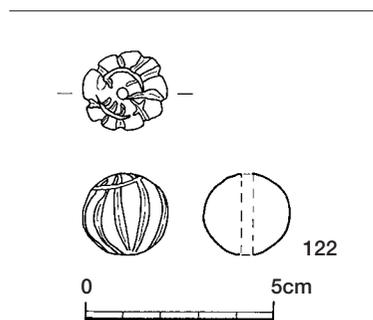
119



121



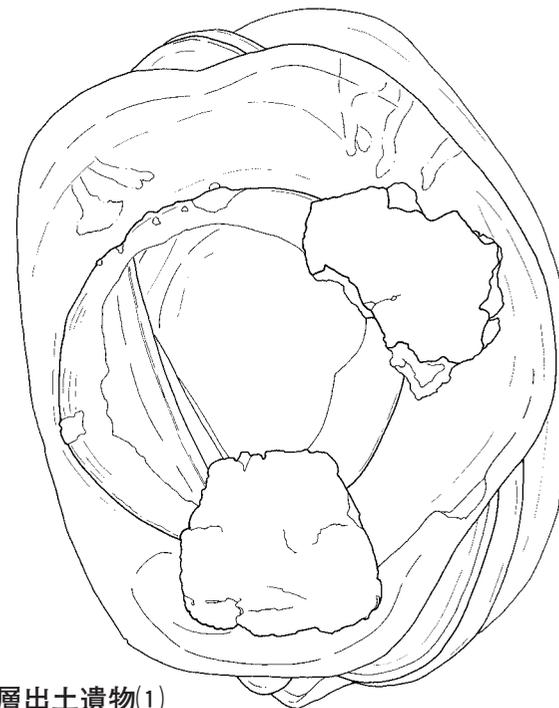
120



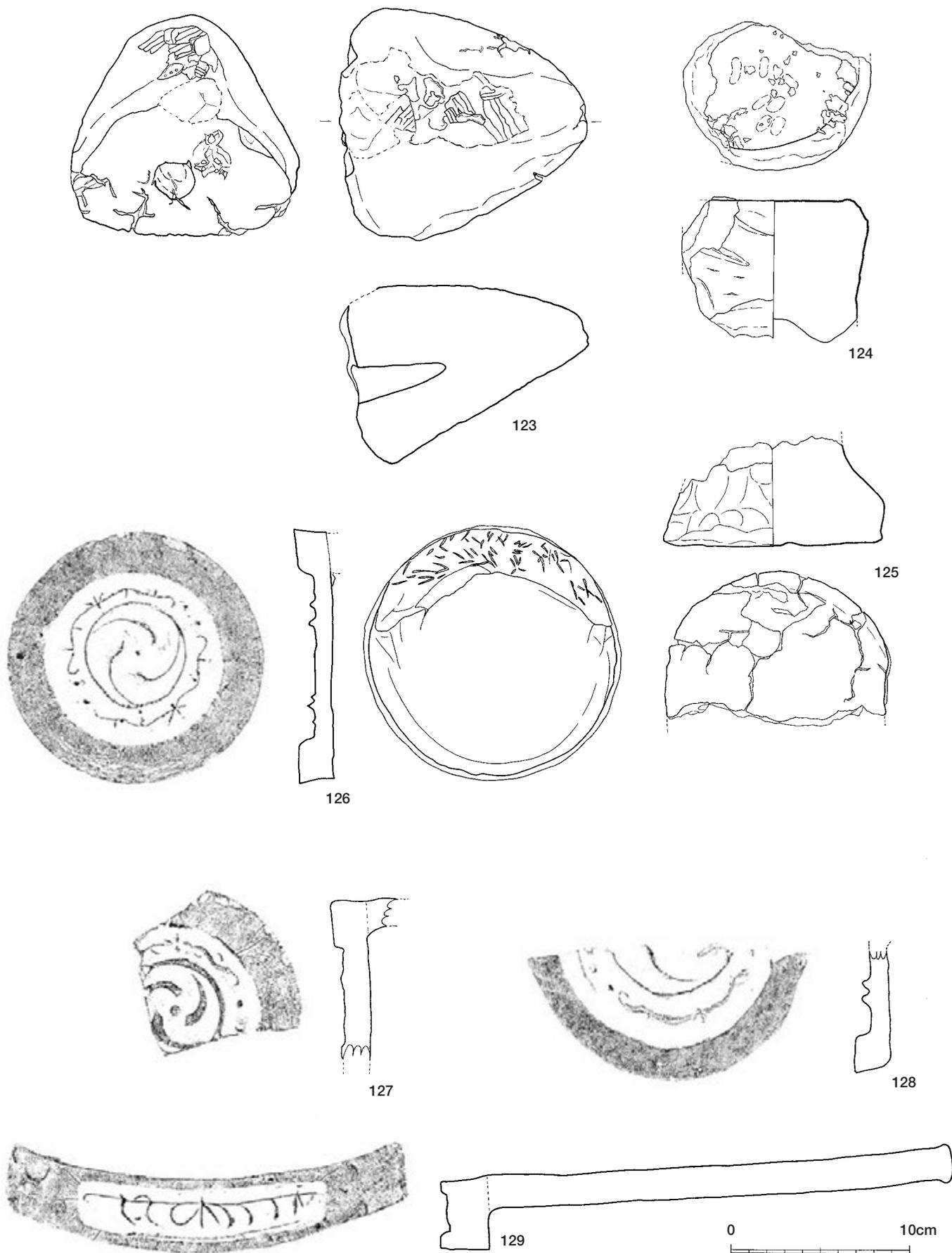
122

0 10cm
(120のみ S=1/4)

0 5cm



第298図 地点不明表層出土遺物(1)



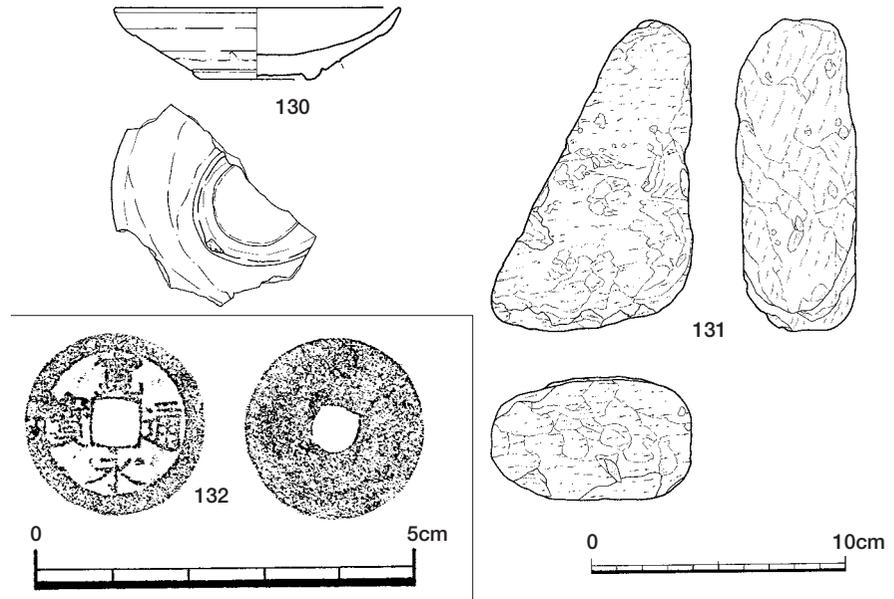
出土地点不明の表層出土遺物

第299図 地点不明表層出土遺物(2)

地点不明の表層出土遺物
(第298~300図)

出土地点は不明であるが、掲載しておいたほうがよいと思われた遺物を紹介しておく。

116・117は、碗である。117は、高台内面に釘彫りが見られる。118は、蓋である。上面につまみはない。119は、碗の形状を呈するが、大形のもので、鉢の可能性もある。120は、把手付き鉢である。外面には、平行タタキ目が鮮明に残る。121は、片口が3個体熔着した資料である。片口部と片口部を合わせるように合わせ口にし、さらにその上に底部を置いて積み重ねて焼成している。また外底面にはハマが熔着している。122は、用途不明の土製品である。球状を呈し、中心に穴が通っており、その周囲には溝が彫り込まれる。123は、断面馬蹄形、上面三角形を呈するハマである。上面には貝目が残る、側面には穿孔が施される。124・125は、トチンの一部と思われる資料である。124は、上面に目跡が残る。126~128は、軒丸瓦である。126は、軒丸と平瓦を接合する際、密着するように細工を施している。129は、



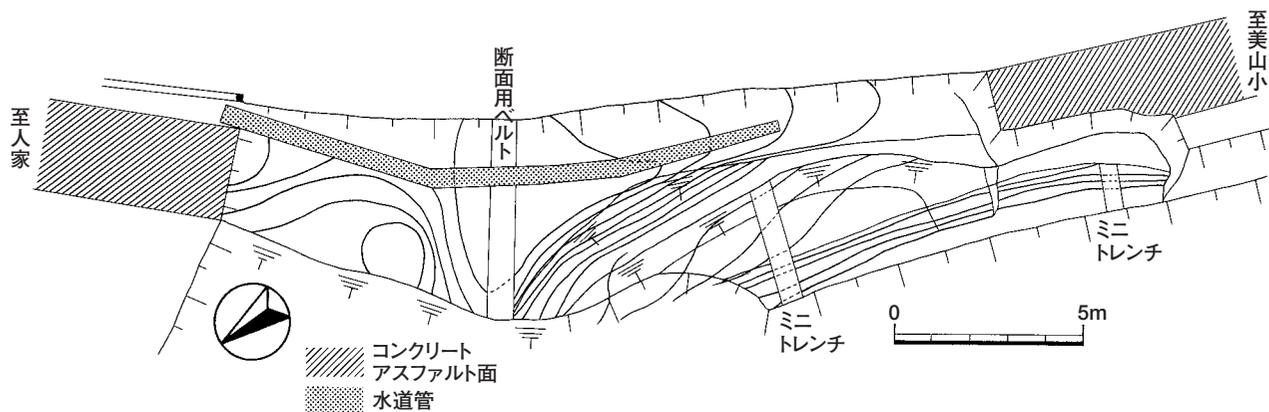
第300図 地点不明表層出土遺物(3)堂平窯製品以外

軒平瓦である。

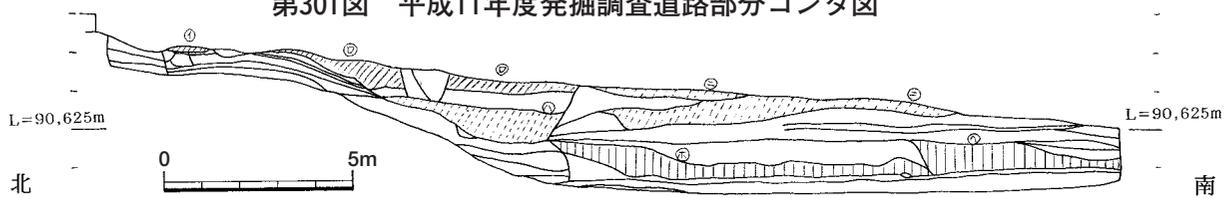
130~132は、堂平窯の製品ではない資料である。130は肥前系陶器である。131は、軽石製品である。用途は不明である。132は、寛永通寶である。

第174表 地点不明表層 遺物観察表

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
116	碗	区不明表層	13.6	—	—	黒褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	
117	高台付碗	区不明表層	—	7.8	—	黄灰色	灰釉 にぶい黄色	残存部全面施釉	高台底部に貝目?
118	蓋	区不明表層	10.2	底径13.0	2.3	暗灰黄色	無釉	—	
119	碗	区不明表層	—	10.5	—	暗灰黄色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	
120	鉢	区不明表層	28.5	—	—	褐灰色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
121	片口	区不明表層	—	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
122	土製品		直径3.4	—	3.1	灰褐色	無釉	—	片面に円形の跡が残る
123	ハマ	区不明表層	幅9.9	長さ13.8	厚さ9.9	にぶい橙色	無釉	—	上面に貝目 側面に穿孔
124	ハマ	区不明表層	—	—	—	にぶい褐色	無釉	—	上面に白い砂粒付着
125	ハマ	区不明表層	幅12.4	—	—	にぶい橙色	無釉	—	
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	瓦当厚	厚さ				
126	軒丸瓦	区不明表層	2.2	2.1	3.2	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	瓦頭部外面・側面施釉	
127	軒丸瓦	区不明表層	—	—	1.6	灰赤色	灰釉 浅黄色	瓦頭部外面施釉	
128	軒丸瓦	区不明表層	—	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰黄色	残存部全面施釉	
129	軒平瓦	区不明表層	28.8	3.8	1.8	橙 色	灰釉 黄灰色	上面・瓦頭部外面施釉	
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
130	皿	区不明表層	11.2	4.5	2.8	にぶい褐色	—	内面と外面底部付近まで施釉	
131	軽石	区不明表層	幅7.9	長さ12.1	厚さ4.8	—	—	—	
132	古銭	区不明表層	径2.4	—	厚さ0.1	—	—	—	寛永通寶

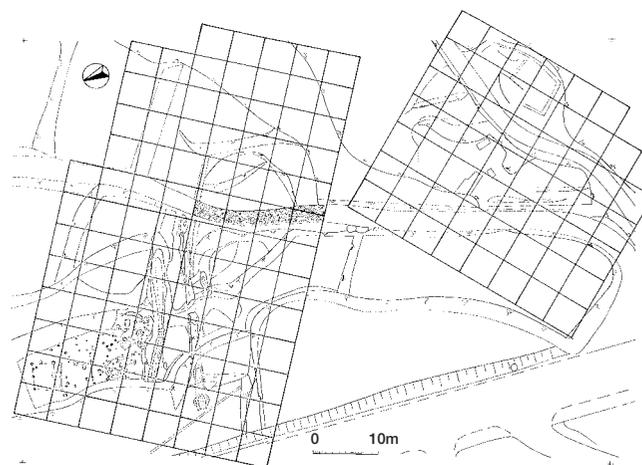


第301図 平成11年度発掘調査道路部分コンタ図



堂平窯跡南北断面図

第302図 平成11年度発掘調査 道路部分土層断面図



第6節 平成11年度の調査

平成10年度の調査で残った里道部分の調査である。里道のコンクリート及びアスファルト部分を重機によって剥ぎ取り、層に従って掘り下げを行った。

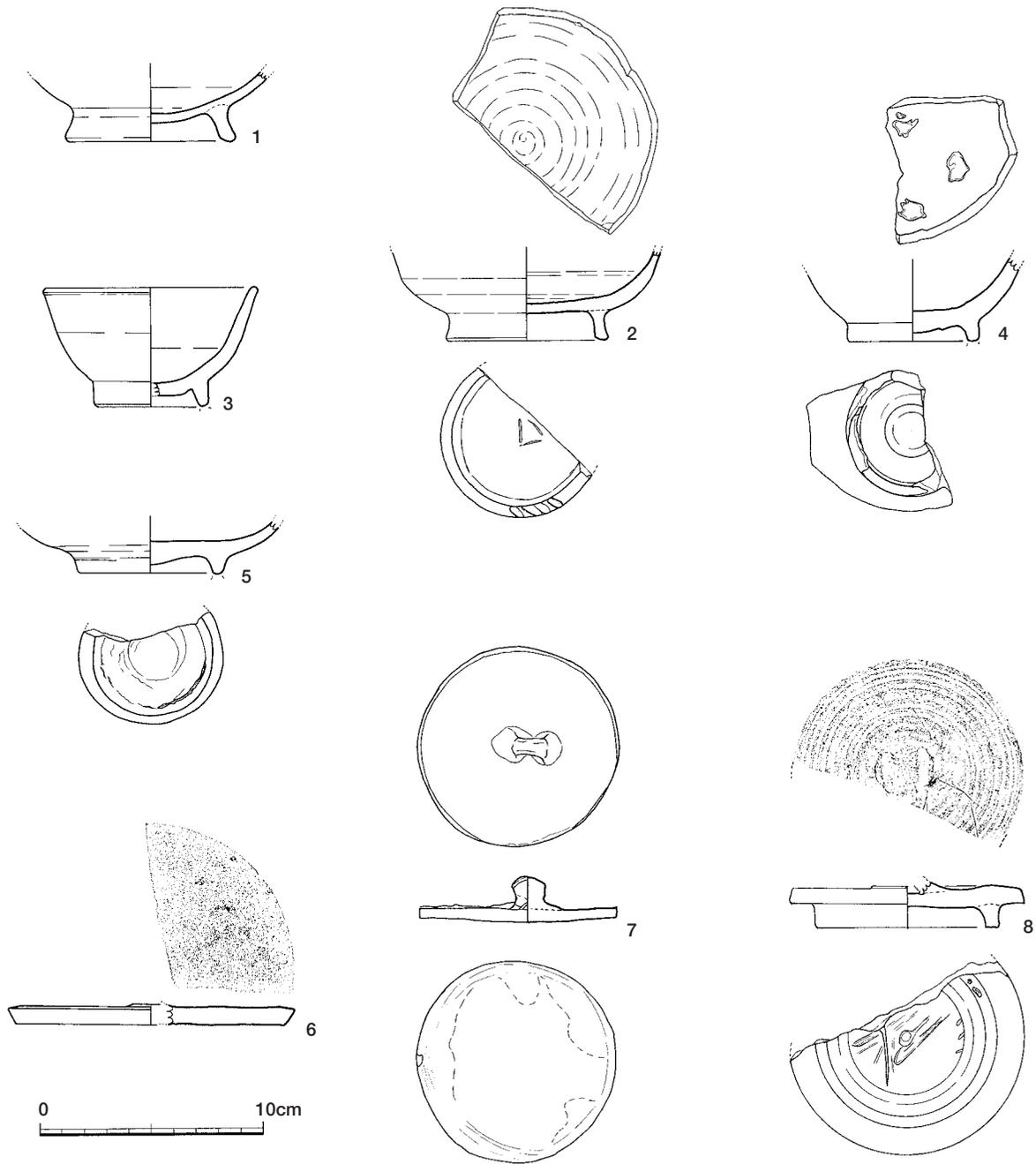
前回調査した物原の広がりをつめるのが目的であったことから層位ごとに遺物の取り上げを行ったが、里道の工事により攪乱を受けていたため、残存状態は良好なものではなかった。

断面観察で、上方（北側）に非常に薄い物原の残存が確認できるが、里道工事によって動かされている可能性が大きく、資料としては良好なものとは言い難い。それに対して、下方（南側）の下部で確認された層は幾分不純物が混入していた状況が見られたものの、割合にまとまった、短期間のもと考えられる遺物が出土した。

完掘後、最終的なコンター測量を行った。それによる

と、窯尻の南側は若干窪んでいたことから、この部分が物原Ⅱの広がり部分と想定されたものの、東側の部分では明瞭な窪みが観察されなかったことから、物原Ⅰの広がり部分は里道工事によって破壊されたものと判断された。

南西部分に大きく広がる窪みは、本来の地形の傾斜を示していると思われる、下部に割合にまとまっていた、短期間のもと考えられる遺物を、ひとまとまりの物原と判断することも可能かも知れないが、手前側が後世の耕作によって削平を受けていたため、純粋な物原との認定には躊躇を覚える。ただし、第1地点の物原から第2地点の物原まではある程度の距離があることから、ここを第2地点に遺棄する移行期の一つの物原としたと考えることもあり得ないことではないことを指摘するに留めておきたい。



第303図 道路部分出土遺物(1)碗・皿・蓋

平成11年度調査出土遺物

平成11年度に調査した道路部分から出土した遺物の中から、堂平窯の製品と思われる資料を掲載した。

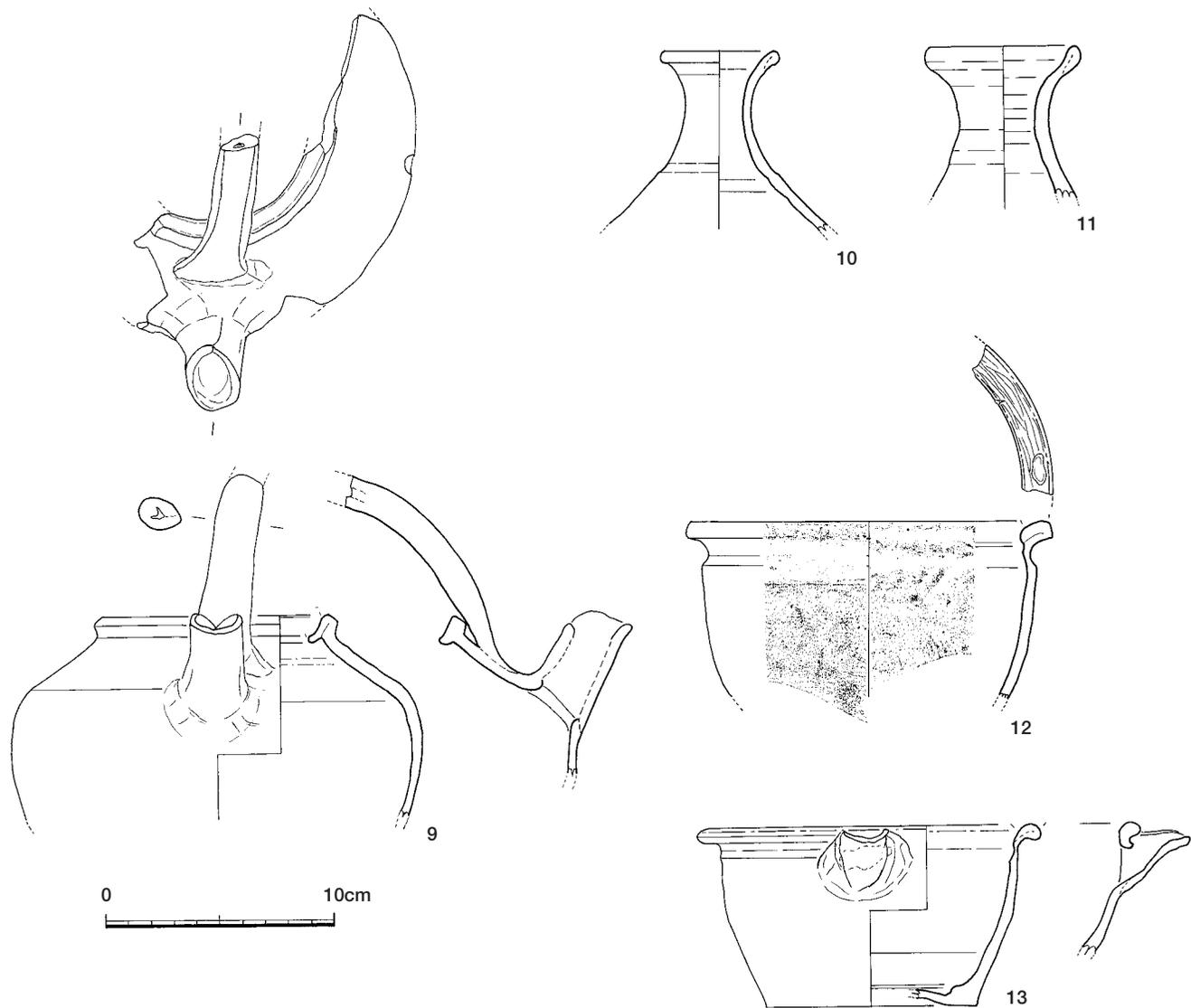
碗・皿・蓋 (第303図)

1～3は碗である。3は小形の資料であるが、3点とも付け高台である。2の畳付には貝目があり、高台内面には白色の目跡も残る。4は白物の碗である。見込みと畳付に胎土目跡が残る。

5は白物の皿である。6～8は蓋である。6・8は上面中央につまみの痕跡が残る。6は上面にタタキ成形の痕跡が、8はへら状工具による調整痕が残る。

水注・徳利・片口 (第304図)

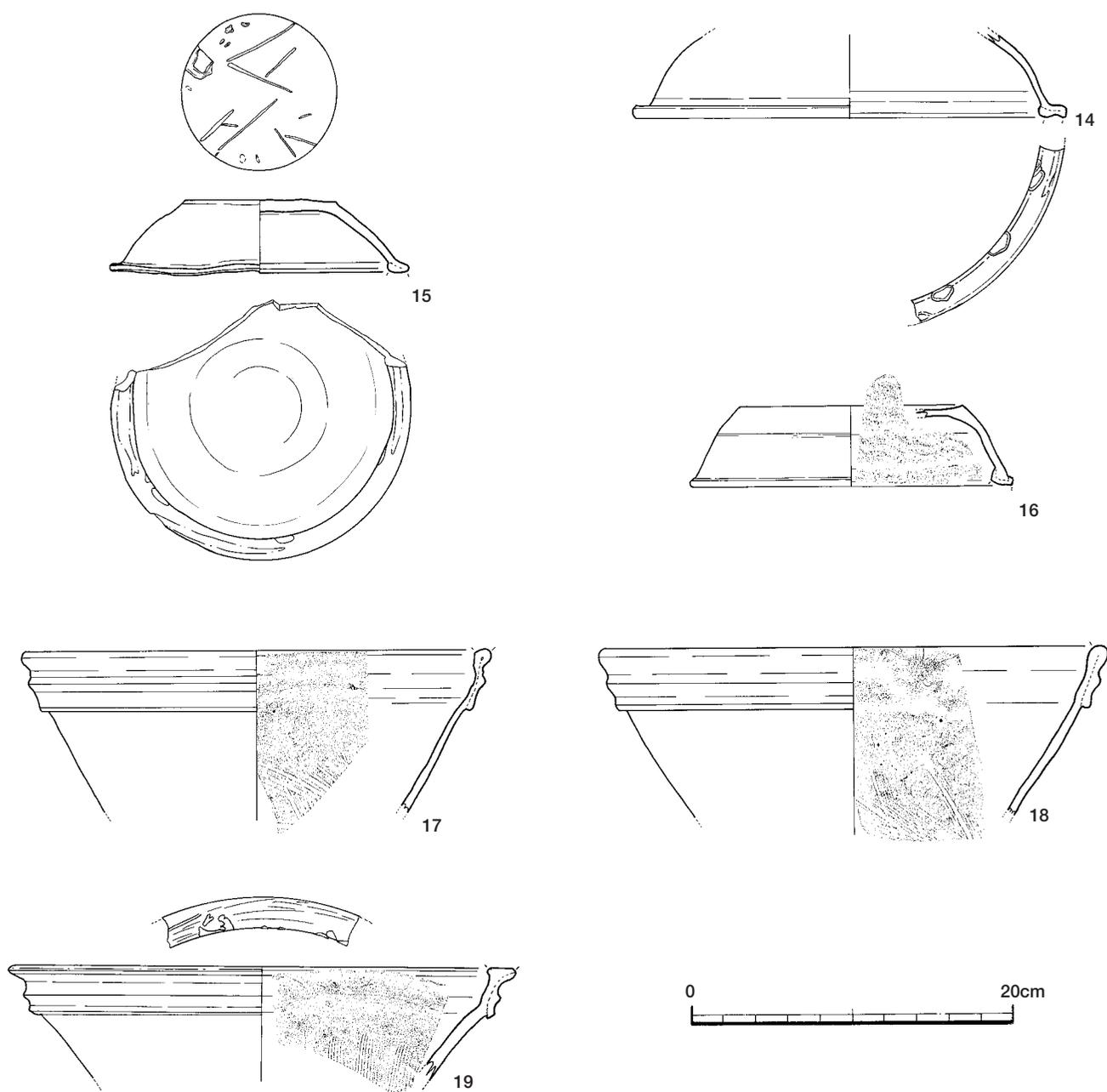
9は水注である。注口部は巻き口で把手も陶製である。10・11は徳利の口縁部である。12・13は片口で、12は片口部が欠損している。口唇部には貝目が残る。



第304図 道路部分出土遺物(2)徳利・片口・水注

第175表 道路部分 遺物観察表1

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
1	碗	口	—	7.6	—	黒褐色	鉄釉 暗赤褐色	全面施釉	
2	碗	ホ	—	7.2	—	灰褐色	灰釉 緑灰色	残存部全面施釉	畳付に貝目
3	碗	へ拡張区	9.6	5.2	5.3	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	
4	碗	へ拡張区	—	5.8	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	見込みに胎土目
5	皿	へ拡張区	—	6.5	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	
6	蓋	へ拡張区	上径12.8	12.0	0.8	赤褐色	灰釉 灰褐色	上面のみ施釉	
7	蓋	へ	上径9.0	—	2.0	灰黄色	灰釉 赤褐色	全面施釉	
8	蓋	ホ	上径10.2	8.2	—	にぶい赤褐色	無釉	—	
9	水注	口	10.6	—	—	褐灰色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	
10	徳利	ハ	5.2	—	—	灰白色	灰釉 灰黄色	口唇部以外全面施釉	
11	徳利	へ	6.8	—	—	灰緑色	灰釉 明黄褐色	残存部全面施釉	
12	片口	ハ	16.0	—	—	橙色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
13	片口	口	15.0	9.0	7.8	にぶい褐色	鉄釉 緑灰色	口唇部以外全面施釉	



第305図 道路部分出土遺物(3)蓋・擂鉢

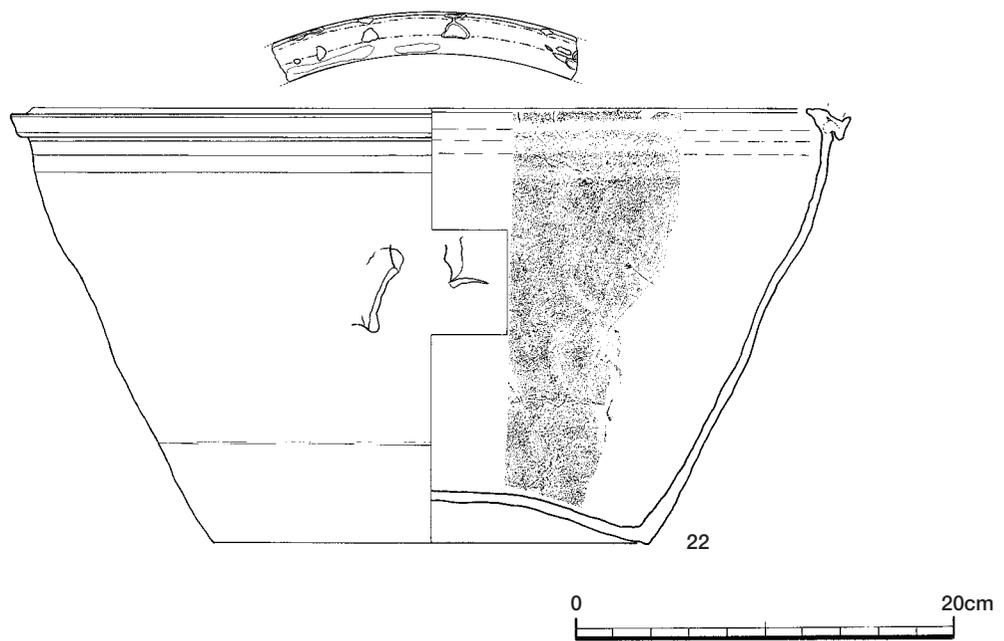
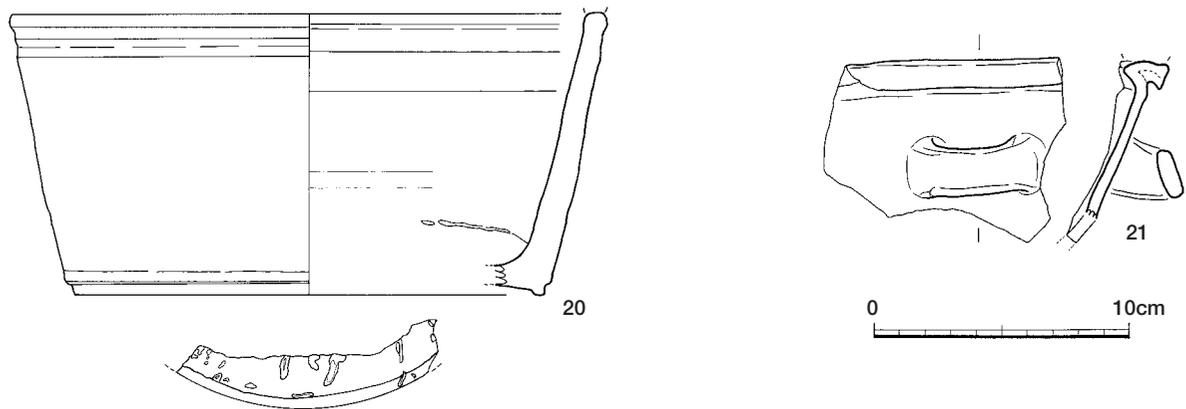
蓋・擂鉢 (第305図)

14～16は浅鉢型の形状を呈する蓋である。14は、口唇部に胎土詰貝目が残る。15は、口唇部に合わせ口をした痕跡が残る。17～19は、擂鉢である。口縁部は外側に折

り返して肥厚させ、2条の突帯をつくる。17・18は口唇部を丸くつくり貝目は残らないが、19は平坦につくり貝目が残る。また擂り目は、17・18は左斜め方向の粗い擂り目が入り、19は細くシャープな擂り目が密に入る。

第176表 道路部分 遺物観察表 2

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
14	蓋	へ	26.6	—	—	灰黄褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
15	蓋	ハ	18.6	上径9.6	4.5	黄灰色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	上面と口唇部に貝目
16	蓋	へ	20.0	上径13.8	5.0	浅黄色	灰釉 灰褐色	口唇部以外全面施釉	上面に目跡 内面に同心円状のタタキ目
17	擂鉢	へ	29.2	—	—	灰黄褐色	灰釉 赤褐色	口唇部以外全面施釉	
18	擂鉢	へ	31.6	—	—	灰褐色	灰釉 黄灰色	口唇部以外全面施釉	
19	擂鉢	へ	31.6	—	—	灰赤色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第306図 道路部分出土遺物(4)鉢・甕

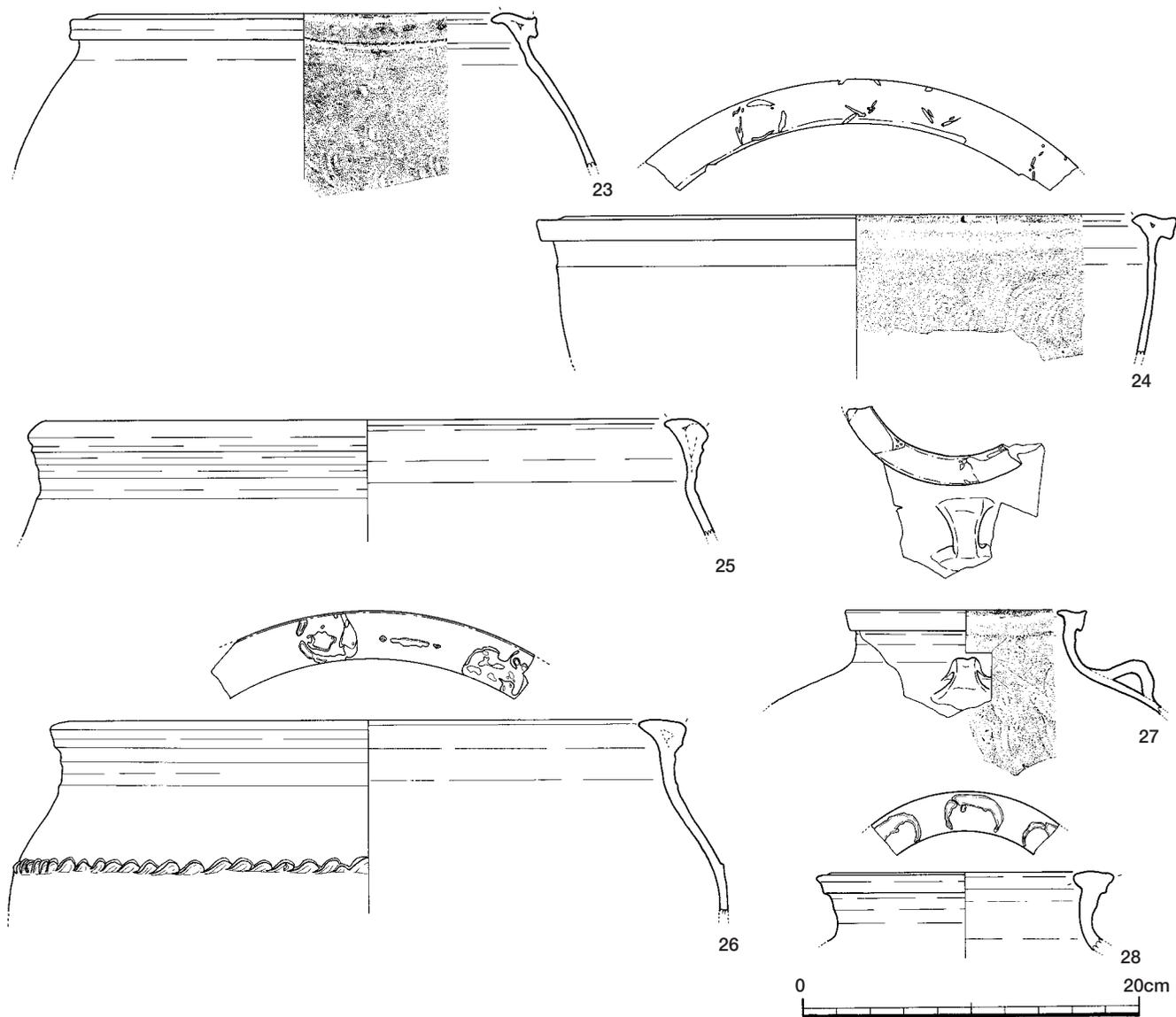
鉢・甕（第306図）

20は、鉢として分類したが、浅鉢型の形状を呈する蓋のやや深めのものの可能性も考えられる。口縁部には2条の沈線が巡り、外底面には貝目が残る。

21・22は把手付甕で、21は把手部である。把手部分は上方を狭く、下方を広くあけてつくられている。22は、把手部分は欠損している。口唇部は内側を高く、外側を溝縁状につくる。内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。

第177表 道路部分 遺物観察表 3

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
20	鉢	へ	23.3	18.8	11.0	暗灰黄色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
21	鉢	へ拡張区	—	—	—	灰褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
22	鉢	へ拡張区	44.4	23.0	22.9	赤褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内底面にタタキ目



第307図 道路部分出土遺物(5)甕・壺

甕・壺 (第307図)

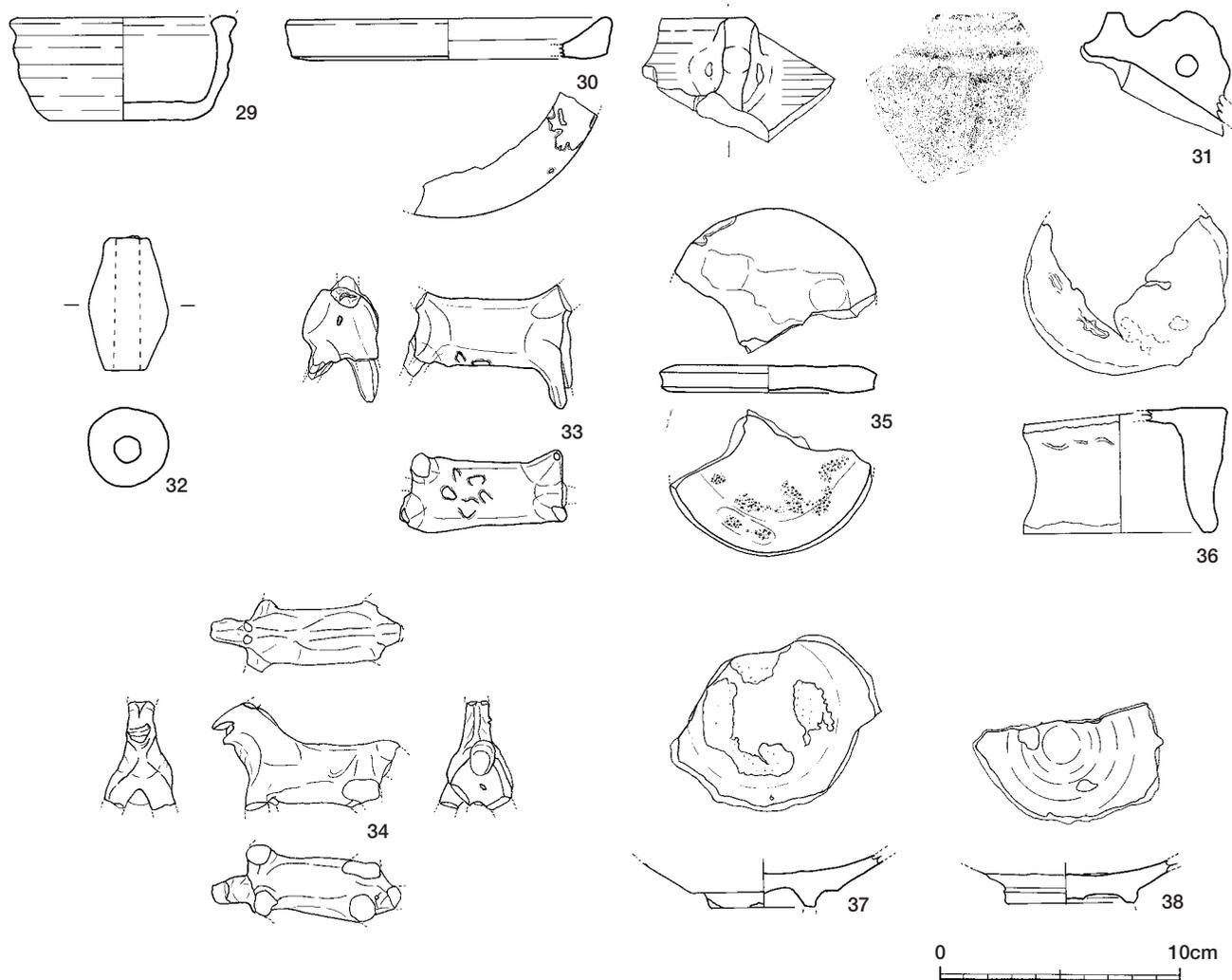
23～26は甕である。23・24は内面にタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。24は甕としたが、鉢の可能性も考えられる。25・26は口縁部の断面が三角形の形状を呈するものである。26は口唇部に貝目が残り、外面肩部

に縄状の突帯を有する。

27・28は壺である。27には縦型の耳がつくが、全体の個数は不明である。

第178表 道路部分 遺物観察表 4

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
23	甕	へ	28.0	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉 内面に同心円状タタキ目	
24	甕	口	38.0	—	—	黄灰色	灰釉 赤褐色	口唇部以外全面施釉 内面に同心円状タタキ目	
25	甕	へ	40.4	—	—	褐灰色	灰釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	
26	甕	へ拡張区	38.0	—	—	灰黄褐色	灰釉 褐色	口唇部貝目 内面に同心円状タタキ目	
27	壺	口	14.3	—	—	黒褐色	灰釉 灰緑色	口唇部貝目 内面に同心円状タタキ目	
28	壺	へ	17.7	—	—	灰黄褐色	鉄釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉 口唇部に貝目	



第308図 道路部分出土遺物(6)その他

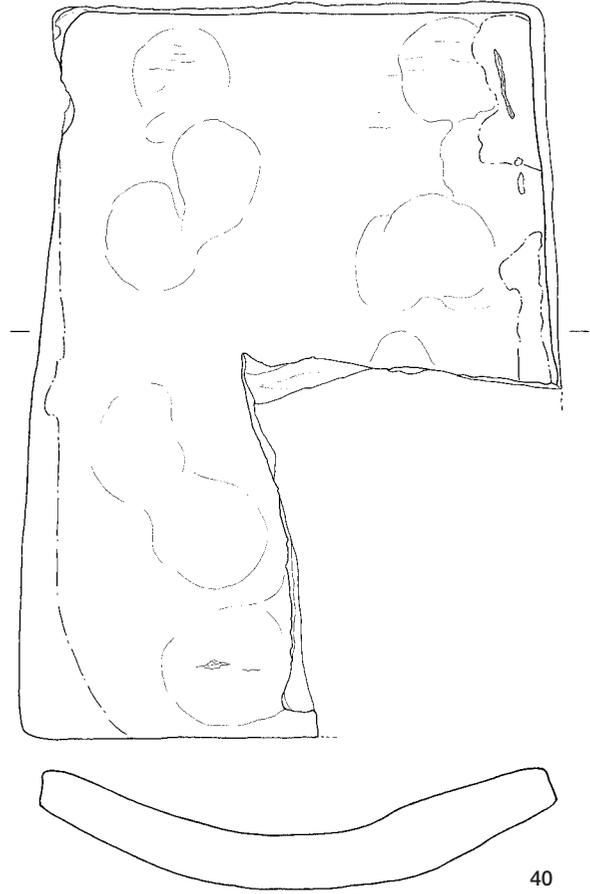
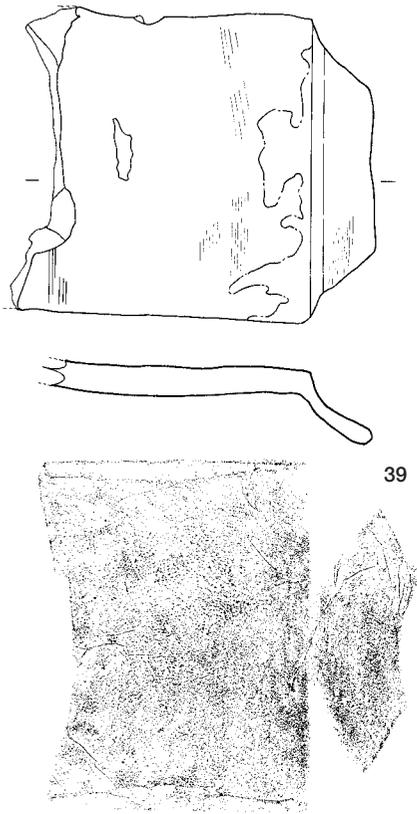
その他の出土遺物 (第308図)

29～36は堂平窯の製品と思われる資料である。29は播鉢と同様の口縁部の形態であるが、播り目はみられない。用途不明である。30も用途不明の製品である。31は茶釜の口縁部ではないかと思われるが、詳細不明である。32は土錘である。33・34は動物型土製品である。ど

ちらも臀部にメスを表現したと思われる穿孔が施される。33の腹部には乳頭と思われる突起もつくられている。35・36は用途不明の資料である。37・38は堂平窯の製品ではない資料で、肥前系の陶器である。37は砂目が残る。

第179表 道路部分 遺物観察表 5

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
29	不明	へ拡張区	9.4	6.0	4.2	灰黄色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	
30	不明	口	13.6	13.0	1.7	灰褐色	鉄釉 緑黒色	全面施釉	外底面に目跡
31	不明	へ	—	—	—	灰色	灰釉 緑黄色	残存部全面施釉	
32	土錘	へ	幅3.2	—	5.0	浅黄色	無釉	—	
33	動物型 土製品	へ拡張区	—	—	—	浅黄色	無釉	—	
34	動物型 土製品	へ拡張区	—	—	—	灰黄褐色	鉄釉 緑黒色	残存部全面施釉	
35	不明	ホ	上径9.0	—	厚さ1.1	にぶい橙色	無釉	—	上面に目跡 下面に砂粒附着
36	不明	ハ・ホ	上径8.3	8.0	5.2	暗灰黄色	—	—	
37	皿	へ拡張区	—	4.5	—	灰白色	透明釉 灰色	畳付以外全面施釉	見込みに白い砂粒附着 高台脇と高台内部に白い砂粒附着
38	皿	へ拡張区	—	5.5	—	にぶい黄橙色	透明釉 灰色	畳付から高台内部以外施釉	見込みに目跡



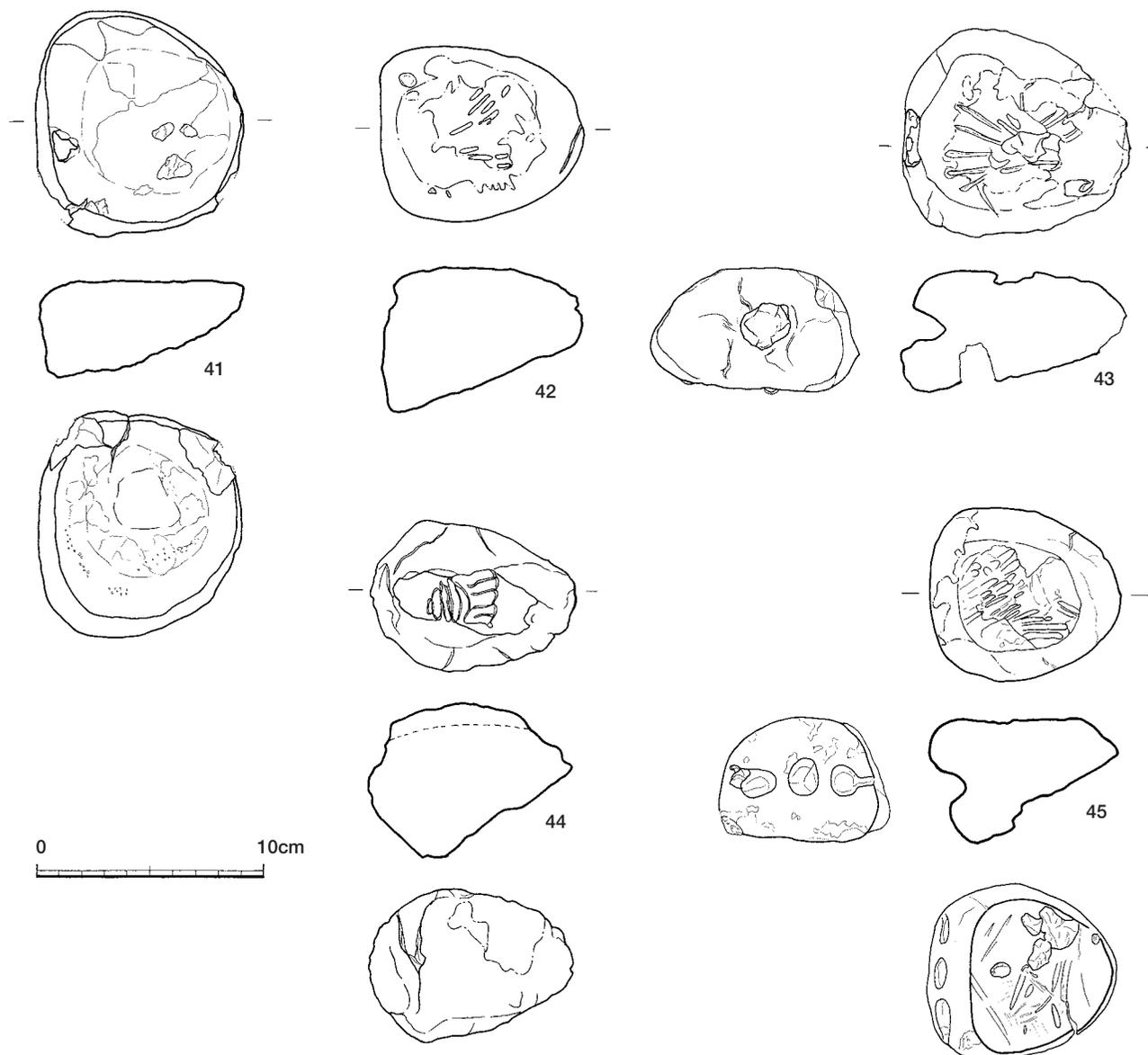
瓦 (第309図)

39は丸瓦である。上面には横ナデ調整の痕跡が残るが、部分的に平行タタキの痕跡も見られる。また、他製品の痕跡と思われる目跡も残る。下面は、同心円状のタタキ目の痕跡をヘラ削り調整により消している。40は平瓦である。粘土中の空気が膨張し、歪に膨らんだ箇所が見られる。焼きぶくれが所々みられる資料である。下面の端には、貝目も看取される。



0 10cm

第309図 道路部分出土遺物(7)瓦



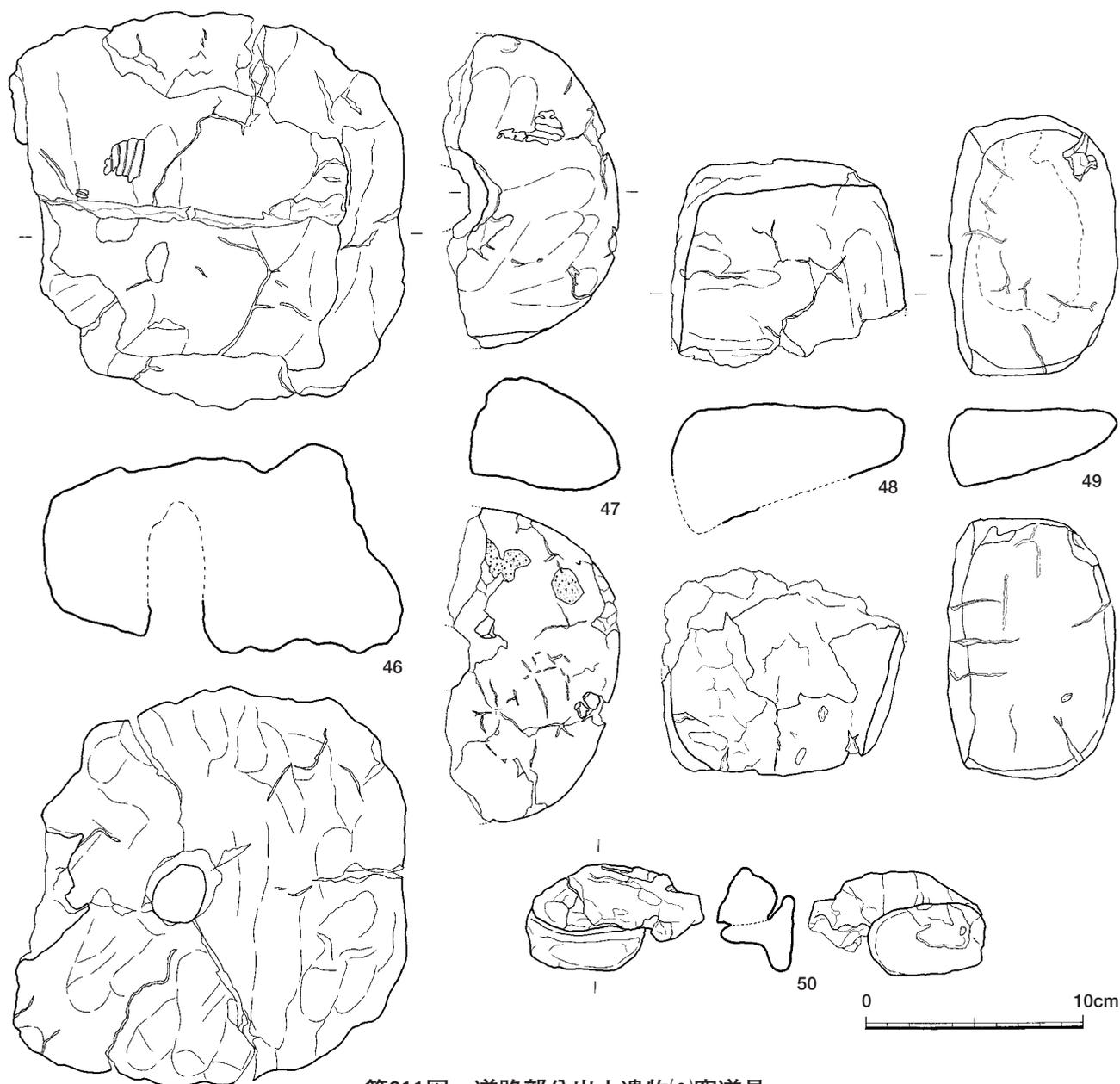
第310図 道路部分出土遺物(8)窯道具

窯道具 (第310～312図)

41～45は断面が馬蹄形、平面が三角形の形状を呈するハマである。製品とハマの間には貝を挟み込んで熔着を防いだものと思われ、上面に貝目が残る。43の上面にはイタヤガイの貝目が残る。また、43は1か所、45は3か所、側面に穿孔が施される。

第180表 道路部分 遺物観察表 6

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
39	丸瓦	へ	玉縁長2.0	—	—	灰黄色	灰釉 暗灰黄色	玉縁以外上面施釉	
40	平瓦	へ	幅20.4	長さ28.5	厚さ2.1	灰色	灰釉 灰褐色	上面のみ施釉	
41	ハマ	へ拡張区	幅9.8	長さ9.9	高さ4.1	にぶい赤褐色	無釉	—	両面量付の痕跡
42	ハマ	口	幅7.5	8.8	6.3	暗青灰色	無釉	—	上面に貝目
43	ハマ	へ拡張区	幅9.9	9.0	5.3	褐色	無釉	—	上面に貝目
44	ハマ	二	幅6.6	9.0	6.7	灰赤色	無釉	—	上面に貝目
45	ハマ	へ	幅7.6	8.3	5.4	灰色	無釉	—	上面に貝目 側面に穿孔



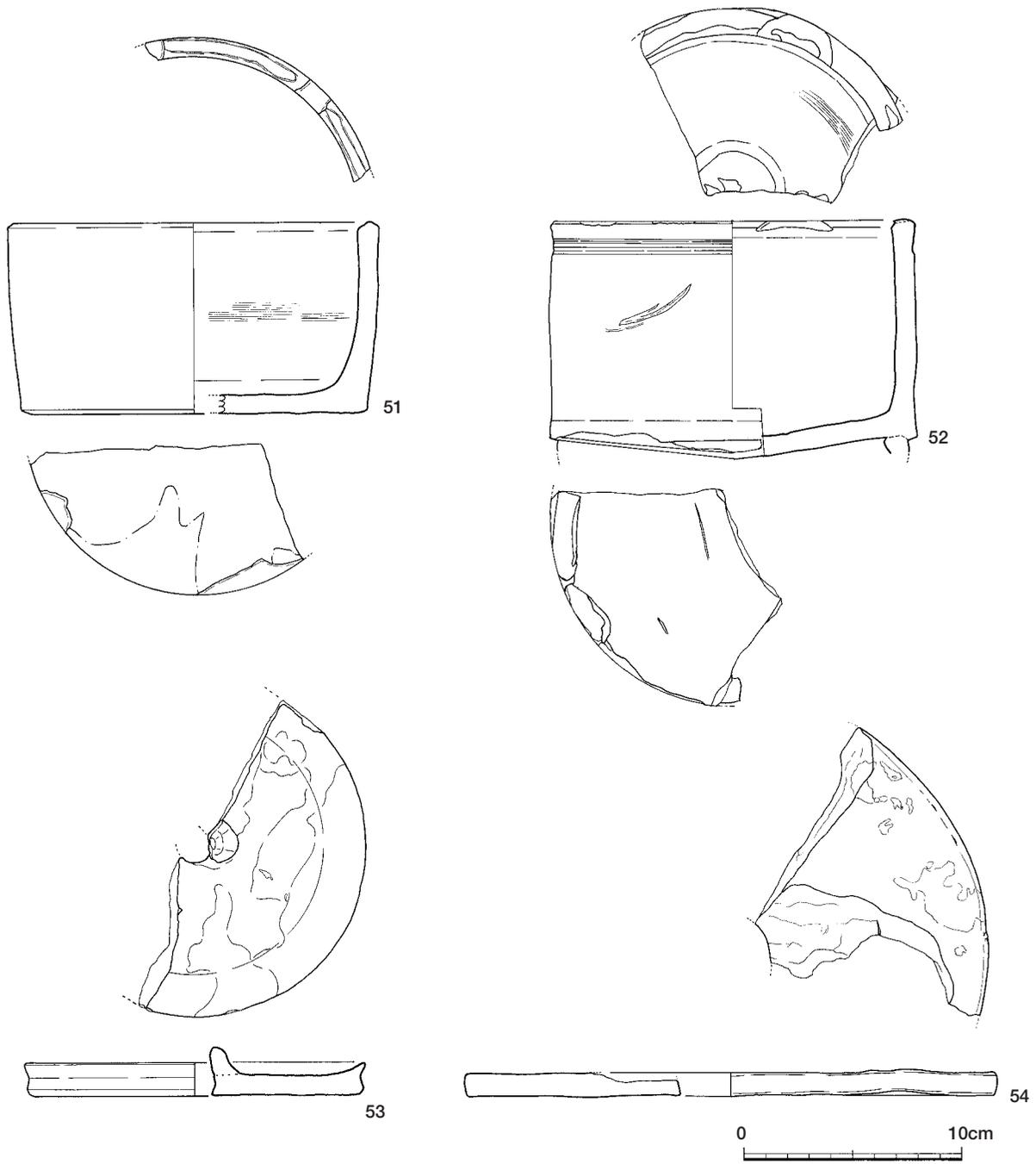
第311図 道路部分出土遺物(9)窯道具

46・47は色見孔の蓋をハマに転用した資料である。どちらも上面に貝目が残る。46は中央の穿孔が貫通していない。48・49は平面が長方形、断面が馬蹄形を呈するハマである。50はスタンプ型のハマに棒状のハマが熔着した資料である。微調整をするために、棒状のハマをさらに挟み込んだのではないかとと思われる。

51・52はサヤ鉢である。どちらも口縁部に胎土目が残る。52は底部にも胎土目残り、内底面には白色の高台畳付の痕跡が残る。53は詳細な用途は不明であるが、窯道具と思われる資料である。54も詳細な用途は不明の資料である。挟み板、サヤ鉢の蓋の可能性も考えられる。

第181表 道路部分 遺物観察表7

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			幅	長さ	厚さ				
46	ハマ	表層	18.1	16.3	9.5	にぶい褐色	無釉	—	上面に貝目
47	ハマ	へ	—	—	5.0	灰赤色	無釉	—	両面に貝目 上面に指痕
48	ハマ	へ	—	10.6	5.4	にぶい赤褐色	無釉	—	上面に指痕
49	ハマ	へ拡張区	11.8	7.7	3.6	にぶい黄褐色	無釉	—	
50	ハマ	へ	4.8	8.0	3.6	浅黄色	無釉	—	



第312図 道路部分出土遺物(10)窯道具

第182表 道路部分 遺物観察表 8

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量(cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
51	サヤ鉢	へ拡張区	17.0	15.8	9.7	にぶい黄橙色	灰釉 緑褐色	外面のみ施釉	口唇部に貝目 口唇部に合わせ口の痕跡
52	サヤ鉢	へ拡張区	16.8	16.8	10.8	褐灰色	無釉	—	口唇部と外底面に貝目 口唇部に合わせ口の痕跡 内底面に高台痕 外底面に他のサヤ鉢付着
53	窯道具	へ拡張区	15.6	15.4	2.3	にぶい橙色	無釉	—	下面に貝目
54	サヤ蓋?	口	径24.4	—	1.2	褐灰色	無釉	—	

第 章 分析・同定

堂平窯の炉跡の地磁気年代推定

1. 堂平窯（遺構と試料，測定結果）

(1) 遺構と試料

堂平窯は西落ちの丘陵緩斜面に構築された連房式登窯（全長～28.8m，幅～1.2m）であるが，耕作等の攪乱により一部の室が破壊され，全体は4部分に切断されている。（図1：A，B，C，D）。最終焼成後に予期される窯の変形を測定結果から検知するために，これらの4部分の広い範囲から，合計38個の地磁気年代測定用の定方位試料を採取した（A [3]，B [5]，C [12]，D [18]）。図1に試料の採取位置を示す。試料と遺物から推定される窯の年代は17世紀初～18世紀初である。

(2) 測定結果

図2は交流消磁の前後の試料の残留磁気の方向，図3は交流消磁前の残留磁気強度である。Aの試料はすべて 10^{-5} emu/gの弱い強度をもち，他の部分の値の1/10以下となっている。この原因は，窯底が攪乱で消失しているために，さらに下方の柔らかい低焼成度の焼土を試料としたためと考えられる。他の部分の強度は 10^{-4} ～ 10^{-3} emu/gの値となり，高焼成度の須恵器窯の値に匹敵する。交流消磁後（20mT）の拡大図に示した小円内には，窯のB（1ヶ），C（6ヶ），D（12ヶ）のデータが含まれている。このように窯の3部分にわたるデータが集中することは各部分の最終焼成後の相対的変異がほとんどないことを意味する。さらに，地盤には窯全体が傾いた形跡は認められない。以上の理由により，小円内のデータは窯の最終焼成磁の地磁気方向を正しく示していると判断できるので，これらの平均方向から地磁気年代を推定する。表1に小円内のデータから計算した平均方向と誤差の目安となる数値を示す。kの値が大きく， α_{95} の値が小さいほど，残留磁気方向がよく揃っていることを意味している。

表1 堂平窯の残留磁気の平均方向と誤差の目安となる数値

試料採取場所	Im(度)	Dm(度E)	k	α_{95} 度	n/N	消磁磁場
窯のB，C，D部	33.82	4.18	2452	0.68	19/38	20mT

Im：平均伏角 k：Fisherの信頼度係数 n/N：採用試料数／採取試料数

Dm：平均偏角 α_{95} ：95%誤差角

2. 堂平窯の地磁気年代

(1) 西南日本の地磁気永年変化曲線から求める

図7は堂平窯の残留磁気の平均方向（+印）と誤差の範囲（点線の楕円）および，広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線（実線）である。堂平窯の地磁気年代を求めるには，残留磁気の平均方向に近い点を永年変化曲線上に求めて，その点の年代を読みとればよい。同様にして，年代誤差も点線の楕円から評価できる。このようにして，広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線から求めた地磁気年代は，AD1550±10になる。

(2) 九州と西南日本の地磁気の地域差を考慮して求める

広岡は九州の16～17世紀における地磁気方向が西南日本のものよりも数度西偏していることを指摘している。西偏の程度を無理のない3度と仮定すると，九州の16～17世紀の地磁気永年変化曲線は，西南日本の標準曲線の16～17世紀の部分西方へ3度回転したものになる（図7の点線の曲線）。この仮定曲線をもとに地磁気年代を推定すると，AD1580±10の値が得られる。表2に異なる導出法による2つの地磁気年代をまとめる。

表2 堂平窯の地磁気年代

年代導出の方法	堂平窯の地磁気年代
西南日本の標準曲線からの値	A D 1550 ± 10
地磁気の地域差を考慮した値	A D 1580 ± 10

3. 考察

試料と遺物から推定される堂平窯の考古学的年代は17世紀初～18世紀初である。この年代に近いのは地磁気的地域差を考慮して求めた地磁気年代 (AD1580±10) であるが、考古学的年代の下限 (17世紀初) にわずかに届かない。この矛盾を生じた原因として次の2項目が考えられる。

第1に、九州の16～17世紀の地磁気永年変化曲線は、西南日本の標準曲線の16～17世紀の部分を西方へ3度回転したものになるとしたが、3度という回転量は正確な値ではなく、およその目安であることがあげられる。

第2に、九州の16～17世紀における地磁気の方法が西南日本のものよりも数度西偏していることの指摘は、九州北部の考古地磁気データの傾向を述べている。鹿児島島の広岡曲線に対する地磁気的地域差は次のように表現できる。すなわち、

鹿児島島の広岡曲線に対する地磁気的地域差 = 九州北部角広岡曲線に対する地域差 + 鹿児島島と九州北部の間の地域差

したがって、もし、右辺第2項が有意の値をとるときには、地域差の補正には、「西方へ3度回転」以外の要素を加えなければならない。九州一円には秀吉の朝鮮出兵に伴う窯跡 (16世紀頃～) が広く分布する。我々は九州北部のかなり多数の同様の窯跡の地磁気年代を推定してきたが、現在、それらのデータの統計処理により九州北部の正確な地磁気的地域差 (広岡曲線に対する) を求める作業を行っているところである。この作業の成果を使用して正しい補正ができると考えている。

鹿児島島における地磁気年代の測定例は残念ながら非常に僅かである。九州の南北間の地磁気的地域差を正しく見積もるためにも、九州南部における焼土の残留磁気測定を継続して、データを蓄積する必要がある。

(島根大学総合理工学部 時枝克安)

図1 堂平窯の試料採取状況

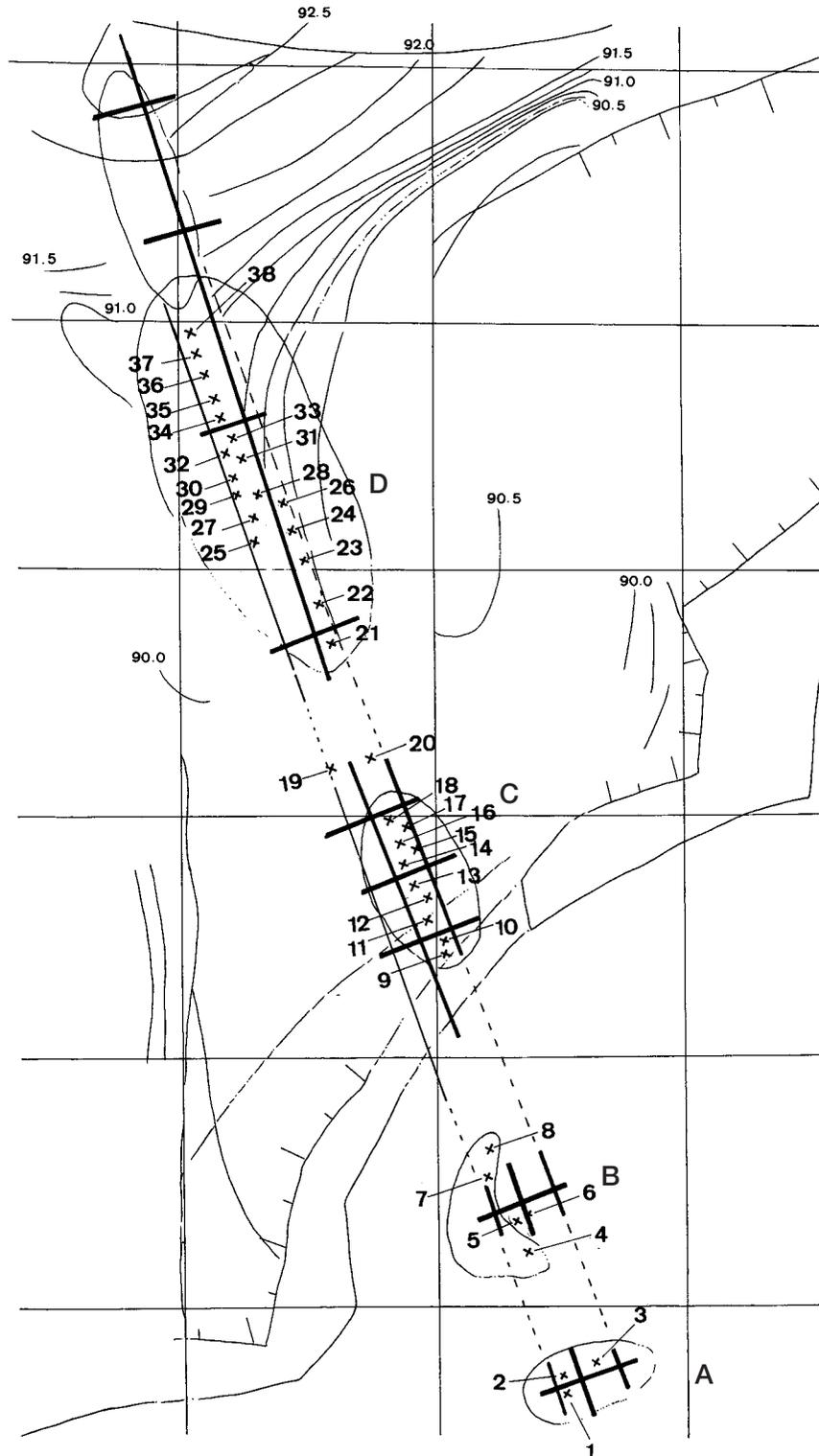


図2 堂平窯の交流消磁前の残留磁気強度分布

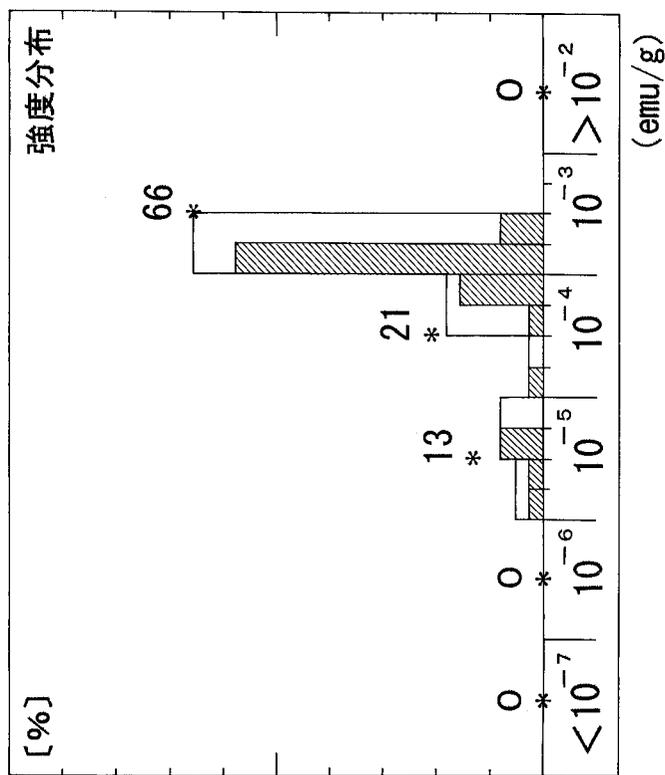
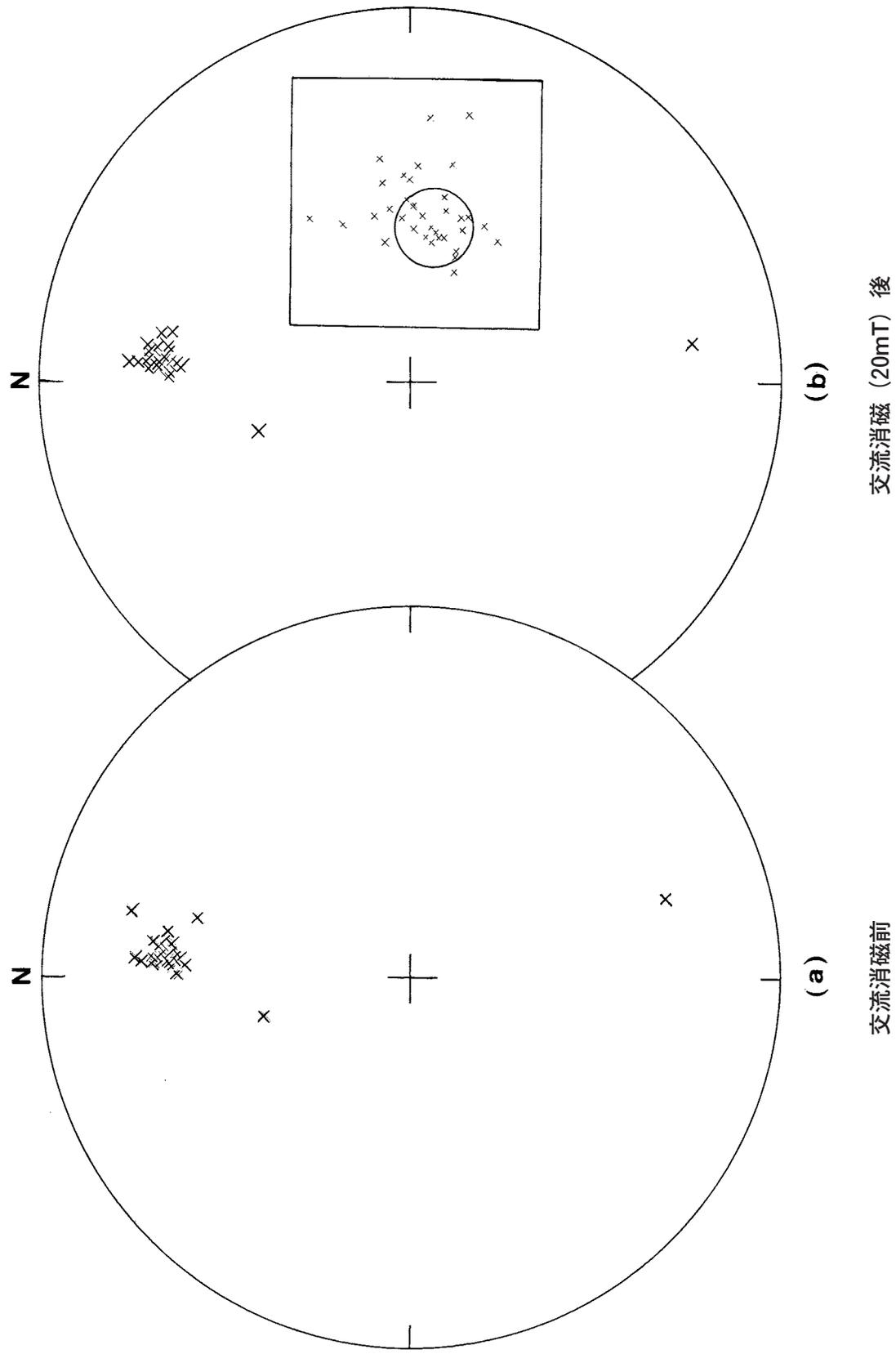


図3 堂平窯の交流消磁 (20mT) 前後の残留磁気の方角



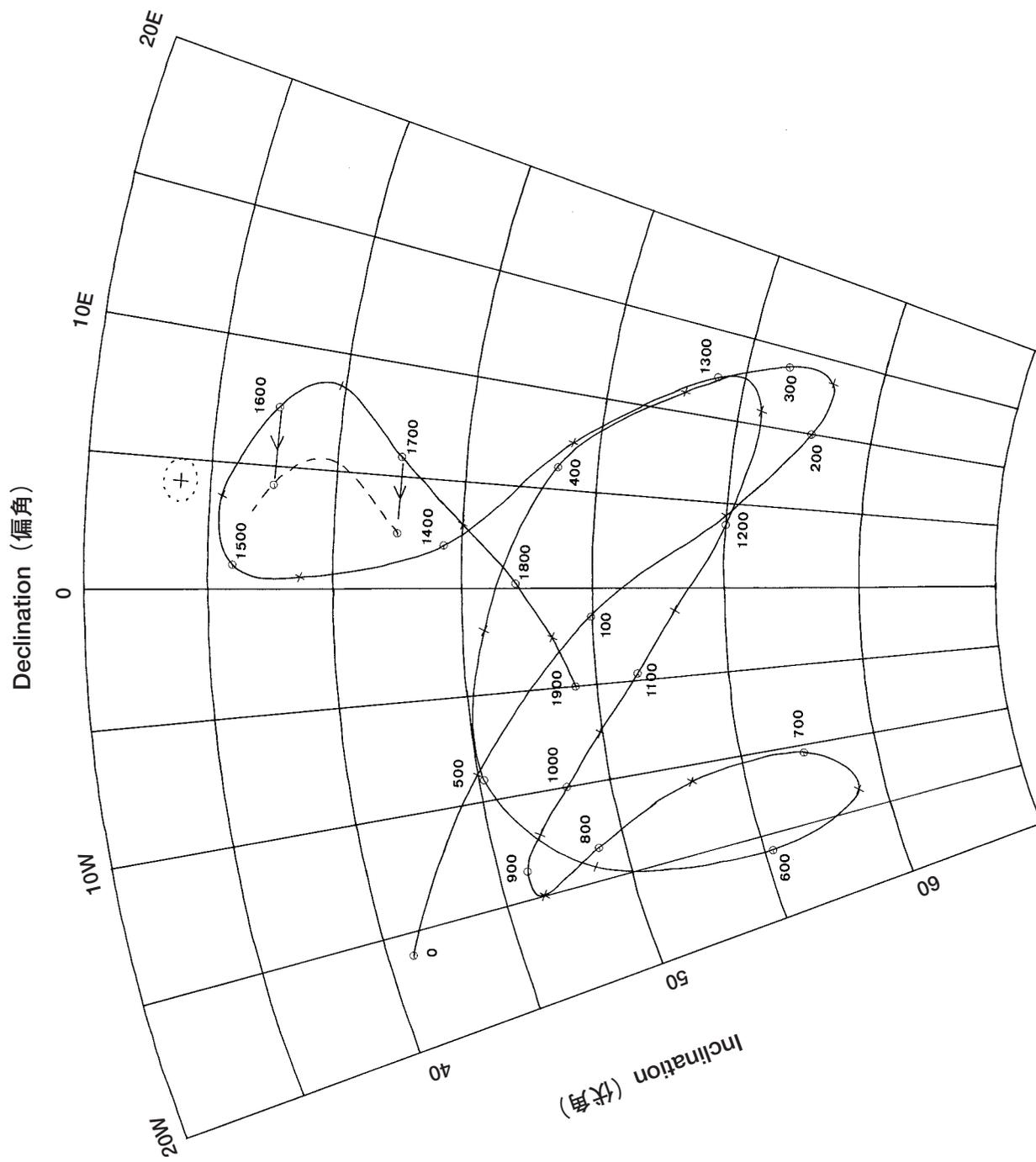


図4 堂平窯の残留磁気の平均方向(十印)と誤差の範囲(点線の楕円)および岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

鹿児島県，堂平窯跡出土遺物の蛍光X線分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。この方法を用いて、考古学分野では朱やベンガラなどの顔料分析、リン-カルシウムの含量分析などが行われている。また、指標となる特定の元素の検出パターンの比較から、石器（黒曜石など）や土器（須恵器など）の産地を推定することも可能となっている。

ここでは、堂平窯跡から出土した陶器類および遺構内検出粘土について蛍光X線分析を行い、出土遺物の産地や流通等に関する情報の収集を試みた。

2. 試料

分析試料は、表1の試料リストに示した陶器、瓦、ハマ、および遺構内検出粘土の計17点である。なお、陶器（No.10, No.11-2）については、釉薬の検討を目的として表面の光沢部分についても分析を行った。

表1 堂平窯跡における蛍光X線分析の試料リスト

試料No.	出土地点	遺物名	備考（測定部位等）
1	石組遺構内	粘土	粘土
2	粘土坑0	粘土	粘土
3	粘土坑1	粘土	粘土
4	粘土坑2	粘土	粘土
5	粘土坑3	粘土	粘土
6	粘土坑4	粘土	粘土
7	粘土坑6	粘土	粘土
8	粘土坑7	粘土	粘土
9	粘土坑8	粘土	粘土
10	物原1-II	陶器（甕，口縁部）	コア部分・表面（光沢部分）
11-1	物原1-II	陶器（碗，白薩摩）	コア部分
11-2	物原1-II	陶器（碗，白薩摩）	コア部分・表面（光沢部分）
12	物原1-II	瓦（平瓦）	コア部分
13	物原1-V	瓦（朝鮮瓦）	コア部分
14-1	物原1-II	窯道具（ハマ）	コア部分
14-2	物原1-II	窯道具（ハマ）	コア部分
15	物原1-II	瓦（平瓦）	コア部分

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット，ベリリウム（Be）窓，X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。以下に分析の手順を示す。

(1) 粘土

- 1) 試料を絶乾（105℃・24時間）
- 2) メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕
- 3) 試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/cm²でプレスして錠剤試料を作成
- 4) 測定時間600秒，照射径20mm，電圧30keV，試料室内真空の条件で測定

(2) 陶器類

- 1) ダイヤモンドカッターを用いて、遺物のコア部分を抽出
- 2) クリーニングの後、試料を絶乾 (105℃・24時間)
- 3) 分析装置の固定試料ステージに固定
- 4) 測定時間600秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

4. 分析結果および考察

各元素の定量分析結果 (wt%) を表 2 および図 1, 図 2 に示し, 図 3 にCaO-K₂O分布図およびSrO-Rb₂O分布図を示す。

(1) 遺構内検出粘土

1) 主要元素 (表 2, 図 1)

石組遺構内から採取された粘土 (No.1) および粘土坑 0~8 (5 を除く) から採取された粘土 (No.2~No.9) の計 9 試料について分析を行った。その結果, No.4 を除く 8 試料では, 珪素 (SiO₂) の含量が56.6~60.0%, アルミニウム (Al₂O₃) が21.8~27.0%, 鉄 (Fe₂O₃) が8.4~12.1%, カリウム (K₂O) が1.6~3.1%であり, 主要元素については特に明瞭な差異は認められなかった。No.4 は, アルミニウム (Al₂O₃) の含量が31.5%と高く, 鉄 (Fe₂O₃) が2.0%とかなり低いのが特徴的であり, その他の 8 試料とは元素組成が明らかに異なっている。

2) K₂O-CaO, Rb₂O-SrO分布図 (図 3)

土器 (胎土) に含まれる元素のうち, カリウム (K), カルシウム (Ca), ルビジウム (Rb), ストロチウム (Sr) の 4 元素は, 土器胎土の地域性を示す有効な因子とされており, K₂O-CaO分布図やRb₂O-SrO分布図を主な指標として土器の産地同定が行われている (三辻, 1998, 1999)。

K₂O-CaO分布図を見ると, 遺構内検出粘土のうちNo.9 を除く 8 試料では, カリウム (K₂O) の含量が1.6~3.1%, カルシウム (CaO) が0.4~1.4%の範囲内にあり, 比較的近似している。また, Rb₂O-SrO分布図を見ると, 遺構内検出粘土ではルビジウム (Rb₂O) の含量が0.01~0.02%, ストロチウム (SrO) が0.02~0.04%の範囲内にあり, 比較的近似している。No.9 はカルシウム含量が1.9%と比較的高い値であるが, 試料中に骨片や貝片と見られる微少な白色粒子が認められることから, 何らかの混在物が測定結果に影響している可能性も考えられる。

(2) 陶器類

1) 主要元素 (表 2, 図 2)

堂平窯跡から出土した陶器 (No.10), 白薩摩 (No.11-1, -2), 平瓦 (No.12, No.15), 朝鮮瓦 (No.13), ハマ (No.14-1, -2) の 8 試料について分析を行った。その結果, 白薩摩 (No.11-1, -2) を除く 6 試料では, 珪素 (SiO₂) の含量が58.7~66.9%, アルミニウム (Al₂O₃) が18.0~24.0%, 鉄 (Fe₂O₃) が7.1~13.5%, カリウム (K₂O) が1.8~3.4%であり, 主要元素については特に明瞭な差異は認められなかった。

白薩摩 (碗: No.11-1, -2) は, アルミニウム (Al₂O₃) の含量が27.3~32.9%と高く, 鉄 (Fe₂O₃) が0.6~1.2%とかなり低いのが特徴的であり, その他の陶器類とは明らかに元素組成が異なっている。このような元素組成は, 遺構内検出粘土のNo.4 と近似している。

2) K₂O-CaO, Rb₂O-SrO分布図 (図 3)

K₂O-CaO分布図を見ると, 白薩摩 (No.11-1, -2) はカルシウム (CaO) の含量が0.1%程度と低く, カリウム (K₂O) が3.4~3.9%と比較的高いのが特徴的であり, その他の陶器類とは明らかに元素組成が異なっている。このような元素組成は, 遺構内検出粘土のNo.4 と

近似している。その他の陶器類は、カリウム (K_2O) の含量が1.9～3.3%、カルシウム (CaO) が0.7～1.2%であり、遺構内検出粘土の分布範囲に含まれる。

Rb_2O-SrO 分布図を見ると、ハマ (No.14-2) を除く7試料では、ルビジウム (Rb_2O) の含量が0.01～0.02%、ストロンチウム (SrO) が0.02～0.04%であり、遺構内検出粘土の分布範囲に含まれる。ハマ (No.14-2) では、両元素ともやや高い値であるが、これについては後述する釉薬等の影響の可能性も考えられる。

平瓦 (No.12, 15) と朝鮮瓦 (No.13) は、 $CaO-K_2O$ 分布図および $SrO-Rb_2O$ 分布図とも、かなり近接した分布を示しており、元素組成に特に明瞭な差異は認められなかった。

(3) 釉薬について (表2, 図2)

No.10 (陶器) とNo.11-2 (陶器, 白薩摩) については、陶器の表面 (光沢部分) についても分析を行った。その結果、カルシウム (CaO) の含量は前者で9.3%、後者で15.7%と高い値であり、コア部分の0.7%および0.1%と比較して明らかに高い値となっている。一方、アルミニウム (Al_2O_3) の含量は前者で15.1%、後者で15.6%であり、各試料のコア部分の21.6%および27.3%と比較して明らかに低い値となっている。なお、釉薬の成分として一般的に認められる珪素 (SiO_2)、ナトリウム (Na_2O)、カリウム (K_2O) などについては、表面 (光沢部分) とコア部分で特に明瞭な差異は認められなかった。

以上の結果から、これらの陶器ではカルシウムを多く含む何らかの物質が釉薬 (媒溶剤) として利用された可能性が考えられる。カルシウムを多く含む物質としては、骨、貝殻、石灰石などが考えられる。なお、予備的な分析の際にハマの表面 (光沢部分を含む) についても分析を行ったが、今回の陶器表面と同様にカルシウムの含量が特徴的に高い値を示した。

5. 所見

堂平窯跡から出土した陶器類および遺構内検出粘土について蛍光X線分析を行った結果、以下のような知見が得られた。

- (1) 遺構内検出粘土 (No.1～9) は、No.4を除いて元素組成が比較的近似している。No.4ではアルミニウム (Al_2O_3) の含量が高く、鉄 (Fe_2O_3) の含量が低いなど、その他の粘土とは元素組成が明らかに異なっている。
- (2) 白薩摩は、アルミニウム (Al_2O_3) の含量が高く、鉄 (Fe_2O_3) の含量が低いなど、その他の陶器類とは元素組成が明らかに異なっている。このような元素組成は、遺構内検出粘土のNo.4と近似している。
- (3) 白薩摩を除く陶器類は、元素組成が比較的近似しており、平瓦と朝鮮瓦についても特に明瞭な差異は認められなかった。また、遺構内検出粘土 (No.4を除く) とも元素組成が近似していることから、これらの陶器類は遺構内検出粘土が主な素材となっている可能性が考えられる。また、白薩摩についてはNo.4の粘土が主な素材となっている可能性が考えられる。
- (4) 陶器類の釉薬 (媒溶剤) として、カルシウムを多く含む何らかの物質が利用された可能性が考えられる。

今後このような基礎的なデータを積み重ねることで、陶器類の産地や流通、および釉薬の利用などについて新たな知見が得られるものと期待される。

文献

- 三辻利一 (1998) 元素分析による古代土器の胎土研究. 人類史研究第10号, p.11-39.
三辻利一 (1999) 元素分析による須恵器の産地推定. 考古学と自然科学4. 同成社, p.294-313.

表2 鹿児島県 堂平窯跡における各試料の蛍光X線分析結果

地点・試料		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	10'	11-1	11-2	11-2'	12	13	14-1	14-2	15
原子No	化学式	粘土	陶器	表面	白薩摩	白薩摩	表面	平瓦	朝鮮瓦	ハマ	ハマ	平瓦								
11	Na ₂ O	0.305	0.507	0.244	0.258	0.446	0.272	0.327	0.204	0.403	0.489	0.635	0.176	0.151	0.073	0.629	0.773	0.775	1.056	0.814
12	MgO	0.678	0.647	0.756	0.000	0.532	0.366	0.377	0.721	0.508	0.976	1.587	0.000	0.000	0.239	0.635	0.182	0.684	0.189	0.641
13	Al ₂ O ₃	23.241	22.392	21.793	31.484	23.732	25.699	27.000	24.593	25.937	21.586	15.139	32.861	27.295	15.576	18.498	23.986	19.904	20.345	18.100
14	SiO ₂	57.250	60.876	60.422	60.879	60.939	59.966	57.351	56.632	57.637	63.037	61.506	61.011	65.084	59.973	66.905	60.429	60.713	58.682	66.661
15	P ₂ O ₅	0.826	0.949	0.877	0.864	0.988	0.863	0.918	0.795	1.047	0.919	1.351	0.564	0.925	1.178	1.040	0.995	0.935	0.765	1.190
16	SO ₃	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.250	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
19	K ₂ O	3.064	2.711	3.073	2.964	2.216	1.642	2.147	2.682	1.706	1.872	3.330	3.408	3.950	4.256	2.480	1.788	3.022	3.287	2.558
20	CaO	0.881	0.865	0.671	0.425	1.358	0.485	0.601	1.080	1.885	0.742	9.374	0.118	0.085	15.657	1.078	1.089	0.869	0.871	1.238
22	TiO ₂	1.381	1.114	1.334	0.971	1.162	1.178	1.142	1.370	1.130	1.368	0.791	1.102	1.136	0.795	1.356	1.042	1.064	1.129	1.174
23	V ₂ O ₅	0.036	0.000	0.026	0.022	0.041	0.020	0.025	0.037	0.021	0.076	0.000	0.042	0.067	0.000	0.056	0.037	0.028	0.028	0.053
25	MnO	0.205	0.154	0.114	0.062	0.186	0.085	0.124	0.228	0.300	0.065	0.295	0.000	0.000	0.192	0.166	0.079	0.148	0.046	0.073
26	Fe ₂ O ₃	12.086	9.702	10.608	2.000	8.358	9.397	9.945	11.620	9.125	8.834	5.878	0.637	1.234	1.828	7.071	9.566	11.753	13.453	7.452
37	Rb ₂ O	0.022	0.014	0.021	0.019	0.011	0.009	0.015	0.014	0.015	0.015	0.015	0.024	0.020	0.029	0.014	0.012	0.013	0.026	0.015
38	SrO	0.025	0.021	0.015	0.018	0.033	0.018	0.027	0.024	0.037	0.020	0.051	0.018	0.029	0.159	0.023	0.023	0.035	0.047	0.032
40	ZrO ₂	0.000	0.048	0.048	0.035	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.048	0.040	0.025	0.046	0.050	0.000	0.057	0.079	0.000

単位:wt(%)

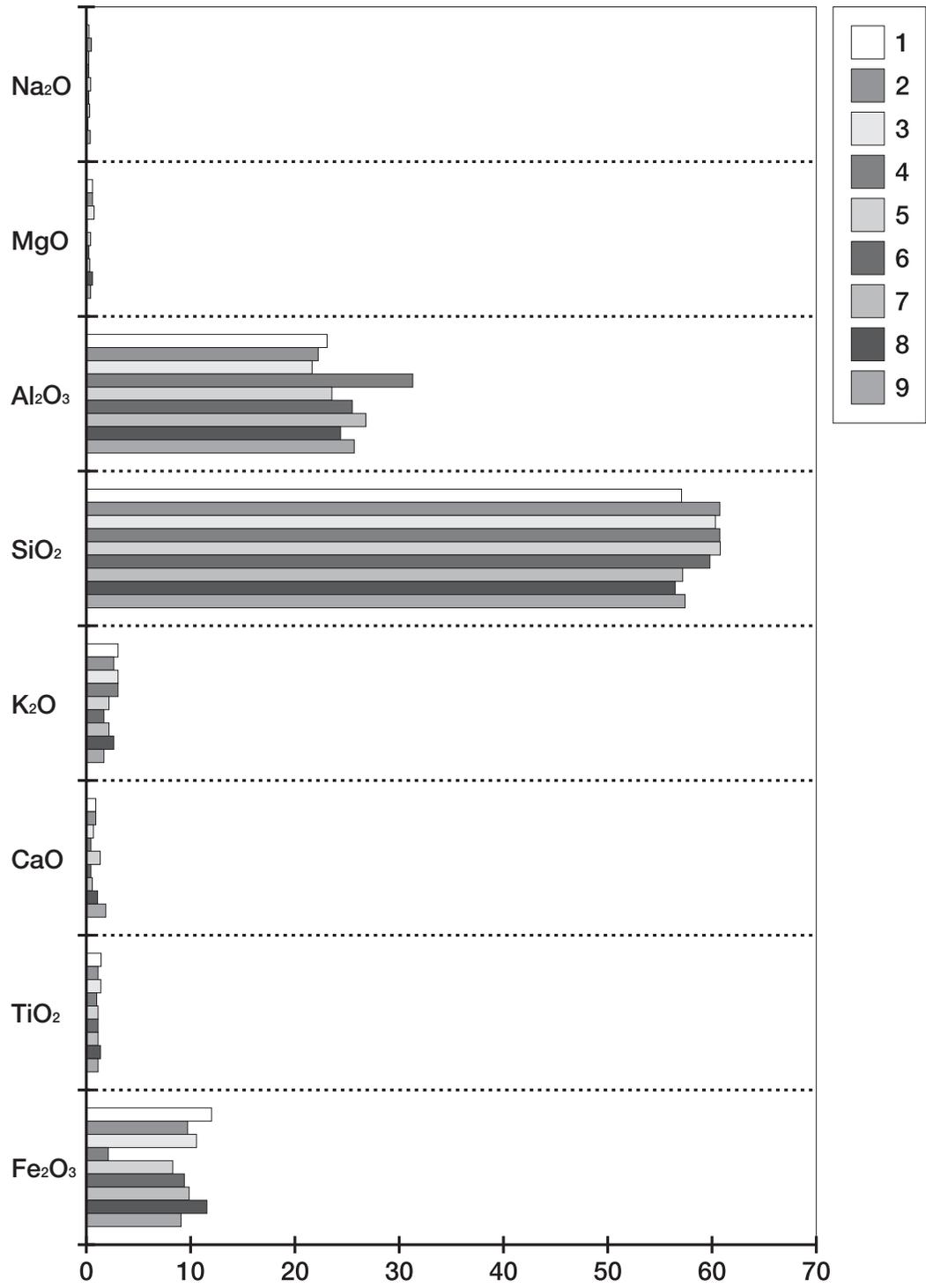


図1 堂平窯跡から出土した粘土の蛍光X線分析結果

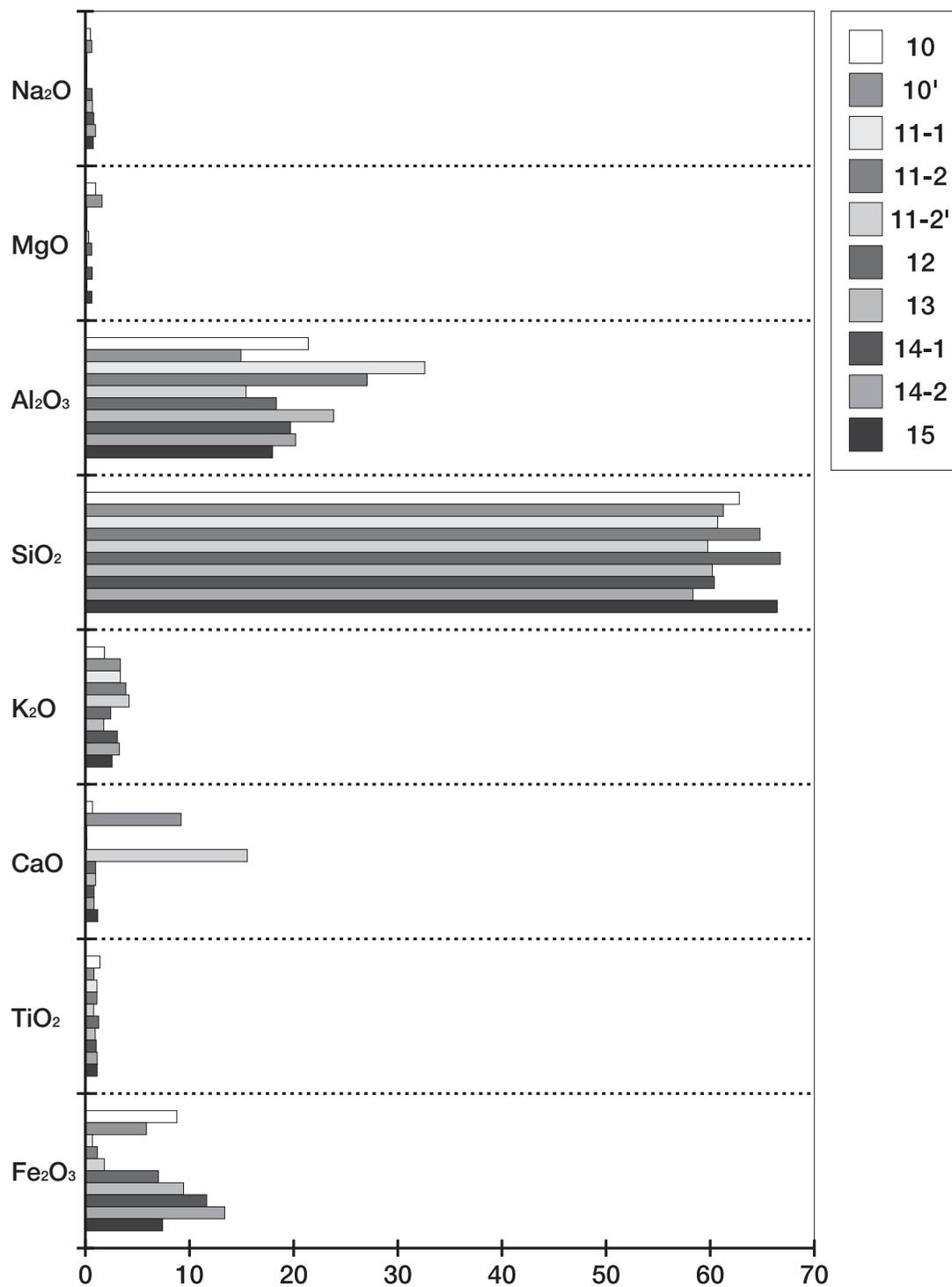


図2 堂平窯跡から出土した陶器、瓦、ハマ等の蛍光X線分析結果

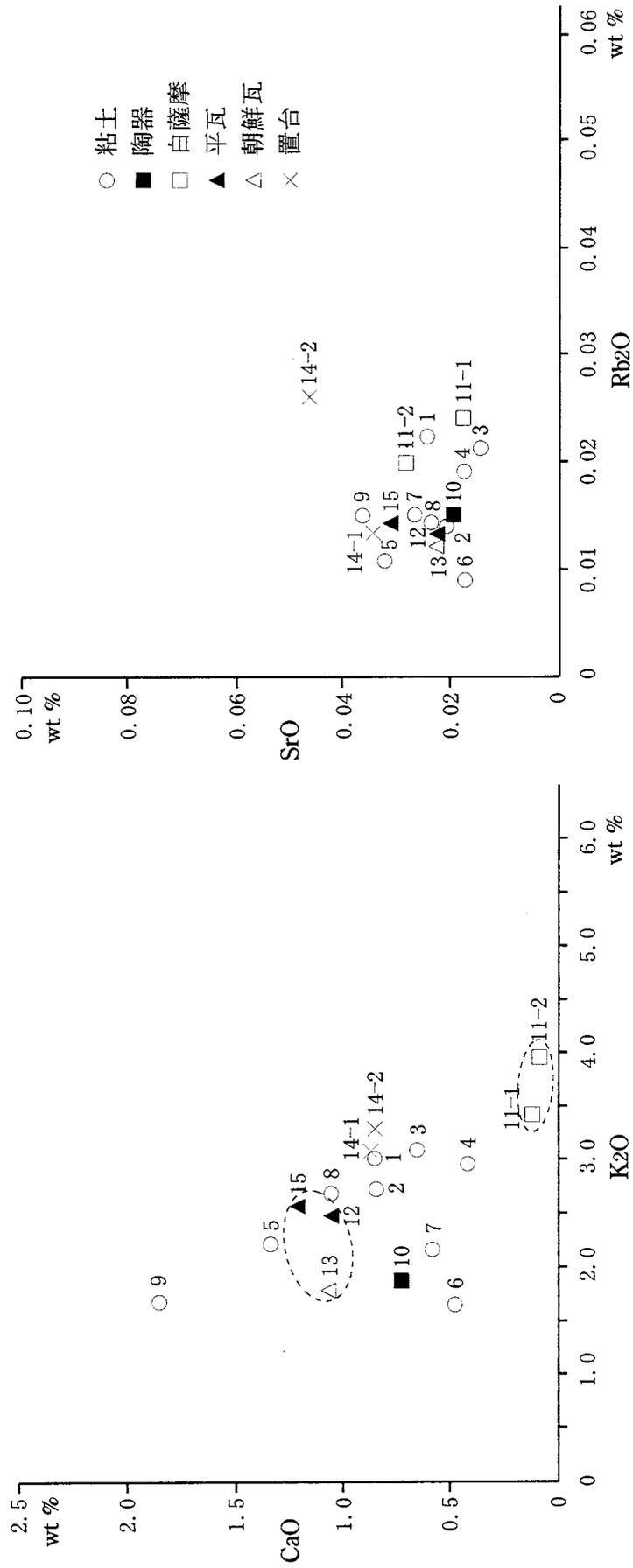


図3 堂平窯跡から出土した粘土, 陶器, 瓦, ハマ等のK₂O-CaO分布図およびRb₂O-SrO分布図



遺構内検出粘土 (No.1~No.9)



No.10



No.11-1



No.11-2



No.12



No.13



No.14-1



No.14-2(左)



No.15

鹿児島県 堂平窯跡関連試料の蛍光X線分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。土器（胎土）に含まれる元素のうち、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）の4元素は、土器胎土の地域性を示す有効な因子とされており、 K_2O-CaO 分布図や Rb_2O-SrO 分布図を主な指標として土器の産地同定が行われている（三辻, 1998, 1999）。

ここでは、堂平窯跡に関わる陶土（粘土）や陶器片について蛍光X線分析を行い、出土遺物の生産地や流通等に関する情報の収集を試みた。

2. 試料

分析試料は、鹿児島県内の各地で採取された陶土7点および陶器片2点の計9点である。試料の詳細を次表に示す。

試料No.	種類	採取地	備考
1	陶土	宇都窯（始良町）	1601～1608年？
2	陶土	御里窯（加治木町）	1608～1619年
3	陶器片	豎野冷水窯（鹿児島市）	1620年～，白薩摩
4	陶器片	串木野窯	1599～1603年？
5	陶土	加世田京の峯	
6	陶土	山川町成川	
7	陶土	霧島	
A	陶土	入来粘土	
B	陶土	笠沙陶石	

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット，ベリリウム（Be）窓，X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。以下に分析の手順を示す。

(1) 陶土

- 1) 試料を絶乾（105℃・24時間）
- 2) メノウ製乳鉢を用いて試料を粉碎
- 3) 試料を塩化ビニール製リング枠に入れ，圧力15t/cm²でプレスして錠剤試料を作成
- 4) 測定時間600秒，照射径20mm，電圧30keV，試料室内真空の条件で測定

(2) 陶器片

- 1) ダイヤモンドカッターを用いて，遺物のコア部分を抽出
- 2) クリーニングの後，試料を絶乾（105℃・24時間）
- 3) 分析装置の固定試料ステージに固定
- 4) 測定時間600秒，照射径20mm，電圧30keV，試料室内真空の条件で測定

4. 分析結果

各元素の定量分析結果（wt %）を表1および図1に示し，図2に $CaO-K_2O$ 分布図および $SrO-Rb_2O$ 分布図を示す。

(1) 陶土

K₂O-CaO分布図(図2)によると、鹿児島県内の7点の陶土はカリウム(K₂O)の含量によって2つのグループに分けられる。すなわち、カリウム含量が1.0%以下のグループ(試料1, 2, 6, 7, A)と、カリウム含量が6.5%以上のグループ(試料5, B)である。Rb₂O-SrO分布図によると、カリウム含量が高い試料はルビジウム(Rb₂O)の含量も高くなる傾向が認められる。また、試料7と試料Aはストロンチウム(SrO)の含量が0.1%以上と比較的高くなっている。

カリウム含量が1.0%以下のグループのうち試料1, 試料2, 試料Aの3試料は、主成分の珪素(SiO₂)の含量が55.6~57.8%と近似しており、試料6と試料7の62.7~67.5%と比較して明らかに低くなっている。また、アルミニウム(Al₂O₃)の含量も、試料1, 試料2, 試料Aの3試料は34.8~40.1%であり、試料6と試料7の27.9~29.5%と比較して明らかに高くなっている。なお、試料6はイオウ(SO₃)の含量が2.6%と比較的高い値であり、含量が0.8%未満である他の陶土とは明らかに異なっている。

カリウム含量が6.5%以上である試料5と試料Bは、アルミニウム(Al₂O₃)の含量が13.5%および25.5%と明らかに異なっており、珪素(SiO₂)の含量も73.4%および65.1%と異なっている。

(2) 陶器片

K₂O-CaO分布図およびRb₂O-SrO分布図(図2)によると、試料3(堅野冷水窯の白薩摩)は、前回分析を行った堂平窯跡の2点の白薩摩と近似しており、上記の7点の陶土とは分布が明らかに異なっている。また、試料4(串木野窯の陶器片)も、堂平窯跡の陶器類と近似しており、上記の7点の陶土とは分布が明らかに異なっている。さらに、珪素(SiO₂)、アルミニウム(Al₂O₃)、鉄(Fe₂O₃)などの元素についても、両者は堂平窯跡の白薩摩および陶器類と元素組成が近似している。

5. 考察

(1) 陶土

蛍光X線分析の結果、鹿児島県内の7点の陶土はカリウム(K₂O)の含量に大きな差異が認められ、含量が1.0%以下のグループ(試料1, 2, 6, 7, A)と、6.5%以上のグループ(試料5, B)に分けられた。

カリウム含量が低いグループのうち、試料1(宇都窯の陶土)と試料2(御里窯の陶土)は元素組成が近似しており、給源地が同一もしくは近接している可能性が考えられる。これらの陶土は、試料A(入来-粘土)と元素組成が比較的近似しており、相互の関連性が示唆される。なお、試料6(山川町成川-陶土)は、イオウ(SO₃)の含量が比較的高いことから、その他の陶土とは明瞭に識別される。

カリウム含量が高いグループの試料5(加世田京の峯-陶土)と試料B(笠沙-陶石)は、アルミニウム(Al₂O₃)の含量が明らかに異なっていることで識別される。

(2) 陶器片

試料3(堅野冷水窯の白薩摩)は、前回分析を行った堂平窯跡の白薩摩と元素組成が近似しており、胎土の給源地が同一もしくは近接している可能性が考えられる。試料4(串木野窯の陶器片)についても、堂平窯跡の陶器類と元素組成が近似しており、胎土の給源地が同一もしくは近接している可能性が考えられる。なお、いずれも鹿児島県内の7点の陶土とは元素組成が異なっており、相互の関連性は考えにくい。

文献

三辻利一(1998) 元素分析による古代土器の胎土研究. 人類史研究第10号, p.11-39.

三辻利一(1999) 元素分析による須恵器の産地推定. 考古学と自然科学4. 同成社, p.294-313.

表1 堂平窯跡に関わる陶土・陶片の蛍光X線分析結果

原子No.	化学式	陶土										陶片		
		地点・試料												
		1	2	5	6	7	A	B	3	4				
		宇都窯-始良	御里窯-加治木	加世田京の峯	山川町成川	霧島	入来粘土	笠沙陶石	堅野冷水窯	申木野窯				
11	Na ₂ O	0.112	0.130	1.843	0.293	0.069	0.133	0.401	0.214	0.861				
12	MgO	0.292	0.270	0.158	0.252	0.178	0.069	0.229	0.302	1.023				
13	Al ₂ O ₃	34.777	38.217	13.482	29.546	27.887	40.185	25.535	27.762	20.715				
14	SiO ₂	57.808	55.951	73.456	62.722	67.481	55.587	65.113	65.318	66.417				
15	P ₂ O ₅	1.073	1.046	1.363	1.404	1.638	1.291	1.173	1.250	1.163				
16	SO ₃	0.203	0.373	0.000	2.601	0.753	0.221	0.000	0.000	0.000				
19	K ₂ O	1.061	0.313	7.397	0.318	0.128	0.081	6.621	3.463	2.155				
20	CaO	0.273	0.472	0.277	0.273	0.165	0.086	0.108	0.105	0.796				
22	TiO ₂	1.504	1.660	0.056	0.950	1.084	1.350	0.078	0.886	1.157				
23	V ₂ O ₅	0.065	0.076	0.000	0.005	0.041	0.075	0.000	0.028	0.044				
25	MnO	0.041	0.028	0.019	0.022	0.005	0.014	0.008	0.005	0.092				
26	Fe ₂ O ₃	2.692	1.380	1.870	1.532	0.417	0.740	0.671	0.583	5.490				
37	Rb ₂ O	0.021	0.000	0.048	0.001	0.001	0.000	0.032	0.018	0.013				
38	SrO	0.038	0.045	0.008	0.042	0.103	0.152	0.005	0.029	0.021				
40	ZrO ₂	0.039	0.039	0.023	0.041	0.051	0.017	0.027	0.038	0.051				

単位:wt(%)

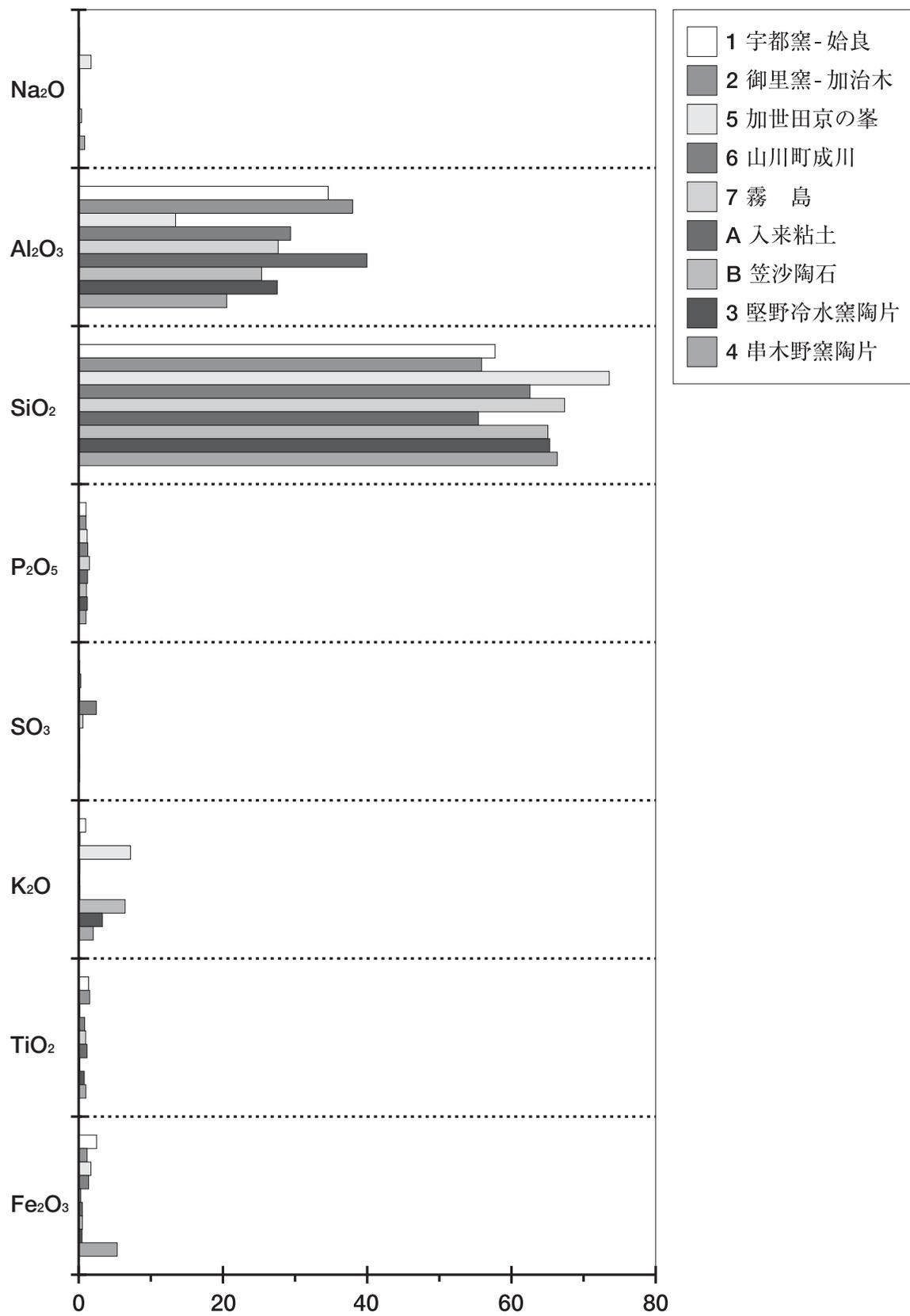


図1 堂平窯跡に関わる陶土・陶片の蛍光X線分析結果（おもな元素：%）

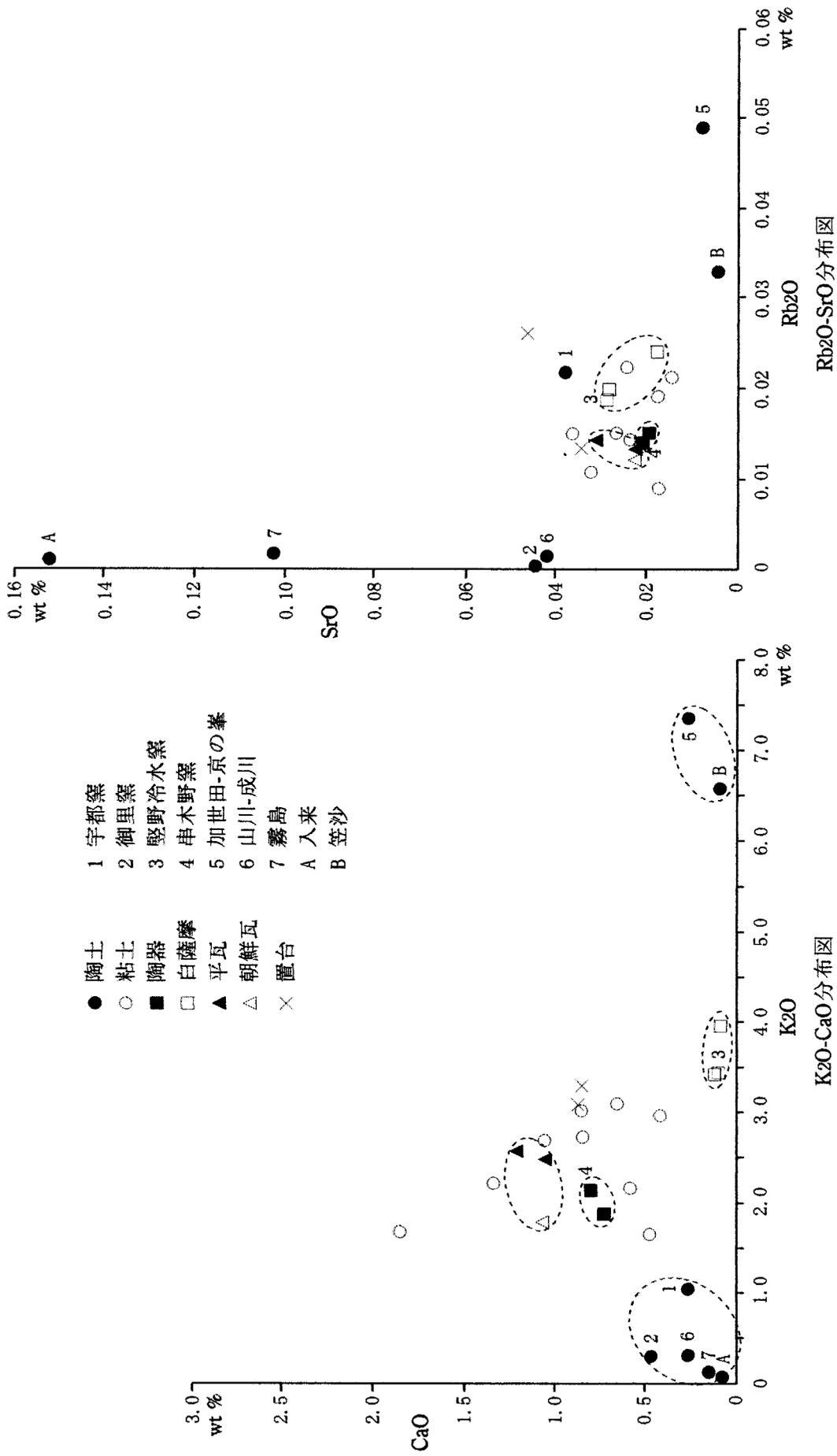


図2 堂平窯跡に関わる粘土・陶器等のK₂O-CaO分布図およびRb₂O-SrO分布図

前回分析分を含む。今回は赤色で表示。



分析試料の陶土・陶片

【資料提供】

宇都窯陶土・串木野窯陶片

御里窯陶土

霧島陶土

京の峯陶土

成川・入来・笠沙陶土

根津美術館

加治木町教育委員会

龍門司焼企業組合

南さつま市教育委員会（旧加世田市教育委員会）

鹿児島県工業技術センター

堂平窯跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

堂平窯跡は、17世紀代の薩摩焼の窯跡である。窯は、丘陵西側斜面に構築されており、長さ約30メートル、幅約1.2メートルの焼成室をもつ朝鮮式単室傾斜窯である。物原からは黒薩摩の甕、壺、猪牙、白薩摩の皿、碗等の破片、窯道具等の遺物が出土している。

今回の分析調査では、窯の木材利用に関する資料を得るために、物原、石組遺構、溝からは出土した炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、石組遺構埋土、溝、物原等から出土した炭化材6点（試料番号1-6）である（表1）。

2. 分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、針葉樹1種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹2種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・シャシャンボ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxyylon*） マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道が認められる。水平樹脂道は全て破損しており、エピセリウム細胞は観察できない。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*） ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・シャシャンボ（*Vaccinium bracteatum* Thunb.） ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、単列で8細胞高前後のものと5-7細胞幅、30-60細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

4. 考察

炭化材は、石組遺構埋土、溝、物原等から出土したものであり、炭化していることから燃料材などとして利用した結果、火を受けて炭化した可能性がある。炭化材には、複維管束亜属、クヌギ節、シャシャンボの3種類が認められた。複維管束亜属は、やや重硬で強度が高く、松脂を多く含むために燃焼性もよい。クヌギ節とシャシャンボは、いずれも重硬で強度が高く、薪炭材としても利用される。とくに、クヌギ節は、国産材の中でも薪炭材として特に優良な種類の一つとされる（平井，1979）。

複維管束亜属のうち、アカマツは現在でも陶器焼成の燃料材として利用される（平井，1980）。このことを考慮すると、堂平窯跡でもマツ材を陶器焼成の燃料材として利用していた可能性がある。一方、クヌギ節やシャシャンボも燃料材として利用された可能性がある。いずれも石組遺構

埋土から出土しており、石組遺構で少なくとも2種類の木材が混在して利用されていた可能性がある。また、物原等と樹種構成が異なることから、使用時の種類構成が窯の燃料材とは異なっていた可能性もある。しかし、県内では同様の窯から出土した燃料材の樹種に関する資料が乏しく、また今回は同定点数も少ないため、遺構による種類構成の差異については不明である。今後さらに各遺構から出土する炭化材の樹種同定を実施し、検討していきたい。

引用文献

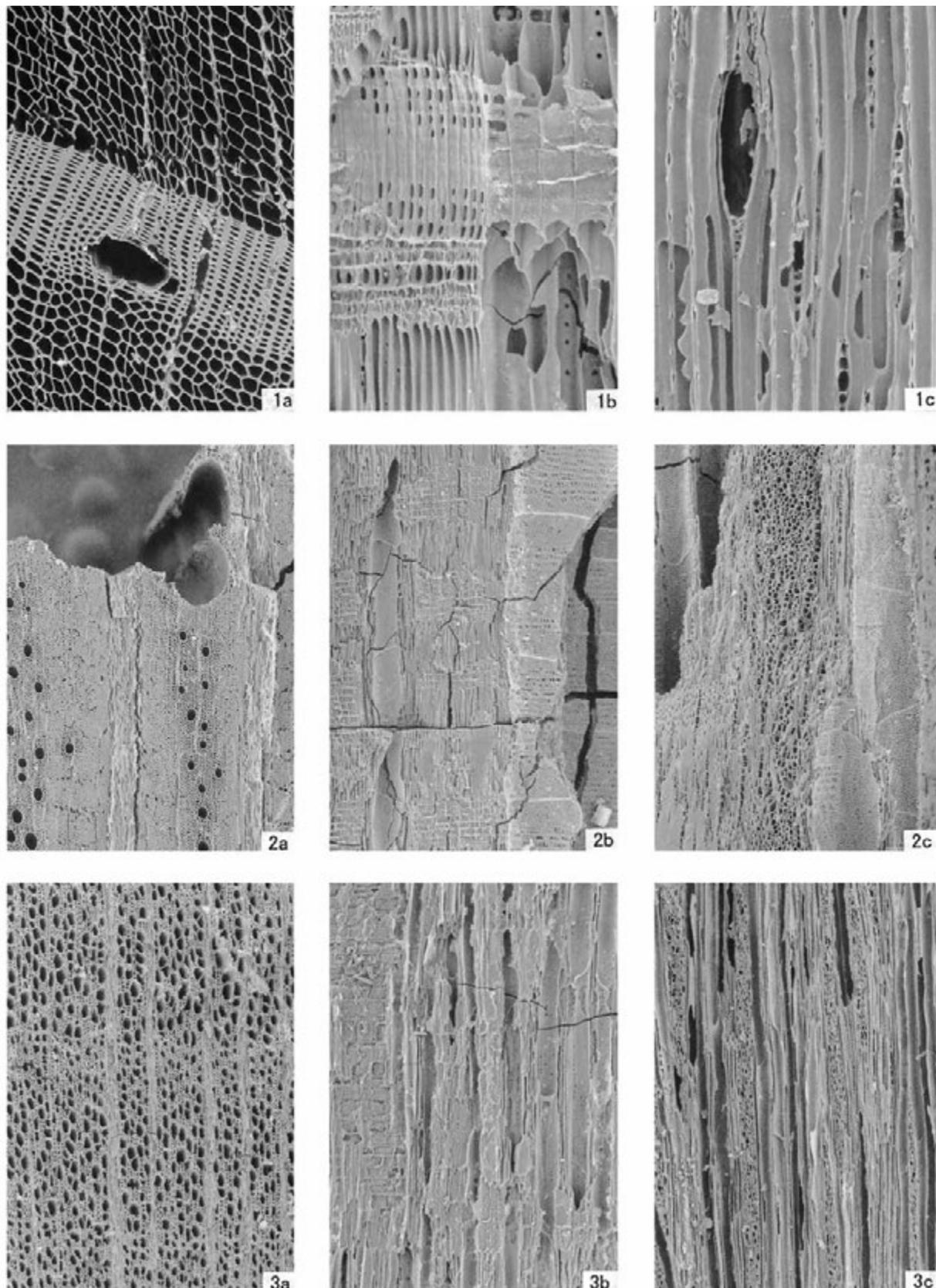
平井 信二, 1979, 木の事典 第2巻. かなえ書房.

平井 信二, 1980, 木の事典 第7巻. かなえ書房.

表1. 樹種同定結果

番号	地点・遺構	樹種
1	石組遺構埋土内	シャシャンボ
2	石組遺構埋土内	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	7-C溝内	マツ属複維管束亜属
4	7-C溝内	マツ属複維管束亜属
5	物原1-IV内	マツ属複維管束亜属
6	6-C内	マツ属複維管束亜属

図版1 炭化材



1. マツ属複維管束亜属 (試料番号 3)
 2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (試料番号 2)
 3. シャシャンボ (試料番号 1)
- a: 木口 b: 柁目 c: 板目

200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 2-3b,c
 100 μ m: 1b,c

第VI章 まとめ

1 立地について

美山集落の西側の外れで、集落のある台地が西側の水田地帯に下りる直前の西側斜面のほぼ中央部に位置する。窯が築かれた場所の北側は若干小高い山となっており、東側は比高差約50mの深い谷となっている。

窯は東北から南西に伸びる尾根に対してほぼ直交するような軸方向を持っている。焚き口から西側の水田面までの比高差は約7mほどである。

ここを窯設置の場所としたのは、西～北西方向からの風を採り入れ、小高い尾根を経て東側の深い谷へと流すことを意図したものと考えられる。水田地帯と深い谷との最も狭隘な部分は60～70mほど南側にあるが、そこでは十分な窯の長さが確保できなかったことによる可能性が考えられるほか、高さの不足も想定される。また、ここでは水田地帯の西側から採り入れた風が直接的に東側の谷に流れてしまうことや、風の強さをコントロールしにくい状況となることを考えての結果とも考えられる。

2 窯の構造と造り替えについて

焚き口は自然角礫を用いて幅が1.0m、長さが1.2mに造られている。礫の上位は削平されていることから上部構造は不明である。ただ、礫の間には粘質を帯びた土が残存していたことから、粘土による上部構造の構築が考えられる。礫の外側も削平を受けていたことから補強の構造などは不明であるが、周辺部の堆積状況から見ると、礫で囲まれた部分の上部構造を補強する構造はなかった可能性が大きいと思われる。なお、焚き口部分の床面の焼成面は1面のみであったことから、造り替えは考えられず、存続期間中継続されたものと考えられる。ただ、上部構造まで造り替えがなかったとは言い切れない。

焚き口に近い焼成室下部は、明瞭な床面の残存状態が良好でないため、造り替えについては不明とせざるを得ない。また、窯本体の補強についても、周辺が削平を受けていることから明確にはし得なかった。

それに対して、焼成室下部でも焚き口から6mほど離れたより上方では、窯本体の少なくとも北側には成層したものではない人為的に固められた層が見られたことから、窯のある高さまでは窯の壁あるいは天井を補強する目的の構造が造られていたことが想定される。

この付近では、火熱を受けて硬化した床面が2～3面あることから、窯創設後の造り替えが1～2回あったことがわかる。なお、最下部の床面は最終の床面よりも約20cm下位にあり、そのレベルの北側の壁があったと想定される床面の端部までの距離は、中央の主軸から約70cmあることから、開窯当時の窯の幅は140cmであり、閉窯時の120cmと比べて約20cm広がったことがわかる。

また、この部分の壁は1～2枚が観察されることから、造り替えが行われたことがわかる。ただ、床面から立ち上がる長軸方向の痕跡が、壁の構造物であったと考ええると、床面はそのままであっても、閉窯までに幅が狭くなった時期があったことになり、そこにも1～2回の造り替えが行われた可能性が考えられるのである。

焼成室の中央部での床面及び壁の観察で、窯本体の北及び南側には窯本体を補強した痕跡と考えられる人為的な層の堆積が見られる。これは、焚き口から最低20.6mの地点までは確認できることから、焼成室中央部までは少なくとも窯本体を補強する構造が造られていたことがわかるのである。

床面及び壁はそれぞれ2～3枚程度観察されることから、窯創設後1～2回の造り替えが行われたと考えられる。ただ、床面と壁の造り替えの時期が同時であるか否かによって、最終的な造り替えの回数が異なってくることになる。つまり、床面と壁の造り替えがすべて同時であれば、開窯後2回の造り替えが行われたと考えられることになる。しかし、廃窯時である最終的な床面にも壁の痕跡が1～2枚は残っているのに加えて、断面観察でも最終的な壁の外側にも壁が1～2枚あること、さらに初期の床面に対応する壁が痕跡として1～2回はあったと考えられることを考慮すれば、床面と壁の造り替えが必ずしも同時に行われたとは言い切れない。そうであれば、開窯後、最大で6枚の壁が考えられることになることから、造り替えは5回が考えられることになる。

ところで、焼成室上部から窯尻にかけての部分では、焚き口から最大で25.3mの地点まで床面の残存が、また、23.2mの地点まで壁の残存が確認されている。これについても、床面及び壁それぞれに1～2枚ほどが観察できることから、造り替えがあったことは確認できる。これ以上の部分については、焚き口から26.4m～27.4mの地点で床面の残存が確認できるものの、広がりとしては極めて小規模で、しかも若干ずり落ちている印象を受ける位置にあることから、データとしては必ずしも良好な資料とは言い難い。また、これらの地点では、床面の一部が残存しているのみで、壁及びそれを含む周辺は残存していない。そのために、窯本体の補強の状況等は確認できなかった。

ただ、窯尻に極めて近い部分で、床面の下部に窯壁などのいわゆる‘ガラ’が盛られている状況が確認された。これは、確実に窯に伴ったものであり、ほかの部分には見られないことから特別な意味を持つものと考えられる。つまり、窯を壊した壁、または床を盛って床面を延長したのだからである。それでは、これはいつ盛られたものであるのか、言い換えれば、堂平窯は開窯当時から

ら総延長31.2m以上の窯であったのか、ということなのである。

ここで、長軸方向の断面を見てみることにする。これによると、焚き口から23.8m（平面上では22.8m）の地点で開窯当時と考えられる床面が終わり、それより上部には新たな土が盛られている状況が確認される。先ほど述べた‘ガラ’はそこより4.6m（平面上では4.4m）上方に位置していることから、確実に開窯当時にはなかった場所であることがわかる。つまり、この部分は開窯後のある時期に延長されたと考えられるのである。そうであれば、この‘ガラ’はほかでもない堂平窯の壁あるいは床面を用いて盛られたものと思われるのである。‘ガラ’を用いる理由は、水分を含まず、乾燥しており、しかも水分を寄せ付けないと考えられることに依るのである。

3 溝について

窯の北側に接するように、窯に沿うように溝が掘られていた。これは、窯が北側から南側へと傾斜した尾根に直交する向きに築かれたことから、北側からの雨水が直接かかる事態が懸念されたことから、窯と同じ方向に、しかも窯と同様に東が高く西に低くなるという傾斜に合わせて掘られたものと考えられる。

ただ、窯の稼働に伴っては雨水がかかる事態がほとんど見られなかったと考えられ、溝のほとんどは埋められたと考えられる。その上で、若干窪んだ西側の部分を窯で焼かれたものの破損品を投棄したものと思われる。それが、溝の上部で検出された陶器片の一群である。

溝を埋めたことから窯と北作業場との比高差がほとんどなくなったことで、西側を通るようになったことから、次第に道が形成されて行ったものと思われる。

4 北作業場について

溝を隔てた東西約10m、南北約23mの狭隘な場所を開削するなどして、作業場として用いていたと考えられる。最も北側に2間×2間に南側に半間の庇を持つ掘立柱建物を建てて、主要な作業のスペースとしている。窯近くに建てられていることと、溝を埋めた跡の道が焚き口に向けて見られることから、窯の作業時の休憩あるいは仮眠の場であった可能性も考えられる。

建物の南側には目隠しかとも思われる塀があり、さらにその南側にはピットや粘土の入った土坑、石組みを伴った粘土の入った遺構、道跡などが検出された。

ピットは、本来的には建物の一部と考えるのが一般的であろうが、現地での調査でも整理作業の段階でもなかなか建物として復元できるような状況ではなかった。いろいろな方向に3～4基が並ぶ傾向は見られたが、それに対応するピットが検出されなかったことから、建物と

判断することはできなかった。

粘土を伴った土坑は、基本的には浅い土坑が掘られた中に遺棄されるように検出されたことから、製品として成形する材料として将来されたものと見るよりは、窯の破損等に伴って補修する目的で準備されたものが、最終的な窯の廃棄の段階なりに遺棄されたものである可能性が高いのではなからうか。ただ、色の違いや、製品の材料となる精製された粘土もあったとのことであることから、当初から窯補修の材料としての位置付けであったかどうかについては不明と言わざるを得ない。

石組みを伴う粘土を伴った土坑は、素焼きの鉢が伏せられた状態で確認されたことから、水簸の場であった可能性も考えられる。

5 物原について

窯の上方に位置している物原Ⅰ及びⅡについては、陶器片や窯壁などを含み、ある程度の層を成して堆積している状況が見られたことから、一般的な意味での物原としても良いと考えられるものの、第1地点のそれ以外の物原については堆積の状態が異なっていることから、一般的な意味での物原とは言い難い状況がある。殊に物原Ⅳについては窯壁などの‘ガラ’が一行に配置され、また、窯に近接して2個の石が並べられていたことなどから、積極的に物原と規定するには躊躇を覚える。また、窯に近接した物原Ⅲ、Ⅴ、Ⅵも粘質の強い土の中に窯壁や焼土が見られ、陶器片はほとんど確認されなかったことから、物原との呼称は適当か否かについて再考すべきかも知れない。しかし、ではどのように呼称すべきかについて、統一した意見を持ち合わせていない現状においては、積極的な意味ではないにしても、窯で使われた物を遺棄する場としての物原との呼称はあながち間違いであるとは言えないことから、物原との呼称を用いることにしたい。

6 南作業場について

ピットなどは検出されていないものの、一行に並べられた‘ガラ’や窯に近接して2個の石が平行に並べられていた状況、及び全体的に平坦に整地されていたと考えられる状況、それに北作業場とほぼ同じようなレベルにあることなどから、作業場と推定した。

窯に近接して並べられた2個の石は、この面に降った雨水を排出するための溝と考えられるほか、‘ガラ’が一行に並べられたところは、その範囲を示すものと想定され、平坦に造成された状況は作業のしやすさを確保するためと考えられる。この面の西側は急傾斜の段であったことも、作業等の場としての想定を肯定するもののように思われる。

ただ、作業の内容については、建物を伴うものでない

ことから、不明と言わざるを得ない。それでも北作業場とは異なった機能を有する場であったことは、ほぼ確実であろう。

7 2地点の物原について

美山地域の窯の物原で判明している、割合に初期と考えられる窯の物原は、南京皿山窯跡に代表されるように窯の上方に形成されることがある。

最初期に位置付けられる堂平窯でも、窯の下方には物原は見られず、すべて窯の周辺及び上方である。先述したように、一般的な意味で確実に物原と言える第1地点の物原Ⅰ及び物原Ⅱは、窯の上方に位置している。そのことから、この美山地域に移り住み、最初期の窯を築いた先人たちは、窯で焼かれ、使用されて遺棄すべき物は、窯の上方に遺棄するものとの認識を持っていたものと考えられる。

その意味から言っても、窯の東側に当たる尾根を隔てた谷に形成された、窯で焼かれ、使用された、遺棄すべき物が、第2地点と呼称した谷に遺棄され、そこで確認されたものを物原と呼ぶのに、何ら障害が生ずることはないと考えられるのである。

8 窯の移設保存について

発掘調査の最中に、地元から堂平窯跡の移設保存についての要望が出され、美山地域に残る最初期の薩摩焼窯跡としての重要性に鑑み、当時の東市来町長と事業主体者である当時の建設省鹿児島国道工事事務所長の協議等を経て、美山地域の郵便局裏の小公園に移設し、永久保存することが決められた。

移設については建設省が負担し、それを覆う上屋の建設は地元東市来町がその経費を負担することで決着し、多大の経費を伴った窯跡の移設保存は平成11年3月までに終了し、上屋の建設もその後に行われて公開され、現在に至っている。

そのように多大な経費を伴った窯の移設保存であったことから、美山地域に残る最初期の薩摩焼の窯跡として将来にわたって保存、活用されることを期待している。

移設保存に関しては、多大な経費を余儀なくされたこ



(写真) 堺市環濠都市遺跡出土の16世紀末の朝鮮陶器

とは疑いようのない事実であり、それに向けての地元の強い要望があったればこそ実現した画期的な出来事であったと考えられる。

だからこそ、その後の管理が十分になされなければ移設保存を強力に要望した地元の意向に背くものであるばかりでなく、貴重な文化財としての薩摩焼の窯そのものの位置付けも相対的に低いものとなるように思われて、寂しさを覚えるのである。調査を担当した者としては、調査にあたって徹底して断ち割りを行い、可能な限りのデータ、情報を得るために立ち向かえば良かったのかも知れない、という思いが残るのである。完全に切り刻みながら最期を看取りつつ、最大限の情報を得て調査を終えること。どちらが良かったのかという思いに駆られる前に、移設保存された窯を、十二分な配慮で未来に引き継いでくれることを望むばかりである。

(文責 繁昌正幸)

第183表 主な器種の出土量

	第1地点			第2地点	合計	
	溝	物原Ⅰ	物原Ⅱ	物原Ⅰ・Ⅱ		
碗	0.25	0.25	0.25	2	2.75	0.57%
皿	-	-	-	1	1	0.21%
碗 (白色)	-	-	0.25	2	2.25	0.47%
皿 (白色)	-	-	0.25	2	2.25	0.47%
蓋 (円板型)	0.25	0.25	0.25	2	2.75	0.57%
水注	0.25	0.25	0.25	0.5	1.25	0.26%
徳利	1.5	3	3	19	26.5	5.52%
鉢	-	0.25	0.25	8	8.5	1.77%
片口	1	1.5	1	5	8.5	1.77%
播鉢	1	1.5	1.5	6	10	2.08%
蓋 (浅鉢型)	1	2	2	7	12	2.50%
甕	1.5	3	2	20	26.5	5.52%
壺	1.5	3	2	23	29.5	6.15%
植木鉢	-	0.25	0.25	2	2.5	0.52%
瓦	0.5	3	8	65	76.5	15.95%
窯道具	3	14	3	35	55	11.46%
その他 器種	7	41	13	151	212	44.19%
合計	19	73	37	351	479.75	
割合	4%	15%	8%	73%		

※ 出土量の数値は深いパンケースの数を表す。陶片が八分入った状態でのカウントである。

※ 窯跡全体のパンケースの数量は、790ケースである。

出土遺物から見た堂平窯 窯構造

堂平窯には新・古二様式の窯があると『薩摩焼の研究』で提唱されてきた。これは、元屋敷窯跡の推定地から採集された瓦片や陶片が、堂平窯跡採集品と類似しており、これらが比較的古い段階の陶片であると比定されたことと、磁器に伴う窯道具が採取されたことによる。これにより、初期窯として朝鮮式半円筒形単室傾斜窯が存在し、次期窯として肥前系連房式登窯の存在が想定されたのである。

今回の発掘調査によって「単室傾斜窯」、又は「単室登窯」と呼ばれる窯体1基が確認された。これは、いち早く検出されていた串木野窯跡（第4図参照）と同様の構造と判断した。串木野窯は文献や伝承から推測して、朝鮮半島の築窯技術で造られた窯とされていたが、近年、韓国の発掘調査により、これを裏付けるような発見（第313・314図）が増加していることから、今回検出された窯体は16世紀代の朝鮮半島に系譜を追える資料と考古学的に立証されたと言えよう。また、膨大な出土品の中に占める磁器資料が極めて少ないことや周辺地形等から、堂平窯はこの朝鮮様式の窯体1基で、『薩摩焼の研究』で報告されたような肥前系連房式登窯が別に存在したかは疑わしい。

なお、国内で、同様の窯構造が確認されているのは、岸岳古窯跡群の皿屋上窯（唐津市、旧北波多村）が挙げられる。（註2、第315図）共に16世紀末から17世紀初頭に朝鮮半島から陶工たちが移動したという歴史と、主として焼成されている器種が、大形の貯蔵器であることが共通する。

製品

堂平窯跡では、物原や遺構内などから大量の遺物が出土した。（第183表参照）そのほとんどは廃棄された甕・壺・徳利等日用陶器の破片であり、この他釉瓦も出土した。また、これらの陶片に伴い、窯詰め時に使用された様々な種類の窯道具も大量に出土した。

一方で、日用陶器の出土量からすると少量ではあるが、白色陶胎の上品も出土しており、堂平窯でさまざまな種類の陶器が焼かれていたことが窺える。

胎土は緻密でよく焼き締まっており、不純物はほとんど含まれないが、一部に微細な黄白色のパミスが観察される資料が見られる。粘土に軽石をすりつぶして混和剤として使用している可能性も考えられる。

成形方法は、轆轤上で粘土紐を巻き上げ叩いており、器壁は非常に薄く、製品の内面には同心円状のあて具痕が残り、口縁部等のつくりがシャープな資料が多い。このような成形技法や堂平窯の製品の器形、口縁部のつくり等は、15世紀後半～16世紀前半とされる朝鮮陶器窯か

らの出土遺物（第314図）や堺環濠都市遺跡から出土した16世紀末に相当する朝鮮陶器（P366写真）と酷似しており、堂平窯の初期の製品には朝鮮的製陶技術が観察できる。しかし、このような特徴は経年変化により、器壁が厚くなり、口縁部等のつくりもシャープさに欠け、成形方法もタタキ成形のあと、ヘラ状工具による横方向な調整が施されるなど、現在の苗代川焼に多用される技法へと変化している。

また、堂平窯初期に製作された製品においては、碗や水注といった小物の製品も、轆轤成形を行わず、粘土紐巻き上げでタタキ成形により製作されている。碗の高台は削り出さず、付け高台であるためバチ状を呈しシャープさに欠ける。このことから、堂平窯の陶工は、「轆轤成形を得意としない集団」、つまり朝鮮半島における「甕匠」（註3）であった可能性が考えられる。

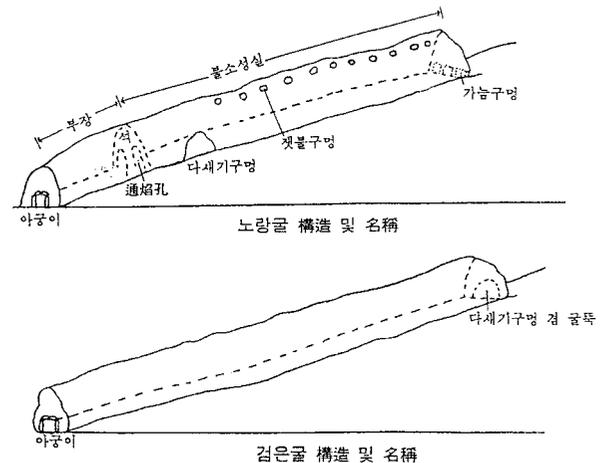
釉薬については、褐色系に発色する鉄釉と緑褐色系に発色する灰釉の2種類が見られる。鉄釉は光沢が強く、厚くかかり、灰釉は透過性が高く、光沢のないものがほとんどである。鉄釉と灰釉の割合は、器種ごとにより違いが見られるが、全体的に初期に生産された製品には灰釉が多く、その後鉄釉の割合が増加する傾向にある。

窯詰め

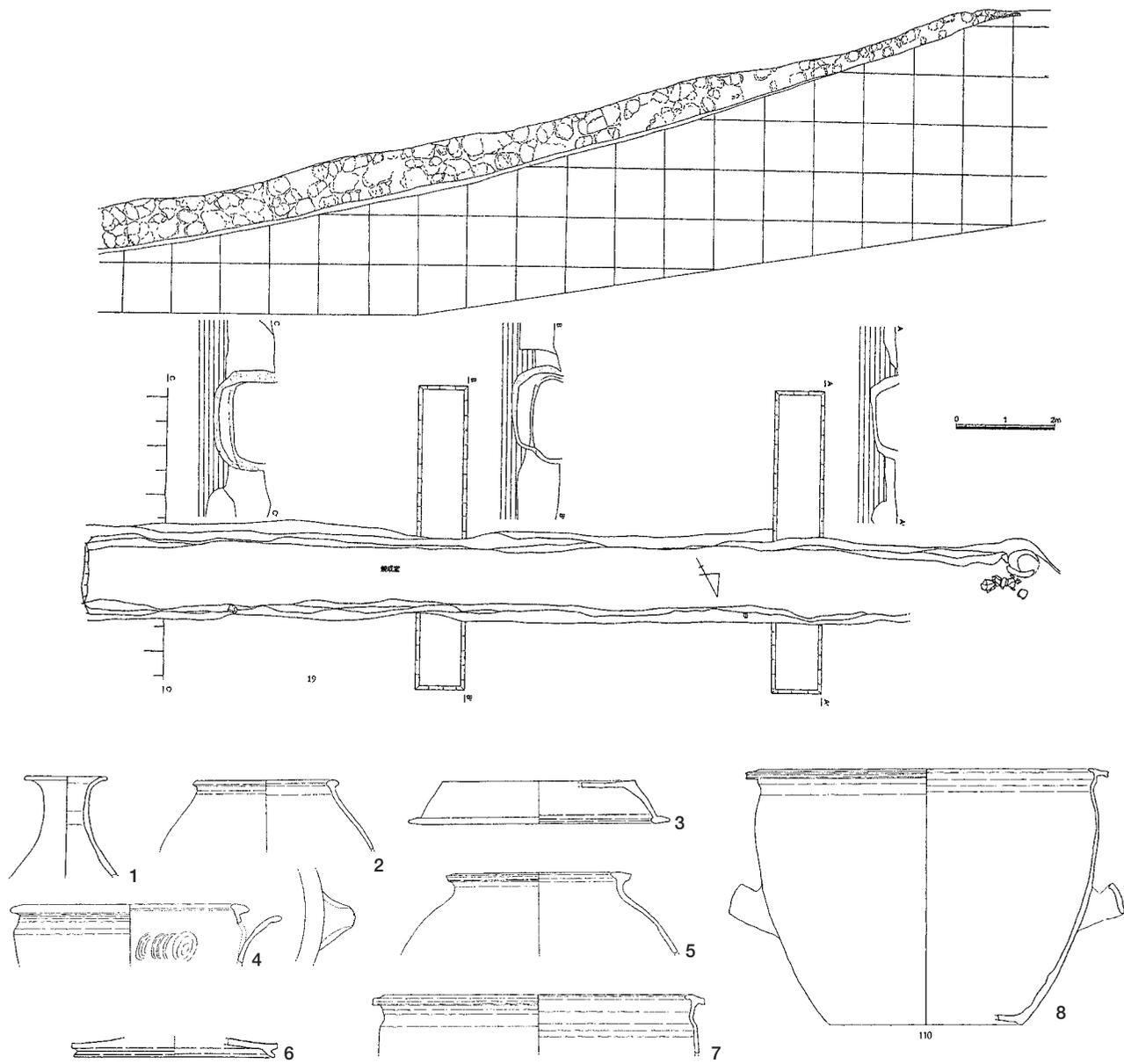
窯詰めについては、窯道具と重ね焼きの技法について述べておきたい。

窯道具は、馬蹄形ハマ・棒状ハマ・スタンプ型ハマ・トチン・サヤ鉢が出土し、他に、色見孔の蓋をハマとして転用したものや、粘土塊を簡易に整えて使用したもの、また、窯道具と思われるがはっきりしないものも見られる。

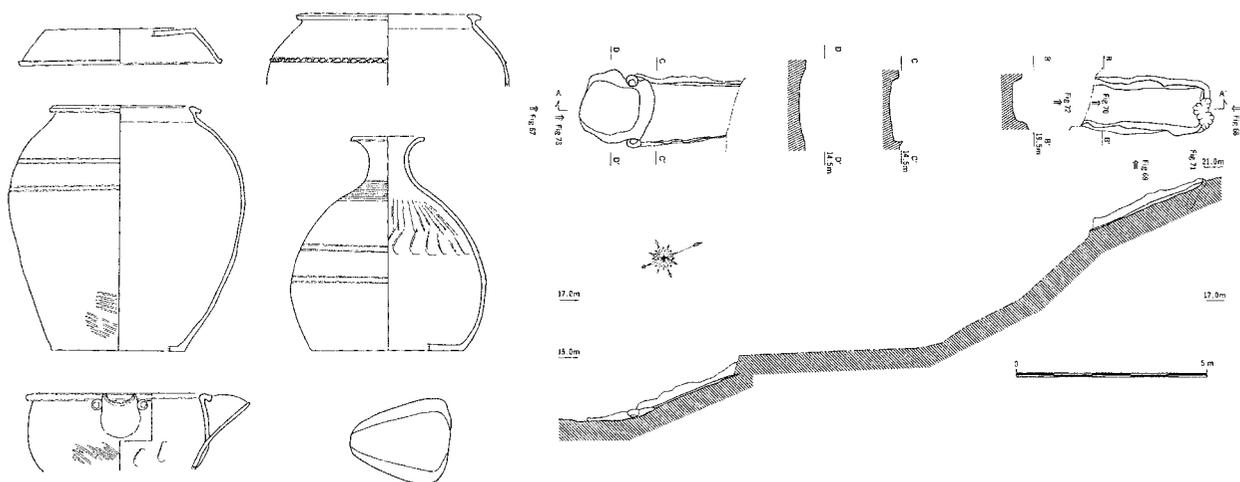
断面が馬蹄形、または台形・くさび状の形状を呈したハマを「馬蹄形ハマ」としたが、これは『薩摩焼の研究』で「馬蹄形据臺」として報告されているもので、「傾斜した窯床に置きこの上に器物を据える」と説明されている。今回の調査では、馬蹄形ハマをその平面形から三角形・



第313図 韓国濟州島における朝鮮王朝期の窯模式図（註1）



第314图 清道葛池里寨跡 出土遺物実測図



第315图 皿屋上寨跡 出土遺物実測図

円形・長方形の3種類に分類した。

三角形の馬蹄形ハマは、窯道具全体の約7割を占め、主に傾斜する床面と甕・壺等の大形の製品の間挟んで使用し、さらに、製品とハマの間には貝殻を挟んでいるため、ハマの上面に貝目が焼き付いている。また、貝目が重複している資料も見られ、複数回の使用が考えられる。円形のもの、上面に高台痕や貝目が残る資料が見られることから、碗等に使用されたもので、県内の他窯では、共に17世紀初頭の宇都窯跡(始良郡始良町)、御里窯跡(始良郡加治木町)で確認されている。また両面に使用された痕跡が残る資料も見られるため、これも複数回使用したものと思われる。長方形のものは、瓦の出土量に伴いその出土量も増えることから、瓦を焼成する際使用されたものと思われる。

棒状ハマは、少量の粘土塊を掌内で棒状に成形して、製品の外底面や馬蹄形ハマの上に置き、水平の微調整を取るために使用したものである。表面には成形時の指跡の凹凸が明瞭に残り、外底面に使用したものは、底面に沿うようカーブしている。

スタンプ型ハマは、瓦の出土量の増加と共に出土量が顕著となる傾向が見られる。瓦に熔着した状態で出土した資料があることから、瓦と瓦の端に挟んで使用したもので、管見の限り、このような窯道具は知られていない。

色見孔の蓋は、出土したものほとんどに貝目が残っており、ハマとして再利用したものと思われる。

その他、窯道具ではない可能性も考えられるが、円板形の体部の上面端部に、粘土紐を斜め上方に貼り付け、中央は穿孔し、その周囲に大豆粒大の突起を付けた資料がある。類似品が、韓国の清道墓池里甕器窯跡でも出土しており(第314図6)、用途不明と報告されている。

トチンは、堂平窯の開窯時から使用されていたのではなく、ある時期から使用されるようになる。その時期については後に述べることにしたい。数量はそれほど多くなく、鼓型・シノ型のものが見られる。

サヤ鉢は、上手の白色陶胎の碗類を焼成するために使用されたもので、サヤ鉢の内底面には、白色の高台痕が残る資料が見られる。白色陶胎の碗類の出土傾向からトチンと同様に、サヤ鉢も開窯時から使用されていたのではないと考えられる。大部分が、口縁部を上向きにして重ねて使用しているが、一部にサヤ鉢の外底面に高台痕が残る資料が見られることから、口縁部を下向きにして被せるようにして使用する例も確認された。また、サヤ鉢とサヤ鉢の間、又はサヤ蓋との間には、胎土目又は貝目が使用されている。

次に、窯詰めは、合わせ口や、口縁部を上向きにして重ねており、この方法を現在の苗代川の陶工たちは「カップラ」「トンキン」と呼んでいる。合わせ口は、片口・播鉢の口唇部の釉を拭い取り、口唇部と口唇部を合

わせている。また、口縁部を上向きにして焼成した播鉢には、内面口縁部下位に棒状ハマの目跡が2か所観察できる資料があり、製品同士の熔着を防ぐため、その隙間に粘土や貝が用いられる。胎土目は、主に白色陶胎の碗・皿類に用いられ、見込みに見られる。貝目は主に、甕・壺の口縁部や外底面に見られ、前述したように馬蹄形ハマの上面にも残るが、碗の畳付にも見られる。また、白色陶胎の碗の見込みや、サヤ鉢の口縁部や内底面にも用いられている。その他に、「胎土詰貝目」とした目跡は、小形の二枚貝の内側に、粘土を詰めて使用した例である。調査では、陶片に混じって窯詰めを使用した貝殻も一緒に出土している。その種類は、マルサルボウガイ・シジミ・イタヤガイ(写真図版102参照)である。サルボウガイは現在でも東市来周辺の浜辺で採集することができ、シジミは、神之川等に生息していたものと思われる。

溝内出土遺物及び物原出土遺物の特徴

堂平窯跡の周辺に形成された物原は、大きく2つの地域に分けることができた。

1つは第1地点とした地域で、窯体の周囲に形成された物原群で、物原Ⅰ～Ⅵとした。なお、物原Ⅲ～Ⅵに関しては純粋な物原としての堆積はみられないため、攪乱に近い状態である。

2つ目は第2地点とした地域で、集落へ続く里道から斜傾する谷川に向けて形成された物原である。今回の報告では、物原1、2と2地点に分けて遺物を報告したが、地形の状況や遺物の特徴などから考えると、物原1の遺物が斜面をころげ落ち物原2を形成したものと考えられる。

これらの物原から出土した遺物を観察すると、器種や器形、製作技法などの点で違いが見られ、これは物原が形成された時期差によるものと考えられる。また、窯体の北側に掘り込まれた溝内から出土した遺物も含めて考えると、大まかではあるが堂平窯の製品の経年変化が窺える。

そこで、まず溝内出土遺物及び第1地点物原Ⅰ、Ⅱ、第2地点物原1・2内出土遺物についてその特徴を簡単にまとめておきたい。

溝内出土遺物

窯体の北側に窯体に沿うように構築された溝からは大量の遺物が出土した。それらの遺物は主に6・7-C区に集中して出土しており、溝の埋土の上位に密集していて、中位～下位にかけては出土していない。溝から出土した陶片は非常に薄く、その器形や製作技法等は、15世紀後半～16世紀前半とされる朝鮮陶器(第314図参照)や串木野窯跡の出土遺物(第316図参照)に酷似しており、堂平窯跡の中で最も古い段階の製品であると思われる。

また、一部攪乱を受けてはいるものの、溝内出土遺物と多く接合していることなどから、物原Ⅴの地点には、堂平窯の古い段階の物原が形成されていたものと想定される。

第1 地点物原Ⅰ

物原Ⅰからは、碗・蓋・水注・徳利・片口・播鉢・甕・壺・貝殻等が出土しており、貝殻は窯詰め時に使用するのためのものと考えられる。出土遺物の器壁は薄く仕上げられ、内面に同心円状のタタキ目が残る資料が目につく。また、甕・壺等の口唇部には貝目が残る。胎土は緻密でよく焼き締まっている。釉薬は緑褐色系の発色する灰釉や褐色系に発色する鉄釉がかけられている。物原Ⅰ内の出土遺物も朝鮮的製陶技術の様相を残す遺物である。しかしながら、本窯跡で初期に生産されたと考えられる溝内出土遺物と比較すると、若干器壁が厚くなる傾向が見られ、甕・壺等の口縁部のつくりもややシャープさに欠ける。法量的にも大きくなり、さらに植木鉢等の溝内出土遺物の中では見られなかった製品も確認され、器種が増加する傾向が見られる。

物原Ⅰ内の出土遺物は、溝内出土遺物に引き続く時期の製品と考えられる。

第1 地点物原Ⅱ

物原Ⅱからは、碗・蓋・水注・徳利・片口・播鉢・甕・壺・窯道具等が出土している。その他に、植木鉢・素焼きの鉢・瓦など、溝内出土遺物や物原Ⅰ内出土遺物にはほとんど見られなかった遺物が多く出土しており、生産される器種の増加が窺える。特に瓦は、鶴丸城（鹿児島城）に葺かれたものと思われ（註4）、物原Ⅱや第2地点の物原からは大量に出土する。

製作技法としては、タタキ成形や貝目が残る資料など朝鮮的製陶技術の様相が一部残るものの、全体的に器壁は厚さを増し、19世紀代の苗代川焼に見られるような、内外面にヘラ状既工具による横方向の筋状の調整が施される資料も目につく。また器形的にも、甕壺の蓋や甕、窯道具などで新しい器形の資料が見られる。甕の口縁部の形状には肥前系陶器の影響を受けた製品も見られ、窯道具にも、トチン・サヤ鉢といった肥前系の道具が導入され、瓦に使用したと思われるスタンプ型を呈する新しい形状の窯道具も出土している。また製品の法量も溝内出土遺物や物原Ⅰと比較すると、大きくなる傾向が見られる。

物原Ⅱ内の出土遺物は、溝内出土遺物や物原Ⅰ内出土遺物とはやや異なった様相を呈し、本窯の製品が在地化していく過程が見られ、物原Ⅰに後続する時期の資料と考えられる。

第2 地点物原1・2

第2 地点物原1・2からは、碗・皿・蓋・水注・徳利・片口・播鉢・鉢・甕・壺・植木鉢・瓦・窯道具等が出土

した。器種もさらに増加し、基本的な器種の他に、量は多くないがバラエティーに富んだ製品が出土している。この地点では、瓦の出土量が非常に多く、大量に生産されていたことが伺える。また、白色陶胎の碗・皿類や植木鉢の出土量も増えている。

製品の特徴としては、第1 地点物原Ⅱと同様で、タタキ成形や貝目が残る資料など朝鮮的製陶技術の様相が一部残るものの、全体的に器壁は厚く、内外面にヘラ状工具による横方向の筋状の調整痕が残る資料が多い。甕の口縁部の形状には肥前系陶器の影響を受けた製品と見られ、窯道具にも、トチン・サヤ鉢・瓦に使用する窯道具といった新しいものや肥前系の窯に見られる道具が出土している。

以上、溝、第1 地点物原Ⅰ、物原Ⅱ、第2 地点物原1・2は、出土した陶片の特徴から、古い順に、溝、第1 地点物原Ⅰ、物原Ⅱ、第2 地点物原1・2の順に形成されたと考えられる。

堂平窯製品の経年変化とその特徴

堂平窯の製品には、朝鮮の様相が次第に消失していき、在地化し現在の苗代川焼へ変化していく過程が見られ、大きくⅠ期（17世紀前半）とⅡ期（17世紀後半）の大きく2時期に編年することができる。Ⅰ期はさらにⅠa期とⅠb期の2つに細分化することができた。

次に、それぞれの時期の特徴を述べておきたい。

Ⅰ a 期（1620～1630年代）

主に溝内出土遺物がこの時期に相当する。15世紀後半～16世紀前半の朝鮮陶器や薩摩焼で最初の窯と伝えられる串木野窯から出土した遺物と同様の器形や製陶技術が見られる（第316図参照）。また、この時期の甕の口縁部のつくりや平面が三角形の馬蹄形ハマは、御里窯（加治木町）から出土する水指の口縁部や窯道具と酷似し、御里窯の稼働年代から考えてもⅠa期の年代は想定できよう。

この時期の製品は、器壁が非常に薄く、口縁部の作りなどはシャープである。胴部内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。器種はそれほど多くなく、碗・蓋・水注・徳利・片口・播鉢・甕・壺が中心である。島津義弘により連行され、串木野窯を経て苗代川に移った朝鮮人陶工らにより製作された、朝鮮的製陶技術そのものが色濃く残る製品と考えられる。

Ⅰ b 期（1630～1650年代）

主に第1 地点物原Ⅰ内出土遺物がこの時期に相当する。朝鮮陶器と同様の器形や製陶技術は引き続きのこるものの、在地的な影響も受ける中で、朝鮮的な様相がやや消失し始める時期である。器形は、成型方法等には大きな変化は見られないが、器壁は若干厚さを増す。口縁部のつくりはややシャープさに欠ける。また、器種は、Ⅰa期とはほぼ同じであるが、器形のバリエーションや法

量が増える傾向が見られる。

Ⅱ期（17世紀後半）

主に第1地点物原Ⅱ、第2地点物原1・2内出土遺物がこの時期に相当する。朝鮮の様相が消失していき、在地化する。器壁は厚くなり、口縁部のつくり等にはシャープさに欠けるものが多い。製作技法の変化としては、タタキ成形のあと、ヘラ状工具によるナデ調整が施されるようになり、横方向の筋状の調整痕が残るものも多く見られる。器種は増大し、碗・蓋・水注・徳利・片口・播鉢・鉢・甕・壺のほか、皿・白色陶胎の碗・皿・素焼きの鉢・植木鉢・瓦等が見られるようになる。特に瓦については、その出土量は膨大である。肥前系の製陶技術も導入されるようになり、窯道具ではサヤ鉢やトチンが使用されるようになる。製品でも、甕の口縁部の形状は17世紀後半の肥前系陶器の影響を受けた口縁部形態に変化する。また、県内他窯との交流も考えられ、堅野系冷水窯のものと類似した上手の白色陶胎の製品や、口縁部形状が山元窯(加治木町)と同様の播鉢も出土している。その他、贈答用と考えられる特注品の植木鉢、鶴丸城の瓦もこの時期には生産しており、堂平窯に対する薩摩藩の関与が窺い知れる。

主な器種の経年変化（第317・318図）

碗

法量的には鉢として分類できる資料がほとんどであるが、本窯では碗として分類した。基本的な形状は、口縁部が僅かに外反し、腰部が張り、一部に口縁部が直口するものも見られる。高台は付け高台で、パチ状を呈する。この器形は、Ⅰ・Ⅱ期を通して見られ大きな変化は見られないが、Ⅱ期になると湯のみ碗程度の大きさのものや鉢のような大形のものも出現する。

皿

堂平窯の製品の中で、皿はほとんど見られない。特にⅠ期では皿は全く出土しておらず、Ⅱ期になって僅かに出土する程度である。しかし、碗と同じ胎土を使用しているものではなく、より緻密な胎土を用いてつくられる。

白色陶胎の碗・皿

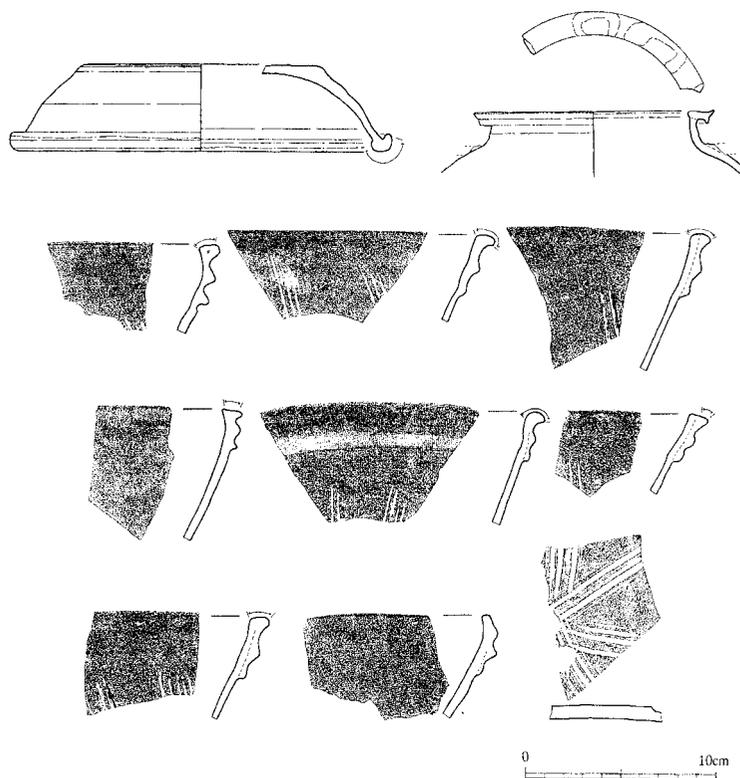
白色陶胎（通称「白薩摩」と呼ばれる）の製品は、Ⅰb期から僅かに見られるが、その中心はⅡ期である。器形や胎土は、16世紀末の朝鮮半島に見られる軟質白磁に類似しているが、同時期の藩窯である堅野（冷水）窯の影響も受けていると考えられる。口縁部は僅かに外反するものも多く、高台が割り高台となる資料もあり、成形は轆轤成形で、高台は削り出しによりつくられるが、器壁は厚く、つくりもシャープ

さに欠け稚拙感がある。胎土はやや粘質性に欠け、釉は豊付を除き全面にやや白濁した透明釉がかかる。また、鉄釉で正面となる位置に景色を施すものもある。窯詰めは、サヤ鉢の中で重ね焼きが行われており、見込みや豊付に白色の砂粒を含む胎土目が付く資料が見られる。また、中には貝目が残るものもあり、甕・壺生産の技法である貝目技法が見られる点は興味深い。

蓋

水注等に被せる円板状で小形のものと甕・壺等に被せる浅鉢形のものがある。前者は、粘土をタタキ成形により平らにし、刃の鋭い工具で円形に切り抜いて体部をつくり、上面にはつまみを付ける。下面に、粘土紐を円形に貼り付けて身受け部をつくるタイプもあるが、全体的にⅠ・Ⅱ期を通して大きな変化は見られない。

甕・壺等に被せるものは、特に口縁部の形状と器面調整の二つの点において変化が見られる。Ⅰ期では、甕や壺と同様で朝鮮的な様相をもつ口縁部の形状、口縁部を外側に折り返して、口唇部の内側を高く外側を低くつくるものや、口縁部を外側に折り、さらに内側に折り返して丸くおさめるタイプが中心であるが、Ⅱ期になると、口縁部先端を折り返さず、口唇部を平坦におさめる洗面器形の形状のものが新たに加わり増加し、やがて、甕・壺と同様の口縁部形態のものは消失していく傾向が見られる。また器面調整は、Ⅱ期になるとⅠ期では見られなかった、ヘラ状工具による横方向の筋状の調整痕が残る製品が多く見られるようになる。



第316図 串木野窯出土遺物実測図（鈴木2004）

水注

外底面にも釉薬がかかっていることから、直火にかけて使用したものではなく、いわゆる「土瓶」とは異なる用途が考えられる。Ⅰ期の時期から、注口の形状は巻口で、把手が注口に対し90度右側に付くもの、中空で棒状の把手が、注口に対して約75度右の外側肩部につくもの、注口上部とその反対側をつなぐアーチ状の陶製の把手が付くものの3種が見られる。全体的な出土量が多くないため、はっきりとした変化は分からないが、Ⅱ期も、把手が注口に対して90度右に付くもの以外は引き続き見られるようである。

徳利

Ⅰa期においては、「舟徳利」型と呼ばれる胴部下位に最大径を有する形状ものが一般的である。肩部には、沈線が数条巡るものと巡らないものがある。Ⅰb期になると、舟徳利型のもの以外に、大形で胴部中位に最大径を有する形状のものがつくられるようになる。Ⅱ期になると、さらにバリエーションが増え、小形で頸部が細長く肩の「鶴首」型と呼ばれる肥前磁器の影響を受けた形状のものもつくられるようになる。また、大形のものには器壁が厚手となり、口縁部は肉厚となるものが多くなる。

片口

Ⅰ期・Ⅱ期を通じて器形や口縁部のつくり等の大きな変化は見られないが、Ⅱ期になると若干器壁が厚くなる傾向は見られる

播鉢

堂平窯の製品の中で、比較的はっきりとした変遷が分かる器種である。堂平窯で生産された播鉢は、串木野窯から出土したもの（第316図参照）と同様の形状を呈し、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、外面口縁部下位に3～4条の突帯を巡らせる。内面には、太く粗い播り目が口縁部下位に余白を残して施される。そのうちⅠa期は、口唇部が丸くつくられるものがほとんどで、口縁部がまっすぐに伸びるものとやや内湾気味につくられるものが見られる。この時期に相当する播鉢の口唇部には貝目は見られない。Ⅰb期は、Ⅰa期と比べ大きな変化は見られないが、やや器壁が厚く、口唇部が幅広につくられるものが見られるようになるが、口唇部にはⅠa期と同じく貝目は見られない。Ⅱ期になると、口唇部の形状に大きな変化が現れ、加治木町山元窯跡出土の播鉢と同様の口縁部形態のものが主流となる。口唇部は幅広で、平坦な面を有するようになり、貝目が残る。このタイプの播鉢は、播り目も細くシャープで密に施される。

播鉢は朝鮮半島には見られない器種といわれる。そのため串木野窯や堂平窯の陶工等は、その製作にあたって当時国内に広く流通していた播鉢を模倣したものである。堂平窯Ⅰa期の播鉢の播り目の特徴は、16世紀第

2四半期～17世紀第1四半期の備前焼の播り目の特徴と類似しており（註5）、さらに、17世紀第2四半期～17世紀第3四半期の備前焼の特徴も堂平窯のⅠb～Ⅱ期の播鉢と類似している。このことから堂平窯の陶工たちが、口縁部の形状等を異にする要素を残しながら、備前焼等の播鉢を参考に製作したことが考えられる。このことは、碗や壺・甕等の汎用の器形は個性的な技術を徐々に在地的なものに同化していきながら、播鉢のようなオリジナル性の強い器種は陶工たちが積極的に吸収を図った様子が窺い知れよう。朝鮮の製陶技術が経年変化のなかでしだいに在地化した一面と、積極的に在地化した側面をみることができる。

甕

Ⅰa期の甕は、比較的小型で、器高が25cm程度である。口縁部は外側に折り返して「T」字状につくり、口唇部は内側を高く外側を溝縁状に仕上げる。全体的につくりはシャープで、器壁は極めて薄く、胴部が膨らむ形状のものとバケツ型を呈するものがある。Ⅰb期になると、口縁部や口唇部の形状に大きな変化は見られないが、つくりはシャープさに欠け、器壁は厚くなる傾向が見られる。器形も大形になり器高が30cm程度のものが主流となる。Ⅱ期になると、口縁部の形態に大きな変化が現れる。Ⅰ期で見られた口縁部や口唇部の形態はほとんど見られなくなり、17世紀後半の肥前系陶器の影響を受けた口縁部の形態（註6）が主流となる。

壺

壺は大形のものから小形のものまで、様々な形状のものが存在するが、ここでは大形のものについて述べておきたい。Ⅰa期では、大形といっても小振りでシャープな器形で、口唇部は甕と同様の形状を呈する。Ⅰb期になると、つくりもシャープに欠け、器壁は厚くなる傾向が見られる。Ⅱ期になっても、Ⅰ期で見られた口縁部の形状は引き続き見られるが、さらに器壁は厚くなり、シャープさに欠けたつくりとなる。また、新たに琉球の荒焼壺に類似した形状のものがつくられるようになる。口縁部は外側に折られ、口唇部が丸くつくられる。耳は横耳である。

植木鉢

植木鉢は、Ⅰb期より僅かに見られるが、種類、量ともに増えるのはⅡ期になってからである。堂平窯で生産された植木鉢は、口径が30cm程度の大形のものや吊り下げて使用したと考えられる小形のものがあり、どちらも素焼きである。大形のものには、口縁部や口唇部に装飾が施され、外面胴部にはスタンプや沈線により文様が施される。吊り下げ型のものには、外面胴部に沈線で文様が施され、口唇部には吊り下げ用の紐を通す穴が2か所穿孔される。また、植木鉢というより盆栽鉢として使用したのではないと思われる、方形で獅子頭付きの脚部を有

するものもある。これについては、出土量が極めて少ないため、藩等からの特注品であろうと考えられる。

植木鉢は、現在のところ、山元窯で生産されたものが最も古いと考えられているが、堂平窯の植木鉢も同時期もしくはそれ以前の可能性が考えられる。

瓦

瓦はⅠ期に相当する物原からは、ほとんど出土していない。その大部分はⅡ期になって大量に出土する。

成型は、中世の瓦成型に見られる「樽巻き」ではなく、粘土紐巻き上げで筒状に作り、タタキ成形が施され、さらに内面は削り調整やヘラ状工具によりナデ調整を施し、外面は轆轤の回転を利用して、ヘラ状工具により横方向の筋状の調整が施される。

瓦の外面に見られるヘラ状工具による筋状の調整痕は、Ⅱ期に相当する製品に見られる成形方法と同様である。

この状況から、これらの瓦は、17世紀後半の製品と位置付けられる。このため、従来、堂平窯で鶴丸城本丸の創建時の瓦を焼いたと考えられていたが、17世紀後半に行われた修復工事等の際に使用した瓦であることが推測される。なお、釉瓦の他に、朝鮮様式の瓦が出土している。胎土分析の結果、堂平窯出土の釉瓦と非常に近い胎土であるとの結果が得られたため、この朝鮮様式の瓦が創建瓦であった可能性が考えられる。

窯道具

平面が長方形の馬蹄形ハマ、スタンプ型ハマ、トチン、サヤ鉢は、Ⅰb期から僅かに出土しているものがあるものの、その出土量が増加するのは、Ⅱ期になってからである。平面が長方形の馬蹄形ハマやスタンプ型ハマは、熔着例などから瓦焼成時に使用されたものと考えられる。トチンやサヤ鉢は、肥前系の窯道具であるため、肥前からの技術伝搬が考えられるが、白色陶胎等が堂平窯での生産されるに伴って使用され始めることから、同時期の堅野（冷水）窯を経由しての技術移入も考えられる。

堂平窯跡の年代

出土遺物から見た堂平窯跡の年代を述べておきたい。結論から先に述べると、開窯年代は1620年代、閉窯年代は17世紀後半であろうと想定される。

まず、開窯年代1620年代とした根拠は、堂平窯跡の出土遺物のうち、最も古い段階（Ⅰa期）に相当する溝内出土遺物に混入する肥前系陶器の年代から推定できる。溝内出土の陶片に混ざり1580年～1610年と思われる胎土目の肥前系陶器や、1680年～1620年代と思われる砂目の肥前系陶器が出土している。このことから堂平窯の開窯年代は遅くとも1620年代には開窯していたと考えられよう。

次に閉窯時期は、17世紀後半と考えられる。その根拠

は次の3点からである。

1点目は、挿鉢の口縁部の形状からである。Ⅱ期に相当する挿鉢の口縁部の形状が山元窯（始良郡加治木町）の挿鉢と同様のタイプであることから、技法や工人の交流により当時一般的であった挿鉢の口縁形態が諸窯で製作されていたものと考えられ、従って少なくとも山元窯が稼働していた1670～1680年代までは堂平窯も稼働していたと考えられる。

2点目は、発掘調査により確認された窯体床面の作り替えの回数からである。断面から、3回～5回の作り替えが行われていると考えられ、同時代の肥前系窯跡の状況から推測すると、1620年代に開窯したのであれば、50～60年の稼働で17世紀後半閉窯が妥当と思われる。

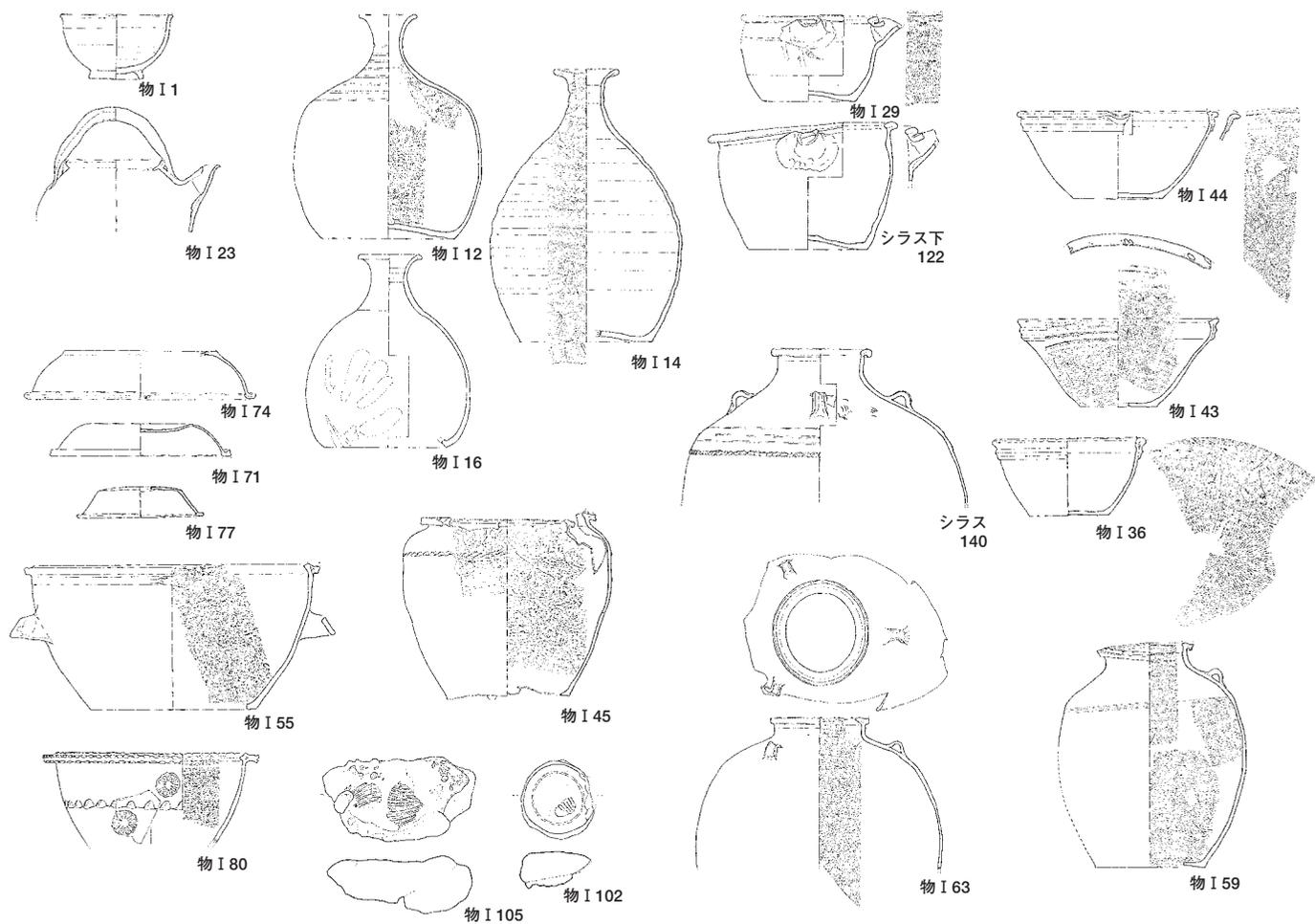
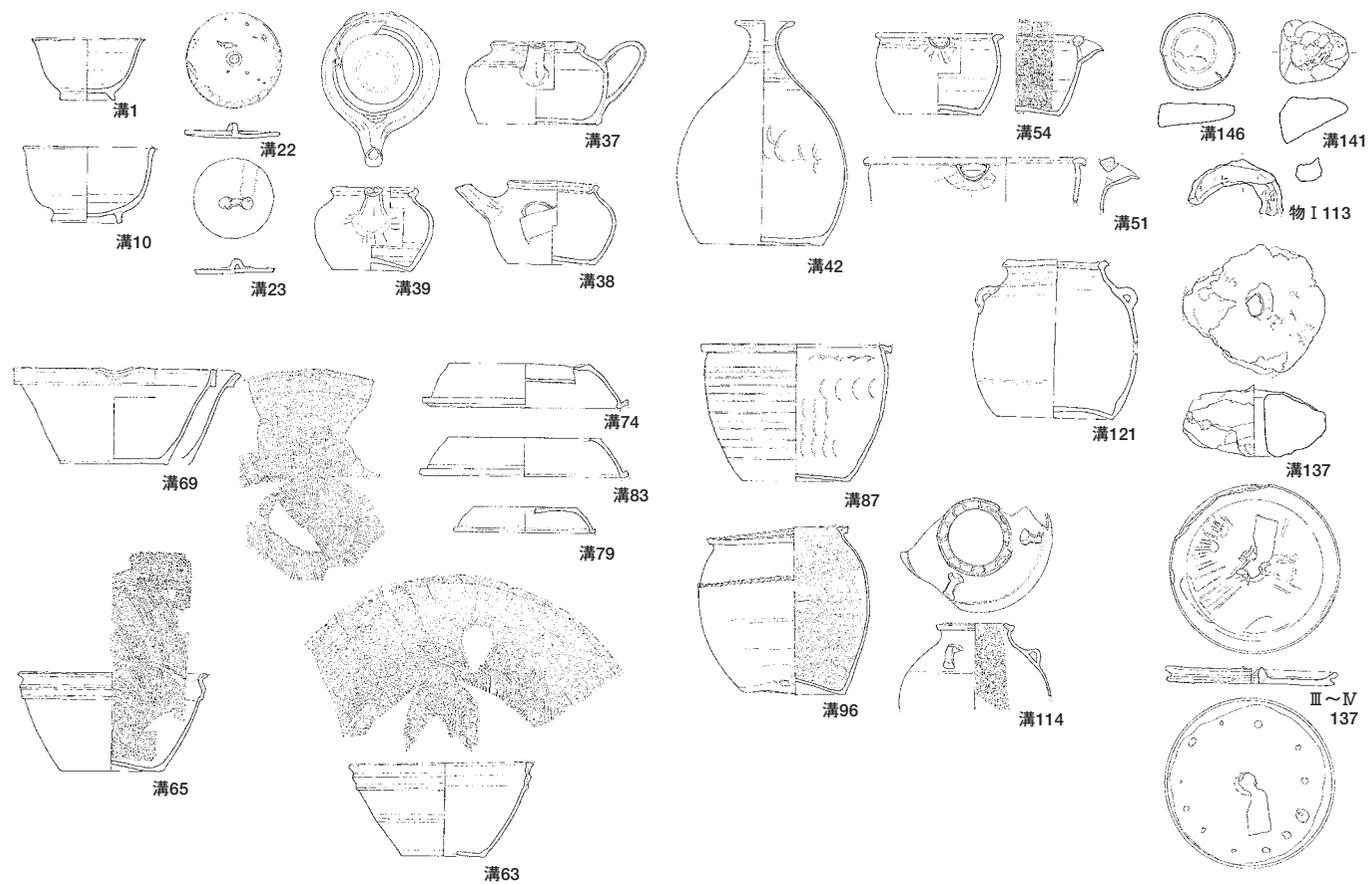
3点目に、甕の口縁部の形状からである。堂平窯の甕の口縁部は朝鮮の様相の強いものから、肥前で17世紀後半に主流となる口縁部形態に変化し、Ⅱ期になって大量に生産されることから、17世紀後半と考えられる。

以上のことから、現在のところ18世紀代まで稼働していたとする資料はなく、17世紀末もしくは18世紀初頭まで稼働していた可能性を残しつつも、17世紀後半としたい。

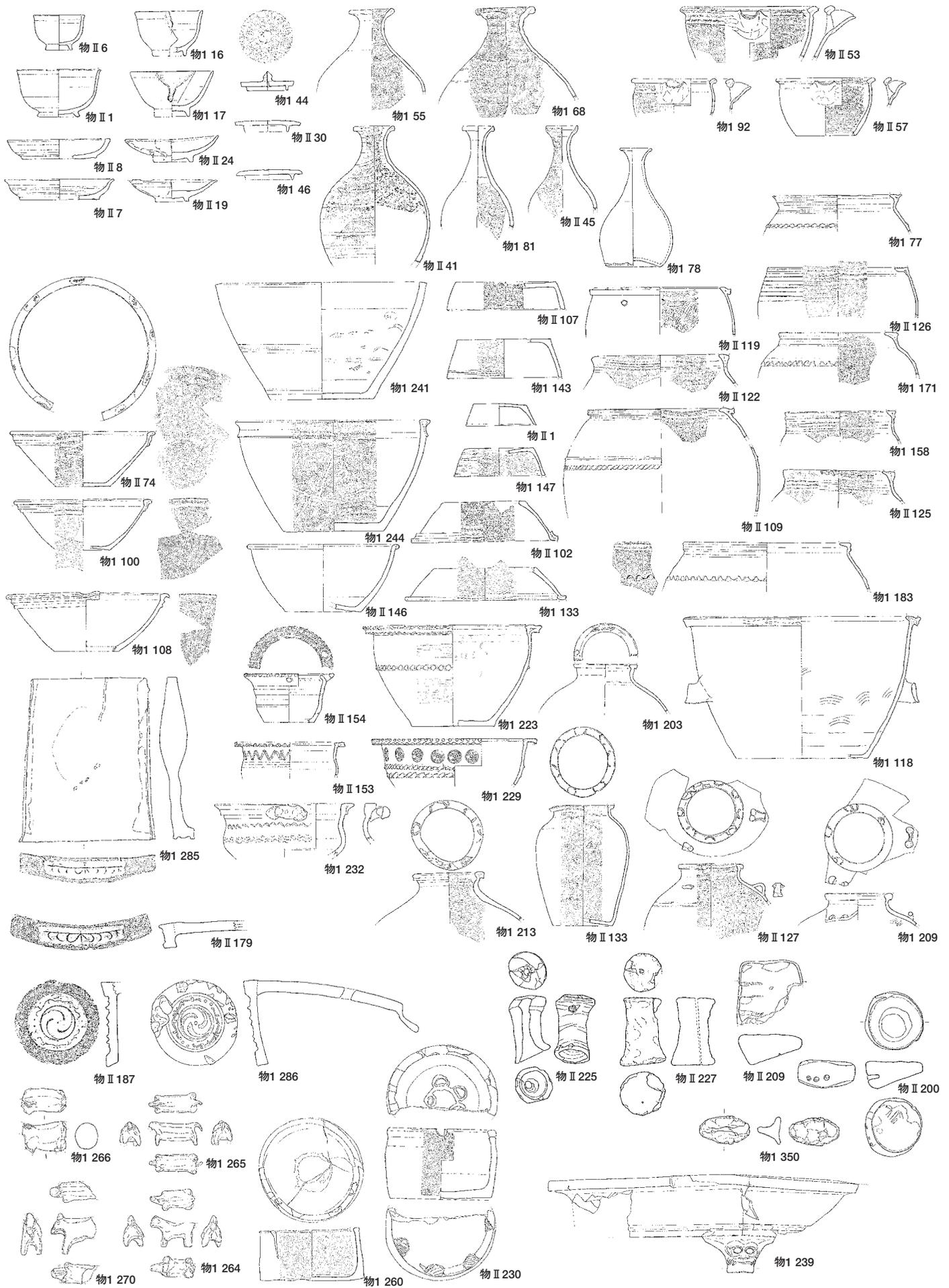
また、堂平窯の窯尻付近は増築された形跡が見られる。その時期については、出土量が急増し大量の瓦も焼成されたⅡ期が考えられよう。Ⅰ期からⅡ期へ移行する17世紀中頃が想定できる。

最後に、開窯年代についての若干の考察を述べておきたい。堂平窯は、伝承から串木野・元屋敷に後続する窯と考えられている。苗代川系で最も古いとされる串木野窯は昭和9年に発掘調査が行われ、窯体や出土遺物等が報告されており、その陶片は、堂平窯Ⅰa期のものと酷似している。このことは、串木野窯には堂平窯と並行した稼働期があった可能性を残しつつも、串木野窯から苗代川地区へ移動したという伝承を裏付けたことになろう。しかし、串木野窯の次で、苗代川地区で最初に開窯されたとされる元屋敷窯については、現在においてもその情報は極めて少ない。『薩摩焼の研究』で、元屋敷窯跡と推定した地点から採集した陶片（註7）を観察すると、串木野窯や堂平窯Ⅰ期の陶片に比べて器壁は厚く、口縁部のつくりもシャープさに欠け、胴部に横筋の調整痕が見られる等、堂平窯Ⅱ期の陶片に近い特徴が見られた。同じく瓦片もⅡ期に分類した資料である。

『薩摩焼の研究』では更に文献や伝承を加えて、堂平窯に先行する窯として元屋敷窯跡の存在を推考しているが、資料的にはその存在を裏付けてきた根拠に疑問を覚えることとなった。元屋敷窯の推定地は、美山小学校の北向きの斜面を利用した築窯適地とは思われない場所で、その名前どおり陶工たちの屋敷や工房があった可能性が考えられる。（註8）実際、『薩摩焼の研究』で元屋



第317図 I a期(上)・I b期(下)相当の出土遺物 スケールは不統一。本文中挿図参照のこと。



第318図 II期相当の出土遺物 スケールは不統一。本文中挿図参照のこと。

敷窯の陶片を採集した場所は、堂平窯まで約200m足らずの地点で、周辺で最も陽当たりの良い傾斜地が堂平窯跡の所在する斜面である。よって、居住地若しくは工房と窯場の関係に両者があったことが想定できよう。このような窯場を共有し、生活・作業区を別に設ける運営は民俗事例としても紹介されており（註9）、堂平窯の時代も同様の窯場経営が考えられる。

従って、元屋敷窯そのものの存在を再考する必要もあり、それによっては、1610年代に堂平窯が開窯していた可能性も考えておく必要もあろう。

（文責 関明恵）

【註 訳】

- 註1 済州島教育大学『90産学共同研究活動報告書 済州の窯址地表調査』より
- 註2 岳古窯跡群は、戦国時代岸岳城の城主であった波多氏朝鮮半島より陶工を招虜して、城下周辺で開かせた窯と考えられており、その年代は1589～1590年代であるとされている。
- 註3 朝鮮王朝時代の陶工は、轆轤技法で碗などをつくる「沙器匠」とタタキ技法で甕壺などをつくる「甕匠」の2集団があり、両者の間には厳然な区分があるという。（片山1998b）また、一方で、沙器匠については、「この沙器匠は、地方の主な地点に中央から配置され、その周囲に磁器所または陶器所があった、沙器匠の指導のもとに働くというシステムと。」という説もある。（北島万次郎2002）また、この説については関一之氏（関2005）、渡辺氏（2005）も指摘している。
- 註4 鶴丸城出土の瓦の化学分析を行った結果、堂平窯跡出土の瓦と、ほぼ同じ胎土であるとの結果が得られた。
- 註5 乗岡氏は16世紀第2四半期～17世紀第1四半期の備前焼を「近世Ⅰ期」、17世紀第2四半期～17世紀第3四半期の備前焼を「近世Ⅱ期」と分類している。（乗岡2000）
- 註6 大橋氏から、「商人山窯跡」（武雄市）の寛永年間頃につくられる甕に近いとのご教示を得た。
- 註7 筆者は根津美術館のご厚意により、『薩摩焼の研究』に掲載されている申木野窯跡と元屋敷出土の陶片の一部を実見する機会を得た。
- 註8 「古記ノ留渡海以来事件」の慶長九年（1604）の項に「申辰○此年、屋敷貳拾四ヶ所罷成下也、其説は池ノ平へ罷居候也、右候而、屋敷被下候付、本屋敷と云所へ為移由、其後、二十ヶ所程被下候、（以下略）」とあり、本（元）屋敷に居住したことが記されている。また、寛文三年（1663）の項には、「申辰、当卯年、本屋敷より只今の所へ、久光公様御上意に而罷移居、屋敷合八拾三ヶ所ニ相成候」とあり、この年まで本屋敷

に住んでいたものと思われる。

註9 鮫島佐太郎『苗代川のくらし』

【参考文献】

- 慶南大学校博物館1994『清道専池里甕器窯跡』
- 大武進2005「古記ノ留渡海以来事件」『からから』No.20
- 大武進2006「堂平窯について」『からから』No.21
- 加治木町教育委員会1995『山元古窯跡』
- 加治木町教育委員会2003『御里窯跡』
- 片山まび1998a「一六世紀の朝鮮陶磁と草創期の唐津焼との比較研究—「近世的な窯業」の萌芽を視座として—」『朝鮮学報』167
- 片山まび1998b「朝鮮人陶工」とは誰なのか？—全羅未知・慶尚道の十六世紀窯址と岸嶽系唐津の比較から—」『陶説』541
- 片山まび2005「朝鮮時代の陶器について」『16・17世紀における九州陶磁をめぐる技術交流』九州近世陶磁学会
- 鹿児島県教育委員会1978『堅野（冷水）窯跡』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『雪山遺跡・猿引遺跡』
- 佐賀県北波多村教育委員会2000『岸岳古窯跡群Ⅰ』
- 鮫島佐太郎1977『苗代川の暮らし』
- 鈴木裕子2004「根津美術館所蔵の申木野窯跡出土品実測図」『からから』No.17鹿児島陶磁器研究会
- 関一之1998「江戸前期における鹿児島県の陶器と製作技法」『第八回九州近世陶磁学会資料集』九州近世陶磁学会
- 関一之2004「薩摩焼の誕生と展開」『くしきの』18号 申木野郷土史研究会
- 関一之2005「松尾城採集のトチンについて」『からから』No.20
- 田沢金吾・小山富士夫1941『薩摩焼の研究』（国書刊行会復刻版1987）
- 武雄市教育委員会1992『武雄市内古窯跡分布調査報告書』
- 乗岡実2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- 松村真希子2004「根津美術館所蔵の薩摩焼出土陶片ノート（2）」『からから』No.17鹿児島陶磁器研究会
- 渡辺芳郎2000「近世摺鉢考」『鹿児島考古』34
- 渡辺芳郎2004「近世薩摩焼の窯構造」『金沢大学考古学研究室紀要』27号
- 渡辺芳郎2004「模造と技術交流—陶磁器生産におけるコミュニケーション—」『コミュニケーションのかたち—ことば・もの・メディア』鹿児島大学法文学部
- 渡辺芳郎2005「薩摩焼と朝鮮文化」『高麗美術館報』65号
- 渡辺芳郎2005「なぜ薩摩藩は苗代川に朝鮮習俗を残したのか？」『鹿大史学』52号
- 渡辺芳郎2005「16・17世紀の薩摩焼の技術」九州近世陶磁学会

Dobira-Kama-Ato (Dobira Kiln Ruins), located in Miyama, Higashiichiki Town, Hioki City, Kagoshima Prefecture, is one of the oldest kilns used to produce Satsuma-Yaki (Satsuma Pottery).

Satsuma-Yaki (Satsuma is Kagoshima's former name) has an unfortunate origin involving Japan and Korea. In 1592-1598, Hideyoshi Toyotomi, the ruler of Japan at the time, ordered his military leaders to conquer Korea. Then Yoshihiro Shimadzu, the military leader of Satsuma-Han (Satsuma clan), forced Korean potters to move to Satsuma-Han bringing their method for making pottery. Kushikino-Kama-Ato, located in Shimomyo, Ichikikushikino City, Kagoshima Prefecture, is said to be the first kiln to produce Satsuma-Yaki. It was a single-chamber kiln rising up a slight slope of a mountain (climbing kiln), and mainly produced pots and jars for storage. After that, it is believed, but it has not been confirmed, the potters moved to Miyama, Higashiichiki Town, Hioki City, Kagoshima Prefecture, and built Motoyashiki-Kama (Motoyashiki Kiln). Details, such as location and form, are still unknown. Dobira-Kama was the next kiln built in the area near Motoyashiki-Kama.

In the excavation of Dobira-Kama-Ato, a climbing kiln with a ditch to protect it from a rainwater, structural remains that may have been used for workshops, and a vast number of pieces of pottery were found. This climbing kiln was 31.2 meters long, 1.2 to 1.4 meters wide, and leaned along a slope of about 17 degrees. Its structure is similar to that of Kushikino-Kama and the Korean climbing kilns built in the end of the 16th century. Kiln wasters, receptacles for disposed broken pieces of pottery, containing pieces of objects for daily life, such as "sake" bottles, bowls with a pouring lip, mortars, pots, and jars were found in the vicinity of the climbing kiln. In the same kiln wasters, there were also fragments of bowls and plates of fine quality called Shiro-Satsuma (White Satsuma Pottery) made from white clay, potteries in the shape of animals, and roof tiles.

Each kiln waster was used in a different period of time. Products from the kiln wasters are roughly divided into two parts. One is Phase 1 (the first half of the 17th century), and the other is Phase 2 (the second half of the 17th century).

The technique for making the products of Phase 1 was strongly influenced by the Korean technique for making pottery around the end of the 16th century. The pottery vessels are thin, and there are concentric paddled marks inside them created by the process for forming the shape of the pottery. There are also marks on the rim and base of each piece of pottery created by a shell or a horseshoe-shaped tool to separate piled up pottery vessels while they were being baked.

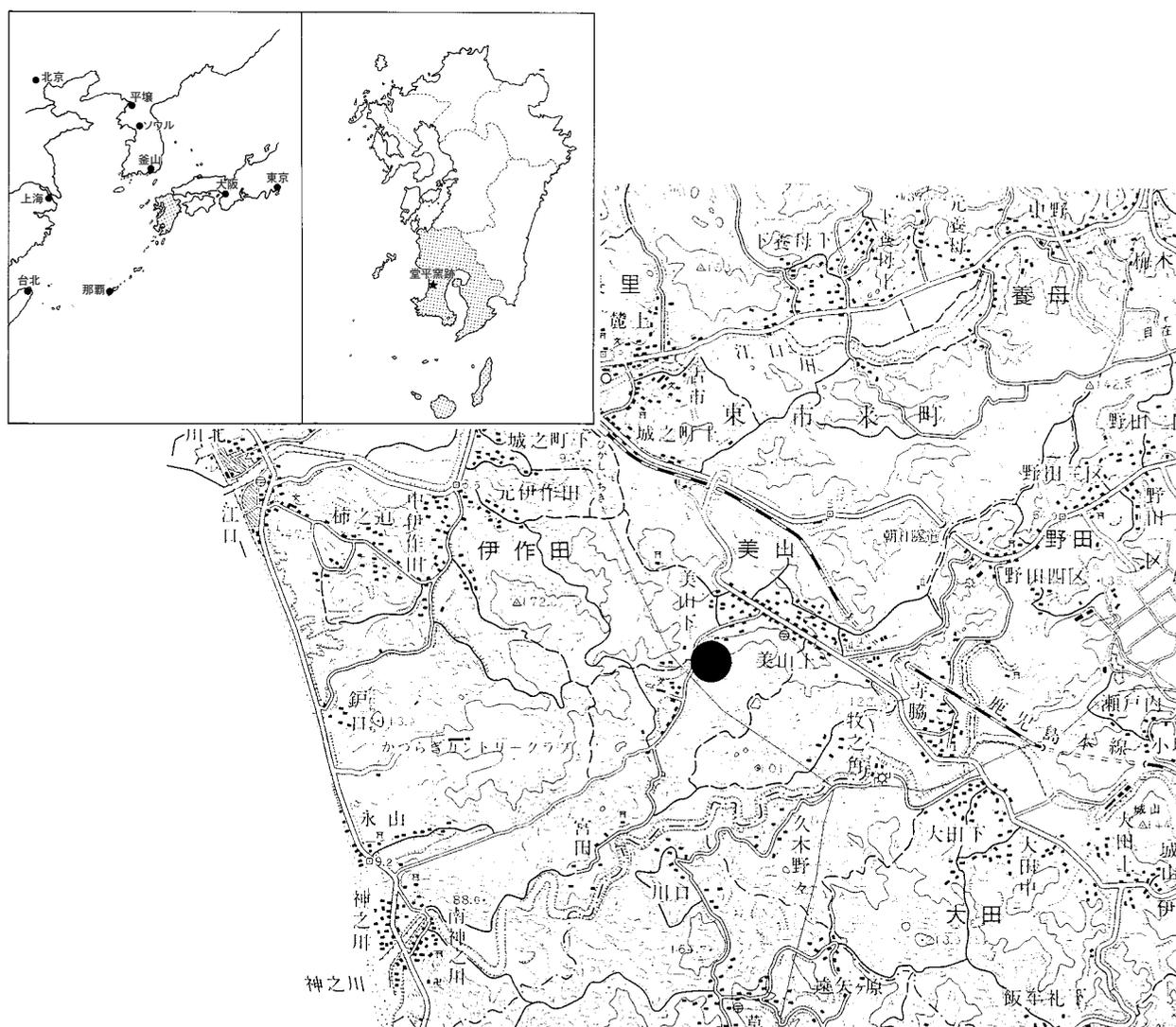
The products of Phase 2 were less influenced by the Korean technique for making pottery. The technique for making them gradually changed to the process used for making present day Naeshirogawa-Yaki (Naeshirogawa Pottery), a type of Satsuma-Yaki. Pottery vessels became thicker compared to the products of Phase 1. They have horizontal lines marked by a spatula used for stroking the pottery after paddling. The shapes of the rims of pots characteristic of Karatsu-Yaki (Karatsu Pottery) became mainstream. During that time tools used inside the kiln for firing pottery, such as saggars and setters had started to be used. The discovery of Shiro-Satsuma similar to that made at Hiyamidzu-Kama (Kagoshima City), and mortars that have a rim shape similar to pottery made at Yamamoto-Kama (Kajiki Town), shows that information exchange between Dobira-Kama and other kilns in Kagoshima Prefecture existed at the time. The discovery of custom-made

flowerpots used as gifts given to leaders of places outside Satsuma-Han, and roof tiles for Tsurumaru Castle, suggest that Satsuma-Han was involved in the production at Dobira-Kama.

Based on the results of the observation of artifacts, it is estimated that Dobira-Kama started production no later than the 1620s and ceased production sometime in the second half of the 17th century. This is believed to be true because pieces of Karatsu-Yaki classified as being produced in the period from 1580 to 1620 were found in one of the oldest kiln wasters at Dobira-Kama-ato.

Artifacts from Dobira-Kama-Ato inform us about how the Korean method for making pottery in the end of the 16th century was introduced to Japan, and also how it was gradually changed in response to the environment and consumer demand of southern Kyushu. Dobira-Kama-Ato is an important site that contributes to archeological exchange between Japan and Korea.

(英訳：木内敏生)



第319図 堂平窯跡位置図

도비라(堂平) 가마터는 가고시마현 히오키시 히가시이찌키초 미야마(鹿兒島県 日置市 東市来町 美山)에 위치하는 사즈마야키(薩摩焼)의 옛 가마터 중 하나이다.

사즈마야키는 한국과 일본 사이에 일어난 불행한 역사로부터 시작되었다. 당시 일본을 통치하던 토요토미 히데요시(豊臣秀吉)의 명을 받은 많은 일본 장병들이 1592~1598년에 걸쳐 한반도를 침략하였고 이 전쟁에 참여한 무장 시마즈요시히로(島津義弘)에게 연행된 도공들로부터 제작기술이 일본으로 전파되었다. 가고시마현에서 가장 이른 시기에 만들어진 가마터는 쿠시키노 가마터(串木野窯), 가고시마현 이찌키 쿠시키노시 시몬묘(鹿兒島県 いちき 串木野市 下名)에 있었다고 전해진다. 이 가마터는 완만한 구룡의 경사면에 축조된 단실 등요(登窯)로 향아리, 독 등의 저장용기가 주로 생산되었다. 그 후, 도공 집단들이 가고시마현 히오키시 히가시이찌키초 미야마로 자리를 옮겨 모토야시기 가마터(元屋敷窯)를 개축했다고 전해지는데 현재 이 가마터의 정확한 위치나 요체는 알 수 없다. 그 다음으로 개축한 가마가 바로 ‘도비라 가마터’이다.

이번 발굴조사는 도비라 가마터로 전해져 오는 곳을 대상으로 조사되었는데 조사 결과, 쿠시키노 가마터와 유사한 구조의 등요가 1기 확인되었으며, 방대한 양의 도편 등이 출토되었다. 등요의 경사도는 약 17도, 길이는 31.2m, 폭 1.2~1.4m 구조로 16세기 한국 등요 가마 구조와 매우 유사하다. 주변에는 구룡사면에서 가마로 흘러 들어오는 빗물을 막기 위한 배수로와 작업장으로 추정되는 유구 등도 발견되었다. 가마 주변과 구룡사면에서는 퇴적층도 확인되는데 여기서는 병, 편구, 스리바찌(播鉢), 향아리, 독(甕) 등의 일상용기 등이 대량으로 출토되었다. 또한 가고시마에서 ‘시로사즈마(白薩摩)’라고 불리는 백색 점토로 제작된 양질의 완, 접시, 도기체의 동물형 토제품, 기와 등도 함께 출토되었다. 한편, 이곳에서 출토된 가마도구에서 조선의 기술이 관찰되는데 그 점은 흥미로운 사실이다.

퇴적층에서 출토된 유물은 퇴적층마다 시기차가 나는데 I기(17세기 전반)와 II기(17세기 후반) 두시기로 나누어진다.

I기에 해당되는 유물은 기형, 제작기술 등에서 16세기 말 조선 도기와 같은 양상이 강하게 남아있다. 기벽은 얇고 내면에는 성형시 사용된 동심원상의 도박 흔적이 보인다. 기물을 포개어 굽기 위해 받친 조개와 단면이 삼각형을 이룬 도침을 사용해 유물의 구연이나 외저면에 받쳐 구운 받침 흔적도 확인된다.

II기에 해당되는 유물은 조선의 양상이 없어지고 현재의 나에시로가와야키(苗代川焼)로 이행되는 과정을 볼 수 있다. 기벽이 두꺼워지고 도박 성형 후에 근개를 이용하여 횡방향으로 정면한 흔적이 관찰된다. 독의 구연부는 17세기 후반 히젠계(肥前系) 도기의 영향을 받은 것이 주류를 이루는데 갑발이나 도침 등의 히젠계 가마도구 사용흔도 보인다. 카타노계(堅野系), 히야미즈요(冷水窯)와 유사한 시로사즈마나 구연부의 형태가 야마모토요(山元窯), 가지키쵸(加治木町)와 동일한 스리바찌가 출토되어 가고시마현 내의 다른 가마와의 교류도 엿볼 수 있다. 기타 선물용으로 생각되는 특별 주문된 화분이나 쓰르마르성(鶴丸城)의 기와 등도 출토되고 있어 사즈마반(薩摩藩)이 도비라 가마터의 운영에 관여했음을 짐작해 볼 수 있다.

이상과 같이 출토유물을 살펴본 결과, 이 가마의 조업연대는 가장 이른 시기에 형성되었다고 추정되는 퇴적층에서 도기와 더불어 1580~1620년대에 편년되는 히젠도기가 출토된 것으로 보아 적어도 1620년대에는 조업이 시작되고 17세기 후반에 끝난 것으로 추정된다.

도비라 가마터에서 출토된 유물과 유구는 16세기말 한반도의 도기 제작기술이 일본에 전해지면서 일본에서의 수요나 세월에 따른 변화 등 여러 요인으로부터 점차 변화되어 남쪽 큐슈(九州)에 뿌리를 둔 요업으로 성장되는 과정을 알 수 있는 유적이다. 더불어 도비라 가마터는 앞으로 한일 간의 문화, 학술 교류에 기여할 귀중한 것으로 생각된다.

(ハングル訳 : 片山まび, 金尹姫)

あ と が き

薩摩焼は、韓国と日本の間に起こった不幸な歴史から始まる。豊臣秀吉によって引き起こされた「焼き物戦争」とも呼ばれる文禄・慶長の役の際、島津義弘に連行された陶工により、製陶技術がもたらされたのである。

堂平窯跡で確認された窯構造や出土した陶片も、朝鮮半島の技術そのものであり、不幸な出来事を裏付けるものであった。

しかし400年前、日本にはなかった先進的な製陶技術が薩摩にもたらされ、それを今は大切に伝承し発展させ、現代の薩摩焼へと繋げてきていることは確かである。

この報告書が、これからの両国の国際交流・文化交流の架け橋になれば幸いである。

最後ではあるが、本遺跡の発掘調査・報告書作成に関わり、御協力頂いた多くの方々に感謝申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106）
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ
（伊集院I.C.～市来I.C.）

堂 平 窯 跡

第2分冊（3分冊中）

発行 平成18年12月

編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 霧島市国分上野原縄文の森2番1号

印刷 株式会社朝日印刷

〒890-0055 鹿児島市上荒田町854-1